シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７cm、凝灰岩。

田ノ沢山遺跡
谷地中遺跡

―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅢ―

２００５・６

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備や国道の建設は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸自動車道建設事業に先立って、平成16年度に大館市において実施した田ノ沢山遺跡、谷地中遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。田ノ沢山遺跡の調査では縄文時代の竪穴住居跡と貯蔵穴、谷地中遺跡の調査では縄文時代の貯蔵穴群が見つかり、大館地域における縄文時代の人々の暮らしを知る貴重な資料を得ることができました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、大館市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年６月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　清

例　　言

1　本報告書は平成16（2004）年度に行われた秋田県教育委員会による日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る田ノ沢山遺跡・谷地中遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

2　調査結果については、秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料等でも公表してきたが、本書の記載と相違のある場合、本書によって訂正したものとする。

3　田ノ沢山遺跡　第３章　自然科学的分析　谷地中遺跡　第３章　自然科学的分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

4　本書に使用した地形図は、国土地理院発行１/50,000地形図「大館」、同「鷹巣」である。

5　本書における土層注記の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』(1997年版)によった。

6　本報告書は、はじめに　遺跡の環境　田ノ沢山遺跡第１章　谷地中遺跡第１章は成田雄毅が、田ノ沢山遺跡第２章　第４章　谷地中遺跡第２章　第４章は河田弘幸が執筆した。編集は河田弘幸が行った。

凡　　例

1　遺構番号は検出順とし、その種別を問わず連番を付した。なお、田ノ沢山遺跡は北側調査区は01から、南側調査区は101から連番を付した。どちらの遺跡も精査過程において遺構でないと判断したものは欠番となっている。

2　本報告書で各遺構・遺物に付している略記号は、以下の通りである。

遺構…ＳＩ　竪穴住居跡　　ＳＫＩ　竪穴状遺構　　ＳＢ　掘立柱建物跡　　ＳＫ　土坑

　　ＳＫＦ　フラスコ状土坑・袋状土坑　　ＳＸ　性格不明遺構

遺物…ＲＰ　縄文土器　　ＲＱ　石器　　Ｓ　礫

3　本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は、１／40を基本とした。遺物の縮尺は、１／２を基本とした。挿図にはそれぞれスケールを付してある。

4　挿図中の遺物実測図には、遺構内出土遺物は遺構ごとに１から、遺構外出土遺物は１から通し番号を付した。

5　縄文土器は、口径１に対して器高がそれを上回るものを深鉢形土器、口径１に対して器高が１以下で１／２を上回るものを鉢形土器、口径１に対して器高が１／２以下のものを浅鉢形土器とした。

6　土層注記は、基本層位にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・）を、遺構堆積土にはアラビア数字（１・２・　３・・）を用いた。

7　挿図中に用いたスクリーントーンは以下の通りである。

焼土　　炭化物の広がり　　地山

粘土範囲

目　　次

序
例言 …… ii
凡例 …… ii
目次 …… iii
挿図目次 …… iv
表目次 …… iv
図版目次 …… iv

はじめに
　調査に至る経過 …… 1
　調査要項 …… 1
遺跡の環境
　遺跡の位置と立地 …… 3
　遺跡の歴史的環境 …… 3

田ノ沢山遺跡
第１章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観 …… 11
　第２節　調査の方法 …… 11
　第３節　調査の経過 …… 12
第２章　調査の記録
　第１節　基本層位 …… 14
　第２節　北側調査区検出遺構 …… 14
　第３節　南側調査区検出遺構と遺構内出土遺物 …… 26
　第４節　北側調査区遺構外出土遺物 …… 56
　第５節　南側調査区遺構外出土遺物 …… 56
第３章　自然科学的分析
　第１節　出土炭化材の樹種同定 …… 70
　第２節　放射性炭素年代測定 …… 71
第４章　まとめ …… 74

谷地中遺跡
第１章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観 …… 97
　第２節　調査の方法 …… 97
　第３節　調査の経過 …… 98
第２章　調査の記録
　第１節　基本層位 …… 100
　第２節　検出遺構と遺構内出土遺物 …… 100
　第３節　遺構外出土遺物 …… 138
第３章　自然科学的分析
　第１節　出土炭化材の樹種同定 …… 143
　第２節　放射性炭素年代測定 …… 145
第４章　まとめ …… 147

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡…… 5

田ノ沢山遺跡

第２図　グリッド設定図…… 13
第３図　北側調査区・南側調査区基本土層…… 15
第４図　遺構配置図…… 16
第５図　ＳＫ11土坑、ＳＫＦ09フラスコ状土坑 …… 17
第６図　ＳＫＦ03・04フラスコ状土坑…… 19
第７図　ＳＫＦ05・06フラスコ状土坑…… 21
第８図　ＳＫＦ07・12フラスコ状土坑…… 22
第９図　ＳＫＦ08フラスコ状土坑 …… 23
第10図　ＳＫＦ10フラスコ状土坑 …… 25
第11図　ＳＩ116竪穴住居跡、ＳＫＦ106
　フラスコ状土坑、ＳＲ105土器埋設遺構…… 29
第12図　ＳＩ116竪穴住居跡土層断面図…… 30
第13図　ＳＩ116竪穴住居跡出土遺物…… 31
第14図　ＳＩ116竪穴住居跡出土遺物、
　ＳＫＦ106フラスコ状土坑…… 32
第15図　ＳＫＦ106フラスコ状土坑出土遺物…… 33
第16図　ＳＫＦ106フラスコ状土坑出土遺物…… 34
第17図　ＳＲ105土器埋設遺構及び出土遺物、
　ＳＩ107竪穴住居跡、ＳＫ120土坑 …… 35
第18図　ＳＩ107・ＳＫ120出土遺物 …… 36
第19図　ＳＩ127・130竪穴住居跡及び出土遺物、
　ＳＫ101・132・133土坑及び出土遺物 …… 39
第20図　ＳＫ135土坑、ＳＫＦ102フラスコ状土坑 …… 41
第21図　ＳＫＦ103フラスコ状土坑及び出土遺物…… 43
第22図　ＳＫＦ109フラスコ状土坑及び出土遺物…… 45
第23図　ＳＫＦ112・113フラスコ状土坑 …… 47
第24図　ＳＫＦ114・118・121フラスコ状土坑 …… 49
第25図　ＳＫＦ123・124・128フラスコ状土坑 …… 51
第26図　ＳＫＦ136・140フラスコ状土坑、
　ＳＸ119性格不明遺構…… 54
第27図　ＳＸ131性格不明遺構、
　ＳＫＰ122柱穴様ピット…… 55
第28図　ＳＢ108掘立柱建物跡及び出土遺物…… 57
第29図　北側調査区・南側調査区遺構外出土遺物…… 60
第30図　南側調査区遺構外出土遺物（1）…… 61
第31図　南側調査区遺構外出土遺物（2）…… 62
第32図　南側調査区遺構外出土遺物（3）…… 63
第33図　南側調査区遺構外出土遺物（4）…… 64
第34図　南側調査区遺構外出土遺物（5）…… 65
第35図　南側調査区遺構外出土遺物（6）…… 66

谷地中遺跡

第36図　グリッド設定図…… 99
第37図　基本土層…… 101
第38図　遺構配置図…… 102
第39図　ＳＫ12土坑、ＳＫＦ11・13フラスコ状土坑 …… 103
第40図　ＳＫＦ11フラスコ状土坑出土遺物 …… 104
第41図　ＳＫＦ13フラスコ状土坑出土遺物、
　ＳＫ28土坑及び出土遺物 …… 105
第42図　ＳＫ30土坑、ＳＫＦ33フラスコ状土坑…… 107
第43図　ＳＫＦ01フラスコ状土坑 …… 108
第44図　ＳＫＦ03フラスコ状土坑 …… 110
第45図　ＳＫＦ04・05フラスコ状土坑…… 111
第46図　ＳＫＦ06・07フラスコ状土坑及び出土遺物…… 113
第47図　ＳＫＦ09・16フラスコ状土坑及び出土遺物…… 116
第48図　ＳＫＦ17・19フラスコ状土坑及び出土遺物…… 118
第49図　ＳＫＦ23・25フラスコ状土坑…… 120
第50図　ＳＫＦ34・40フラスコ状土坑、
　ＳＫＦ02袋状土坑 …… 122
第51図　ＳＫＦ08・14袋状土坑及び出土遺物…… 124
第52図　ＳＫＦ15・20袋状土坑及び出土遺物…… 126
第53図　ＳＫＦ21・24・26袋状土坑及び出土遺物 …… 128
第54図　ＳＫＦ27・31・36袋状土坑及び出土遺物 …… 130
第55図　ＳＫＦ37・38・39袋状土坑及び出土遺物 …… 133
第56図　ＳＫＦ42・43袋状土坑及び出土遺物…… 134
第57図　ＳＫＩ29竪穴状遺構 …… 136
第58図　ＳＫＩ29竪穴状遺構出土遺物、ＳＫ44土坑…… 137
第59図　遺構外出土遺物（1）…… 139
第60図　遺構外出土遺物（2）…… 140

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧…… 6

田ノ沢山遺跡

第２表　縄文土器観察表…… 67
第３表　石器観察表…… 69
第４表　出土炭化材樹種同定結果…… 71
第５表　放射性炭素年代測定および
　歴年代較正の結果…… 73

谷地中遺跡

第６表　縄文土器観察表…… 141
第７表　石器観察表…… 142
第８表　出土炭化材樹種同定結果…… 144
第９表　放射性炭素年代測定および
　歴年代較正の結果…… 146

図　版　目　次

田ノ沢山遺跡

図版１　遺跡全景
図版２　遺跡全景、北側調査区検出遺構
図版３　検出遺構（1）
図版４　検出遺構（2）
図版５　検出遺構（3）
図版６　検出遺構（4）
図版７　検出遺構（5）
図版８　検出遺構（6）
図版９　検出遺構（7）
図版10　検出遺構（8）
図版11　検出遺構（9）
図版12　検出遺構（10）
図版13　検出遺構（11）
図版14　出土遺物（1）
図版15　出土遺物（2）
図版16　出土遺物（3）
図版17　出土遺物（4）
図版18　出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真

谷地中遺跡

図版19　遺跡近景
図版20　検出遺構（1）
図版21　検出遺構（2）
図版22　検出遺構（3）
図版23　検出遺構（4）
図版24　検出遺構（5）
図版25　検出遺構（6）
図版26　検出遺構（7）
図版27　検出遺構（8）
図版28　検出遺構（9）
図版29　検出遺構（10）
図版30　出土遺物（1）
図版31　出土遺物（2）
図版32　出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真（1）
図版33　出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真（2）
図版34　出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真（3）

はじめに

調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市へと至る日本海沿岸の高速交通体系を改善し、以て沿線諸地域の生産活動や情報・物資の交通を促進すべく計画された、総延長340kmの高速道路である。このうち秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路と連結し、小坂ジャンクション（Ｊ.Ｃ.Ｔ）で東北自動車道に接続する。平成９年２月に新潟市～青森市までが日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうち秋田南インター・チェンジ（Ｉ.C）～昭和男鹿半島Ｉ.C間の25.7kmについては、同年11月13日に開通している。また、平成13年７月には河辺Ｉ.C～秋田空港Ｉ.C間が開通し、平成14年には、琴丘・森岳Ｉ.C～能代南Ｉ.C間（３月・17.1km)、昭和・男鹿半島Ｉ.C～琴丘・森岳Ｉ.C間（９月・20.7km)、岩城Ｉ.C～秋田空港Ｉ.C間（10月・14.8km）がそれぞれ開通している。

田ノ沢山・谷地中遺跡が所在する大館北Ｉ.C～小坂Ｊ.Ｃ.Ｔ間の14.5kmについては、平成８年12月に整備計画区間に設定され、平成11年１月の実施計画認可を経て、平成11年３月に路線が発表された。[註1] これを受けて秋田県教育委員会は、平成14年から翌15年にかけて大館北Ｉ.C～小坂Ｊ.Ｃ.Ｔ間を対象とした遺跡分布調査を行い、その結果、田ノ沢山・谷地中両遺跡が確認調査の対象となった。秋田県教育委員会は、田ノ沢山遺跡の確認調査を平成15年10月14日から11月４日にかけて20,000㎡を対象として実施した。[註2] その結果、縄文時代前期・後期の集落跡であることが判明し、工事区域内遺跡面積2,400㎡が発掘調査区域として認定した。発掘調査は、平成16年５月11日から７月６日にかけて実施され、縄文時代の竪穴住居跡や多数のフラスコ状土坑などを検出した。

谷地中遺跡の確認調査は500㎡を対象として、田ノ沢山遺跡と平行して平成15年10月14日から11月４日にかけて実施した。[註3] その結果、縄文時代の遺跡であることが判明し、工事区域内遺跡面積500㎡をそのまま発掘調査区域として認定した。発掘調査は、平成16年７月７日から８月19日にかけて実施され、多数のフラスコ状土坑や袋状土坑、古代に構築されたと考えられる竪穴状遺構などを検出した。

調査要項（※職名等は発掘調査当時のものである）

（田ノ沢山遺跡）

遺　跡　名	田ノ沢山遺跡（たのさわやまいせき）
遺 跡 略 号	２ＴＮＳＹ
遺跡所在地	秋田県大館市商人留字田ノ沢100－１
調 査 期 間	平成16年５月11日～７月６日
調 査 目 的	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調 査 面 積	2,400㎡
調査主体者	秋田県教育委員会

調査担当者	河田　弘幸（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　学芸主事）
	安田　博生（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　学芸主事）
	成田　雄毅（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　調査・研究員）
総務担当者	渡辺　　憲（秋田県埋蔵文化財センター総務課　課長）
	池端　　徹（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　副主幹）
	高橋　　修（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任）
	田口　　旭（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
調査協力機関	日本道路公団東北支社秋田工事事務所　大館市　大館市教育委員会

（谷地中遺跡）

遺　跡　名	谷地中遺跡（やちなかいせき）
遺 跡 略 号	２ＹＴＮ
遺跡所在地	秋田県大館市商人留字谷地中83外
調 査 期 間	平成16年７月７日～８月20日
調 査 目 的	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調 査 面 積	500㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	河田　弘幸（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　学芸主事）
	安田　博生（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　学芸主事）
	成田　雄毅（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　調査・研究員）
総務担当者	渡辺　　憲（秋田県埋蔵文化財センター総務課　課長）
	池端　　徹（秋田県埋蔵文化財センター北調査課　副主幹）
	高橋　　修（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任）
	田口　　旭（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
調査協力機関	日本道路公団東北支社秋田工事事務所　大館市　大館市教育委員会

註１　日本道路公団東北支社　秋田工事事務所　『高速自動車国道　日本海沿岸東北自動車道（大館～小坂間）』
　　2002（平成14）年
註２　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第380集
　　2004（平成16）年
註３　註２と同じ

遺跡の環境

遺跡の位置と立地

田ノ沢山・谷地中遺跡の所在する大館市は、秋田県北東部、奥羽山脈の西側にある大館盆地に位置し、東は鹿角市と小坂町、西は田代町、南は北秋田市と比内町、北は青森県碇ヶ関村にそれぞれ隣接している。大館盆地の周囲を取り巻く山地は地塊構造がよく発達している。北西側には白神山地、東側には高森山地、南西側には摩当山地があり、田ノ沢山遺跡は高森山地に立地する[註1]。また、盆地内部には、米代川をはじめ、その支流長木川・下内川・犀川他たくさんの小河川が流れ、それぞれの河川の流域には河岸段丘が見られる。これらの段丘は、その生成時期の新古によって大きく５つに分類することができ、谷地中遺跡は第３段丘－洪積台地の上に立地する[註2]。

田ノ沢山遺跡は、盆地を取り巻く山地帯北東域の丘陵に立地し、ＪＲ奥羽本線大館駅より北東へ約5.6km、北緯40°19′19″、東経140°36′19″に位置する。遺跡の標高は134～148mで、南西から北東へと下る急峻な斜面をなし、遺跡中央に大きな沢が入り込む。遺跡はこの沢により、北側調査区と南側調査区に二分される。遺跡の北側には農業用水を供する釈迦池があり、東側を農免農道白沢大茂内線が走っている。

谷地中遺跡は、盆地北半域にある河岸段丘末端に所在し、ＪＲ奥羽本線大館駅より北東へ４km、北緯40°18′50″、東経140°35′17″に位置する。遺跡の標高は80～82mで、東側に小さい沢が入り込む。遺跡の北西約0.7kmには国指定天然記念物芝谷地湿原植物群落があり、また遺跡の南西約1.2kmには、田ノ沢山・谷地中遺跡と同様に日本海沿岸東北自動車道建設事業に係り、平成13年度から発掘調査が始まった平安時代の集落跡である、釈迦内中台Ｉ遺跡がある。

遺跡の歴史的環境

田ノ沢山・谷地中遺跡が所在する大館市には、旧石器時代から近世までの遺跡が多数確認されており、米代川とその支流群によって形成された河岸段丘や、低丘陵地上に多く分布している[註3]。本節では、それらのうち、旧石器時代から中世までの遺跡について概観する。

１　旧石器時代の遺跡

旧石器時代の遺跡としては、大型の石刃が発見された松木高館平遺跡があげられる[註4]。この石刃の素材は頁岩で、後期旧石器時代に属し、現在のところ旧石器時代唯一の遺跡である。第四紀洪積世の終末期（１～３万年前）には、十和田火山が数次にわたる大爆発を起こしており、一度につき周囲約7,000km^{2}を火砕流が埋めつくしたと言われている。この時代の遺跡・遺物の発見が少ない理由の一つとして、十和田火山の火砕流により埋没した可能性が高い。

２　縄文時代の遺跡

田ノ沢山遺跡は、縄文時代前期と後期の集落跡を主体とした遺跡であり、谷地中遺跡は、縄文時代

晩期中葉の貯蔵場所・墓域である。この他、縄文時代各期を代表する著名な遺跡を古いものからあげてみると、上ノ山Ⅰ遺跡、池内遺跡、萩ノ台Ⅱ遺跡、寒沢遺跡、家ノ後遺跡などがある。上ノ山Ⅰ遺跡は、縄文時代早期から晩期まで断続的に生活の痕跡が残っていた遺跡であり、特に縄文時代前期に大きな集落が営まれていた。(註5) この前期の層からは、緑泥変岩に半打・半磨の特殊な製法を施した鋒形石器が２点出土している。池内遺跡は、縄文時代前期の集落跡で、数多くの竪穴住居跡・大形住居跡、掘立柱建物跡や土坑群が検出されており、台地上には集落が想定される。(註6) 豊富な動植物遺存体も出土しており、山形の文様を彫刻したクルミの殻が日本で初めて発見された。この山形の文様は、同遺跡から出土した土器や建築材にも描かれている。上ノ山Ⅰ遺跡と共に当時期の集落を考える上で貴重な遺跡である。萩ノ台Ⅱ遺跡では、台地の斜面から縄文時代前～中期と後期の「捨て場」が発見された。(註7) 縄文時代前～中期を主体とする捨て場からは、円筒下層式・上層式土器や岩偶など、米代川流域に特徴的な遺物が多く出土しており、縄文時代後期を主体とする捨て場からは、十腰内１式・２式土器とともに翡翠の大珠３点が出土している。翡翠は新潟県糸魚川に産地が限定されるため、当時の交易圏の広さをものがたる資料として重要である。寒沢遺跡は、縄文時代後期の集落跡を主体とする遺跡である。(註8) ７軒の竪穴住居跡が検出されているが、特筆すべきは出土した土器のバリエーションの豊富さである。注口土器・台付皿・台付鉢・壺・鉢・小皿・深鉢・浅鉢・異形台付土器などが出土しており、縄文人の豊かな土器文化を現在に伝えている。家ノ後遺跡は、縄文時代晩期の墓域である。(註9) 展開区域を異にする土坑墓群－墓域が２つあり、墓域の近くからは建物群の存在を想定させるような柱穴様ピットが多数検出された。また、「捨て場」を２か所擁しており、この墓域・建物群・捨て場というセット関係は、縄文時代後期～晩期の大湯環状列石やその周辺の遺跡など、他の遺跡とも共通するものである。

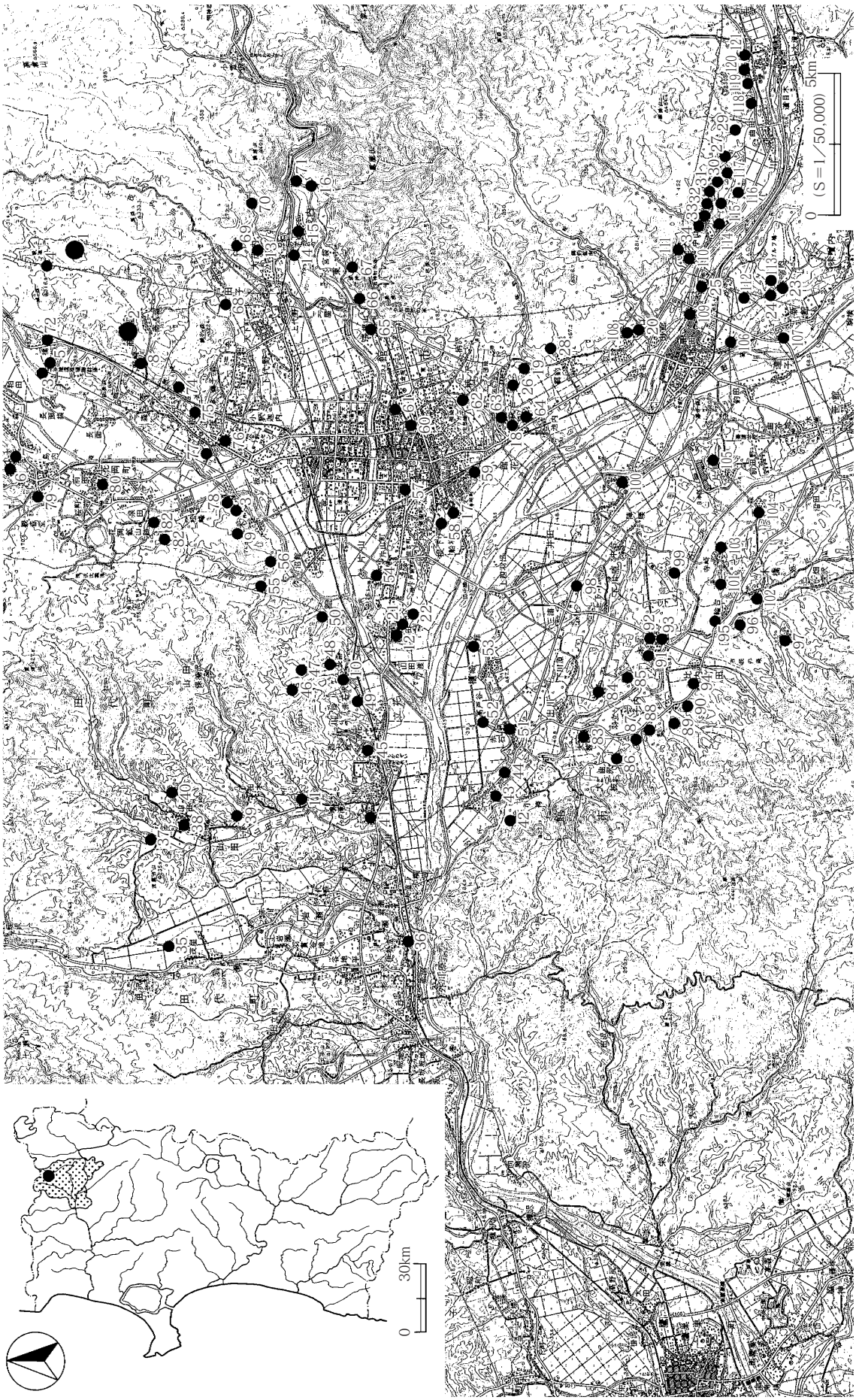
３　弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡としては、秋田県北部で唯一発掘調査がなされた弥生集落、諏訪台Ｃ遺跡が著名である。(註10) 直径７～８m以上の大形竪穴住居が６軒検出され、遺構の重複から、３時期にわたって集落を営んでいたことが明らかになっている。

４　古代の遺跡

古代に入ると、平安時代の集落跡である釈迦内中台Ⅰ遺跡がある。(註11) 一辺10mを超える50畳敷き規模の大形住居や、炭化した部材が良好な状態で残る焼失家屋など、多くの竪穴住居跡が検出された。また、こうした住居の一つから律令体制下における石製丸鞆が出土しており、10世紀半ばにおける中央政府の東北経営を窺う上でも重要な遺跡である。

この他、古代の家屋構造を現代に伝える埋没住居が、平成11年に道目木地区の河岸段丘斜面から発見されている。(註12) 10世紀頃の米代川の大洪水（シラス洪水）によって埋没したと見られ、当時の建築技法等を知る上で重要な資料となった。この道目木の事例と同じ洪水で埋没した住居・家屋は、大館市以外の米代川流域でも確認されている。中でも全国的に著名なのが、北秋田市鷹巣地区で昭和38年に発見された胡桃館遺跡の埋没家屋である。(註13) 当時の家屋構造をそのまま残して建築材が出土しており、建築史的にも大きな発見となった。こうした米代川流域における古代の埋没住居・家屋の発見については江戸時代から報告例があり、紀行家として名高い菅江真澄（1754～1829）もその著作『埋没之家居』に見聞録を残している。



第１図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	時　　代	遺　　構・遺　　物
1	田ノ沢山	大館市商人留字田ノ沢100－1	縄文　前・後・晩期 中世	竪穴住居跡　土坑　フラスコ状土坑　土器　石器
2	谷地中	大館市商人留字谷地中83外	縄文　前・晩期 古代	土坑　フラスコ状土坑　袋状土坑　土器　石器　竪穴状遺構
3	松木高館平	大館市松木高館平	旧石器	石刃
4	釈迦池	大館市商人留大沢口	縄文　前期～晩期	竪穴遺構　縄文土器　弥生土器　石器
5	福館橋桁野	大館市橋桁字前田	縄文　前・中・晩期	縄文時代竪穴住居跡　縄文土器　土師器
6	根井下	大館市花岡町字根井下	縄文　中期	縄文土器片（円筒下層式）
7	十三森	大館市花岡町字根井下	縄文　前期　晩期	円墳状遺構　縄文土器片　土師器　須恵器　中世陶器
8	狼穴	大館市釈迦内字狼穴	縄文　前期	縄文土器　土師器　須恵器　岩偶
9	松木	大館市松木字家後	縄文　前期	縄文土器（円筒下層ab式）
10	長瀞Ⅰ	大館市沼館字長瀞	縄文　中期～晩期	縄文土器　石器
11	鳴滝	大館市川口字下鳴滝岱	縄文　中・後・晩期	縄文時代竪穴住居跡　フラスコ状ピット　組石土坑　縄文土器　続縄文土器　土製品　石製品
12	餅田屋敷添	大館市餅田字中道下屋敷添	縄文　前期	不整円形土坑　縄文土器（円筒下層ab式土器）
13	諏訪台	大館市大茂台	縄文　前期～晩期	縄文・弥生・平安時代竪穴住居跡　配石遺構　縄文土器　弥生土器　土師器　石器
14	塚ノ下	大館市茂内字塚下	縄文　前期	縄文時代竪穴住居跡　フラスコ状ピット　石囲炉　縄文土器（円筒上層式大木式）土偶　石器
15	茂内	大館市茂内字膳棚下	縄文　中期	縄文土器（円筒下層ab式）
16	王林寺跡	大館市茂内字鬼ヶ台	縄文　中期	縄文時代竪穴住居跡　土坑　中世配石土坑　縄文土器　陶磁器
17	太平山	大館市神明堂後	縄文　晩期	縄文土器　土師器
18	萩ノ台Ⅱ	大館市小館花字萩ノ台	縄文　前・中期	縄文土器　石器
19	餌釣館 （山王岱）	大館市餌釣字山王岱 柄沢字山王台	縄文　中・後期	縄文・平安時代竪穴住居跡　建物跡柱穴　積石塚　土坑　空堀　縄文土器　須恵器　土師器
20	山館上ノ山	大館市山館字上ノ山	縄文　前期～晩期	縄文時代竪穴住居跡　土坑　フラスコ状ピット　平安時代竪穴住居跡　縄文土器　石器　土師器
21	芋掘沢	大館市餅田字根下戸道下芋掘沢	縄文　前・中期	石蓋甕棺　縄文土器
22	根下戸道下	大館市餅田字根下戸道下芋掘沢	縄文　早・後期	縄文土器　土師器
23	袖ノ沢	大館市比内町字宿内 袖ノ沢67－2外	古代	平安時代竪穴住居跡　土坑　溝状土坑　柱穴様土坑　土師器片
24	横沢	大館市比内町字扇田字横沢3外	縄文　早・中期	縄文・平安時代竪穴住居跡　土坑　フラスコ状土坑　板状土偶　土器片　縄文土器片
25	本道端	大館市比内町扇田字本道端44外	縄文　早・前・中・ 晩期	竪穴住居跡　土坑　集石遺構　縄文土器
26	上野	大館市池内字上野270外	縄文　前期～晩期	縄文・平安時代竪穴住居跡　土坑　フラスコ状土坑　縄文土器　弥生土器片　石器　須恵器 擦文土器　小刀　刀子
27	上聖	大館市曲田字上聖3－2外	縄文　前期～晩期	土坑　焼土遺構　縄文土器　石器
28	餌釣	大館市餌釣字山王岱 柄沢字山王台	縄文　中・後期	縄文・平安時代竪穴住居跡　中世竪穴建物跡　建物跡柱穴　空堀　柵列　積石塚　縄文土器 土師器　中国陶磁器
29	家ノ後	大館市曲田字家ノ後96－2外	縄文　中期～晩期	縄文時代竪穴住居跡　土坑　縄文土器　石器
30	野沢岱	大館市曲田字野沢岱102－4外		縄文土器　青竜刀型石器　磨製石器
31	冷水山根	大館市曲田字冷水山根56－1 71－6外	縄文　前期～後期	縄文土器　石器
32	寒沢Ⅱ	大館市曲田字寒沢77－1外	縄文　前期～後期	屋外炉　縄文土器
33	寒沢Ⅰ	大館市中山字寒沢83－1外	縄文　早・中・後期	竪穴住居跡　縄文土器　石器
34	中山	大館市中山字中山31－1	縄文　中・後期	
35	中茂屋	北秋田市山田字屋敷岱230	縄文　後期	縄文土器
36	岩瀬鉄橋畔	北秋田市岩瀬字五味1		竪穴住居跡
37	野突館	大館市山田字野月		空堀　陶器片　鉄滓
38	山田館	大館市山田字山田171		空堀
39	一本柳館	大館市山田字向家下		
40	向家下館	大館市山田字向家下		
41	川口館	大館市川口長里		空堀
42	山根岱	大館市小袴字山根岱		縄文土器
43	板沢	大館市板沢字甲上野		須恵器　中世陶器
44	板沢一里塚	大館市板沢字狐台		
45	下川沿	大館市川口字隼人岱		勾玉　土製朱彩丸玉
46	赤石沢Ⅰ	大館市川口字上赤石沢		縄文土器
47	赤石沢Ⅱ	大館市川口字上赤石沢		縄文土器
48	長瀞Ⅱ	大館市沼館字長瀞		縄文土器
49	押館	大館市川口字十三森		空堀
50	沼館	大館市沼館字細越		
51	赤石館	大館市赤石字屋敷		
52	高戸谷館	大館市櫃崎字上坂上		空堀　土師器　中世陶器
53	櫃崎館	大館市櫃崎字館宅地		
54	片山館	大館市片山字立抗上岱		続縄文時代竪穴住居跡　掘立柱建物　中世竪穴遺構　空堀　土塁　後北ｃ式土器　中世陶磁器 鉄器　銭貨
55	下堤沢	大館市沼館字下堤沢		土師器片
56	鍛冶屋敷	大館市沼館字鍛冶屋敷	縄文　後期	縄文土器　土師器　須恵器　石器
57	土飛館	大館市宗福寺後		空堀　段築
58	稲荷中岱	大館市稲荷中岱		土師器　中世陶磁器
59	小館花館	大館市小館花字萩ノ台		空堀　段築　土師器　中世陶器
60	大館城	大館市中城　三ノ丸　桂城 長倉　片町　上町		内堀　土居

61	金坂	大館市金坂		土師器　須恵器　中世陶器
62	扇田道下	大館市扇田道下	縄文　中・後期	縄文土器
63	萩ノ台Ⅰ	大館市小館花字萩ノ台	縄文　中・後期	縄文土器
64	池内	大館市池内字上野56－110	縄文　前～後期 弥生　古代	竪穴住居跡　土器　石器　土師器　須恵器　鉄製品
65	青嵐亭跡	大館市東字山屋敷下		
66	岩神			縄文土器
67	宮袋		縄文　晩期	縄文土器
68	芦田子上岱	大館市芦田子字上岱	縄文　前期	縄文土器　土師器
69	大茂内	大館市大茂内字諏訪台	縄文　前・中期	縄文土器
70	小茂内沢	大館市小茂内字上瘤之木台		縄文土器
71	鬼ヶ城	大館市茂内字鬼ヶ台		空堀　段築　桝形遺構
72	橋桁	大館市橋桁字前田	縄文　後・晩期	縄文土器
73	福館	大館市釈迦内字福館		空堀
74	釈迦内中台Ⅰ	大館市釈迦内字中台103－2号外	縄文　前期　平安 中世	竪穴住居跡　土坑　井戸　土器　石器　土師器　須恵器
75	釈迦内中台Ⅱ	大館市釈迦内字中台		土師器
76	釈迦内館	大館市釈迦内字館		段築　空堀　中世陶磁器
77	釈迦内古館	大館市釈迦内		空堀　段築
78	高館	大館市松木字高館平		空堀　段築
79	七ッ館	大館市花岡町字七ッ館	縄文　晩期	掘　段築　縄文土器　土師器　須恵器　中世陶器
80	花岡城　神山	大館市花岡町字神山　アセ石		空堀　土師器　須恵器　中世陶器
81	松峰	大館市松峰字仁王田		土師器　須恵器　中世陶器
82	大山板碑	大館市松峰字土滝		碑文（種子）”オン”年号なし
83	大披館	大館市大披字大披		郭　空堀
84	下野	大館市本宮字下野	縄文　後・晩期	縄文土器　磨製石斧　石匙
85	本宮中台	大館市本宮字中台		
86	曲沢	大館市大披字開ノ沢		縄文土器
87	林ノ上	大館市大子内字林ノ上		石器　剥片
88	大子内館	大館市大子内字三ッ梨		
89	薬師岱	大館市杉沢字薬師岱		土師器　須恵器
90	杉沢岱	大館市杉沢字姥沢出口		
91	本宮上ノ山	大館市本宮字上ノ宮善知鳥		縄文土器　土師器　寛永通宝
92	本宮寺ノ沢	大館市本宮寺ノ沢		土師器
93	本宮館	大館市本宮字熊ノ下		郭　空堀　中世陶磁器
94	前田館	大館市比内前田字前田山根		竪穴住居跡　堀立柱建物２棟　板井遺構　谷地堀　土師器　中世陶器
95	五輪台Ⅱ	大館市比内町八木橋 字五輪台128外	縄文　晩期	縄文土器片
96	五輪台Ⅰ	大館市比内町八木橋 字五輪台3－1外	縄文　晩期	縄文土器片
97	一通	大館市比内町八木橋 字一通41－1外	縄文　晩期	縄文土器片
98	けらき森一里塚	大館市二井田字館		
99	ぱっこ沢	大館市本宮パッコ沢	縄文　晩期	縄文土器　石器
100	二井田館	大館市二井田館		
101	寺崎Ⅱ	大館市比内町八木橋 字竹原2－1外	縄文　晩期	縄文土器片
102	八木橋城	大館市比内町八木橋 字八木橋63外		郭　空堀
103	寺崎Ⅰ	大館市比内町八木橋字寺崎1外	縄文　晩期	縄文土器片
104	二ッ森	大館市比内町片貝 字二ッ森132－2外	縄文　晩期	縄文土器片
105	片貝	大館市比内町片貝 字伊勢堂北76－5外	縄文　晩期	縄文土器片
106	長岡城	大館市比内町扇田字長岡41外		腰郭　堀跡
107	真館	大館市比内町新館 字真館100－1外		竪穴住居跡　土坑　土師器片　須恵器
108	山館	大館市山館字館ノ上		土師器　中世陶磁器
109	市川	大館市比内町扇田字本道端65外		
110	竜毛岱	大館市中山字竜毛岱	縄文　中・後期	縄文土器　須恵器
111	兎沢	大館市中山字兎沢		縄文土器
112	大岱	大館市比内町字扇田南大岱	縄文　前期	縄文土器片　土師器
113	横沢	大館市比内町字扇田 字横沢128－1外		土師器片
114	野沢岱Ⅰ	大館市曲田字野沢岱	縄文　前期	縄文土器
115	野沢岱Ⅱ	大館市曲田字野沢岱	縄文　中期	縄文土器　石器
116	下聖	大館市曲田字下聖	縄文　前期～後期	縄文土器
117	野沢岱Ⅳ	大館市曲田字野沢岱	縄文	縄文土器　石器　土師器　須恵器
118	沢口	大館市曲田字沢口	縄文　後期	縄文土器
119	鳶ヶ長根Ⅱ	大館市軽井沢字鳶ヶ長根	縄文　晩期	土壙　縄文土器　石器
120	鳶ヶ長根Ⅲ	大館市軽井沢字鳶ヶ長根	縄文　晩期	縄文時代竪穴住居跡　土坑　縄文土器　石器
121	鳶ヶ長根Ⅳ	大館市軽井沢字鳶ヶ長根	縄文　早・前期 ～晩期	縄文時代竪穴住居跡埋甕炉　埋設土器　土坑　縄文土器　弥生土器

５　中世の遺跡

中世の遺跡では、主たるものとして矢立廃寺跡があげられる[註14]。下内川右岸の段丘上にあり、総門や山門、仏殿など、宗教施設と考えられる建物跡が並んで検出された。古くから知られた遺跡で、菅江真澄は現在秋田市にある松原補陀寺の前身と考え、口伝では藤原藤房が隠棲した寺院とされているが、未だ特定はできていない。いずれにせよ、秋田県内では数少ない中世の寺院跡であり、当時の宗教の在り方をものがたる遺跡として重要である。

参考文献
註１　大館市史編さん委員会　『大館市史』第１巻　1979（昭和54）年
註２　註１と同じ
註３　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版)』　1991（平成３）年
註４　秋田県教育委員会　『秋田ふるさと紀行ガイドブック　史跡・考古編』　1999（平成11）年
註５　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』
秋田県埋蔵文化財調査報告書　第166集　1988（昭和63）年
註６　秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅷ－　遺構篇』
秋田県埋蔵文化財調査報告書　第268集　1997（平成９）年
註７　秋田県教育委員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－萩ノ台Ⅱ遺跡』
秋田県文化財調査報告書第236集　1993（平成５）年
註８　秋田県教育委員会　『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－寒沢遺跡－』
秋田県文化財調査報告書　第254集　1995（平成７）年
註９　秋田県教育委員会　『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－家ノ後遺跡－』
秋田県文化財調査報告書　第229集　1992（平成４）年
註10　秋田県教育委員会　『諏訪台Ｃ遺跡－釈迦内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』
秋田県文化財調査報告書　第196集　1990（平成２）年
註11　秋田県教育委員会　『平成15年度　秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』　2004（平成16）年
註12　板橋範芳　「道目木遺跡埋没家屋調査概報」『大館市郷土博物館研究紀要　火内』　創刊号
2000（平成12）年　大館市郷土博物館
註13　鷹巣町史編纂委員会　『鷹巣町史　第一巻』　1988（昭和63年）
註14　註１と同じ

ー　田ノ沢山遺跡　ー

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

田ノ沢山遺跡は、大館盆地を取り巻く山地帯北東域の丘陵上に立地し、元々は山林であった。遺跡は、中央部を開析する沢によって北側調査区と南側調査区に分けられる。両調査区ともに、南西から北東へと下るゆるやかな斜面上に遺構を構築しており、遺跡の標高は134～148mである。

第２節　調査の方法

１　野外調査

調査はグリッド法を採用した。調査区全域に世界測地系平面直角座標第Ｘ系の座標北を基準として、(X＝36171.603 ，Y＝－19586.669) を原点とする各４m間隔の方眼を設定した。方眼の原点を通る南北線をＭＡ、同じく東西線を50とし、南北線は西に向かってアルファベットを昇順、東西線は北に向かって数字の符号を昇順となるようにして付した。なお、南北線に付した２文字のアルファベットはＡ～Ｔまでの20文字の繰り返しで、ＭＡ～ＭＴ、ＬＡ～ＬＴと記述する。この方眼によって画する４m四方の区画は、その南東隅を通る南北線の符号と、東西線の符号とを組み合わせて「ＭＡ50グリット」のように呼称した。磁北は、座標北から西へ８°50′偏する。

遺構には種類別で略号を付し、あわせて検出順に連番で遺構番号を付した。なお、南北調査区を区別するために、北側調査区の検出遺構は01から、南側調査区は101から付している。遺構の調査は、原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、２分割法または４分割法による精査を行った。遺物は基本的にグリット単位で取り上げ、出土した層位、グリット名または遺構名、採取年月日を記録した。

記録は、写真と図面に拠った。遺構や遺物を対象とする写真撮影は、35mm版カメラでモノクロ、カラーリバーサル（スライド用)、ネガカラーの各フィルムを使用して行った。遺跡全景写真については、ラジコンヘリコプターに中版カメラを搭載して空中撮影を行った。遺構の平面図、断面図の計測は、基本的に縮尺1/20の手実測で行い、細部表現が必要なところについては縮尺を1/10とした。また、遺構配置図やコンター図の作成にはトータルステーションを使用した。

２　室内整理

現場で作成した実測図を第１原図とし、これをもとに平面図と断面図を組み合わせた図を第２原図とした。第２原図の作成にあたっては、第１原図をスキャナーで取り込んでデータ化し、パソコン上で平面図と断面図を組み合わせた。また、トータルステーションのデータも同じくパソコン上で展開・処理した。トレースはすべてプロッターで行った。

遺物は、洗浄・注記後に報告書へ記載するものを選別した。その後基本的に１／１で実測図を作成し、報告書に記載するにあたって、適宜縮尺を変えてトレースした。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などについては拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

第３節　調査の経過

５月11日　田ノ沢山遺跡の発掘調査を開始した。北側調査区から粗掘りを始める。

５月13日　北側調査区から縄文時代後期の土器片が少量出土。大館警察署より警官来跡。遺跡付近で行方不明者が出たため、目撃情報等を求められる。

５月14日　北側調査区東部の沢沿いで土坑を検出する。

５月21日　北側調査区の調査と平行して、南側調査区の粗掘りを始める。

５月24日　南側調査区の伐根から、完形の小形壺形土器が出土する。

５月25日　北側調査区の中央部沢沿いにてフラスコ状土坑を検出する。北側調査区の遺構は、全て沢沿いに一列で並んでいることが明らかになった。

５月28日　南側調査区中央部で地床炉と石囲炉を検出し、竪穴住居跡であることが判明した。

６月 ４日　南側調査区西側で中世の所産と考えられる１間×２間の掘立柱建物跡を検出する。

６月 ７日　北側調査区精査終了。午後、花岡公民館にて作業員の健康診断を行う。

６月 ９日　南側調査区西部から、副葬品と考えられる打製石斧を伴った土坑墓を検出する。

６月10日　北側調査区の引き渡しを行う。出席者は、日本道路公団永井氏、文化財保護室谷地学芸主事、北調査課榮主任学芸主事、河田である。また、同メンバーで谷地中遺跡の現地協議も行った。

６月14日　北鹿新聞社木野内記者が取材のため来跡。

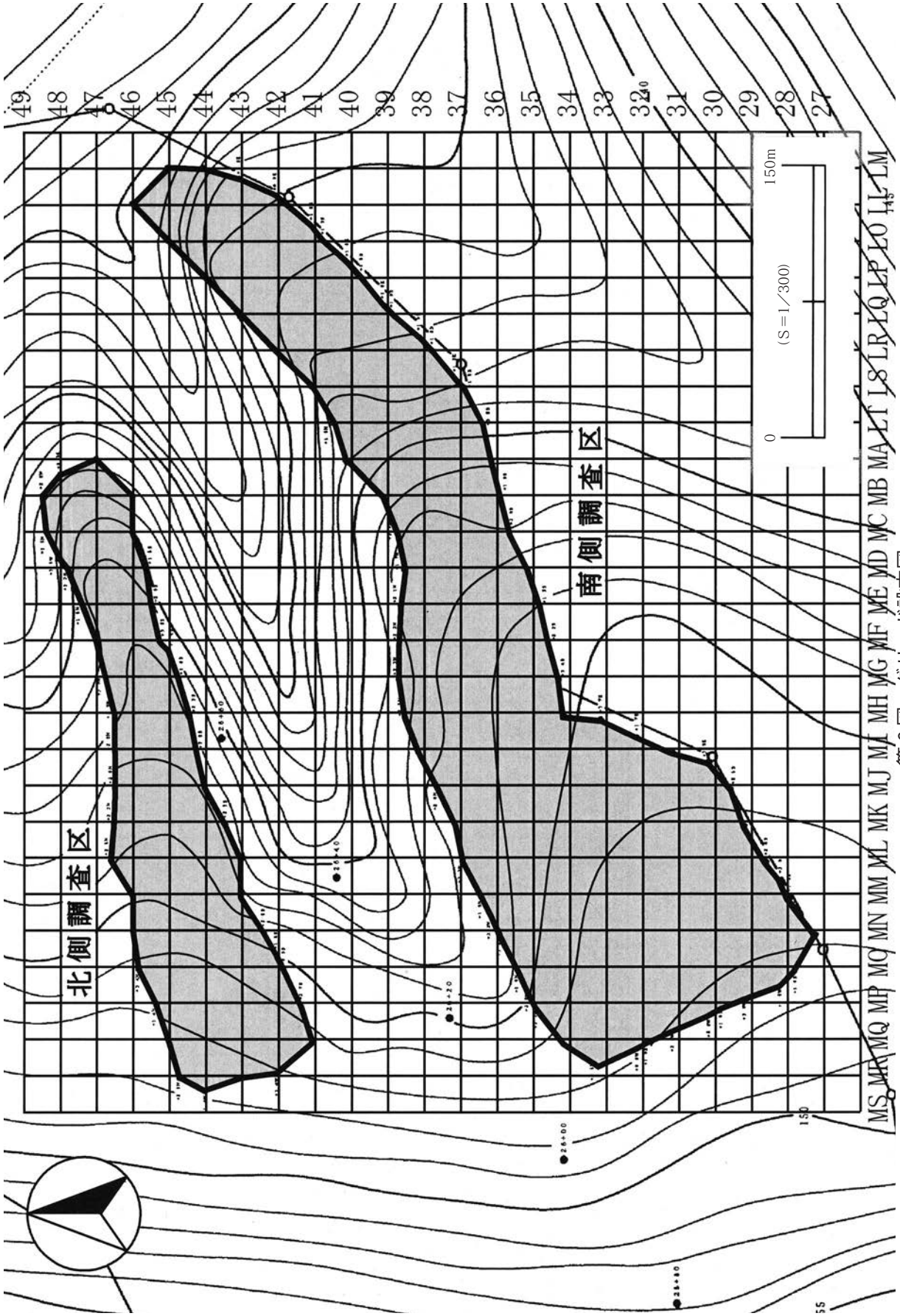
６月15日　北鹿新聞にて「フラスコ状土坑十数基」との見出しで本遺跡の現況が報道される。

６月22日　台風接近のため、調査を休止する。

６月25日　南側調査区東部平場にて検出されたフラスコ状土坑を精査したところ、底面に２基の小規模なフラスコ状土坑を伴うことが明らかになった。

７月 ５日　遺跡全景の空中写真撮影にむけて、遺跡内の清掃を行う。

７月 ６日　午前中、南側調査区の引き渡しを行う。出席者は、日本道路公団木田氏他１名、文化財保護室磯村学芸主事、鎌田副所長、小林北調査課長、河田である。その後、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。午後から発掘機材を谷地中遺跡へ搬出し、田ノ沢山遺跡の発掘調査を終了した。


北側調査区
南側調査区
0
150m
(S=1/300)
MS MR MQ MP MO MN MM ML MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA LT LS LR LQ LP LO LL LM

第２図　グリッド設定図

第２章　調査の記録

第１節　基本層位

北側調査区及び南側調査区は山林として利用されていた。北側調査区・南側調査区とも４層に分かれ、層位はそれぞれ対応する。Ⅰ層は黒色土の表土であり、層厚は30～40㎝程である。Ⅱ層は二次堆積した火山灰である。この火山灰は十和田ａ火山灰であり、流出のため所々に堆積している。Ⅲ層は黒褐色であり、北側調査区では流出のため一部に残存しており、南側調査区では層を形成している。層厚は10㎝程である。Ⅳ層は黒色土の遺物包含層であり、層厚は20㎝程である。遺物はⅣ層から出土しており、遺構の掘り込み面も基本的にはⅣ層と考えられる。

第２節　北側調査区検出遺構

１　検出遺構の概要

遺構確認面はすべて地山であり、検出遺構は以下のとおりである。

縄文時代の土坑１基、フラスコ状土坑９基である。遺物は供伴しなかったがＳＫＦ07の放射性炭素年代測定結果（2,650±30ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ920～750）から本遺構の構築時期は晩期中葉と考えられる。検出したフラスコ状土坑は、規模や形態が類似し、ほとんど重複することなく１列に並んでいることから他のフラスコ状土坑もほぼ同時期に構築されたと考えられる。

２　縄文時代の遺構

（1）土坑

ＳＫ11土坑（第５図、図版３）

《位　　置》　ＭＬ43区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面でＳＫＦ09と重複して確認した。

《重　　複》　ＳＫＦ09を掘り込んでいる。

《規模と平面形》　平面形は、長軸154㎝、短軸124㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から40㎝である。主軸方向はN－ 33°－Eである。

《埋　　土》　単一層である。基本土層Ⅳ層に由来する一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　南側はほぼ垂直に、北側はやや緩やかに立ち上がっている。

《底　　面》　鍋底状を呈し、堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

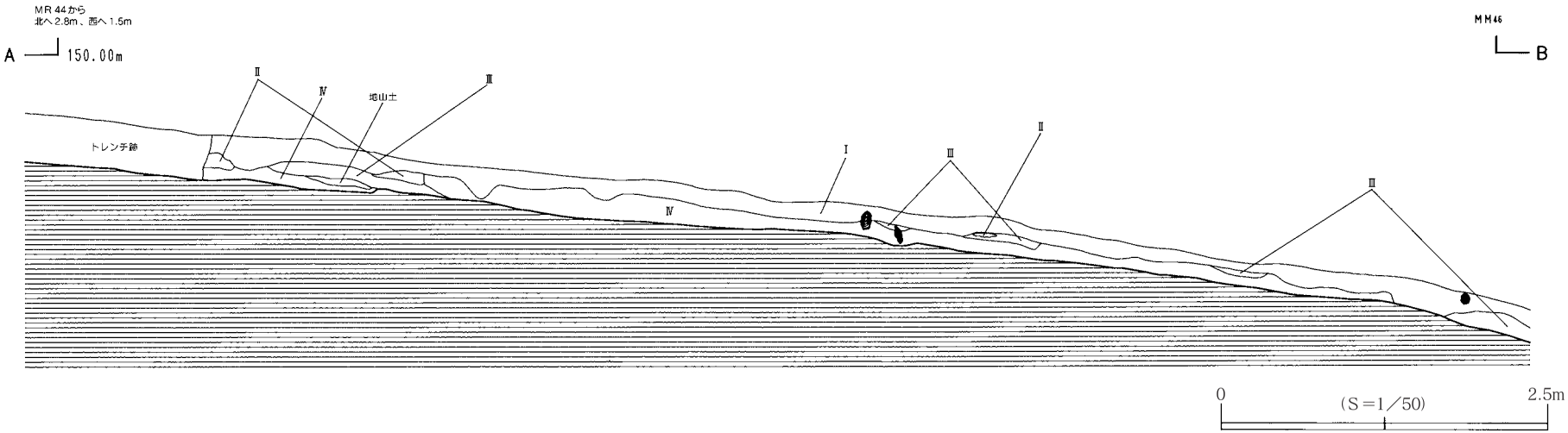
《考　　察》　重複関係より、晩期中葉以降と考えられる。他のフラスコ状土坑と規模や形態が異なり性格等は不明である。

（2）フラスコ状土坑

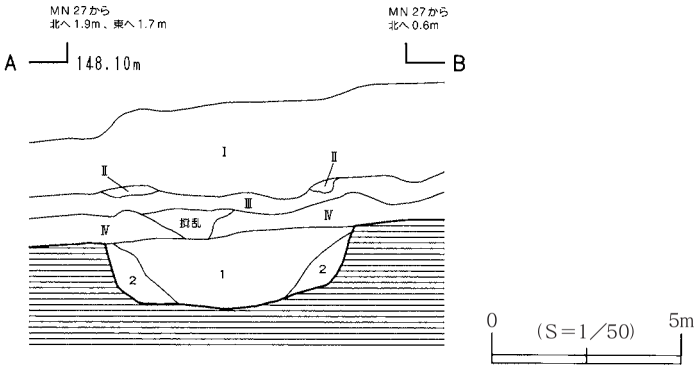
ＳＫＦ03フラスコ状土坑（第６図、図版３）

《位　　置》　ＭＥ45、ＭＦ45区に位置する。

北側調査区基本土層



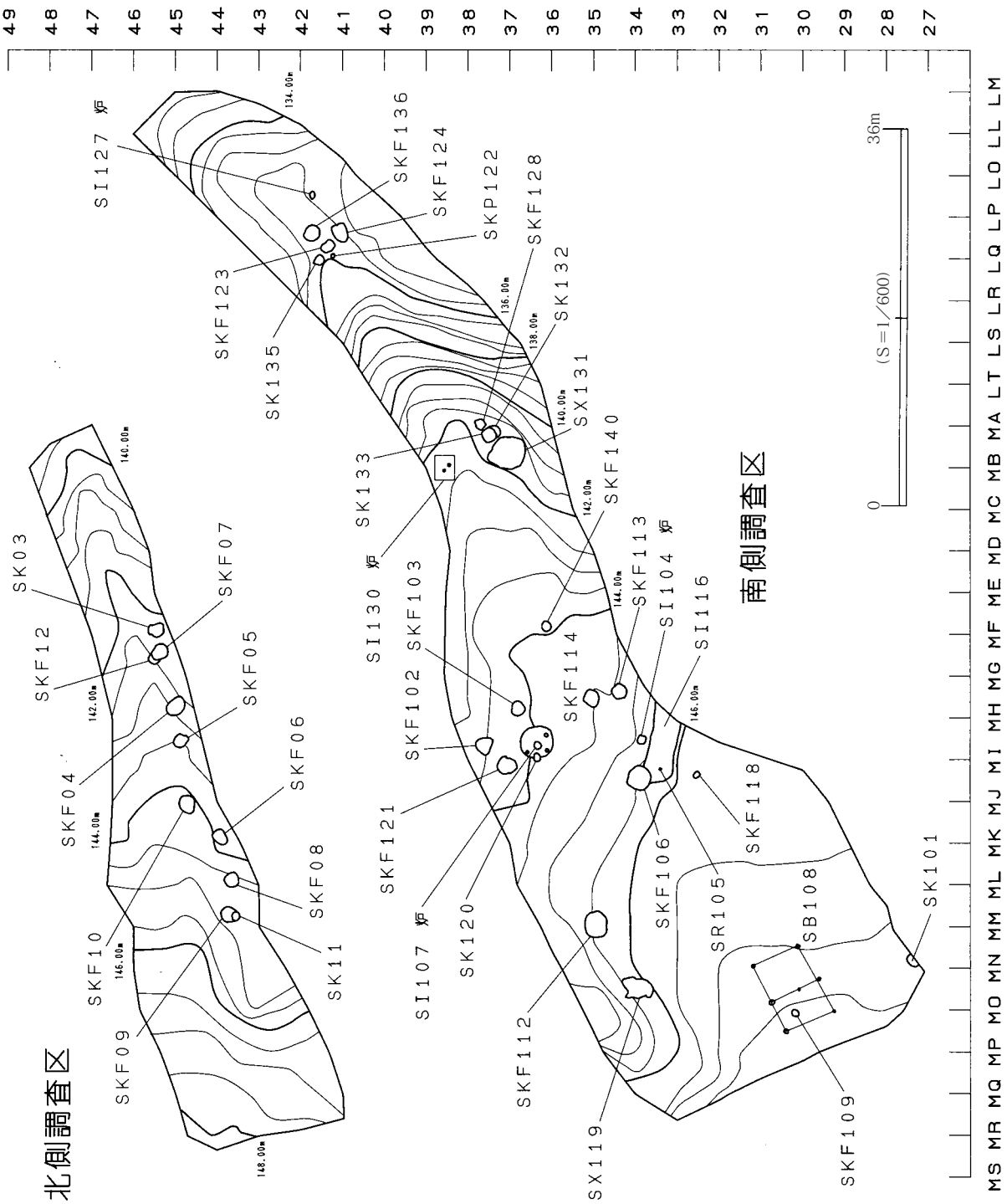
南側調査区基本土層



北側基本土層
- Ⅰ　黒色土（10YR1.7/1～10YR2/1）しまり普通　粘性強い　クレイローム
- Ⅱ　黄橙色土（10YR7/8）　テフラ　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土少量含む
- Ⅲ　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性強い　クレイローム
- Ⅳ　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　クレイローム

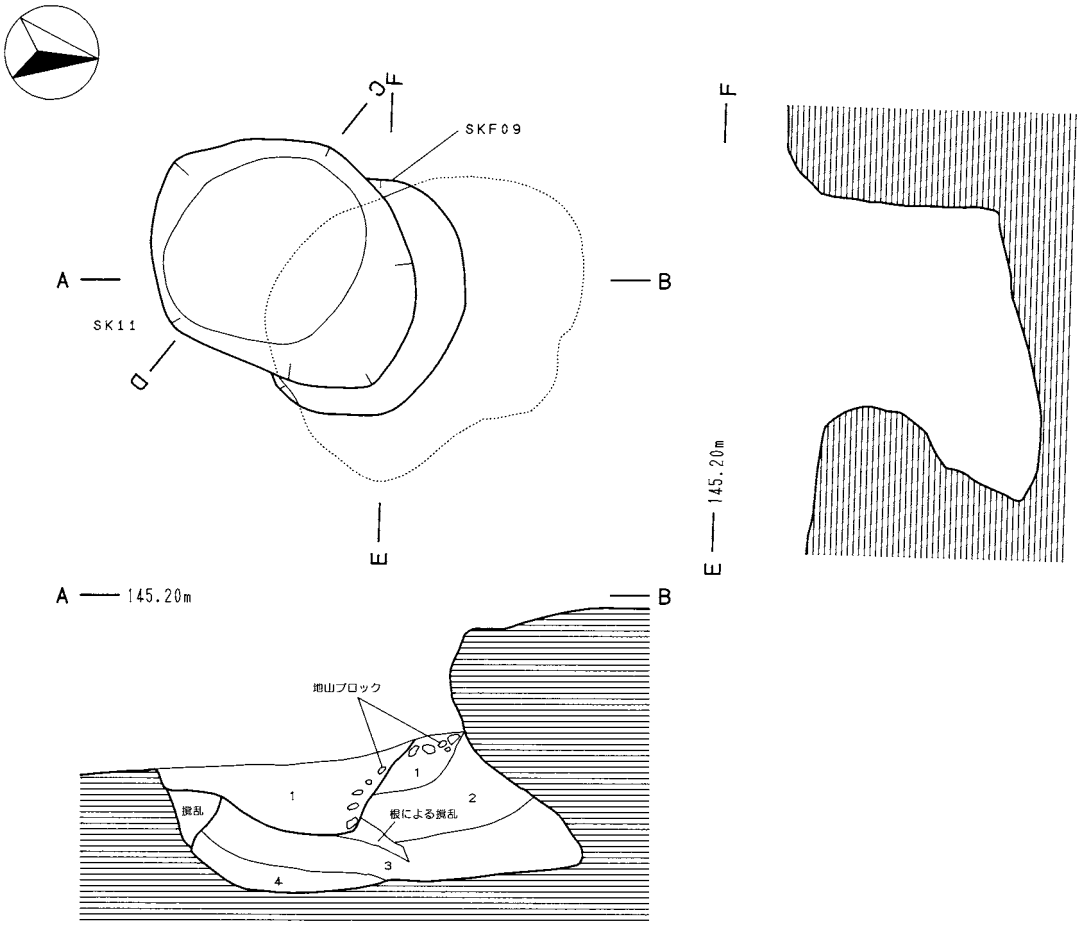
南側基本土層
- Ⅰ　黒色土　（10YR1.7/1～10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　クレイローム
- Ⅱ　黄橙色土（10YR7/8）　テフラ　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土少量含む
- Ⅲ　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性強い　クレイローム
- Ⅳ　黒色土　（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　クレイローム

第３図　北側調査区・南側調査区基本土層


北側調査区
南側調査区
SI127 炉
SKF136
SKF124
SKP122
SKF128
SKF123
SK135
SK132
SX131
SK133
SI130 炉
SKF140
SKF113
SI104 炉
SI116
SKF114
SKF103
SKF102
SKF121
SI107 炉
SK120
SKF112
SX119
SKF106
SR105
SB108
SKF118
SKF109
SK101
SK03
SKF12
SKF07
SKF05
SKF04
SKF06
SKF08
SKF10
SK11
SKF09
(S=1/600)
0
36m
134.00m
136.00m
138.00m
140.00m
142.00m
144.00m
146.00m
148.00m
49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27
MS MR MQ MP MO MN MM ML MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA LT LS LR LQ LP LO LL LM

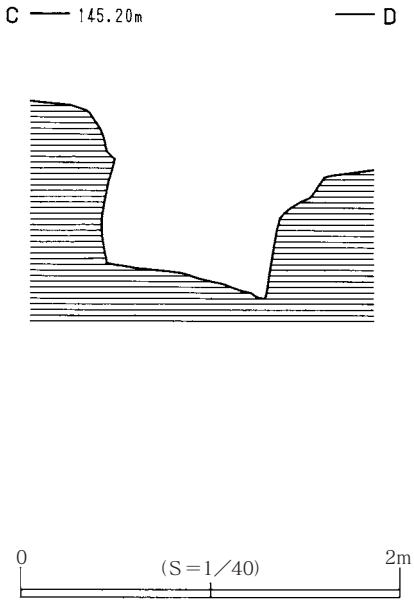
第4図　遺構配置図

ＳＫ１１・ＳＫＦ０９



ＳＫ11
　1　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ５～10mm25%）
　　地山ブロック含む（φ４cm）

ＳＫＦ09
　1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm15%）
　　地山ブロック含む（φ５～６cm30%）
　2　黄褐色土（10YR5/6）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ５～10mm10～15%）
　　黒褐色土含む（15%）
　3　にぶい黄褐色土　黄褐色土（10YR5/4～10YR5/6）
　　しまり強い　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm20%）
　4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
　　しまり強い　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm10%）



第５図　ＳＫ11土坑、ＳＫＦ09フラスコ状土坑

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸136㎝、短軸124㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から72㎝である。最大径部位の平面形は、長軸142㎝、短軸136㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 88°－Eである。

《埋　　土》　９層に分けた。第６～８層は開口部の地山崩落土であり、その他の層も地山崩落土混入の層が多く、基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　北側から南側にかけて壁低位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ04フラスコ状土坑（第６図、図版３）

《位　　置》　ＭＧ44・45区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸212㎝、短軸131㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から82㎝である。最大径部位の平面形は、長軸230㎝、短軸166㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 50°－Wである。

《埋　　土》　３層に分けた。第２層は地山崩落土であり、第１層は沢に向かっての流込土である。基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　北側から南側にかけて壁低位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。なお、第１規層から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は4,520±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ3,360－3,090（95.4%）を示す。この結果は、ＳＫＦ07より旧い数値を示しているが、土坑の堆積土に旧い炭化材が混入したものと考えられ、遺構構築時期の根拠にはなり得ない。本遺構は、規模や形態からＳＫＦ07の構築時期同様、晩期前葉から中葉と考えられる。

ＳＫＦ05フラスコ状土坑（第７図、図版３）

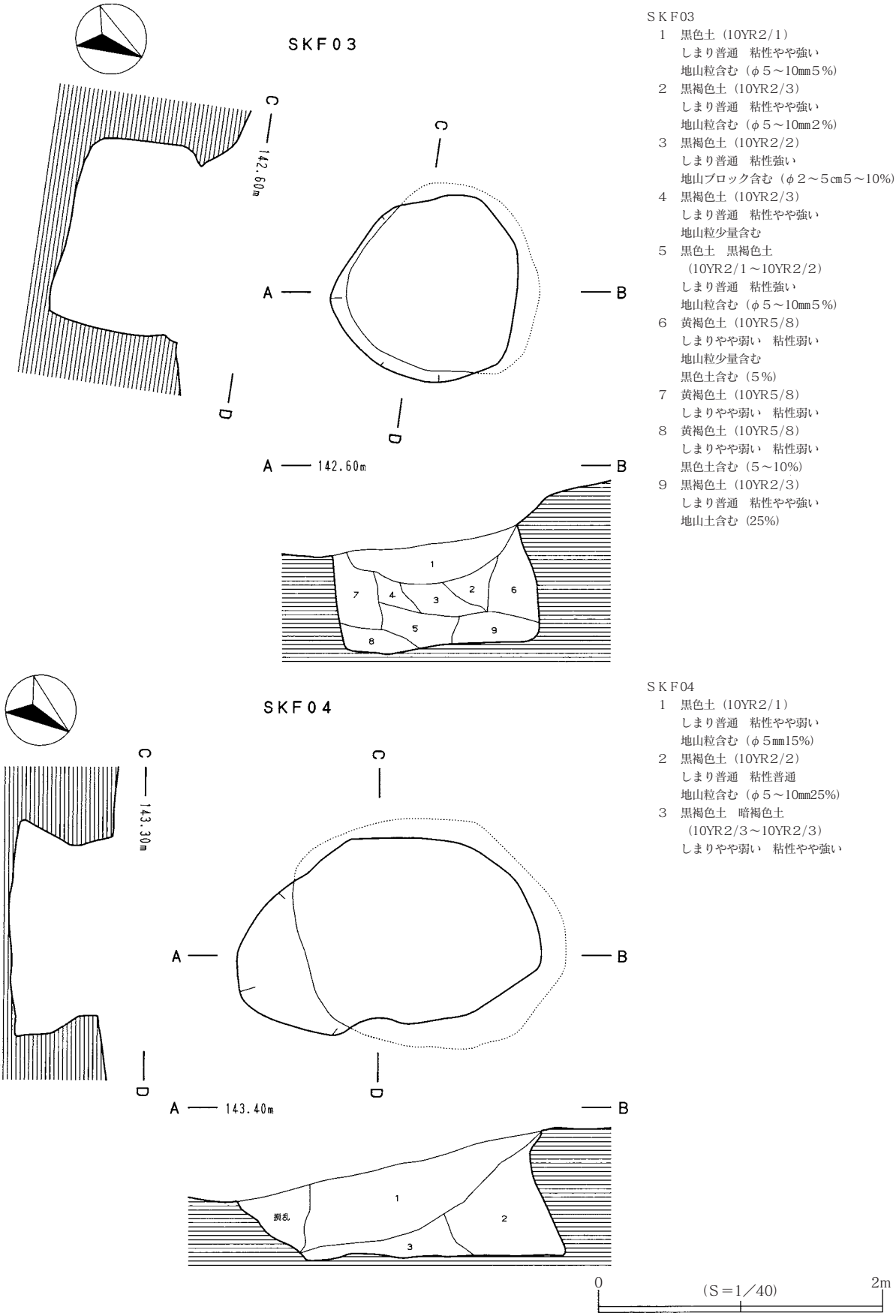
《位　　置》　MH44・45区に位置する。

《確　　認》　プランがはっきりしなかったため、サブトレンチを入れ地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸118㎝、短軸104㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から106㎝である。最大径部位の平面形は、長軸128㎝、短軸106㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 41°－Eである。

《埋　　土》　９層に分けた。第６層はレンズ状に堆積し、第５層は地山崩落土混入の埋土であ



ＳＫＦ03
1　黒色土（10YR2/1）
　しまり普通　粘性やや強い
　地山粒含む（φ５～10mm５%）
2　黒褐色土（10YR2/3）
　しまり普通　粘性やや強い
　地山粒含む（φ５～10mm２%）
3　黒褐色土（10YR2/2）
　しまり普通　粘性強い
　地山ブロック含む（φ２～５cm５～10%）
4　黒褐色土（10YR2/3）
　しまり普通　粘性やや強い
　地山粒少量含む
5　黒色土　黒褐色土
　（10YR2/1～10YR2/2）
　しまり普通　粘性強い
　地山粒含む（φ５～10mm５%）
6　黄褐色土（10YR5/8）
　しまりやや弱い　粘性弱い
　地山粒少量含む
　黒色土含む（５%）
7　黄褐色土（10YR5/8）
　しまりやや弱い　粘性弱い
8　黄褐色土（10YR5/8）
　しまりやや弱い　粘性弱い
　黒色土含む（５～10%）
9　黒褐色土（10YR2/3）
　しまり普通　粘性やや強い
　地山土含む（25%）

ＳＫＦ04
1　黒色土（10YR2/1）
　しまり普通　粘性やや弱い
　地山粒含む（φ５mm15%）
2　黒褐色土（10YR2/2）
　しまり普通　粘性普通
　地山粒含む（φ５～10mm25%）
3　黒褐色土　暗褐色土
　（10YR2/3～10YR2/3）
　しまりやや弱い　粘性やや強い

第６図　ＳＫＦ03・04フラスコ状土坑

る。基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　　壁　　》　南側を除き底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ06フラスコ状土坑（第７図、図版４）

《位　　置》　ＭＪ43・45、ＭＫ43・44区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸117㎝、短軸111㎝のほぼ円形を呈し、深さは地山面から170㎝である。最大径部位の平面形は、長軸173㎝、短軸172㎝の隅丸方形を呈する。主軸方向はN－ 39°－Eである。

《埋　　土》　10層に分けた。地山崩落土混入の土と黒土が互層に堆積することより、基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　　壁　　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ07フラスコ状土坑（第８図、図版４）

《位　　置》　ＭＦ45区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　ＳＫＦ12を掘り込んでいる。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸160㎝、短軸136㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から72㎝である。最大径部位の平面形は、長軸166㎝、短軸136㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 43°－Wである。

《埋　　土》　８層に分けた。第６・７層は地山崩落土であり、基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　　壁　　》　南東側の一部が底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

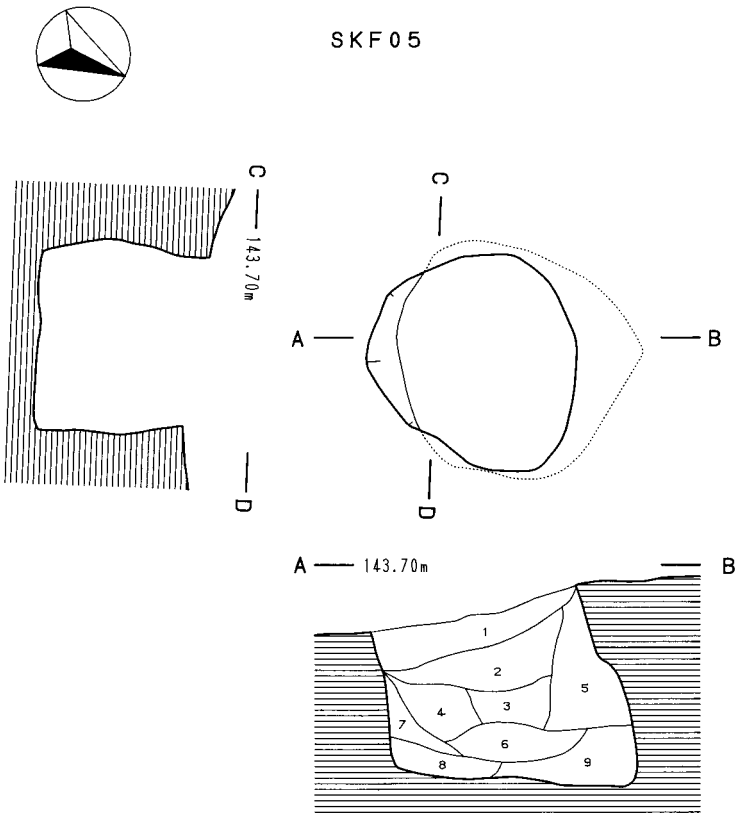
《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。なお、土坑底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,645±50ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ920－750（94.1%）を示し、晩期中葉と考えられる。

ＳＫＦ08フラスコ状土坑（第９図、図版４）

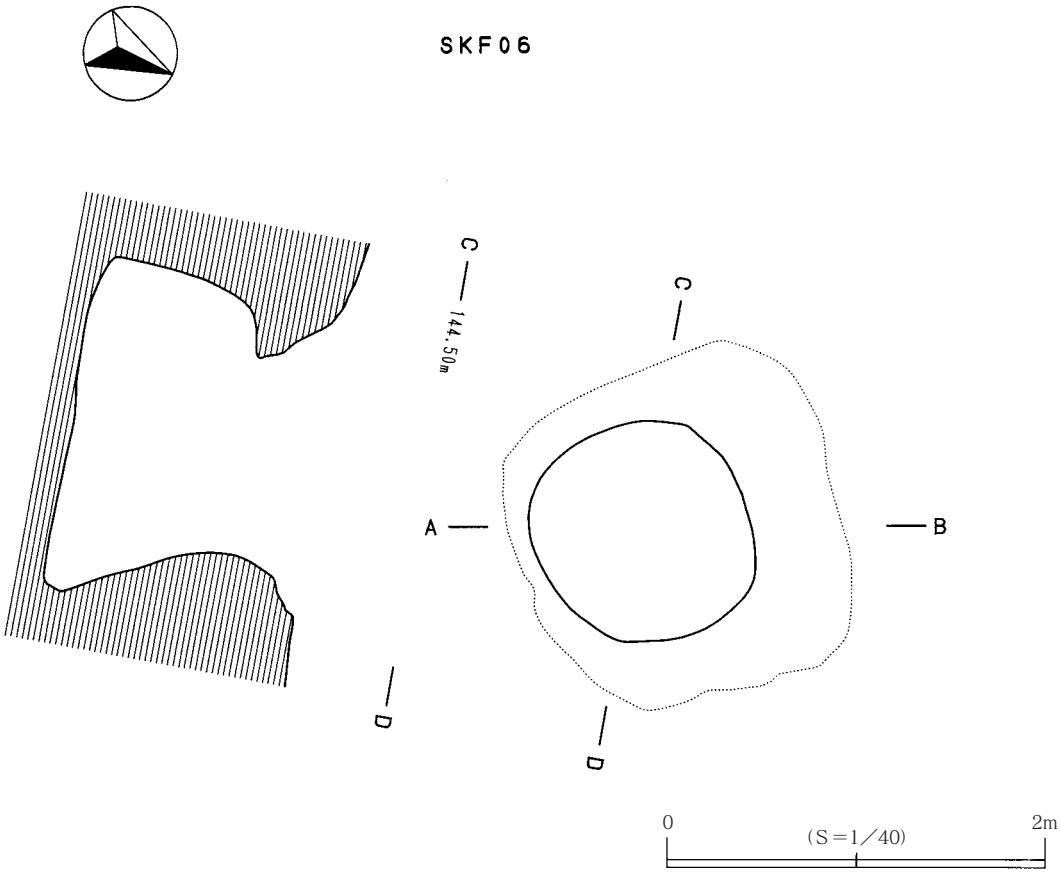
《位　　置》　ＭＫ43・44、ＭＬ43区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面で確認した。

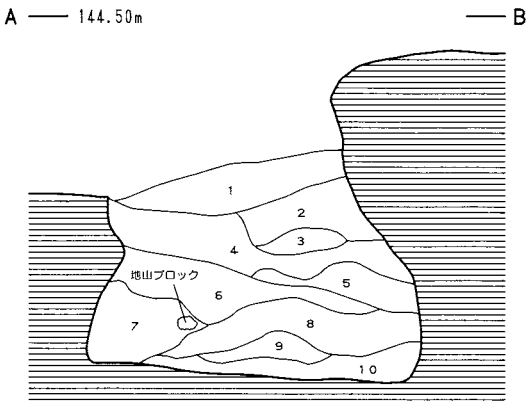
《重　　複》　なし。



ＳＫＦ05
1　黒褐色土（10YR2/2）
　しまりやや弱い　粘性やや弱い
　地山粒含む（5～10mm20%）
2　黒色土　黒褐色土
　（10YR2/1～10YR2/2）
　しまり普通　粘性普通
　地山ブロック（φ5㎝）
3　黒褐色土（10YR2/2）
　しまり普通　粘性強い
　地山粒微量含む
4　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）
　しまり普通　粘性やや強い
　地山粒含む（φ10mm15%）
5　暗褐色土（10YR2/3）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山粒含む（φ5～10mm5～10%）
6　黒色土（10YR1.7/1～10YR2/1）
　しまりやや弱い　粘性強い
　地山粒微量含む
7　黒褐色土（10YR2/3）
　しまり弱い　粘性普通　地山粒微量含む
8　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR2/3）
　しまりやや弱い　粘性強い　地山粒微量含む
9　黒褐色土（10YR2/2）
　しまり普通　粘性強い
　地山粒微量含む

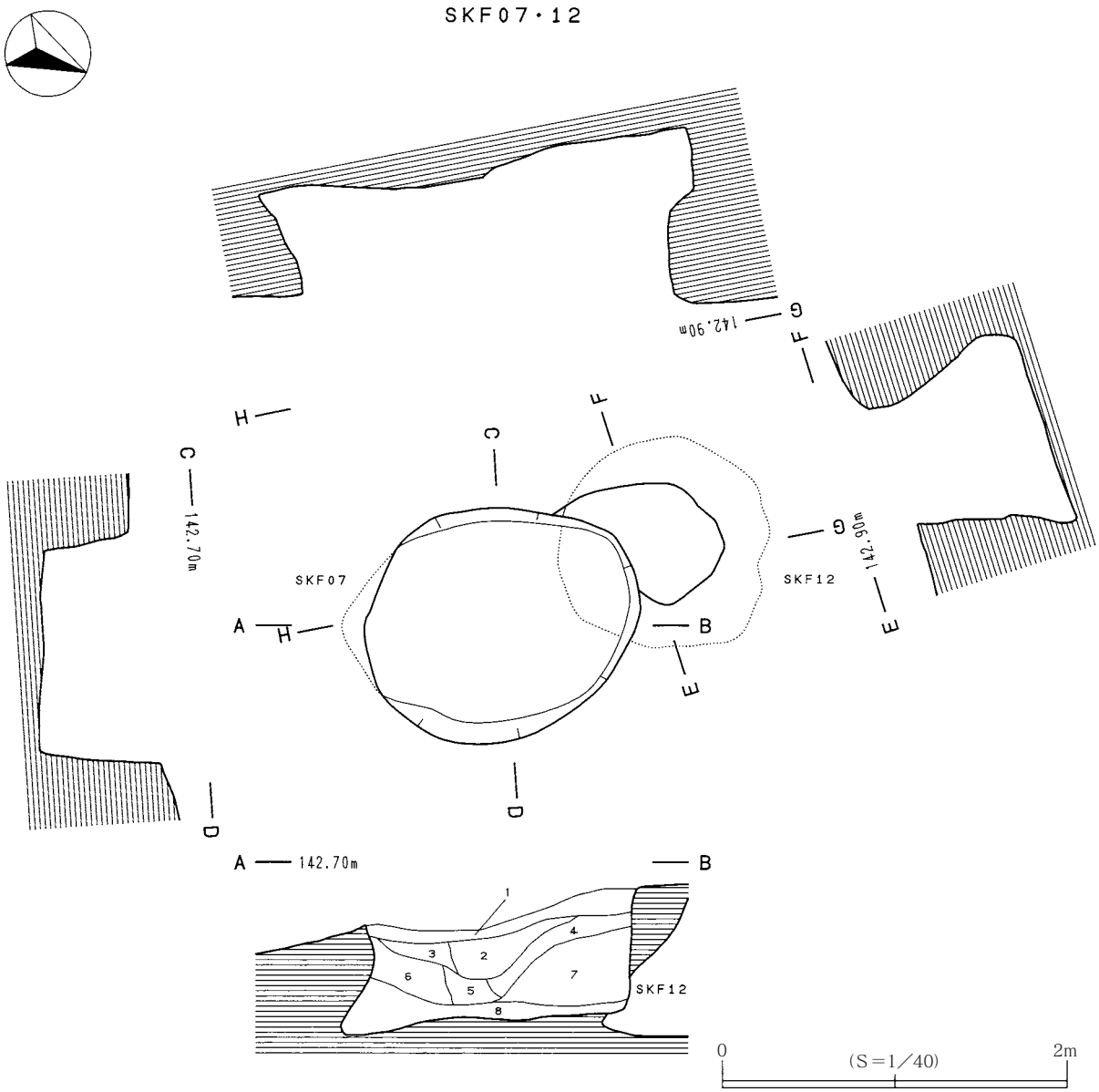


第７図　ＳＫＦ05・06フラスコ状土坑



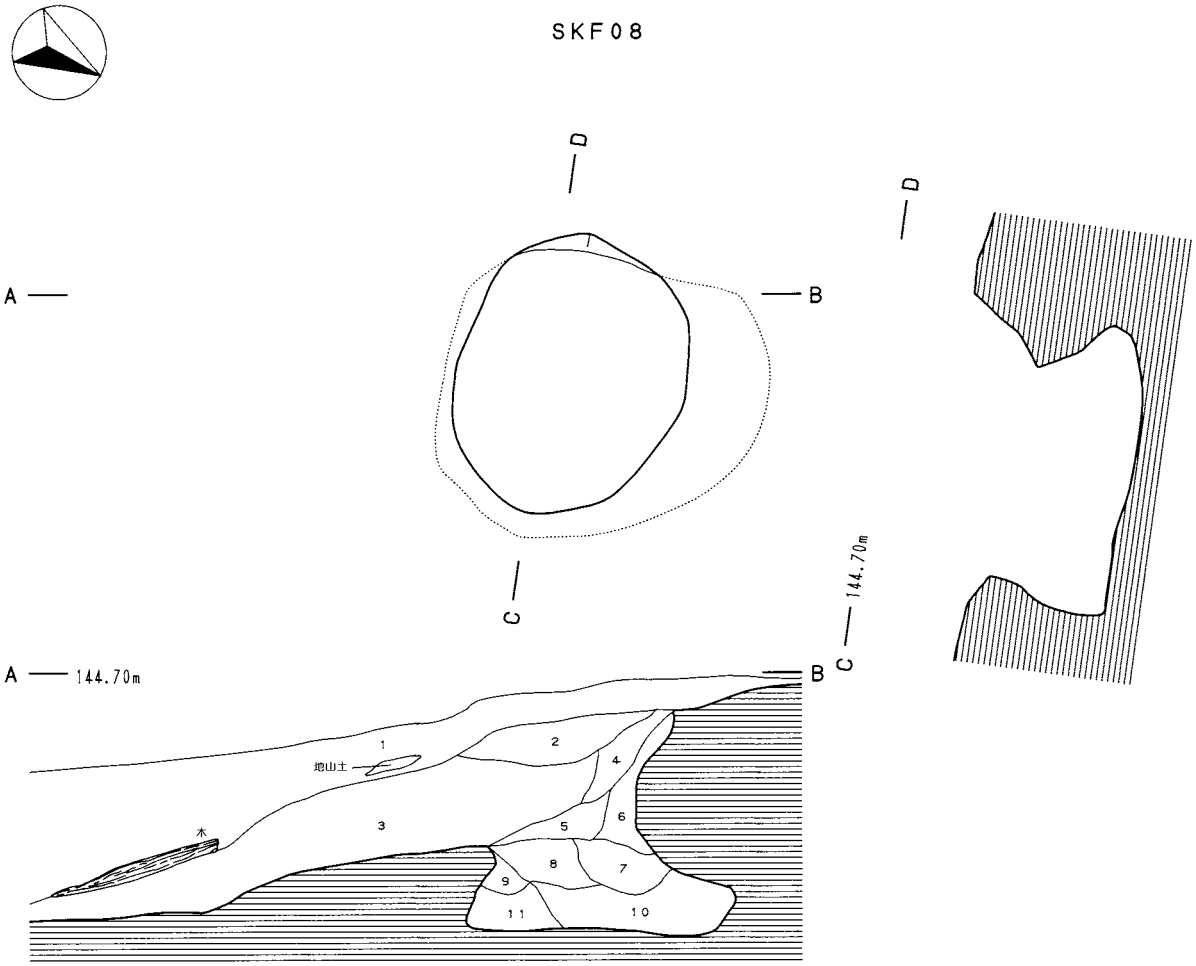
ＳＫＦ06

1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性普通　地山粒含む（φ10mm25%）
2　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR3/3）しまり普通　粘性普通
　　地山ブロック含む（φ5cm5～10%）
3　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（25%）黒褐色土含む（25%）
4　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ10mm25%）
5　黄褐色土（10YR5/6～10YR5/8）しまり普通　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ5cm5～10%）
6　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（5～10mm20%）
7　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む
8　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
　　黒褐色土含む（5%）
9　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性やや強い　地山粒少量含む
10　褐色土（10YR6/4）　しまりやや弱い　粘性強い　地山粒少量含む



第８図　ＳＫＦ07・12フラスコ状土坑

ＳＫＦ07
1　黒褐色土（10YR２/３）しまり弱い　粘性やや弱い　地山粒含む（φ５mm１%）
2　暗褐色土（10YR３/３～10YR３/４）　しまりやや弱い　粘性やや弱い
地山粒含む（φ５～10mm10%）
3　暗褐色土（10YR３/３）しまり普通　粘性やや弱い
地山粒含む（φ５～10mm15%）
4　暗褐色土（10YR３/３～10YR３/４）　しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ３～５cm20%）
5　黒褐色土（10YR３/２）しまり普通　粘性普通　地山粒含む（φ５～10mm25%）
6　暗褐色土（10YR３/４）しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ３～５cm20%）
7　黄褐色土（10YR５/６）しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（30%）
8　黒褐色土（10YR２/３）しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む



ＳＫＦ08
1　黒色土（10YR２/１）
しまりやや弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む
2　黒褐色土（10YR２/２～10YR２/３）
しまり普通　粘性やや強い　地山粒少量含む
地山土（10～15%）
3(沢）黒色土（10YR1.7/１～10YR２/１）
しまり普通　粘性やや強い　地山粒少量含む
4　黒褐色土（10YR２/３）　しまり普通　粘性やや強い　地山粒少量含む
地山土含む（10%）
5　黒褐色土　暗褐色土（10YR２/３～10YR３/３）
しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ５～10mm30%）　暗褐色土含む（25%）
6　暗褐色土（10YR３/４）
しまり強い　粘性強い　地山ブロック含む（φ５cm25%）
7　暗褐色土　褐色土（10YR３/４～10YR４/４）
しまり普通　粘性強い　地山粒含む（φ５～10mm25～30%）
8　黒褐色土（10YR２/２）
しまり普通　粘性普通　地山粒含む（φ５～10mm15～20%）
9　暗褐色土（10YR３/４）
しまり普通　粘性やや強い　地山土含む（30%）
10　黒褐色土（10YR２/２）
しまり普通　粘性やや強い　地山粒含む（φ５～10mm30～35%）
地山ブロック含む（φ５cm）
11　黒褐色土（10YR２/２～10YR２/３）
しまり普通　粘性やや強い　地山粒少量含む

0　（S＝1／40）　2m

第９図　ＳＫＦ08フラスコ状土坑

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸151㎝、短軸120㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から118㎝である。最大径部位の平面形は、長軸169㎝、短軸118㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 74°－Eである。

《埋　　土》　７層に分けた。第５～11層が本遺構の埋土である。第７～11層は塊状または粒状地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。第５・６層は北側から南側沢への流れ込みによる自然堆積土であろう。

《　壁　》　西側の一部を除き、壁下位から底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　本遺構は廃絶後に人為的に埋め戻しており、他の遺構のように開口状態で廃棄されていなが、構築場所、規模や形態から他のフラスコ状土坑同様貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ09フラスコ状土坑（第５図、図版３）

《位　　置》　ＭＬ43・44区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　ＳＫ11に掘り込まれている。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸132㎝、短軸124㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から134㎝である。最大径部位の平面形は、長軸172㎝、短軸160㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 68°－Wである。

《埋　　土》　５層に分けた。第３～５層は地山土に由来し、隣接する遺構掘削土の埋め戻し土と考えられる。基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　南側の一部を除き、底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　本遺構は廃絶後に人為的に埋め戻しており、他の遺構のように開口状態で廃棄されていなが、構築場所、規模や形態から他のフラスコ状土坑同様貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ10フラスコ状土坑（第10図、図版４）

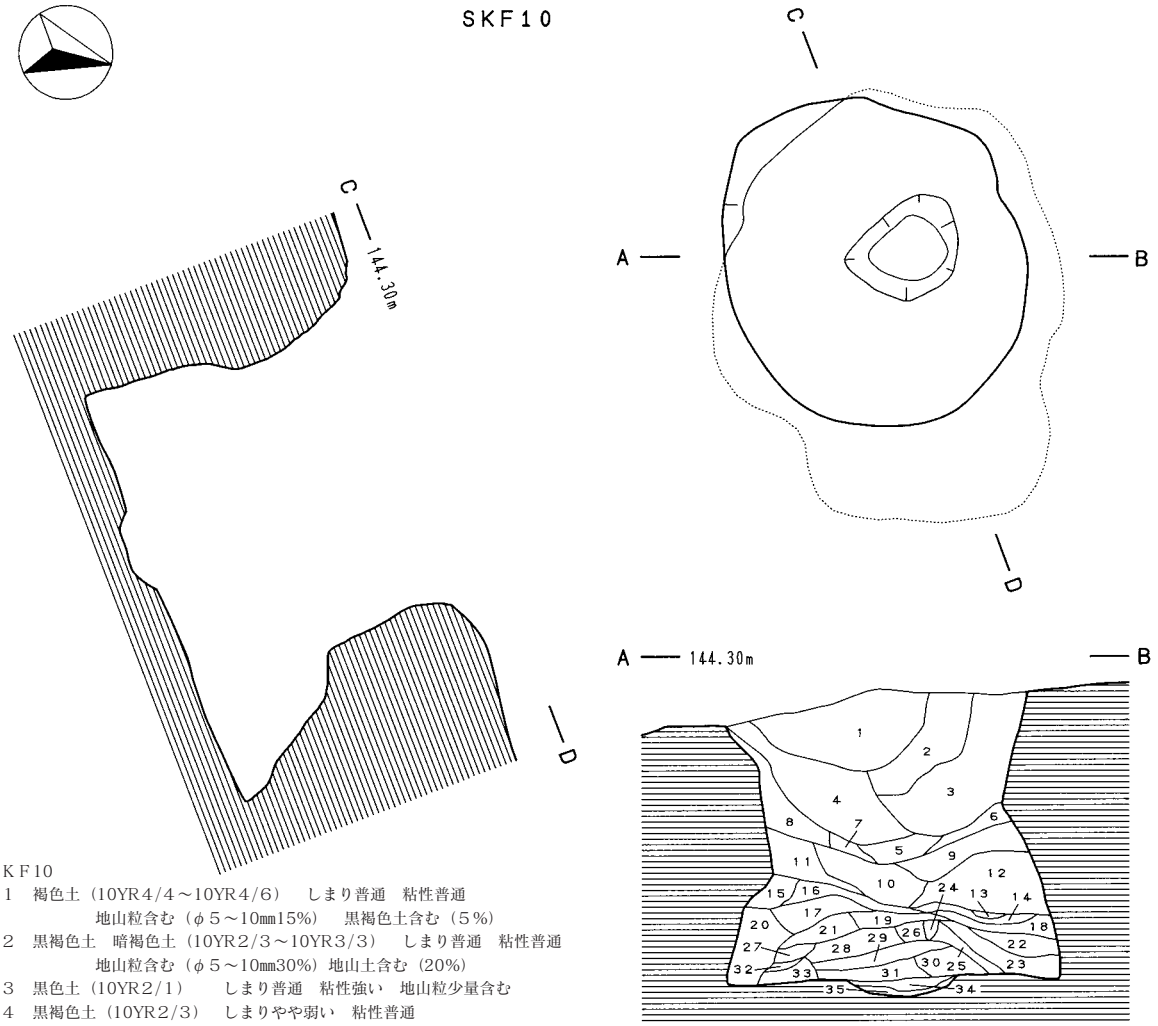
《位　　置》　ＭＩ44、ＭＪ44区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側を開析する沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸180㎝、短軸156㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から150㎝である。最大径部位の平面形は、長軸228㎝、短軸186㎝の不整な楕円形を呈する。主軸方向はN－ 54°－Eである。土坑中央部には、長軸60㎝、短軸48㎝の楕円形を呈し、深さが底面から８㎝のピットが掘り込まれている。

《埋　　土》　35層に分けた。第４層に由来する黒土と地山の崩壊土が互層に堆積しており、第２層～33層は流れ込みによる自然堆積土である。第１層は隣接する遺構掘削土の埋



ＳＫＦ10
1　褐色土（10YR4/4～10YR4/6）　しまり普通　粘性普通
　　地山粒含む（φ５～10mm15%）　黒褐色土含む（５%）
2　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR3/3）　しまり普通　粘性普通
　　地山粒含む（φ５～10mm30%）地山土含む（20%）
3　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
4　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性普通
　　地山粒含む（φ５～10mm15%）２．３層との境
5　黒褐色土（10YR2/2）　地山粒少量含む
6　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
　　しまりやや弱い　粘性普通　地山粒含む（φ５～10mm５～10%）
7　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ５～10mm10%）
8　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ５～10mm20%）
9　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ５～10mm15%）
10　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm20%）
11　褐色土（10YR4/6）　しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm10%）
12　褐色土（10YR4/6）　しまりやや弱い　粘性強い　地山粒少量含む
13　暗褐色土（10YR3/3）　しまり弱い　粘性強い　地山粒少量含む
14　褐色土（10YR4/6）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む
15　暗褐色土（10YR3/4）　しまり普通　粘性やや強い　黒褐色土含む（25%）
16　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒少量含む
17　褐色土　黄褐色土（10YR4/6～10YR5/6）　しまりやや強い
　　粘性やや強い　地山粒含む（φ10～15mm10～15%）
18　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ10～15mm５%）
19　褐色土　（10YR4/6）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ５～10mm15%）
20　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm20%）
21　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm15～20%）
22　褐色土（10YR4/6）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
23　黒褐色土（10YR2/2）　しまり弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm20%）
24　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm40%）
25　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）
　　しまり普通　粘性強い　地山粒含む（φ５～10mm15～20%）
26　黒褐色土（10YR2/2）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm30～40%）
27　褐色土（10YR4/6）　しまり普通　粘性やや強い　地山粒少量含む
28　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ５～10mm25%）
29　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）
　　しまりやや強い　粘性強い　地山粒含む（φ５～10mm15%）
30　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
　　しまり普通　粘性やや強い　地山粒含む（５～10mm10～15%）
31　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性普通　地山粒少量含む
32　黄褐色土（10YR5/6）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ10～15mm20%）
33　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまり弱い　粘性強い
　　地山粒少量含む　黄褐色土含む（15%）
34　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや強い　粘性やや弱い
　　地山粒含む（φ３～４cm25%）
35　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや強い　粘性普通　地山粒少量含む

0　（S＝1／40）　2m

第10図　ＳＫＦ10フラスコ状土坑

め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　南西側の一部を除いて、底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまってる。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。底面中央部に掘り込まれている浅い小ピットは、水抜きのために掘り込まれた可能性が高い。

ＳＫＦ12フラスコ状土坑（第８図、図版４）

《位　　置》　ＭＦ45区に位置する。

《確　　認》　当初ＳＫＦ07と同一遺構と考えていたが、精査中に本遺構が重複していることを確認した。

《重　　複》　ＳＫＦ07に掘り込まれている。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸100㎝（推定）、短軸64㎝で楕円形を呈すると考えられ、深さは地山面から96㎝である。最大径部位の平面形は、長軸120㎝（推定）、短軸120㎝でほぼ円形を呈すると考えられる。主軸方向はN－ 25°－Wである。

《埋　　土》　調査途中で断面が崩落したため詳細は不明であるが、底面には黒色土、壁際には地山崩落土が見られた。基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　　壁　　》　南側の一部を除き底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。

第３節　南側調査区検出遺構と遺構内出土遺物

１　検出遺構の概要

遺構確認面はすべて地山であり、検出遺構は以下のとおりである。

縄文時代の竪穴住居跡５軒、土坑５基、フラスコ状土坑14基、土器埋設遺構１基、性格不明遺構２基、柱穴様ピット１基と、中世の掘立柱建物跡１棟である。

２　縄文時代の遺構と遺構内出土遺物

(1)　竪穴住居跡

ＳＩ104竪穴住居跡（第11図、図版５・６）

《位　　置》　ＭＨ33区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で焼土を確認し、竪穴住居の地床炉と判断した。

《重　　複》　ＳＩ116と重複していると考えられるが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》　地床炉のみの検出のため、規模と平面形は不明である。

《柱　　穴》　検出されなかった。

《埋　　土》　確認できなかった。

《　　壁　　》　確認できなかった。

《床　　面》　明確には確認できなかったが、地床炉の検出状況より地山面かその直上の基本土層Ⅳ層下位の黒土が床面と考えられる。

《　　炉　　》　大部分が木の根により攪乱を受けているが、焼土が径60㎝程に広がっており地床炉である。第１・２層とも焼土層であるが、層厚は薄い。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　地床炉に伴う試料を抽出したつもりであったが、放射性炭素年代測定結果は2,105±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ210－40を示す。同時代の遺構や遺物は出土しておらず、また木の根による攪乱を受けているため、本試料は後世の撹乱由来の炭化材と思われる。炉の位置や形態から、ＳＩ116と同時期の前期中葉円筒下層b式期と考えられる。

ＳＩ107竪穴住居跡（第17・18図、図版５・６・14）

《位　　置》　ＭＨ36区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で石囲炉を確認し、その後柱穴３基を検出した。

《重　　複》　ＳＩ120と重複していると考えられるが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》　壁の一部のみの検出のため詳細は不明であるが、平面形は、長軸3.2m、短軸2.8m程の楕円形を呈すると考えられる。

《柱　　穴》　検出した柱穴は３基である。平面形は、径22～30㎝のほぼ円形を呈し、深さは地山面から８～15㎝である。

《埋　　土》　３層に分けた。第１層は炉南側に広がる白色粘土の層であり、土の由来ははっきりしない。基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　南側の一部で検出したのみである。急に立ち上がっており、壁高は床面から10㎝である。

《床　　面》　南側は地山掘り込み面が、北側は地山直上の基本土層Ⅳ層下位の黒土が床面と考えられる。

《　　炉　　》　住居ほぼ中央に石囲炉をもつ。石囲炉は、長軸70㎝、短軸50㎝の楕円形を呈する。礫はほとんど抜き取られており、残存する礫は２個のみである。下部は浅く掘り窪められている。炉上面の焼土は層をなし、磚化している。

《出 土 遺 物》　１・２は床面直上から出土したと考えられる剥片である。１の縁辺には調整痕が見られ、２には使用痕が残る。３は炉の東側に置かれていた磨石である。片面に磨痕が見られる。

《時　　期》　地床炉から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は3,640±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ2,140－1,890（95.4%）を示す。炉の形態と科学的分析結果から、後期前葉と考えられる。

ＳＩ116竪穴住居跡（第11・12・13・14図、図版５・６・14）

《位　　置》　ＭＧ33、ＭＨ33、ＭＩ33区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で２か所の焼土を検出し、その後竪穴住居の壁の一部を確認した。

《重　　複》　ＳＩ104と重複していると考えられるが、新旧関係は不明である。また、ＳＫＦ106、ＳＲ105は本住居に付設すると考えられる。

《規模と平面形》　住居東側が調査できなかったため詳細は不明であり、西側はわずかな窪みを壁際と想定した。平面形は、長軸８ｍ（推定）、短軸2.5mで方形を呈すると考えられる。建物方位は、N－ 64°－Eを示す。

《柱　　穴》　検出されなかった。

《埋　　土》　３層に分けた。南側から北側の斜面に流れ込んだ自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　東側で確認した壁は緩やかに立ち上がりテラス状を呈する。

《床　　面》　南側から北側に緩やかに傾斜しており、南側は地山面が、北側は地山直上の基本土層Ⅳ層下位の黒土が床面と考えられる。

《　炉　》　住居北側の壁寄りで地床炉２基を検出した。炉は建物方向に約70㎝の間隔で並んでいる。それぞれ、長軸56㎝、短軸24㎝と長軸28㎝、短軸26㎝の楕円形に広がっている。

《出土遺物》　すべて住居西側の壁際の床面から出土した。１・２・４～17・20・22は撚糸文を施文する同一個体の深鉢形土器である。胎土には多量に繊維が混入する。21には被熱痕が見られる。３・19は隆帯を貼り付け、隆帯上に半截竹管文を施文する深鉢形土器である。18は、上半には横位に、下半には縦位に撚糸文を施文する深鉢形土器である。21は撚糸文を施文する深鉢形土器で、外面には厚く被熱痕が見られる。いずれの土器も、胎土に多量の繊維を混入している。これらの土器は前期中葉円筒下層ｂ式土器と考えられる。

《時　　期》　出土遺物と炉や壁の形態等から、前期中葉円筒下層ｂ式期と考えられる。地床炉から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,555±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ720－540を示すが、これは後世の撹乱による由来する炭化材と思われる。

ＳＩ127竪穴住居跡（第19図、図版７・14）

《位　　置》　ＬＯ41区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で焼土を確認し、竪穴住居の地床炉と判断した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　地床炉のみの検出のため、規模と平面形は不明である。

《柱　　穴》　検出されなかった。

《埋　　土》　確認できなかった。

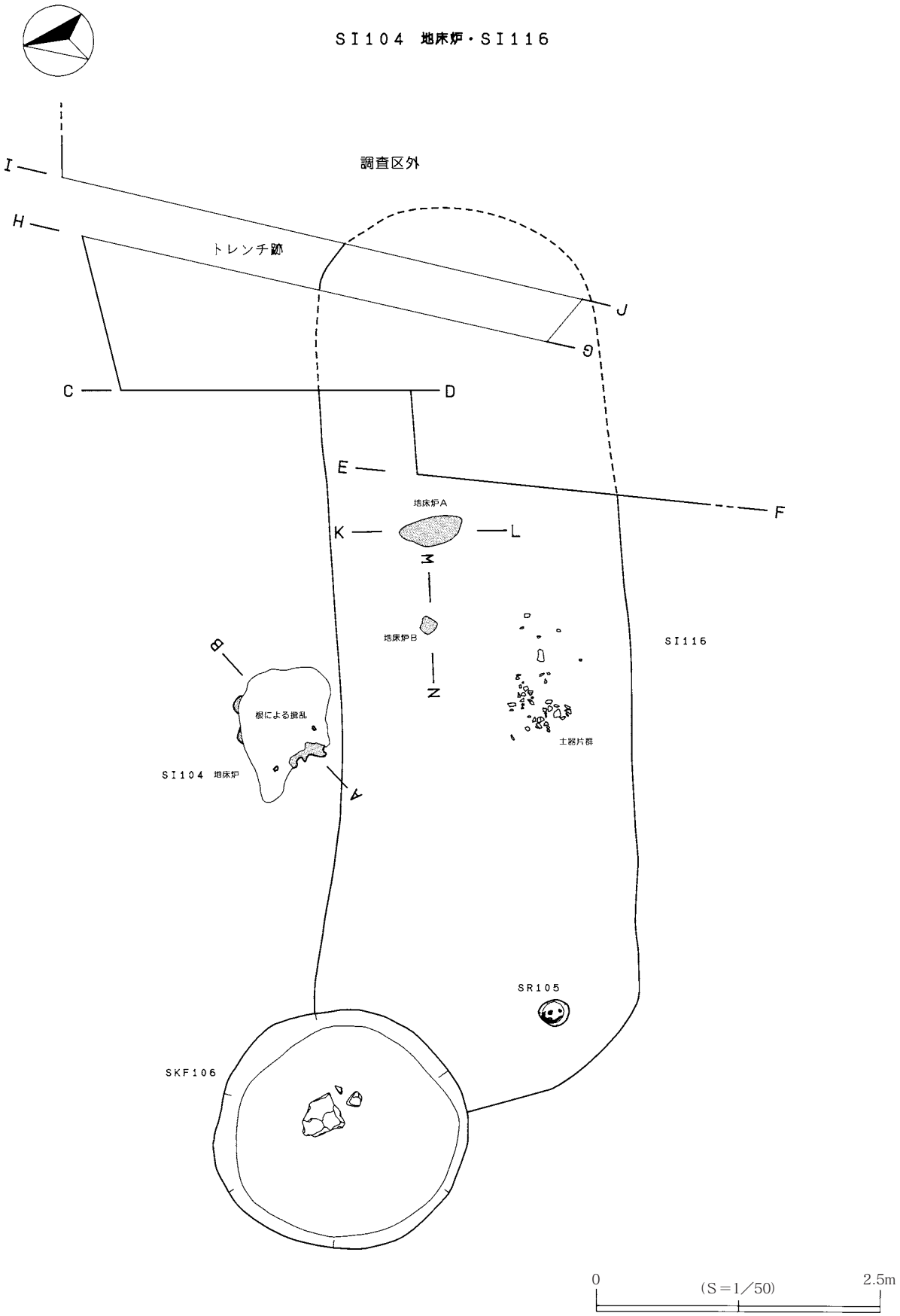
《　壁　》　確認できなかった。

《床　　面》　明確には確認できなかったが、地床炉の検出状況から地山面かその直上の基本土層Ⅳ層下位の黒土が床面と考えられる。

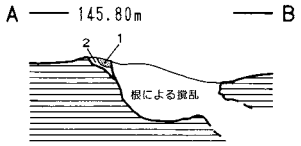
《　炉　》　地床炉である。長軸48㎝、短軸28㎝のやや不整な楕円形状に広がっている。

《出土遺物》　１はＬＲ縄文を施文する深鉢形土器破片である。内外面には煤状炭化物が付着する。この土器は後期の土器である。

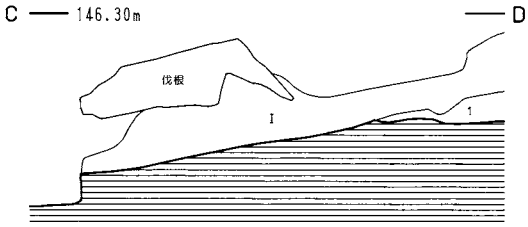
《時　　期》　出土遺物から、後期と考えられる。



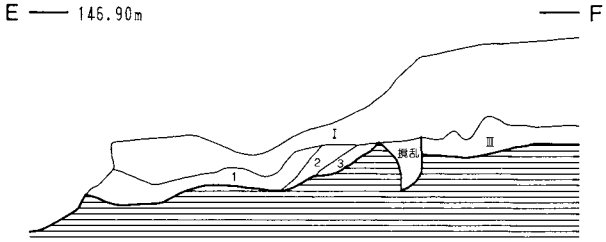
第11図　ＳＩ116竪穴住居跡、ＳＫＦ106フラスコ状土坑、ＳＲ105土器埋設遺構



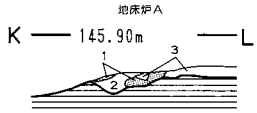
ＳＩ104　地床炉
1　褐色土（7.5YR4/6）　しまり普通　粘性普通
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　しまり弱い　粘性普通



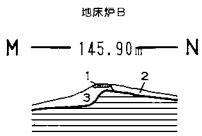
ＳＩ116
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む



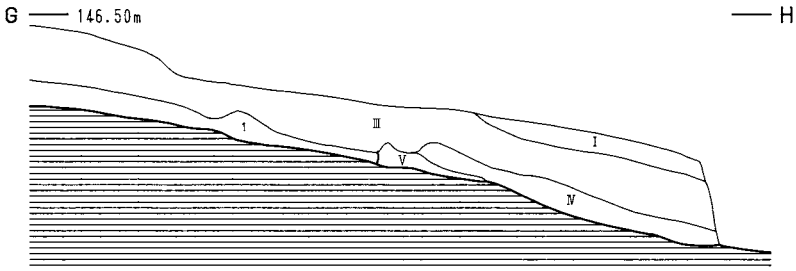
ＳＩ116
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む
2　暗褐色土（10YR3/3）　しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ２～５mm15～20%）１層との境
3　褐色土（10YR4/6）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む
黒褐色土含む（20%）



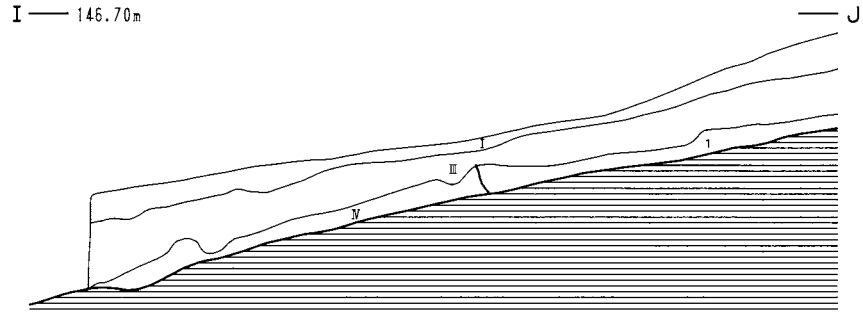
ＳＩ116　地床炉A　被熱土
1　褐色土（7.5YR4/6）　しまり普通　粘性普通
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　しまりやや弱い　粘性普通
3（撹乱）黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや弱い　粘性やや強い
地山粒少量含む



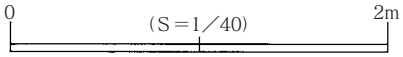
ＳＩ116　地床炉B
1（被熱土）褐色土（7.5YR4/6）　しまり普通　粘性普通
2（撹乱）黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや弱い　粘性やや強い
地山粒少量含む
3　地山土と暗褐色土が入り混じる層→ほぼ地山



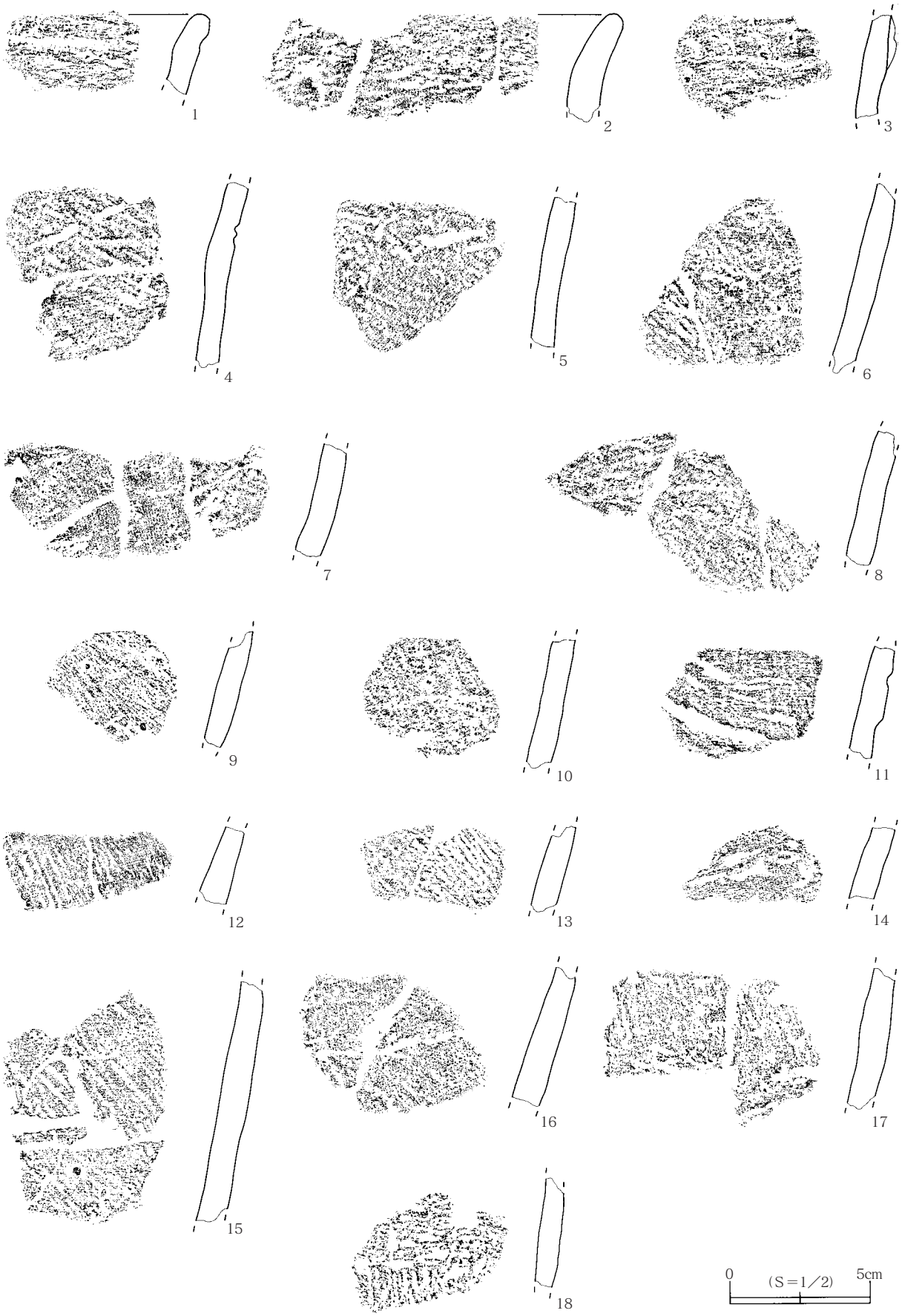
ＳＩ116
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む



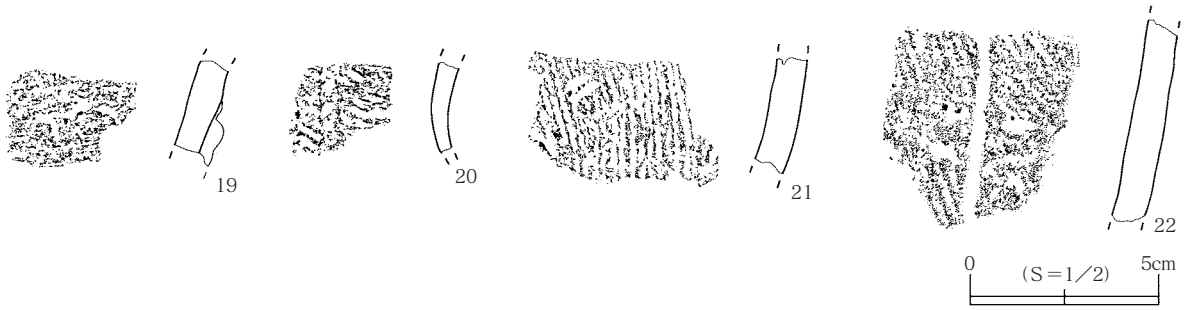
ＳＩ116
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む

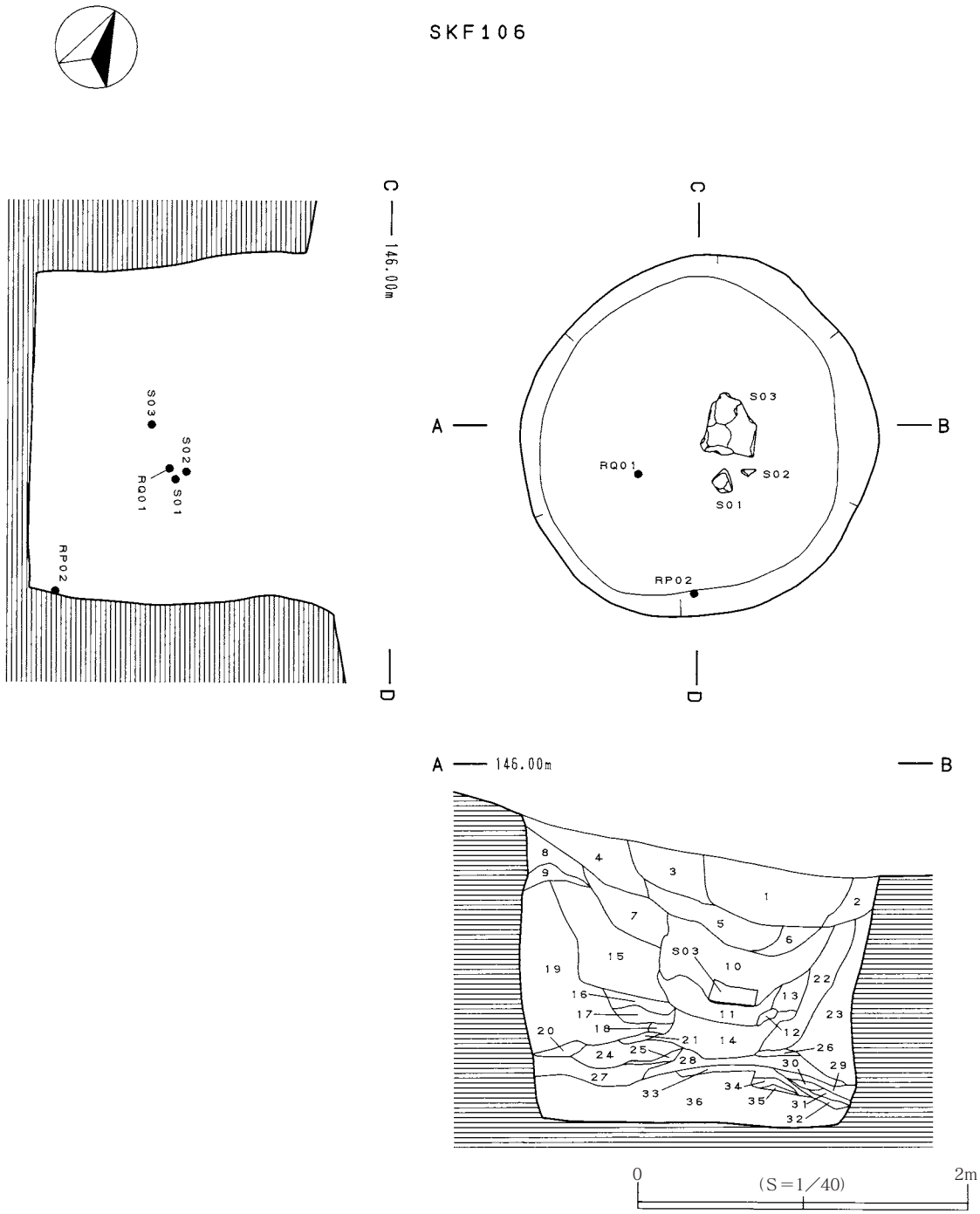


第12図　ＳＩ116竪穴住居跡土層断面図



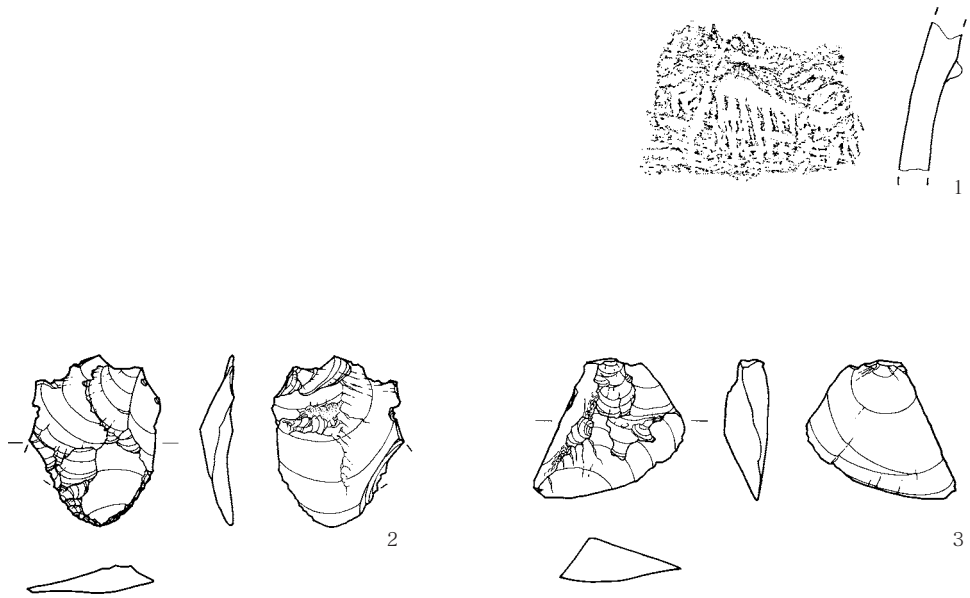
第13図　ＳＩ116竪穴住居跡出土遺物





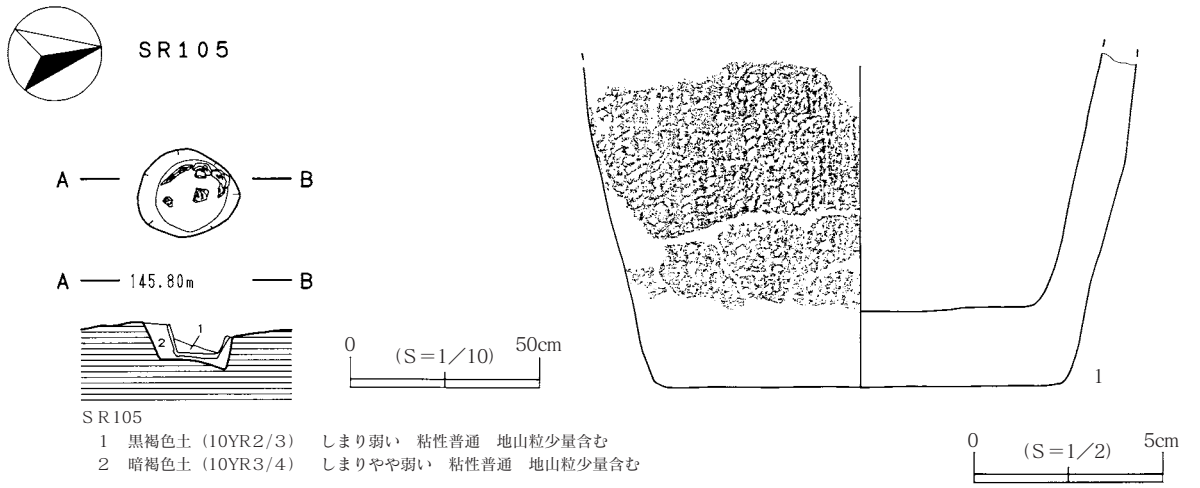
第14図　ＳＩ116竪穴住居跡出土遺物、ＳＫＦ106フラスコ状土坑

ＳＫＦ106
1　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い
地山粒含む（φ２～10㎜25%）
2　暗褐色土（10YR3/3）しまり普通　粘性強い
地山粒含む（２～５㎜20%）
3　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性普通
地山粒含む（φ２～５㎜15～20%）
4　黒褐色土（10YR2/3）しまりや弱い　粘性普通
地山粒含む（φ２～５㎜20%）
地山土（５～10%）
5　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性普通
地山粒含む（φ５㎜30%）
6　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱い　粘性強い
地山粒含む（φ２～10㎜15%）
地山土（20%）
7　暗褐色土（10YR3/4）しまり普通　粘性強い
地山粒含む（φ２～５㎜20%）
地山土（20%）下部に分布
8　暗褐色土（10YR3/3）しまり普通　粘性普通
地山粒少量含む
9　褐色土（10YR4/4）　しまりやや弱い　粘性普通
地山粒少量含む
10　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強い　粘性やや強い
地山粒　地山ブロック含む
（φ２～30㎜45%）
11　暗褐色土（10YR3/4）しまり普通　粘性普通
地山粒含む（φ５～10㎜20%）
中央部に地山ブロック
12　暗褐色土（10YR3/3）しまり普通　粘性強い
地山ブロック含む（φ２～３㎝50%）
13　褐色土（10YR4/6）　しまり強い　粘性強い
地山粒含む（φ２～５㎜20%）
14　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性普通
地山ブロック含む（φ３㎝30%）
15　褐色土（10YR4/4）　しまり普通　粘性普通
地山粒含む（φ５～10㎜20%）下部に分布
16　黄褐色土（10YR5/6）しまり普通　粘性普通
地山粒少量含む
17　褐色土（10YR4/6）　しまり普通　粘性普通
暗褐色土含む（15%）
18　暗褐色土（10YR3/4）しまり弱い　粘性普通
地山粒少量含む
19　黄褐色土（10YR5/6）しまり強い　粘性普通
地山ブロック含む（φ５㎝）
20　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱い　粘性普通
地山土含む（20%）
21　褐色土（10YR4/4～10YR4/6）　しまりやや弱い　粘性やや強い
地山粒（φ２～５㎜）と暗褐色土が
マーブル状に入り混じる（35%）
22　褐色土（10YR4/4）　しまり普通　粘性強い
地山粒含む（φ２～10㎜20～25%）
23　黄褐色土（10YR5/6）しまりやや強い　粘性強い
地山粒少量含む
24　黄褐色土（10YR5/6）しまり普通　粘性普通
地山粒少量含む
25　暗褐色土（10YR3/3）しまり普通　粘性普通
地山粒含む（φ２～３㎝40%）
26　褐色土（10YR4/4～10YR4/6）しまり強い　粘性強い　地山粒少量含む
27　褐色土（10YR4/6）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山粒少量含む
28　黒褐色土　暗褐色土（10YR3/2～10YR3/3）　しまり普通　粘性普通
地山ブロック含む（φ３～５㎝30%）
29　褐色土（10YR4/4）　しまりやや弱い　粘性強い　地山粒少量含む
30　褐色土（10YR4/6）　しまり弱い　粘性強い　地山粒少量含む
31　暗褐色土　褐色土（10YR3/4～10YR4/4）　しまり弱い　粘性強い
地山粒少量含む
32　黒褐色土（10YR2/3）しまり弱い　粘性強い　地山粒少量含む
33　暗褐色土（10YR3/3）しまり普通　粘性強い　地山粒含む（φ２～10㎜30%）
34　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
35　褐色土（10YR4/4）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
36　黄褐色土（10YR5/6）しまり強い　粘性普通
地山ブロック含む（φ３～５㎝25%）

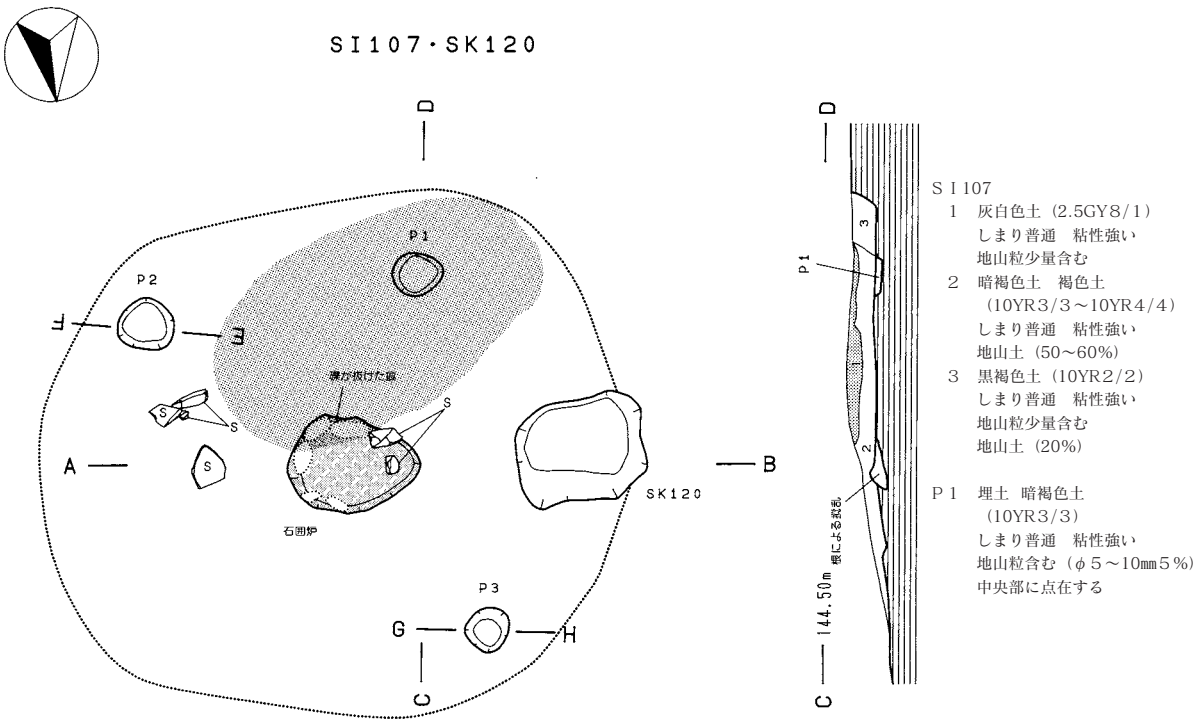


第15図　ＳＫＦ106フラスコ状土坑出土遺物

第16図 ＳＫＦ106フラスコ状土坑出土遺物

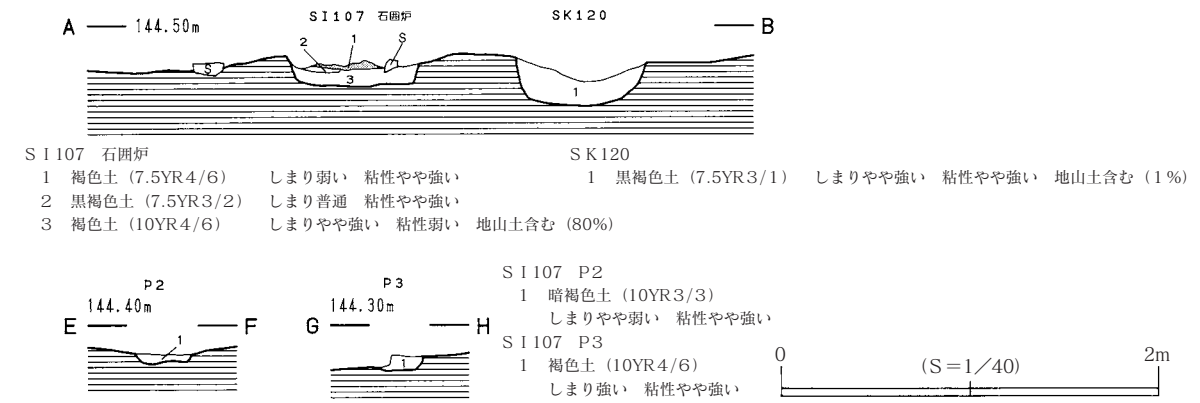


ＳＲ105
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり弱い　粘性普通　地山粒少量含む
2　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや弱い　粘性普通　地山粒少量含む



ＳＩ107
1　灰白色土（2.5GY8/1）
しまり普通　粘性強い
地山粒少量含む
2　暗褐色土　褐色土
（10YR3/3～10YR4/4）
しまり普通　粘性強い
地山土（50～60%）
3　黒褐色土（10YR2/2）
しまり普通　粘性強い
地山粒少量含む
地山土（20%）

Ｐ１　埋土　暗褐色土
（10YR3/3）
しまり普通　粘性強い
地山粒含む（φ５～10mm５%）
中央部に点在する



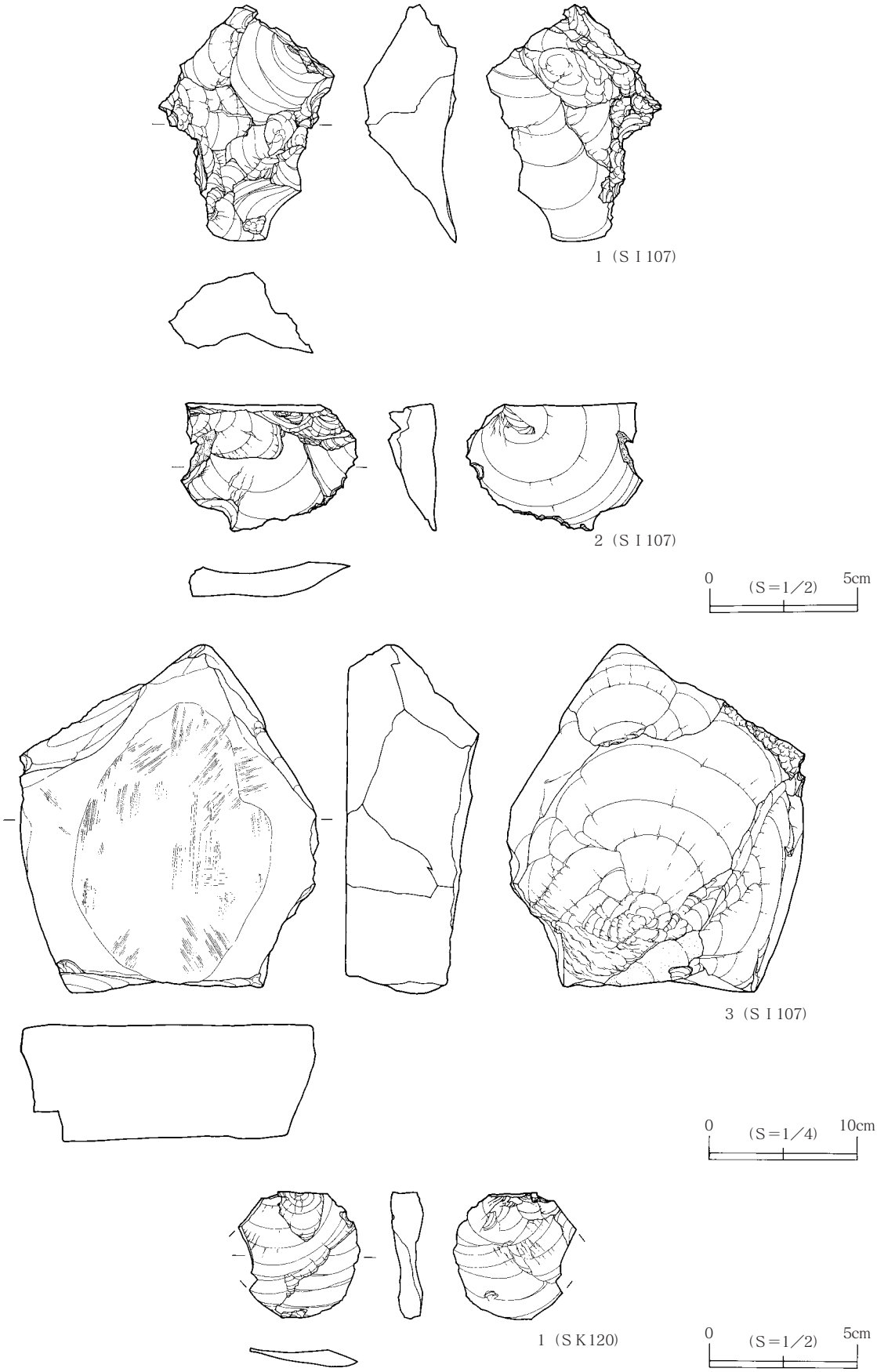
ＳＩ107　石囲炉
1　褐色土（7.5YR4/6）　しまり弱い　粘性やや強い
2　黒褐色土（7.5YR3/2）　しまり普通　粘性やや強い
3　褐色土（10YR4/6）　しまりやや強い　粘性弱い　地山土含む（80%）

ＳＫ120
1　黒褐色土（7.5YR3/1）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（１%）

ＳＩ107　Ｐ2
1　暗褐色土（10YR3/3）
しまりやや弱い　粘性やや強い

ＳＩ107　Ｐ3
1　褐色土（10YR4/6）
しまり強い　粘性やや強い

第17図　ＳＲ105土器埋設遺構及び出土遺物、ＳＩ107竪穴住居跡、ＳＫ120土坑



第18図　S I 107・S K 120出土遺物

ＳＩ130竪穴住居跡（第19・21図、図版７）

《位　　置》　ＭＡ38・ＭＢ38区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で２か所の焼土を確認し、竪穴住居の地床炉と判断した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　地床炉のみの検出のため、規模と平面形は不明である。

《柱　　穴》　検出されなかった。

《埋　　土》　確認できなかった。

《　壁　》　確認できなかった。

《床　　面》　明確には確認できなかったが、地床炉の検出状況から地山面かその直上の基本土層Ⅳ層下位の黒土が床面と考えられる。

《　炉　》　約50㎝の間隔で２基の地床炉がある。それぞれ、長軸30㎝、短軸24㎝と長軸50㎝、短軸30㎝の楕円形に広がっている。

《出土遺物》　なし。

《時　　期》　本遺跡の特徴として、住居に隣接して貯蔵穴や土坑墓が構築されていることから、隣接するＳＫ133と同時期の晩期の可能性が高い。

（２）土坑

ＳＫ101土坑（第19図、図版７）

《位　　置》　ＭＭ27区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　南半が調査区外であるため、平面形は、長軸133㎝、残存する短軸62㎝で楕円形を呈すると考えられ、深さは地山面から40㎝である。主軸方向はN－ 53°－Eである。

《埋　　土》　２層に分けた。土の由来は不明であるが、基本土層を掘り込んでいないことから自然堆積土とは考えにくく、連続した埋め戻し土であろう。

《　壁　》　急に立ち上がっている。

《底　　面》　若干鍋底状を呈し堅くしまっている。

《出土遺物》　なし。

《時　　期》　詳細は不明であるが、掘り込み面から基本土層Ⅳ層堆積以前である。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫ120土坑（第17・18図、図版７・14）

《位　　置》　ＭＨ36・ＭＩ36区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　ＳＩ107と重複していると考えられるが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》　平面形は、長軸66㎝、短軸53㎝の隅丸方形を呈し、深さは地山面から26㎝である。主軸方向はN－ 84°－Eである。

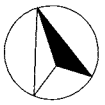
《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　やや緩やかに立ち上がっている。
《底　　面》　鍋底状を呈し、堅くしまっている。
《出 土 遺 物》　埋土から、剥片１点が出土した。一部折損している。
《時　　期》　不明である。
《考　　察》　ＳＩ107に伴う土坑とも考えられるが判然としない。性格は不明である。

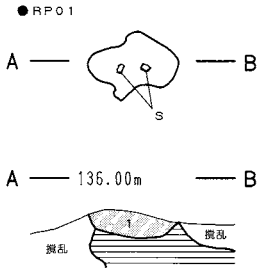
ＳＫ132土坑（第19図）
《位　　置》　ＭＡ37区に位置する。
《確　　認》　プランがはっきりしないためサブトレンチを入れ、断面観察からＳＫ133と重複していることが分かった。
《重　　複》　ＳＫ133に掘り込まれている。
《規模と平面形》　平面形は、残存する長軸84㎝、短軸100㎝（推定）で楕円形を呈すると考えられ、深さは地山面から80㎝である。主軸方向はN－ 55°－Eである。
《埋　　土》　３層に分けた。すべての層に地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。
《　　壁　　》　南側はほぼ垂直に、北側はやや緩やかに立ち上がっている。
《底　　面》　北西側から南東側に傾斜しており、堅くしまっている。
《出 土 遺 物》　なし。
《時　　期》　重複関係と構築場所から、晩期と考えられる。
《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓の可能性が高い。

ＳＫ133土坑（第19図、図版７・14）
《位　　置》　ＭＡ37区に位置する。
《確　　認》　プランがはっきりしないためサブトレンチを入れ、断面観察からＳＫ132と重複していることが分かった。
《重　　複》　ＳＫ132を掘り込んでいる。
《規模と平面形》　平面形は、残存する長軸78㎝、短軸136㎝でやや不整な楕円形を呈すると考えられ、深さは地山面から43㎝である。主軸方向はN－ 52°－Eである。
《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。
《　　壁　　》　やや緩やかに立ち上がっている。
《底　　面》　鍋底状を呈し、堅くしまっている。
《出 土 遺 物》　埋土から、深鉢形土器破片１点が出土した。ＲＬ縄文を施文し、外面には被熱痕が見られる晩期の粗製土器である。
《時　　期》　出土土器から、晩期と考えられる。
《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓の可能性が高い。

ＳＫ135土坑（第21図、図版８）
《位　　置》　ＬＰ41・ＬＱ41区に位置する。
《確　　認》　精査中に基本土層Ⅳ層下部で確認した。
《重　　複》　なし。

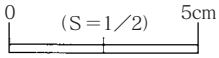


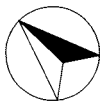
ＳＩ１２７　地床炉



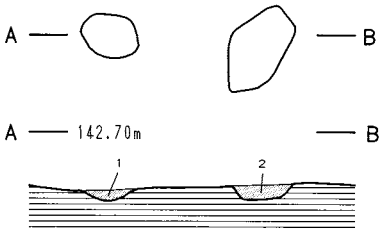
ＳＩ１２７　地床炉
　１　褐色土（7.5YR４/６）
　　しまり普通　粘性やや弱い

１（ＳＩ１２７）

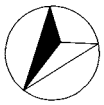




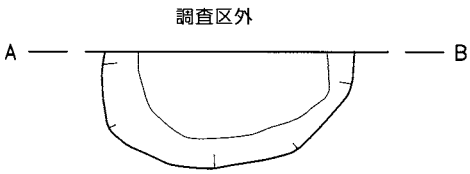
ＳＩ１３０　地床炉

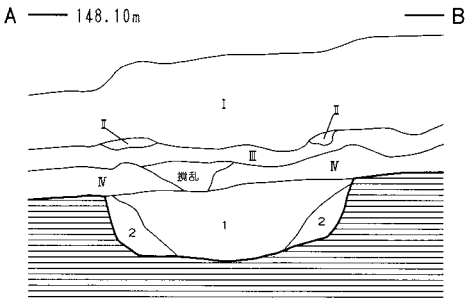


ＳＩ１３０　地床炉
　１　褐色土（7.5YR４/６）　しまり普通　粘性やや弱い
　２　暗褐色土（7.5YR３/４）　しまりやや弱い　粘性普通

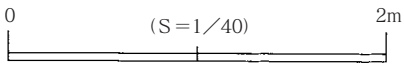


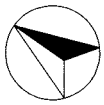
ＳＫ１０１



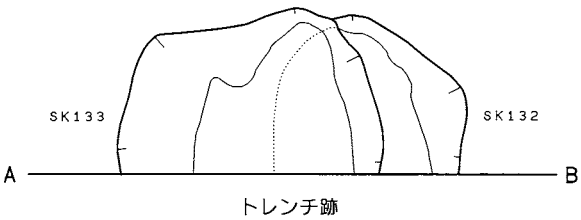


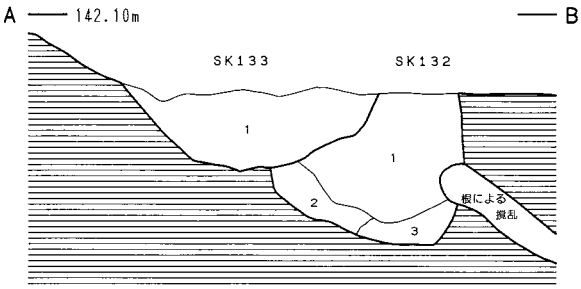
ＳＫ１０１
　１　黒褐色土（10YR２/２）　しまりやや強い　粘性やや強い
　２　暗褐色土（10YR３/３）　しまりやや強い　粘性やや強い





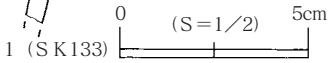
ＳＫ１３２・１３３





ＳＫ１３２
　１　黒褐色土（10YR３/２）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（10%）
　２　黒褐色土（10YR３/２）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（70%）
　３　暗褐色土（10YR３/３）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（50%）

SK133
　１　黒褐色土（10YR３/２）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（50%）



１（ＳＫ１３３）

第19図　ＳＩ127・130竪穴住居跡及び出土遺物、ＳＫ101・132・133土坑及び出土遺物

《規模と平面形》　平面形は、長軸82㎝、短軸80㎝でやや不整な楕円形を呈し、深さは地山面から34㎝である。主軸方向はN－ 34°－Wである。

《埋　　土》　２層に分けた。第１・２層とも地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　急に立ち上がっている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　ＳＩ127に隣接しており、この住居と同時期の後期の可能性が高い。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓の可能性が高い。

（３）フラスコ状土坑

ＳＫＦ102フラスコ状土坑（第20図、図版８）

《位　　置》　ＭＨ37区に位置する。

《確　　認》　確認調査時で検出されており、半截された状態で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸128㎝、短軸118㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から72㎝である。最大径部位の平面形は、長軸138㎝、短軸137㎝ほぼ楕円形を呈する。主軸方向はN－ 26°－Wである。

《埋　　土》　８層に分けた。第４・５・８層は地山崩落土を混入しており、基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　本遺跡の特徴として、住居に隣接して貯蔵穴や土坑墓を構築していることから、隣接するＳＩ107と同一時期の後期前葉の可能性が高い。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ103フラスコ状土坑（第20図、図版８・14）

《位　　置》　ＭＧ36・37、ＭＨ36・37区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

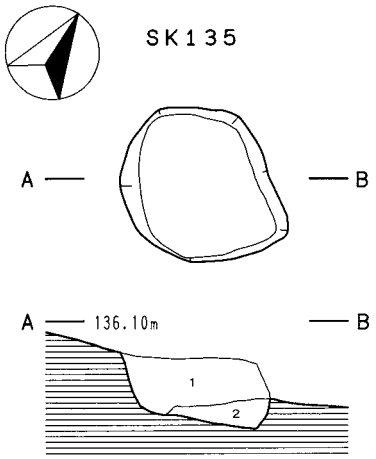
《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸136㎝、短軸118㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から140㎝である。最大径部位の平面形は、長軸169㎝、短軸155㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 74°－Wである。

《埋　　土》　26層に分けた。地山崩落土混入の黒土が互層しており、第14層は地山崩落土である。基本的に、流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

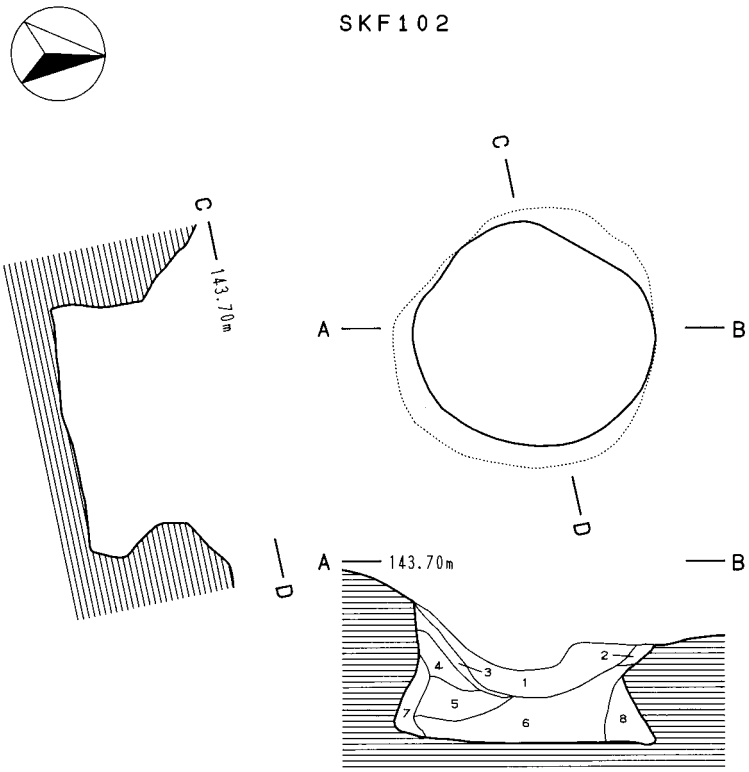
《　壁　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　確認面から深鉢形土器破片２点が出土した。１は、浅い沈線により渦巻文を描く



ＳＫ135
1　黒色土（10YR1.7/1）　しまりやや強い　粘性やや弱い
地山ブロック含む（φ５～20㎜３％）
2　褐色土（10YR４/４）　しまりやや強い　粘性やや弱い
地山ブロック含む（φ５㎜２％）



ＳＫＦ102
1　黒色土（10YR1.7/1）
しまりやや弱い　粘性強い
地山粒含む（φ５㎜20％）６層との境
2　黒褐色土（10YR2/3）
しまり普通　粘性強い
黒色土含む（25％）
3　黒褐色土（10YR2/2）
しまり弱い　粘性強い
地山粒微量含む　暗褐色土含む（15％）
4　暗褐色土（10YR3/3）
しまりやや弱い　粘性強い
地山粒微量含む　黒褐色土含む（10％）
5　褐色土（10YR4/6）
しまりやや弱い　粘性強い
暗褐色土含む（30％）砂質混
6　黒色土（10YR2/1）
しまり普通　粘性強い
地山粒含む（φ２～５㎜15％）
7　暗褐色土（10YR3/4）
しまり弱い　粘性強い
地山粒微量含む
8　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
しまり普通　粘性強い
地山粒含む（φ５㎜10～15％）

0　（S＝1／40）　2m

第20図　ＳＫ135土坑、ＳＫＦ102フラスコ状土坑

土器である。内外面には煤状炭化物が付着する。この土器は後期初頭の土器と考えられる。２は、内外面に煤状炭化物が付着する後期の無文の土器である。

《時　　期》　確認面で出土した遺物とＳＩ107、ＳＫＦ102に隣接して構築していることから、この住居と同時期の後期前葉の可能性が高い。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ106フラスコ状土坑（第14・15・16図、図版９・10・14・15）

《位　　置》　ＭＩ33・34区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　ＳＩ116に付設すると考えられる。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸218㎝、短軸188㎝の円形を呈し、深さは地山面から184㎝である。

《埋　　土》　36層に分けた。底面付近には地山崩落土混入の黒土が堆積し、中位壁際には地山崩落土が堆積する。底面付近の地山崩落土混入の土は流れ込みによる自然堆積土である。中位の地山崩落土は、壁際にドーナツ状に堆積しており人為的に崩落させた可能性が高い。第10層下部には、40×33㎝、重量約20kgの角礫と２個の棒状の礫を設置して埋めている。第１層～14層は連続した人為的な埋め戻し土である。

《　壁　》　ほぼ垂直に立ち上がっておりビーカー状を呈する。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》　底面付近の流れ込み土から深鉢形土器破片１点、スクレイパー１点、剥片１点がが出土し、すべて図示した。１は撚糸文を地文とし、横位に撚糸圧痕が施文される。また、１条の隆帯を貼り付け、隆帯上には撚糸文を施文している。胎土に繊維を混入しており、内外面には煤状炭化物が付着する。この土器は、前期中葉円筒下層ｂ式土器と考えられる。２は縦長剥片を素材とし、片面調整により刃部を作出するスクレイパーである。３は横長剥片である。

《時　　期》　出土土器から、前期中葉下層ｂ式期と考えられる。なお、底面と地山面から160㎝で採取した試料の放射性炭素年代測定結果は4,705±45ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ3,540－3,360（69.5%）を示す。

《考　　察》　当初貯蔵穴として構築された遺構が、その後土坑墓に転用されて礫を入れて埋め戻されたものと考えられる。

ＳＫＦ109フラスコ状土坑（第22図、図版10・15）

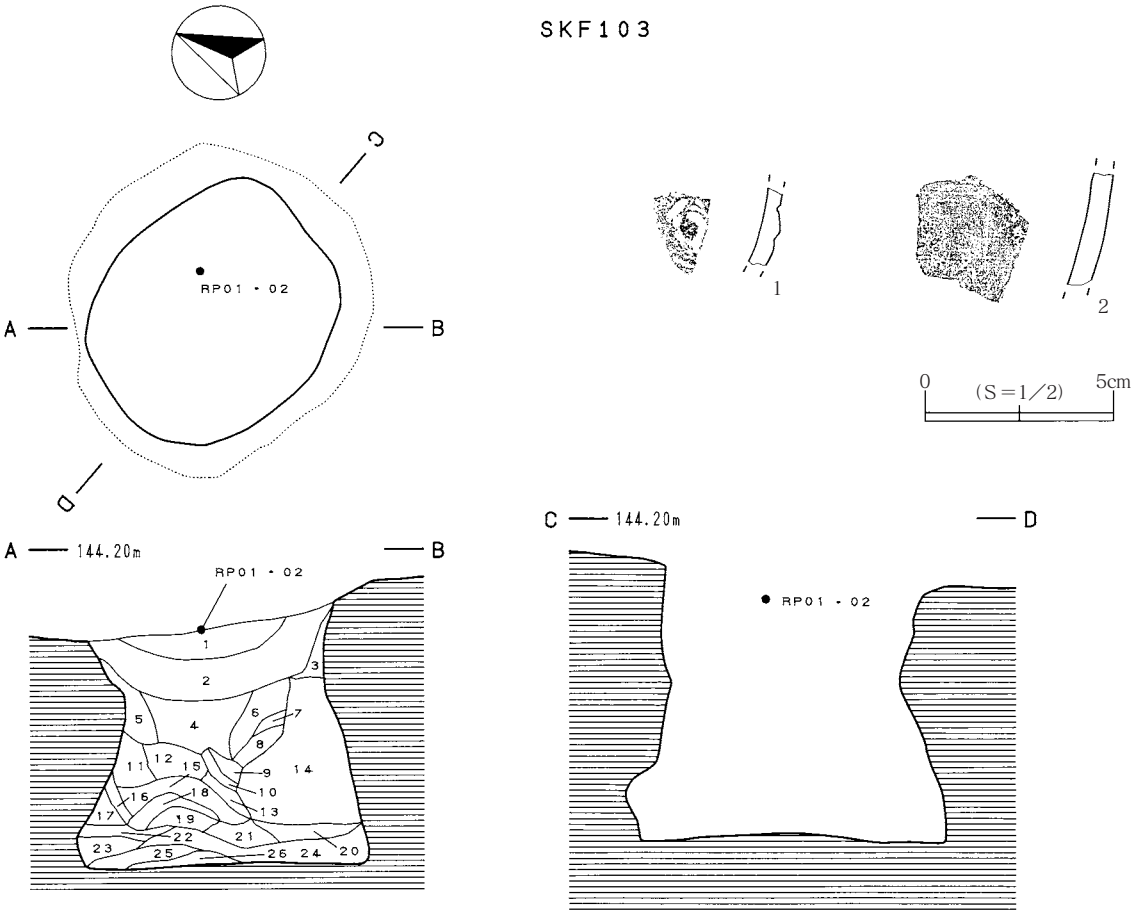
《位　　置》　ＭＯ30区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸100㎝、短軸83㎝のやや不整な楕円形を呈し、深さは地山面から40㎝である。最大径部位の平面形は、長軸102㎝、短軸90㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 27°－Eである。

《埋　　土》　６層に分けた。地山土を包含している層が多く、連続した人為的な埋め戻し土と



ＳＫＦ103

1　黒色土（10YR1.7/1～10YR2/1）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜20%）２層との境に集中
2　黒色土（10YR2/1）しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜15～20%）
3　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜15%）
4　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性強い
　　地山粒少量含む　地山ブロック含む（φ５㎝）
5　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜10%）
　　地山ブロック含む（φ７㎝）
6　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ５㎜15%）
7　暗褐色土　褐色土（10YR3/4～10YR4/4）
　　しまりやや弱い　粘性強い　地山土含む（25%）
8　暗褐色土（10YR3/4）しまり普通　粘性強い　地山土（15%）
9　黄褐色土（10YR5/6）しまりやや弱い　粘性強い
　　黒褐色土含む（10%）　砂質含む
10　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
11　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ５㎜15～20%）
12　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜15%）　地山ブロック含む（φ５㎝）
13　褐色土（10YR4/6）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ３㎝）　黒褐色土含む（30%）
　　砂質含む
14　褐色土　黄褐色土（10YR4/6～10YR5/6）
　　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む
　　地山ブロック含む（φ３～５㎝）　黒褐色土含む（５～10%）
　　砂質含む
15　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜15%）上層との境に集中
16　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜20%）
17　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜10%）中央部に集中
18　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや弱い　粘性強い　黒色土含む（10%）
　　砂質含む
19　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
　　地山土（15%）
20　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜15%）　地山ブロック含む（φ５㎝）
21　黒色土（10YR2/1）　しまり強い　粘性強い　地山粒含む（φ２～５㎜20%）
22　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR3/3）地山粒含む（φ２～５㎜25%）
23　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜20%）上層との境に集中
24　黒褐色土（10YR2/3）しまり強い　粘性強い　地山粒含む（φ２～５㎜20%）
　　地山ブロック含む（φ５㎝）
25　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや弱い　粘性強い　地山土含む（15～20%）
26　黒色土（10YR2/1）　しまり強い　粘性強い　地山粒少量含む

0　(S＝1／40)　2m

第21図　ＳＫＦ103フラスコ状土坑及び出土遺物

考えられる。

《　　壁　　》　南側の壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　１・４は遺構確認面から、２・３は第４層から出土した土器破片である。１は、ＲＬ縄文を施文する深鉢形土器で、内外面に煤状炭化物が付着する。また、内面には被熱痕が見られる。この土器は後期の土器である。２は、ＲＬ縄文を施文する後期の深鉢形土器である。３はＢ突起を有し、口唇部に刻み目を配する鉢形土器である。口縁部に４条の平行沈線を配し、胴部にはＬＲ縄文を施文する。内外面に厚く煤状炭化物が付着し、内面には被熱痕が見られる。この土器は晩期中葉の大洞Ｃ$_1$式土器である。４は、胴部上端に３条の平行沈線を配し、胴部にはＲＬ縄文を施文する土器である。外面には赤色顔料が塗布されている。この土器は晩期中葉の大洞Ｃ$_1$式土器である。５は、底面に埋納された頁岩製の打製石斧である。上下両端が張り出し中央部がくびれる分銅形を呈する。縦長剥片を素材とし、器面全体に大まかな調整を施す。

《時　　期》　出土遺物から、晩期中葉大洞Ｃ$_1$式期と考えられる。なお、底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,655±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ900－790（95.4%）を示す。

《考　　察》　副葬品として打製石斧を埋納していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ112フラスコ状土坑（第23図、図版９）

《位　　置》　ＭＬ34・35、ＭＭ34・35区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、径230㎝の円形を呈し、深さは地山面から115㎝である。最大径部位の平面形は、長軸234㎝、短軸229㎝のほぼ円形を呈する。

《埋　　土》　８層に分けた。第８層は底面に敷き詰めたように堆積する人為的な埋め戻し土である。第６・７層は地山崩落土であり、人為的に崩落させた可能性が高い。第２～５層は塊状地山土を包含している。基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えれられる。

《　　壁　　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

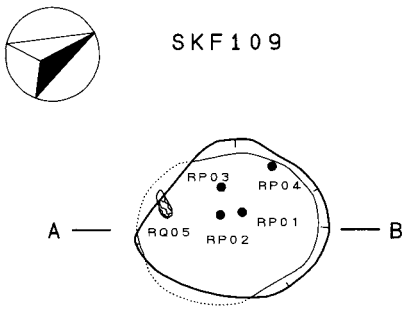
《出 土 遺 物》　なし。

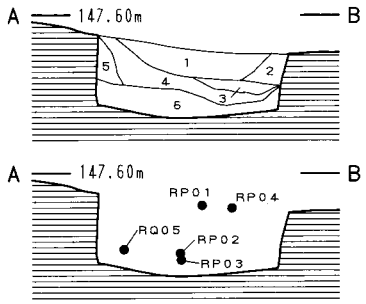
《時　　期》　底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,775±50ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ1,050－810（95.4%）を示し、晩期前葉と考えられる。

《考　　察》　規模や形態からは他の貯蔵穴と類似するが、人為的に埋め戻していることから、土坑墓または貯蔵穴から土坑墓へ転用された可能性が高い。

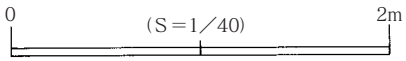
ＳＫＦ113フラスコ状土坑（第23図、図版10）

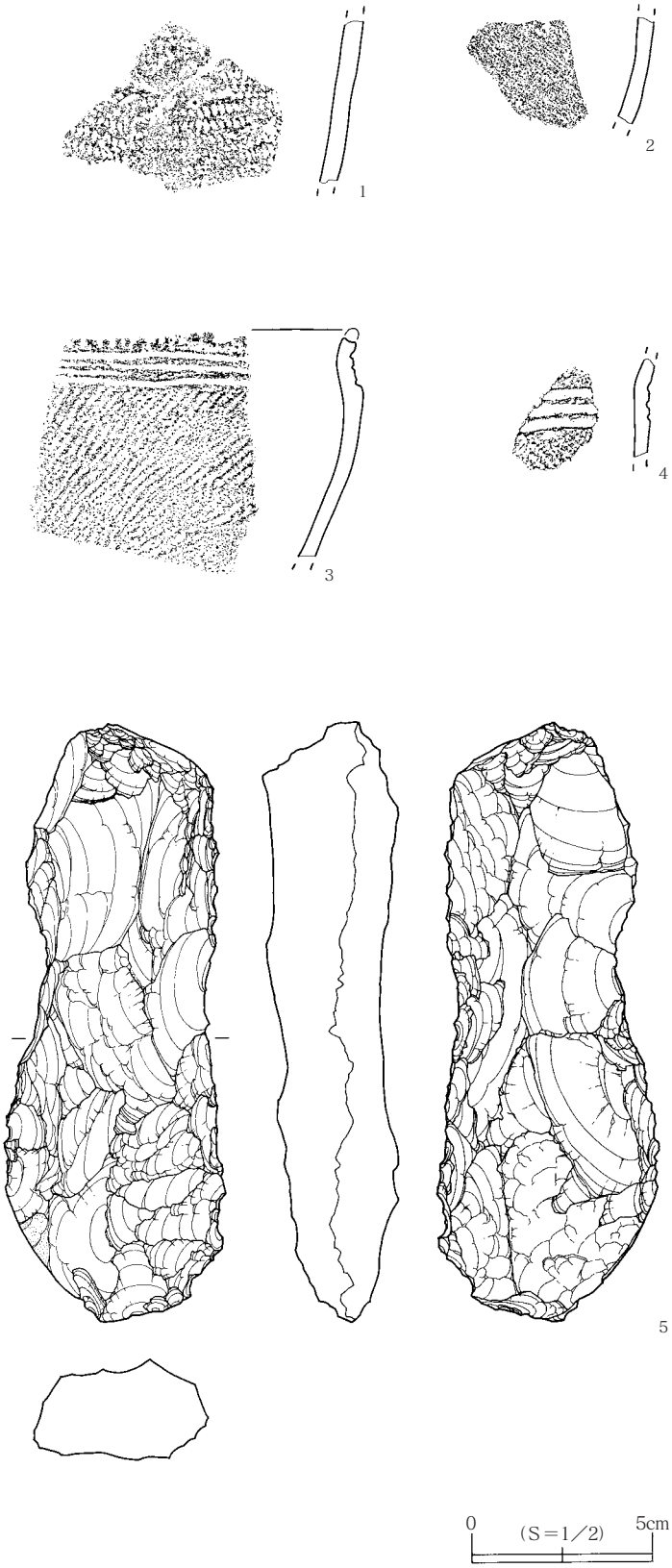
《位　　置》　ＭＧ34区に位置する。





ＳＫＦ109
１　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒少量含む
２　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性やや強い
　　地山土含む（15～20%）
３　褐色土（10YR4/4）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　黒色土含む（20%）
４　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜10%）
　　６層との境に集中
５　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒少量含む
　　黒色土含む（10%）
６　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）
　　しまり普通　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５㎜20%）





第22図　ＳＫＦ109フラスコ状土坑及び出土遺物

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸146㎝、短軸137㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から56㎝である。最大径も開口部である。主軸方向はN－ 9°－Wである。

《埋　　土》　３層に分けた。地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　西側から南側にかけて壁中位から下位でオーバーハングしており、東側は段を有する。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　不明である。

《考　　察》　他の貯蔵穴より掘り込みが浅く、また人為的に埋め戻されていることから、土坑墓の可能性が高い。

ＳＫＦ114フラスコ状土坑（第24図、図版10）

《位　　置》　ＭＧ34・35区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸120㎝、短軸110㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から51㎝である。最大径部位の平面形は、長軸132㎝、短軸124㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 27°－Eである。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　全体的に壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　不明である。

《考　　察》　他の貯蔵穴より掘り込みが浅く、また人為的に埋め戻されていることから、土坑墓の可能性が高い。

ＳＫＦ118フラスコ状土坑（第24図、図版11）

《位　　置》　ＭＩ32区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

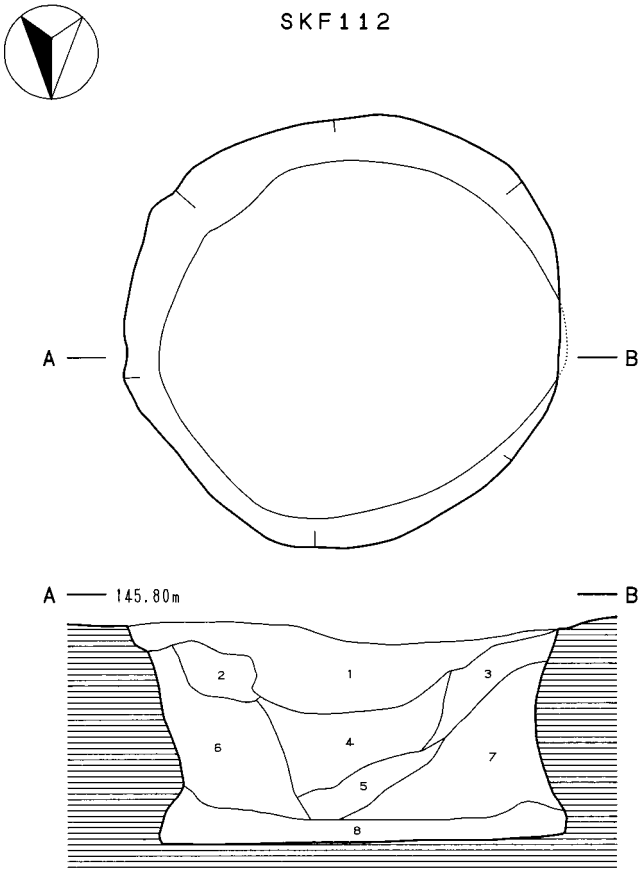
《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸62㎝、短軸54㎝のやや不整な楕円形を呈し、深さは地山面から50㎝である。最大径部位の平面形は、長軸99㎝、短軸83㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 64°－Eである。

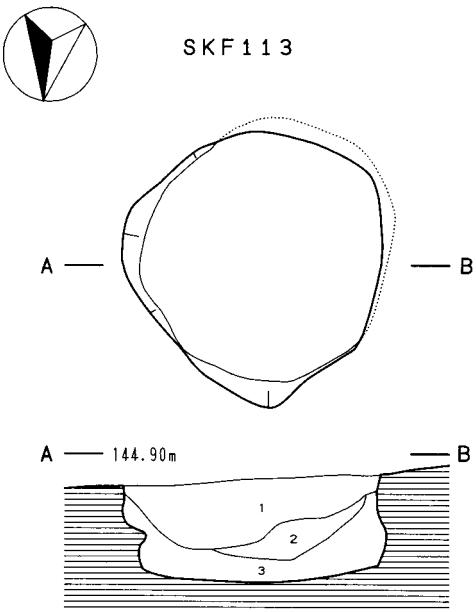
《埋　　土》　単一層である。地山土を包含した一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。



ＳＫＦ112
1　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや弱い　粘性普通
地山粒含む（φ２～５㎜30%）
西側に多く分布
2　暗褐色土（10YR3/3）　しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ２～５㎜25%）
下部に地山ブロック（φ５㎝）
3　褐色土（10YR4/4）　しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ２～５㎜50%）
4　暗褐色土（10YR3/4）　しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ５～10㎜40%）
5　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性やや強い
地山ブロック含む
（φ３～５㎝35%）
6　褐色土（10YR4/6）　しまり普通　粘性普通
地山粒含む（φ２～５㎜20%）
7　黄褐色土（10YR5/6）　しまり普通　粘性普通
５層に類似する
8　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
しまり強い　粘性強い
地山粒含む（φ２～５㎜20%）
地山ブロック含む（φ５～６㎝）



ＳＫＦ113
1　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ２～５㎜10～15%）
地山土含む（10%）
2　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ２～５㎜10%）
地山土含む（10%）
3　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性強い
地山粒含む（φ２～５㎜15%）
地山ブロック含む（φ５㎝）

0　（S＝1／40）　2m

第23図　ＳＫＦ112・113フラスコ状土坑

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　中位から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は3,765±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ2,300－2,110（80.7％）を示す。この結果では中期後葉を示しているが、同時期の遺構や遺物が出土しておらず、ＳＩ107と同時期の後期前葉の可能性が高い。

《考　　察》　形態的には貯蔵穴の遺構と類似するが、一括して埋め戻されており、土坑墓か貯蔵穴か不明である。

ＳＫＦ121フラスコ状土坑（第24図、図版11）

《位　　置》　ＭＨ36・37、ＭＩ36・37区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸173㎝、短軸145㎝のやや不整な楕円形を呈し、深さは地山面より77㎝である。最大径部位の平面形は、長軸186㎝、短軸165㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ ２°－Eである。

《埋　　土》　６層に分けた。第４・５層は地山崩落土であり、第２～６層は流れ込みによる自然堆積土と考えられる。第１層は人為的な埋め戻し土であろう。

《　壁　》　北側を除き底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　遺物が出土していないため確定は出来ないが、ＳＩ107に隣接して構築していることから、この住居と同時期の後期前葉の可能性が高い。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ123フラスコ状土坑（第25図、図版11）

《位　　置》　ＬＰ41区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸120㎝、短軸95㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から72㎝である。最大径部位の平面形は、長軸154㎝、短軸140㎝の不整形を呈する。主軸方向はN－ 24°－Wである。

《埋　　土》　７層に分けた。第４層は他の遺構掘削土の埋め戻し土である。基本的に、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

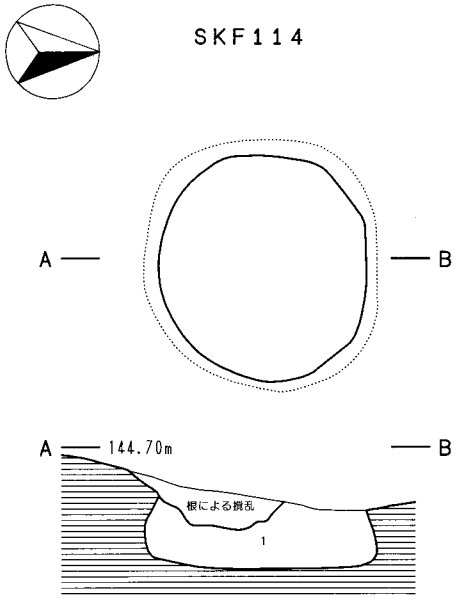
《　壁　》　北側から西側の壁中位で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

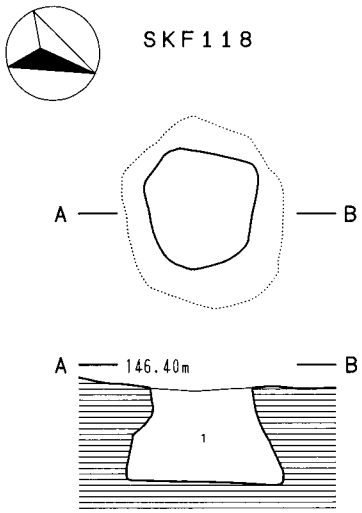
《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　ＳＩ127に隣接しており、この住居と同時期の後期の可能性が高い。

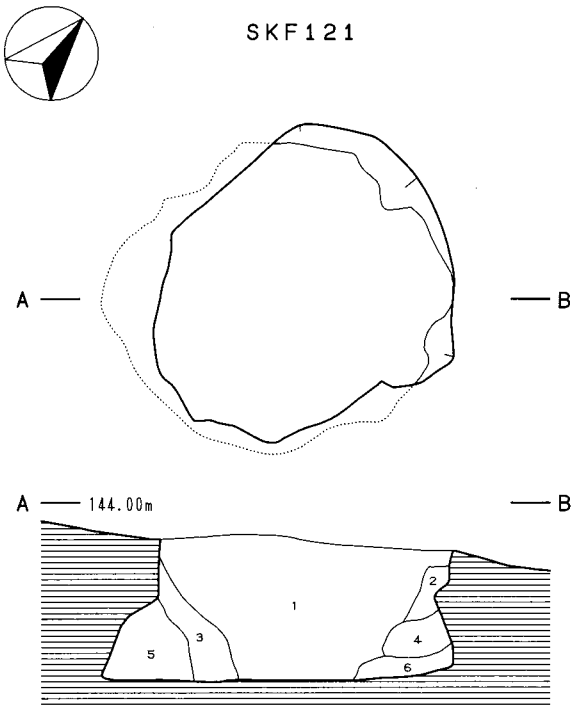
《考　　察》　規模や形態から、貯蔵穴と考えられる。人為的に埋め戻されているのは、この貯蔵穴を廃棄するときに隣接する土坑の掘削土を埋めたと考えられる。



ＳＫＦ114
　1　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ２～５mm15%）
　　地山ブロック含む（φ５cm）



ＳＫＦ118
　1　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）
　　しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ５～10mm20%）
　　地山ブロック含む（φ３cm）



ＳＫＦ121
　1　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
　　褐色土含む（５%）４～５層との境
　2　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性強い
　　地山ブロック含む（φ４cm）黒色土含む（15%）
　3　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
　　地山土含む（５～10%）
　4　褐色土（10YR4/4）　しまりやや弱い　粘性強い　黒色土含む（５%）
　5　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強い　粘性強い
　　地山ブロック含（φ５cm）
　6　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱い　粘性強い　地山粒少量含む

0　（S＝1／40）　2m

第24図　ＳＫＦ114・118・121フラスコ状土坑

ＳＫＦ124フラスコ状土坑（第25図、図版11）

《位　　置》　ＬＰ40・41区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸190㎝、短軸144㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から90㎝である。最大径部位の平面形は、長軸190㎝、短軸156㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 72°－Eである。底面の東側と西側に２基のフラスコ状土坑（ＳＫＦ１・２）が掘り込まれている。ＳＫＦ１の開口部の平面形は、長軸78㎝、短軸43㎝の隅丸方形を呈し、深さは底面から51㎝である。最大径部位の平面形は、長軸102㎝、短軸63㎝の楕円形を呈する。ＳＫＦ２の開口部は、長軸37㎝、短軸35㎝の円形を呈し、深さは底面から46㎝である。最大径部位の平面形は、長軸57㎝、短軸47㎝の楕円形を呈する。

《埋　　土》　10層に分けた。ほとんどの層で塊状の地山土を包含しており、基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　北側の壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　ＳＩ127に隣接しており、この住居と同時期の後期の可能性が高い。

《考　　察》　底面に２基のフラスコを掘り込んでいることから、貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ128フラスコ状土坑（第25図、図版12）

《位　　置》　ＬＴ37、ＭＡ37区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸96㎝、短軸88㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から32㎝である。最大径部位の平面形は、長軸101㎝、短軸83㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 54°－Wである。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　西側の底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　不明である。

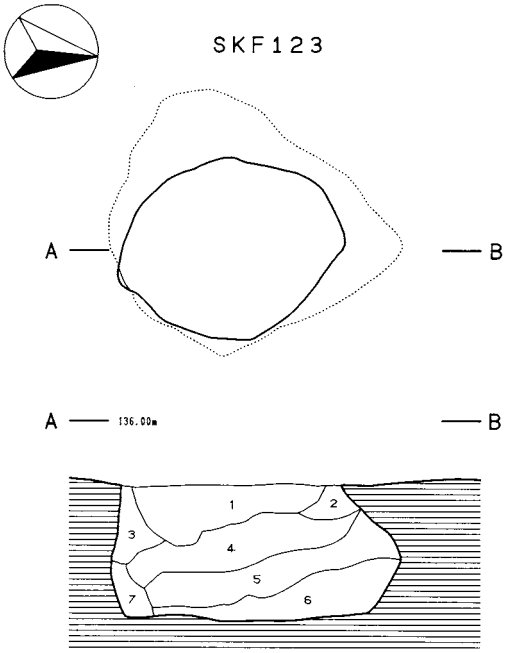
《考　　察》　他の貯蔵穴と比べ掘り込みが浅く、人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ136フラスコ状土坑（第26図、図版12）

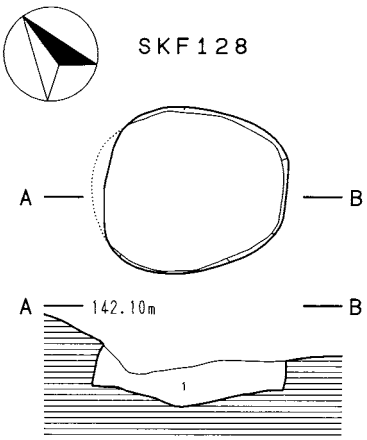
《位　　置》　ＬＰ41区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

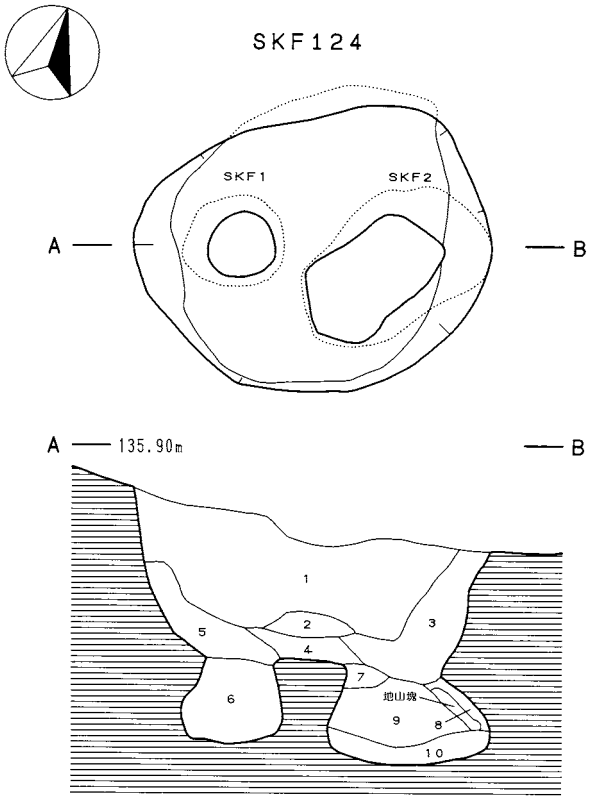
《重　　複》　なし。



ＳＫＦ123
1　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（５%）
2　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（10%）
3　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（20%）
4　明黄褐色土（10YR7/6）しまりやや弱い　粘性弱い
　　地山土含む（１%）
5　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（５%）
6　黄橙色土（10YR8/6）　しまりやや弱い　粘性弱い
　　地山土含む（15%）
7　黄褐色土（10YR5/6）　しまりやや強い　粘性弱い
　　地山土含む（10%）



ＳＫＦ128
1　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや強い　粘性やや弱い
　　地山土含む（５%）



ＳＫＦ124
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ10～80mm30%）炭化物少量含む
2　黒褐色土（10YR3/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ10～100mm70%）
3　黒褐色土（10YR3/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ５～20mm20%）炭化物少量含む
4　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ３～10mm20%）炭化物少量含む
5　褐色土（10YR4/4）　しまりやや強い　粘性やや弱い
　　地山ブロック含む（φ５～30mm15%）
6　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　しまりやや強い　粘性やや弱い
　　地山ブロック含む（10～50mm10%）
7　明黄褐色土（10YR6/6）（地山塊）
　　しまりやや弱い　粘性やや弱い
8　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山塊含む（60%）
9　黒褐色土（10YR2/2）　しまり弱い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ１～30mm５%）炭化物少量含む
10　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ10～20mm５%）

0　（S＝1／40）　2m

第25図　ＳＫＦ123・124・128フラスコ状土坑

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸152㎝、短軸137㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から42㎝である。最大径部位の平面形は、長軸157㎝、短軸135㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 74°－Wである。

《埋　　土》　４層に分けた。第４層は塊状地山土を、第１～３層は粒状地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　東側の壁上位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　ＳＩ127に隣接しており、この住居と同時期の後期の可能性が高い。

《考　　察》　他の貯蔵穴と比べ掘り込みが浅く、人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ140フラスコ状土坑（第26図）

《位　　置》　ＭＥ36区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸91㎝、短軸83㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から129㎝である。最大径部位の平面形は、長軸158㎝、短軸136㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 13°－Wである。

《埋　　土》　４層に分けた。第３層は他の遺構を掘削した地山の埋め戻し土であり、第２層は塊状地山土を包含している。基本的に、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　不明である。

《考　　察》　規模や形態は他の貯蔵穴と類似するが、人為的に埋め戻しており、土坑墓か貯蔵穴か断定できない。

（４）土器埋設遺構

ＳＲ105土器埋設遺構（第11・17図、図版12･15）

《位　　置》　ＭＩ33区に位置する。

《確　　認》　確認調査時で検出されており、土器内埋土は掘り上げられた状態で確認した。

《重　　複》　ＳＩ116の床面に構築されたと考えられる。

《形　　態》　径25㎝の掘り込みに正位に埋設されていた。確認調査時の重機によるトレンチ掘削により土器上半が壊されており、遺存状態は悪い。土器内にはわずかに暗褐色土が残存していたが、本来の土器内埋土かどうかは不明である。

《出 土 遺 物》　１は、胴部から底部にかけての深鉢形土器破片である。撚糸文を地文とし、底部付近はナデにより磨り消している。胎土には繊維を多量に混入している。内外面には煤状炭化物が付着し、外面には被熱痕が見られる。遺存状態が悪いため断定は出

来ないが、ＳＩ116の床面から出土した土器同様前期の円筒下層ｂ式土器と考えられる。

《時　　期》　前期中葉円筒下層ｂ式期と考えられる。

（５）性格不明遺構

ＳＸ119性格不明遺構（第26図、図版12）

《位　　置》　ＭＮ33・34区に位置する。

《確　　認》　精査中に北側の沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《形　　態》　平面形は、長軸216㎝、短軸109㎝の不整形を呈する。深さは南側地山面から109㎝である。埋土は２層分けた。どちらも沢への流れ込みによる自然堆積土と考えられる。残存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、段を有する。底面は平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　不明である。

ＳＸ131性格不明遺構（第27図、図版13）

《位　　置》　ＭＡ36・37、ＭＢ37区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側の沢の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《形　　態》　平面形は、長軸3.55m、短軸1.48mの楕円形を呈する。深さは北側地山面から148㎝である。埋土は７層分けた。第７層は塊状の地山土を包含しており、６層と共に連続した人為的な埋め戻し土である。第５層は十和田ａ火山灰の層であり、第１～５層は後世の流れ込みによる自然堆積土である。壁はやや急に立ち上がるが、南側の一部は緩やかである。底面は鍋底状を呈し、凸凹している。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　不明である。

（６）柱穴様ピット

ＳＫＰ122柱穴様ピット（第27図、図版13）

《位　　置》　ＬＰ41区に位置する。

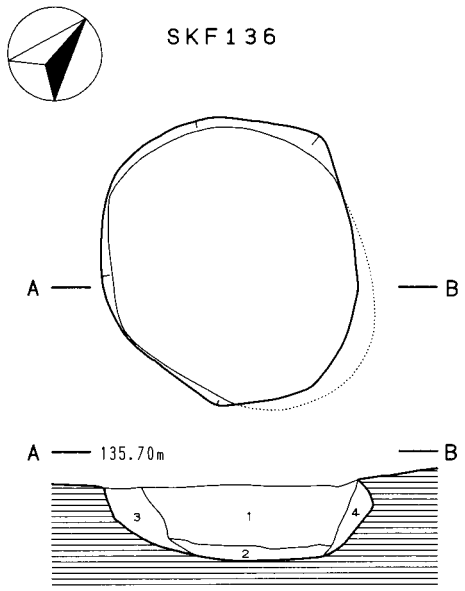
《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

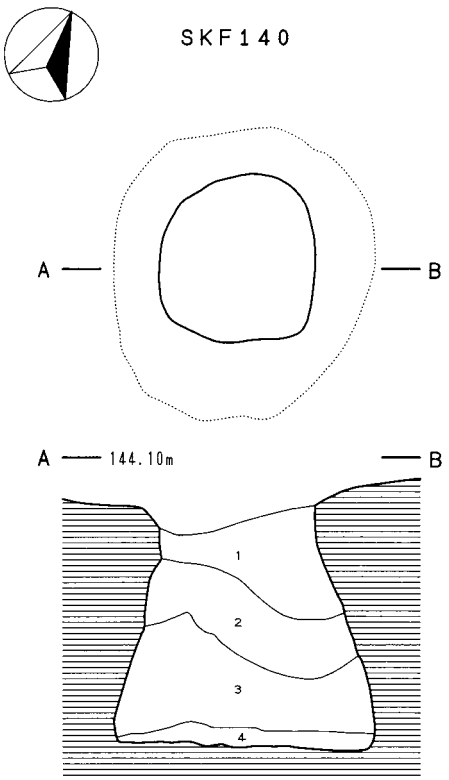
《形　　態》　平面形は、長軸50㎝、短軸37㎝の隅丸方形を呈する。深さは地山面から16㎝である。埋土は単一層である。底面は平坦であり、壁は北側を除き急に立ち上がっている。

《出 土 遺 物》　なし。

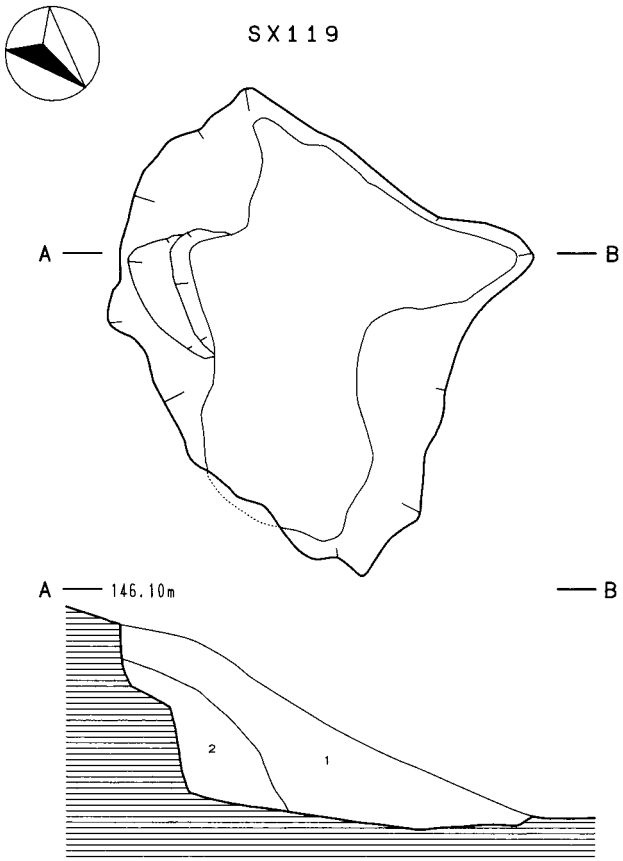
《時　　期》　不明である。



SKF136
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまり強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ5～10mm20%）
2　褐色土（10YR4/4）　しまり強い　粘性弱い
　　地山ブロック含む（φ5～20mm30%）
3　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ3～5mm3%）
4　黒褐色土（10YR3/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（1～2mm2%）



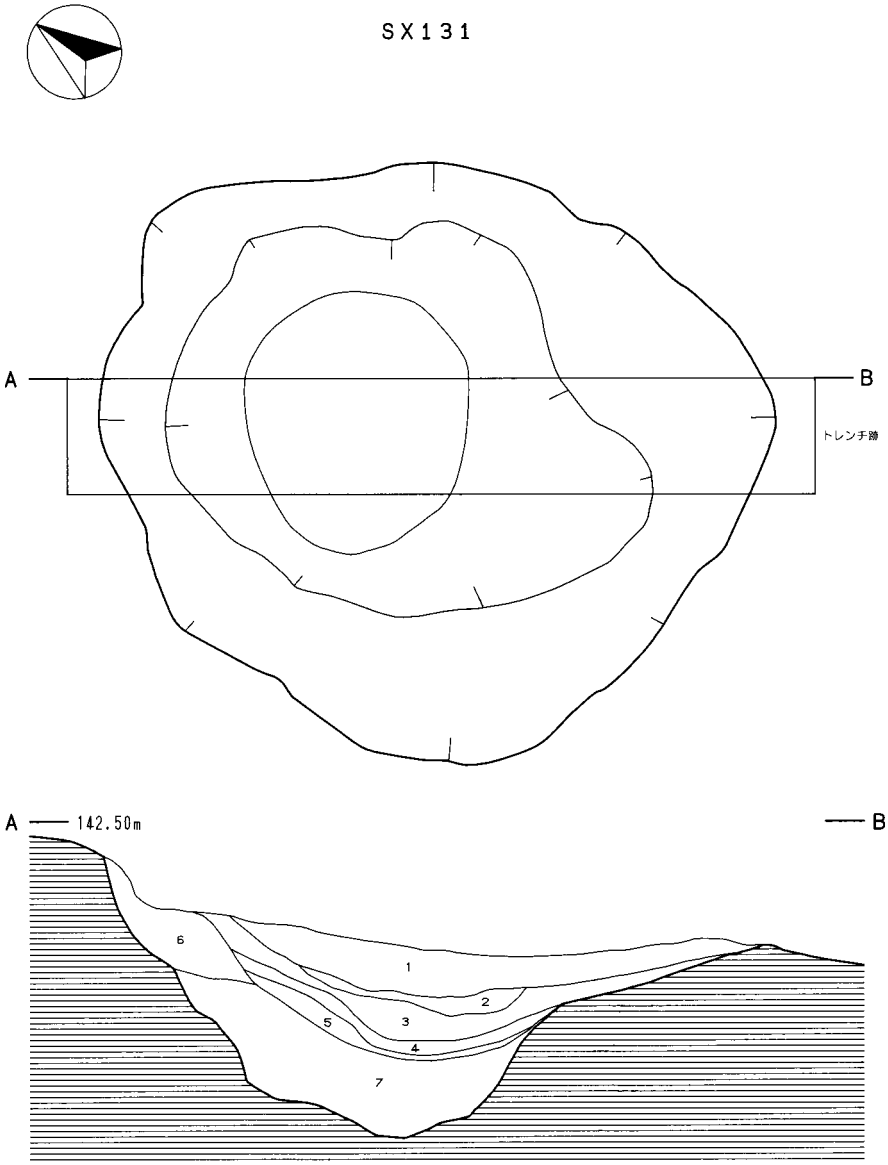
SKF140
1　黒色土（10YR1.7/1）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（1%）
2　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む
　　（φ30～40mm2～5%）
3　黄褐色土（10YR5/6）　しまりやや強い　粘性やや弱い
4　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ0.1mm30%）



SX119
1　褐色土（10YR4/4）　しまり強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ10mm30%）
　　黒褐色土含む（20%）
2　褐色土（10YR4/6）　しまり強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ10mm30～35%）
　　地山ブロック含む（φ5cm）

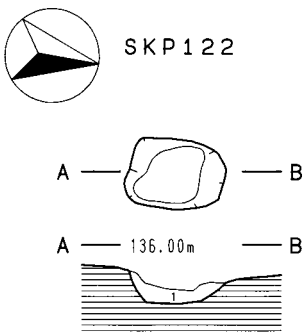
0　（S＝1／40）　2m

第26図　ＳＫＦ136・140フラスコ状土坑、ＳＸ119性格不明遺構



ＳＸ131

1	黒色土（10YR2/1）	しまりやや弱い　粘性やや強い
2	灰黄褐色土（10YR4/2）	しまりやや弱い　粘性弱い
3	にぶい黄橙色土（10YR6/3）	しまり強い　粘性弱い
4	浅黄橙色土（10YR8/4）	しまり弱い　粘性弱い　テフラ
5	黒褐色土（10YR2/3）	しまりやや弱い　粘性やや強い 地山土含む（1％）
6	黒褐色土（10YR2/3）	しまりやや弱い　粘性やや強い 地山ブロック含む（50％）
7	黒褐色土（10YR2/2）	しまりやや弱い　粘性弱い



ＳＫＰ122

1	暗褐色土（10YR3/4）	しまりやや弱い　粘性やや強い 地山土含む（20％）

0　（S＝1／40）　2m

第27図　ＳＸ131性格不明遺構、ＳＫＰ122柱穴様ピット

３　中世の遺構

（１）ＳＢ108掘立柱建物跡（第28図、図版13・15）

《位　　置》　ＭＫ43・44、ＭＬ43区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で７基の柱穴が掘立柱建物跡になることを確認した。

《重　　複》　直接重複関係にはないが、ＳＫＦ109と重複しており、本遺構が新しい。

《規　　模》　桁行２間×梁行１間の総柱の掘立柱建物跡で、桁行6.97～7.04m、梁行4.73～5.08mを測る。建物方位は、N－ 63°－Eを示す。

《柱　　穴》　検出した柱穴は７基である。平面形は、Ｐ１・３・４・６が、長軸36～42㎝、短軸28～32㎝の楕円形を呈する。Ｐ２・５は、長軸46・32㎝、短軸36・24㎝の隅丸方形を呈し、Ｐ７は径24㎝の円形を呈する。深さはそれぞれ地山面から24～40㎝である。Ｐ２の埋土には、柱痕が残る。

《出 土 遺 物》　Ｐ１の埋土から、縄文土器破片３点が出土した。１は隆帯を貼り付ける深鉢形土器破片で、胎土には繊維を多量に混入している。この土器は前期中葉の円筒下層ｂ式土器と考えられる。２はＬＲ縄文を施文する土器破片で、外面に厚く煤状炭化物が付着する。３は摩滅が著しいが、一部にＲＬ縄文が残り、内外面には煤状炭化物が付着する。どちらも後期の土器である。

《時　　期》　Ｐ１の埋土から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果は2,090±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ200－ＡＤＯ（95.4%）を示すが、柱穴の規模が小さく建物が総柱の形態を呈することから中世の遺構と考えられる。

第４節　北側調査区遺構外出土遺物

出土した遺物は、同一個体の縄文土器である。

１　土器（第29図、図版15）

ＭＰ44区から同一個体の壺形土器破片が出土した。１は頸部が外反し、胴部は球状の器形を呈する。１条の平行沈線により、幅広い口縁部が区画される。区画内はＬＲ縄文が充填される。胴部には弧状沈線により幅広い文様帯の区画がなされる。区画内には羽状縄文が充填される。外面には煤状炭化物が付着し、被熱痕が見られる。内面は丁寧にみがかれている。この土器は、後期中葉の十腰内３式土器である。

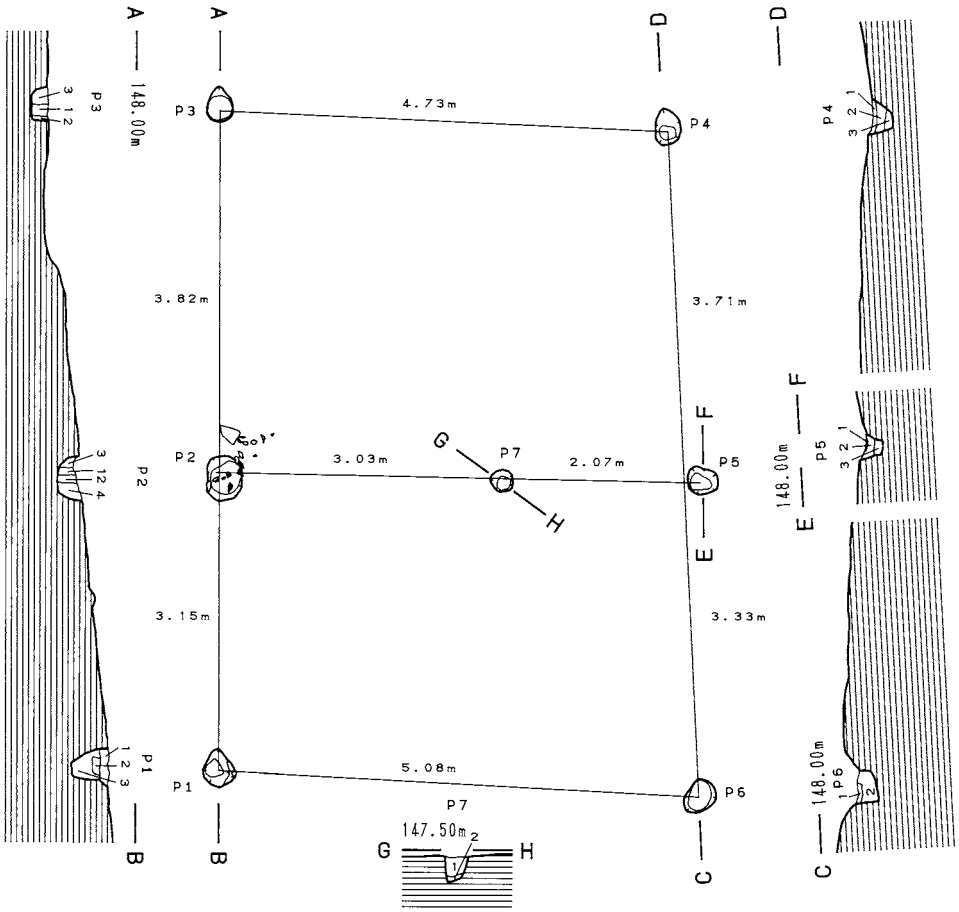
第５節　南側調査区遺構外出土遺物

出土した遺物は、縄文土器と石器である。土器は、前期・後期・晩期の時期ごとに分類した。また、石器は器種ごとに分類した。

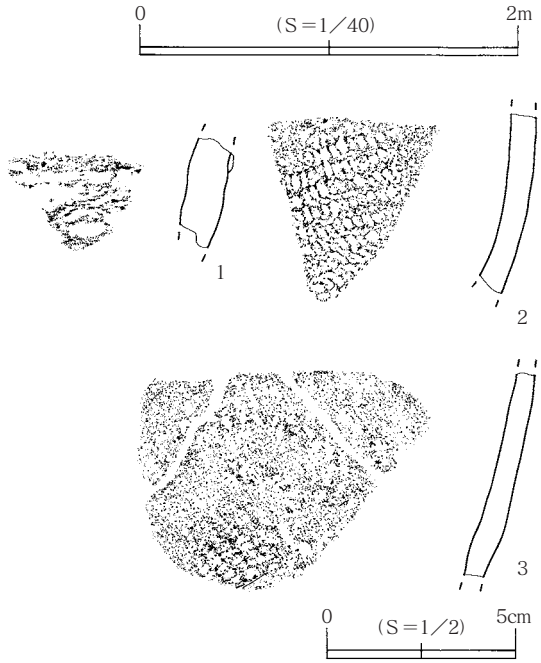
１　土器

【第Ⅰ群土器】前期の土器（第29図、図版15）

ＳＢ１０８



ＳＢ108　Ｐ1
　1　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　2　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（2％）
　3　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性強い　地山土含む（50％）
ＳＢ108　Ｐ2
　1　褐色土（10YR4/4）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山土含む（40％）
　2　黄褐色土（10YR5/6）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（30％）
　3　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（1％）
　4　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（30％）
ＳＢ108　Ｐ3
　1　黄褐色土（10YR5/6）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（90％）
　2　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山土含む（30％）
　3　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山土含む（10％）
ＳＢ108　Ｐ4
　1　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山土含む（1％）
　2　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山土含む（5％）
　3　褐色土（10YR4/4）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（20％）
ＳＢ108　Ｐ5
　1　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　2　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや弱い　粘性やや強い
　3　黄褐色土（10YR5/6）　しまりやや弱い　粘性やや強い
ＳＢ108　Ｐ6
　1　褐色土（10YR4/6）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　2　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや弱い　粘性やや強い
　3　黄褐色土（10YR5/6）　しまりやや弱い　粘性やや強い
ＳＢ108　Ｐ7
　1　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山土含む（10％）
　2　明黄褐色土（10YR6/8）しまりやや強い　粘性やや強い　地山土含む（80％）



第28図　ＳＢ108掘立柱建物跡及び出土遺物

出土した土器はすべて深鉢形土器破片である。１は、横位不整撚糸文を施文し、縦位と横位に３条ずつの無節の撚糸圧痕文を配する土器である。内外面には煤状炭化物が付着する。５・６も横位不整撚糸文を施文し、縦位に無節の撚糸圧痕を施文する。２・３は隆帯を貼り付け、隆帯上と隆帯上端に１条ずつ撚糸の側面を圧痕する。すべての土器の胎土には繊維が混入する。１～８は円筒下層ａ式土器である。

【第Ⅱ群土器】後期の土器（第29図、図版15）

１類：深鉢形土器群（第19・30・31・32図、図版15・16）

11は山形突起を有する深鉢形土器である。口縁部に沿って隆帯を貼り付け、幅広い沈線により弧状または渦巻文を描く。内外面には煤状炭化物が付着する。13～23は縄文を地文とし、幅広い沈線により曲線の文様を描く土器である。土器型式的には十腰内１式土器直前の後期初頭に位置づけられる。12は角状突起を有する土器である。３条の平行沈線を配し、上下の沈線間に刻み目を充填する。胴部にも、曲線の沈線により文様帯を区画し、区画内に刻み目を充填する。この土器は十腰内５式土器である。24は無文に沈線により曲線の文を描く土器である。25～39は縄文を施文する土器である。35の外面には被熱痕が見られる。煤状炭化物が付着する土器が多い。

２類：鉢形土器群（第31・32図、図版15・16）

40は小突起を有する土器である。４条の平行沈線を配し、口縁部は無文帯を呈する。胴部にはＬＲ縄文を施文する。外面には煤状炭化物が厚く付着する。この土器は十腰内５式土器である。41・42は１条の平行沈線を配し、口縁部文様帯を区画する。41の区画内には磨消が施されるが雑であり、縄文が残る。外面には被熱痕が見られる。これらの土器は後期前葉の土器である。43～45・49・50は縄文を施文する土器である。44の口縁部には磨消が施されるが雑である。46・47は同一個体であり、幅広い沈線により曲線の文様帯を描く。この土器は後期初頭の土器である。48は複節ＲＬＲ縄文を施文し、３個の円形刺突文を配する。この土器は後期前葉の土器である。

３類：壺形土器群（第32図、図版16）

51は口縁部に２条の平行沈線を配する土器である。52は胴部上端に１条の平行沈線を配し、羽状縄文を施文する土器である。51は前葉の土器で、52は十腰内３式土器である。53は複節ＬＲＬ縄文を施文している。54は完形の小形壺形土器である。口縁に沿って１条の平行沈線が配され、胴部上端には横位に１対の橋状把手が貼付られる。把手からは２本１組の沈線が横走し、先端部は渦巻文が描かれる。平行沈線とこの沈線間には、２本一組の弧状短沈線と渦巻文が描かれる。また、下部にも渦巻文が描かれる。この土器は前葉の土器である。北側の沢の落ち際から出土した完形の土器であり、隣接する同時期のＳＩ107と関連が考えられる。

【第Ⅲ群土器】晩期の土器（第33図、図版16・17）

１類：深鉢形土器群（第33図、図版16）

55はＯ段多条縄文を施文する深鉢形土器破片である。

２類：鉢形土器群（第33図、図版17）

57・58は口唇部に刻み目を配し、口縁部に２条の平行沈線を配する土器である。どちらも内外面に煤状炭化物が厚く付着する。61・62は胴部に２条の平行沈線を配する。これらの土器は大洞C_1式と考えられる。63～65はＯ段多条縄文を施文する胴部破片であり、煤状炭化物が厚く付着する。

３類：浅鉢形土器（第34図、図版17）

67はＢ突起を有する土器である。口唇部には刻み目を配する。口縁に沿って隆線を貼り付け、隆線上に沈線により文様を表出する。胴部上端には４条の平行沈線が配され、下部には沈線により雲形文が描かれる。雲形文内にはＬＲ縄文が充填される。この土器は大洞C_1式土器である。

２　石器

石匙（第34図、図版17）

石匙は３点出土した。すべて頁岩製の縦型石匙である。67・69は一部両面調整に刃部を作出し、68は片面調整のみにより刃部を作出している。

石錐（第34図、図版17）

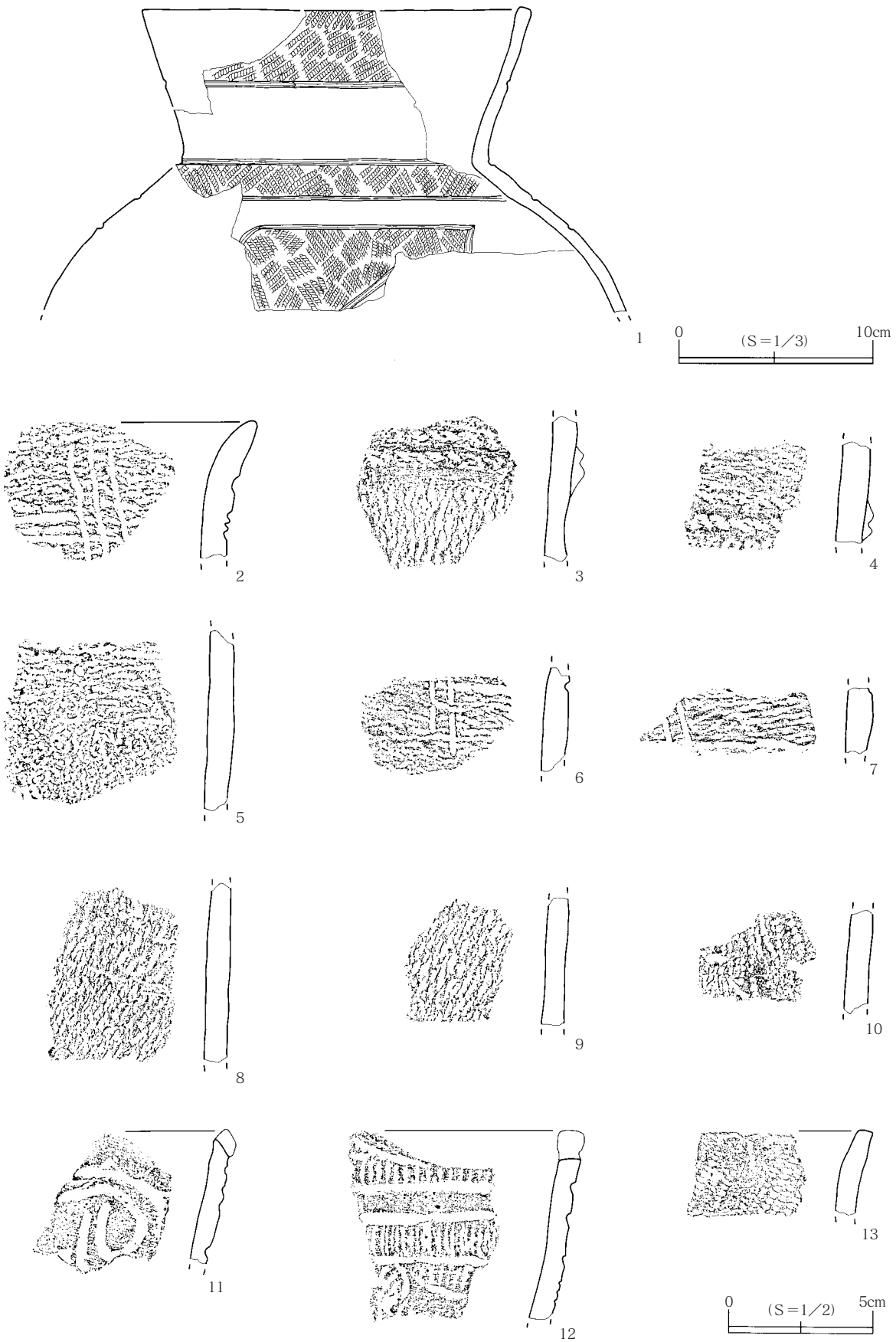
石錐は２点出土した。どちらも縦長剥片を素材としており、縁辺部に微調整を加え刃部を作出している。

スクレイパー（第34・35図、図版17）

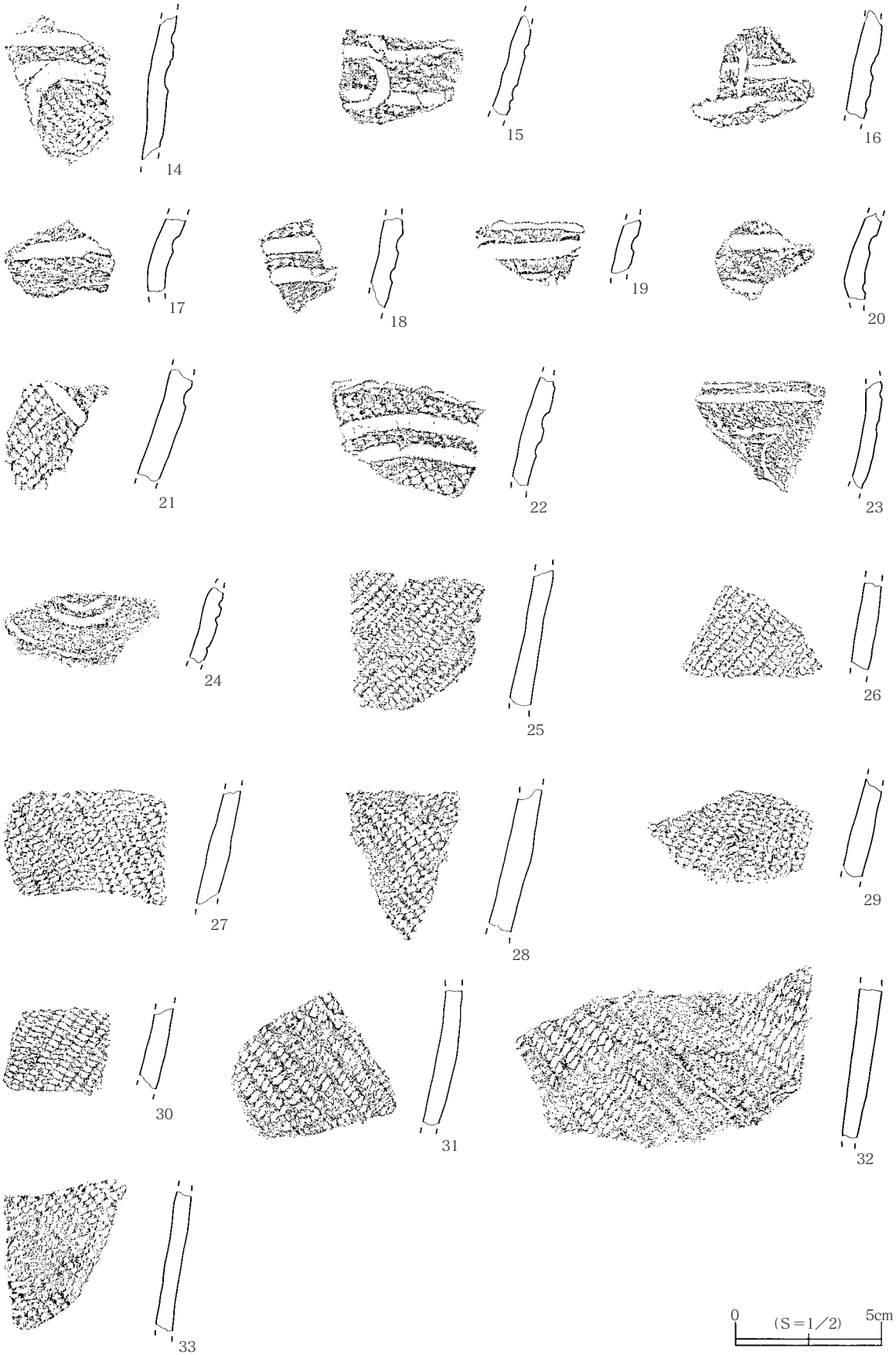
スクレイパーは７点出土し、すべて図示した。72～77は縦長剥片を素材としたスクレイパーである。73は両面に大きな剥離痕が残る。その他は片面に微調整を加え刃部を作出している。

磨石（第35図、図版17）

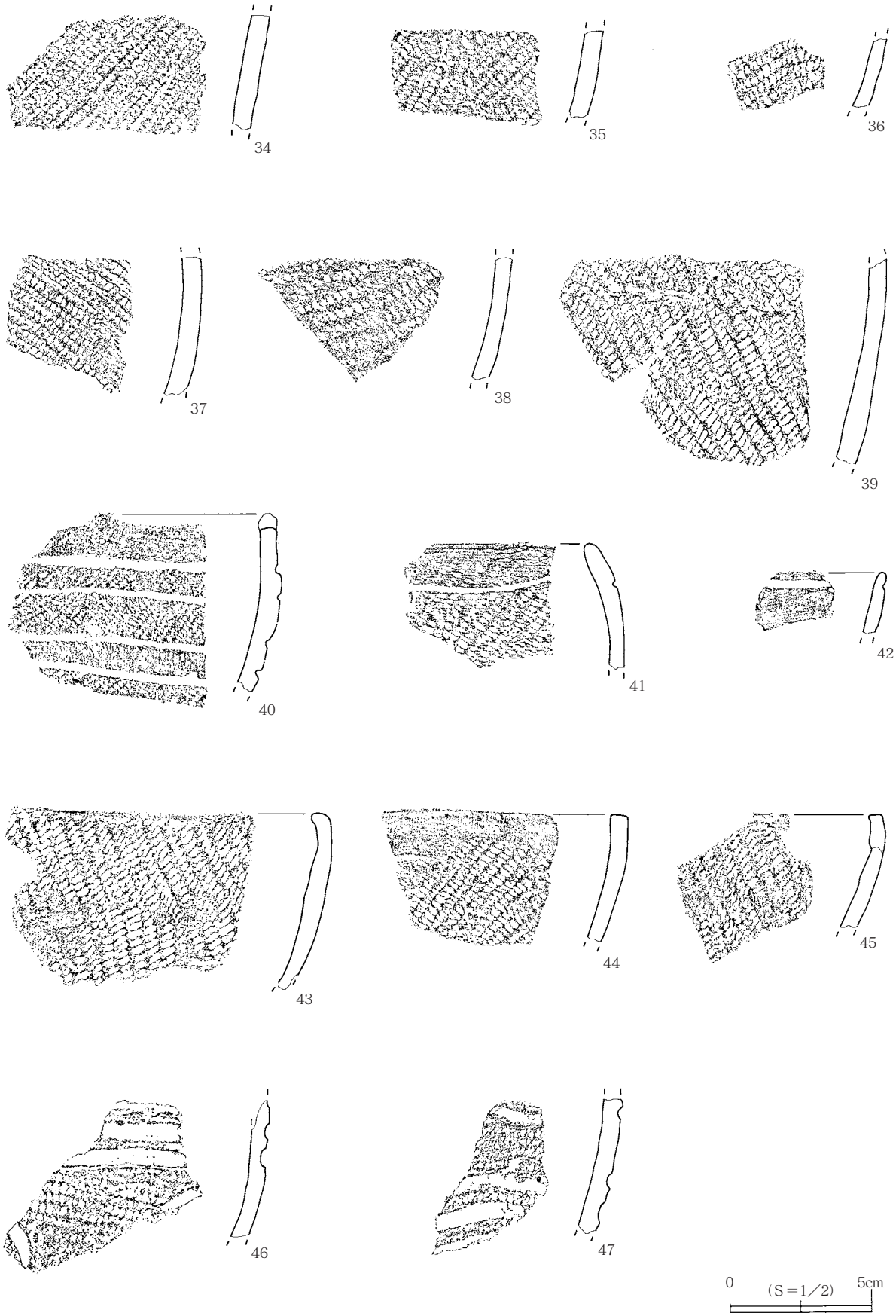
79は棒状の、80は円礫を素材した磨石である。79には敲打痕が残る。



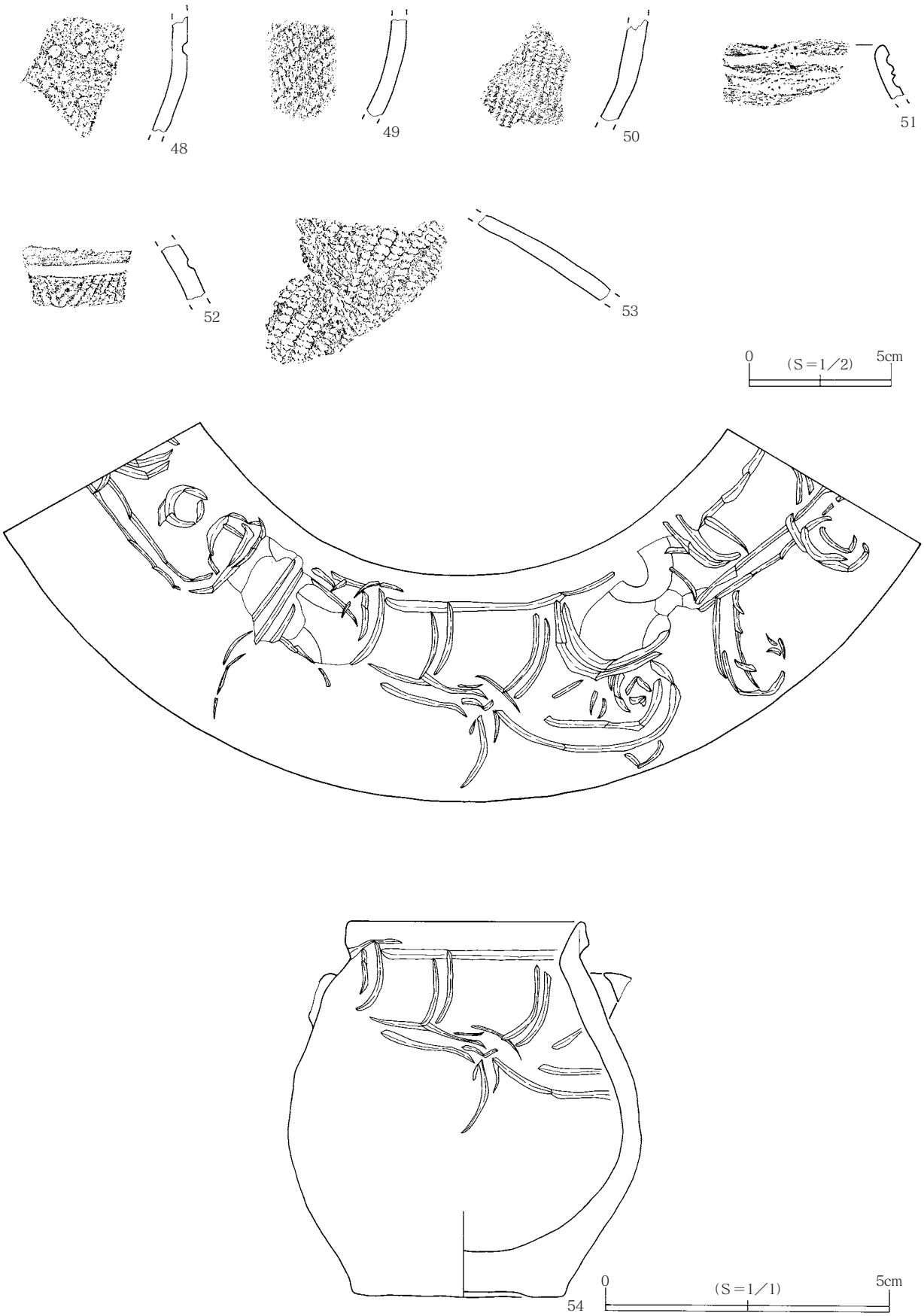
第29図　北側調査区・南側調査区遺構外出土遺物



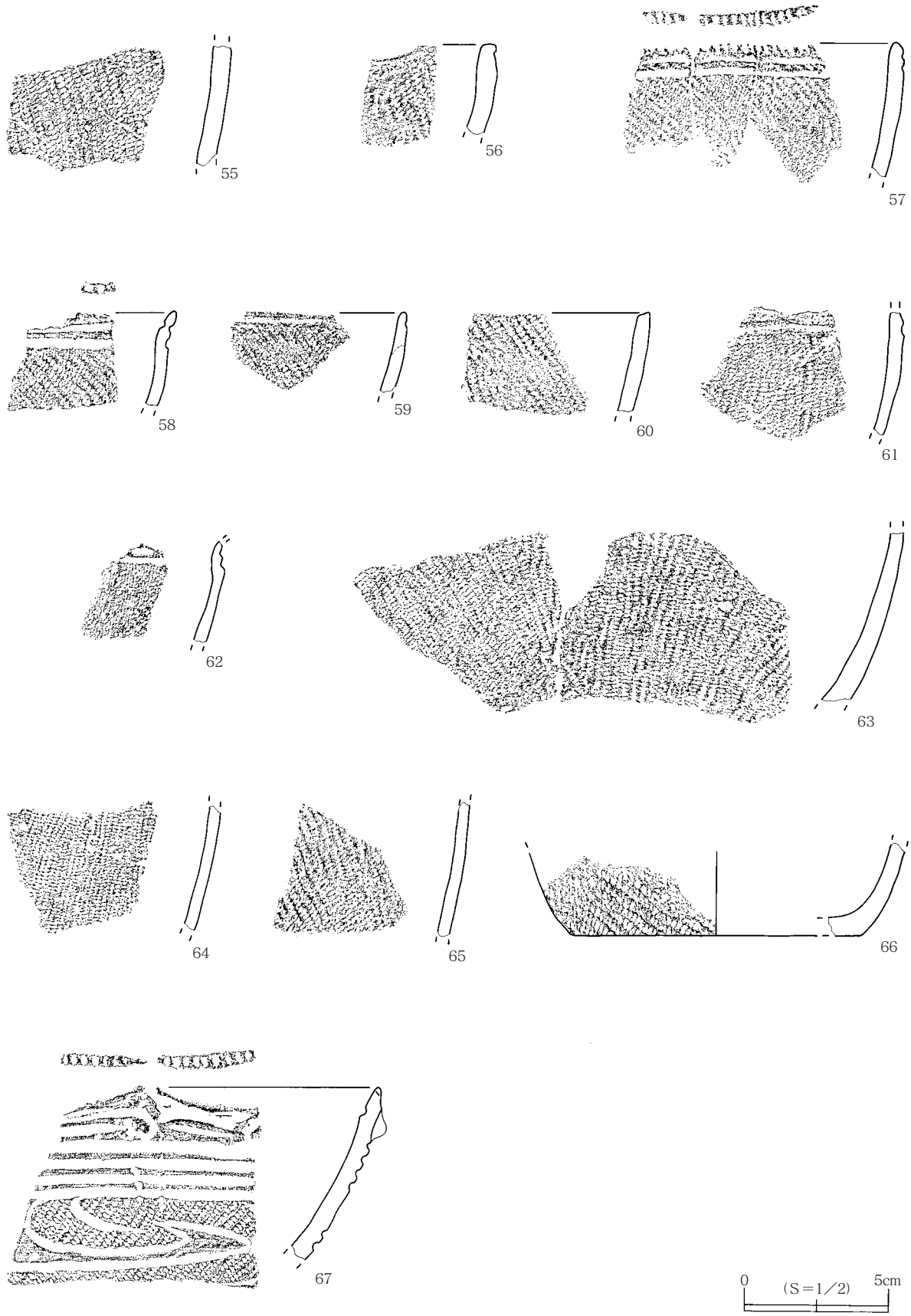
第30図　南側調査区遺構外出土遺物（1）



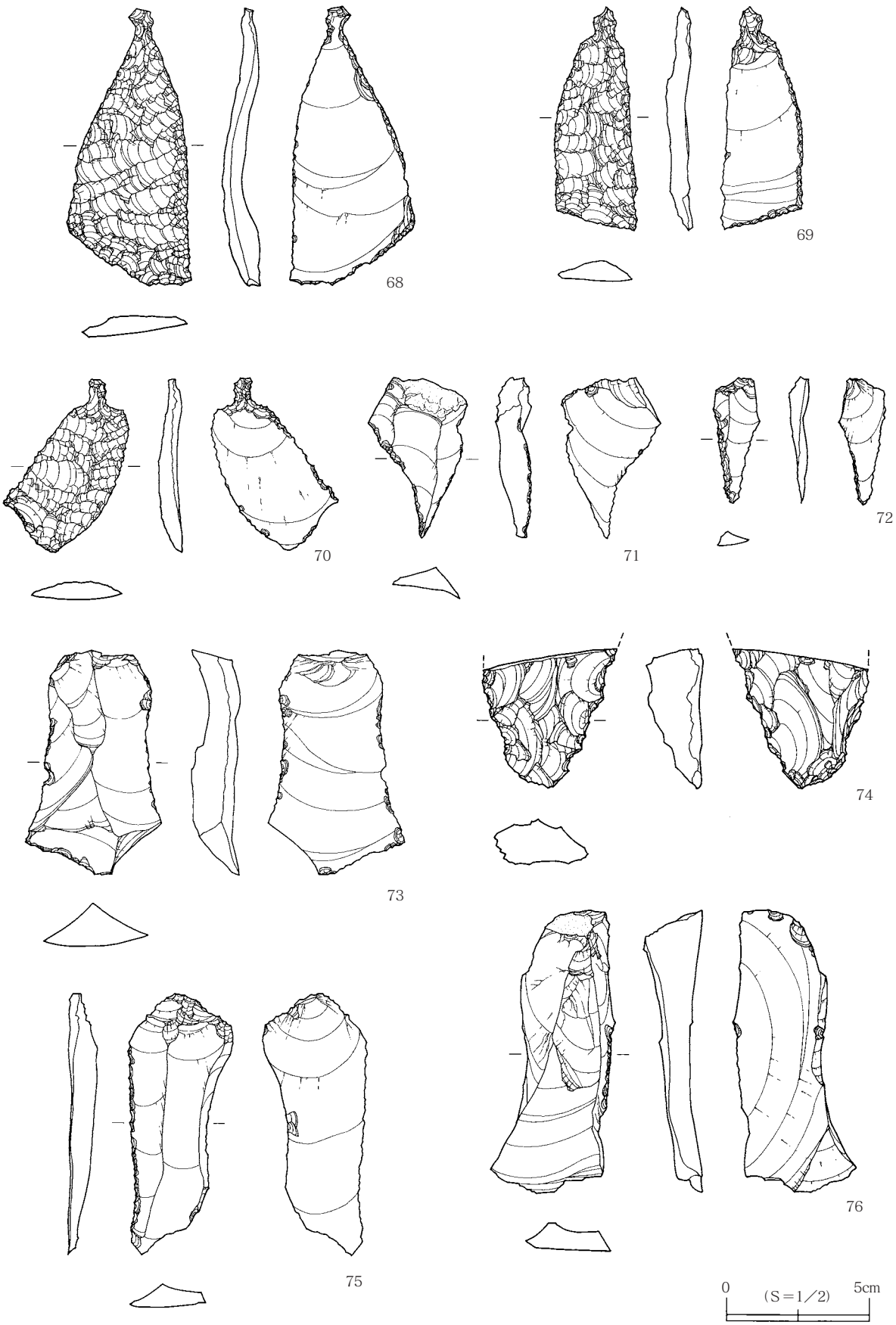
第31図　南側調査区遺構外出土遺物（2）



第32図　南側調査区遺構外出土遺物（3）



第33図　南側調査区遺構外出土遺物（4）



第34図　南側調査区遺構外出土遺物（5）

第35図　南側調査区遺構外出土遺物（6）

第２表　縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器　形	部　位	口唇部・口縁部	頸　部	肩　部・胴　部	底　部	分　　類	備　　考
13－1	14－4	ＳＩ116	深鉢	口縁部	横位不整撚糸文				Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－2	14－5	ＳＩ116	深鉢	口縁部	横位不整撚糸文				Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－3	14－6	ＳＩ116	深鉢	胴部			隆帯貼付　半截竹管文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－4	14－7	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－5	14－8	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－6	14－9	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－7	14－10	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－8	14－11	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－9	14－12	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－10	14－13	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－11	14－14	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－12	14－15	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－13	14－16	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－14	14－17	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－15	14－18	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－16	14－19	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－17	14－20	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
13－18	14－21	ＳＩ116	深鉢	胴部			上半横位撚糸文　下半縦位撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
14－19	14－22	ＳＩ116	深鉢	胴部			隆帯貼付　半截竹管文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
14－20	14－23	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
14－21	14－24	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	外被熱痕　繊維含む
14－22	14－25	ＳＩ116	深鉢	胴部			撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	繊維含む
19－1	14－26	ＳＩ127	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群	内外煤状炭化物
19－1	14－27	ＳＫ133	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅳ群	外被熱痕
21－1	14－28	ＳＫＦ103	深鉢	胴部			渦巻文　ＲＬ縄文		Ⅲ群　初頭	内外煤状炭化物
21－2	14－29	ＳＫＦ103	深鉢	胴部			無文		Ⅲ群	内外煤状炭化物
15－1	14－30	ＳＫＦ106	深鉢	胴部			隆帯貼付　隆帯上撚糸文 横位撚糸圧痕　撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ｂ	内外煤状炭化物 繊維含む
22－1	14－31	ＳＫＦ109	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群	内外煤状炭化物 内被熱痕
22－2	14－32	ＳＫＦ109	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群	
22－3	14－33	ＳＫＦ109	鉢	口縁部	口唇刻み目　Ｂ突起 平行沈線４　ＬＲ縄文				Ⅳ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物 内被熱痕
22－4	14－34	ＳＫＦ109	鉢	胴部			平行沈線３　ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	外赤色顔料
17－1	15－40	ＳＲ105	深鉢	胴～底部			撚糸文２	ナデに よる磨消	Ⅰ群　円筒下層ｂ	内外煤状炭化物 外被熱痕　繊維含む
28－1	15－41	ＳＢ108	深鉢	胴部			隆帯貼付　不整撚糸文		Ⅰ群　前葉 円筒下層ｂ	繊維含む
28－2	15－42	ＳＢ108	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群	外煤状炭化物
28－3	15－43	ＳＢ108	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群	内煤状炭化物
29－1	15－44	ＭＰ44	壺	口～肩部	平行沈線１ ＬＲ縄文充填		沈線による文様帯区画 羽状縄文充填　内ミガキ		Ⅲ群　十腰内３	外煤状炭化物・被熱痕
29－2	15－45	ＭＪ36	深鉢	口縁部	横位不整撚糸文		撚糸圧痕・横位３・縦位３		Ⅰ群	内外煤状炭化物 繊維含む
29－3	15－46	ＭＢ37	深鉢	胴部			隆帯貼付 隆帯上撚糸圧痕１・上端撚糸圧痕 横位不整撚糸文　下半不整撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ａ	外煤状炭化物・被熱痕 繊維含む
29－4	15－47	ＭＢ37	深鉢	胴部			隆帯貼付 隆帯上横位撚糸圧痕１・上端撚糸圧痕１		Ⅰ群　円筒下層ａ	内外煤状炭化物 繊維含む
29－5	15－48	ＭＪ36	深鉢	胴部			上半横位不整撚糸文 下半縦位不整撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ａ	内外煤状炭化物 繊維含む
29－6	15－49	ＭＪ36	深鉢	胴部			横位不整撚糸文　縦位撚糸圧痕２		Ⅰ群　円筒下層ａ	外煤状炭化物 繊維含む

挿図番号	図版番号	出土地区	器　形	部　位	口唇部・口縁部	頸　部	肩　部・胴　部	底　部	分　　類	備　　考
29－7	15－50	ＭＪ36	深鉢	胴部			横位不整撚糸文　縦位撚糸圧痕２		Ⅰ群　円筒下層ａ	外煤状炭化物 繊維含む
29－8	15－51	ＭＢ38	深鉢	胴部			縦位不整撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ａ	内外煤状炭化物・被熱痕 繊維含む
29－9	15－52	ＭＢ38	深鉢	胴部			縦位不整撚糸文		Ⅰ群　円筒下層ａ	内外煤状炭化物・被熱痕 繊維含む
29－10	15－53	ＭＧ35	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅰ群	繊維含む
29－11	15－54	ＭＧ37	深鉢	口縁部	山形突起　口縁貼付 沈線による渦巻文 裏ナデ				Ⅲ群　十腰内１	内外煤状炭化物
29－12	15－55	ＬＰ42	深鉢	口縁部	口唇角状突起貼付 沈線による文様帯区画 刻み目充填				Ⅲ群　十腰内５	内外煤状炭化物
29－13	15－56	ＭＨ37	深鉢	口縁部	口唇面取り　ＬＲ縄文				Ⅲ群	外煤状炭化物
30－14	15－57	ＭＨ35	深鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群	
30－15	15－58	ＭＦ35	深鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群	内煤状炭化物
30－16	15－59	ＭＨ35	深鉢	胴部			平行沈線２　縦位短沈線文 無節Ｌ縄文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
30－17	15－60	ＭＦ35	深鉢	胴部			平行沈線１　ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	内外煤状炭化物
30－18	15－61	ＭＨ35	深鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群	外煤状炭化物
30－19	15－62	ＭＨ35	深鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群	
30－20	15－63	ＭＧ36	深鉢	胴部			弧状沈線文　無節Ｌ縄文		Ⅲ群	
30－21	15－64	ＬＴ37	深鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群	
30－22	15－65	ＭＨ35	深鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
30－23	15－66	５試掘点	深鉢	胴部			沈線による文様帯区画　ＬＲ縄文充填		Ⅲ群　十腰内１	
30－24	15－67	ＭＣ37	深鉢	胴部			沈線による渦巻文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物 内被熱痕
30－25	15－68	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
30－26	15－69	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
30－27	15－70	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
30－28	15－71	ＭＦ37	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	
30－29	15－72	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
30－30	15－73	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
30－31	15－74	ＭＯ32	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	内外煤状炭化物
30－32	15－75	ＭＯ32	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群	外煤状炭化物
30－33	15－76	ＭＤ36	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群	内外煤状炭化物
31－34	16－77	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群	外煤状炭化物
31－35	16－78	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群	
31－36	16－79	ＭＤ35	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群	外被熱痕
31－37	16－80	ＭＨ37	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群	
31－38	16－81	ＭＮ33	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅲ群	内外煤状炭化物
31－39	16－82	ＭＯ32	深鉢	胴部			Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅲ群	外煤状炭化物
31－40	16－83	ＬＱ41	鉢	口縁部	小突起貼付 平行沈線４　ＬＲ縄文				Ⅲ群　十腰内５	内外煤状炭化物
31－41	16－84	ＭＤ37	鉢	口縁部	平行沈線１　磨消		ＲＬ縄文		Ⅲ群　前葉	外被熱痕
31－42	16－85	８トレ	鉢	口縁部	平行沈線１		弧状沈線文		Ⅲ群　十腰内１	外煤状炭化物
31－43	16－86	ＭＯ32	鉢	口縁部	ＲＬ縄文　内ナデ				Ⅲ群	外煤状炭化物
31－44	16－87	ＭＨ37	鉢	口縁部	口唇面取り　磨消 ＬＲ縄文				Ⅲ群	内煤状炭化物
31－45	16－88	ＭＯ32	鉢	口縁部	Ｏ段多条ＲＬ縄文 内輪積痕				Ⅲ群	
31－46	16－89	ＭＨ35	鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群　初頭	外煤状炭化物
31－47	16－90	ＭＨ35	鉢	胴部			弧状沈線文　ＬＲ縄文		Ⅲ群　初頭	外煤状炭化物 46と同一個体
32－48	16－91	ＭＤ37	鉢	胴部			複節ＲＬＲ縄文　円形刺突文		Ⅲ群　前葉	
32－49	16－92	ＭＤ36	鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅲ群　十腰内１	内煤状炭化物
32－50	16－93	ＭＢ38	鉢	胴部			ＬＲ縄文			
32－51	16－94	ＭＨ35	壺	口縁部	平行沈線２				Ⅲ群　初頭	内外煤状炭化物
32－52	16－95	排土	壺	胴部			平行沈線１　磨消　羽状縄文		Ⅲ群　十腰内３	
32－53	16－96	ＭＢ37	壺	胴部			複節ＬＲＬ縄文		Ⅲ群	

挿図番号	図版番号	出土地区	器　形	部　位	口唇部・口縁部	頸　部	肩　部・胴　部	底　部	分　　類	備　　考
32−54	16−100	ＭＧ37	小形壺	完形	折り返し口縁 平行沈線1		横走する渦巻文　垂下する渦巻文 縦位弧状短沈線文　橋状把手貼付２		Ⅲ群　前葉	外被熱痕
33−55	16−97	５試掘点	深鉢	胴部			Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅳ群	内外煤状炭化物
33−56	16−98	ＬＰ41	鉢	口縁部	口唇面取り Ｏ段多条ＲＬ縄文					外煤状炭化物
33−57	16−99	ＭＨ32	鉢	口縁部	口唇刻み目　平行沈線２		Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物
33−58	16−101	ＭＮ33	鉢	口縁部	口唇刻み目　平行沈線２		Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物
33−59	16−102	ＭＮ31	鉢	口縁部	ナデ　ＲＬ縄文 内輪積痕					内外煤状炭化物
33−60	16−103	７トレ	鉢	口縁部	ＲＬ縄文				Ⅳ群	外煤状炭化物
33−61	16−104	ＭＮ32	鉢	胴部			平行沈線２　Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物
33−62	16−105	ＭＬ31	鉢	胴部			平行沈線２　Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	
33−63	16−106	ＭＯ31	鉢	胴部			Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	外煤状炭化物
33−64	17−107	ＭＯ33	鉢	胴部			Ｏ段多条ＬＲ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物
33−65	17−108	ＭＮ32	鉢	胴部			Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物
33−66	17−109	ＭＦ46	鉢	胴～底部			ＲＬ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	
33−67	17−110	ＭＮ33	浅鉢	口縁部	口唇Ｂ突起・刻み目 隆帯貼付　隆帯上沈線文		上端平行沈線４　雲形文 磨消　ＬＲ縄文		Ⅳ群　大洞Ｃ１	外煤状炭化物

第３表　石器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器　種	石　質	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量（ｇ）
18−１	14−１	ＳＩ107	剥片	頁岩	79.5	54	30	80.6
18−２	14−２	ＳＩ107	剥片	頁岩	43.5	59.5	15.5	30.6
18−３	14−３	ＳＩ107	磨石	頁岩	233	201	88	5,400
18−１	14−35	ＳＫ120	剥片	頁岩	42.8	41.8	6.1	12
15−２	14−36	ＳＫＦ106	スクレイパー	頁岩	44.7	35	7.5	8.8
15−３	14−37	ＳＫＦ106	剥片	頁岩	43.7	33.6	11.5	12.4
16−４	15−38	ＳＫＦ106	礫	デイサイト	416	345	135	19,900
22−５	15−39	ＳＫＦ109	石斧	頁岩	164.5	60.5	35.5	361.2
34−68	17−111	ＭＩ34	石匙	頁岩	96.2	43.5	5.7	24
34−69	17−112	ＭＢ36	石匙	頁岩	77	28	6.5	15
34−70	17−113	ＭＣ37	石匙	頁岩	60	44	5.7	24
34−71	17−114	ＭＢ37	石錐	頁岩	55.5	35	11.4	12.6
34−72	17−115	ＭＢ37	石錐	頁岩	44.4	15.2	4	2.5
34−73	17−116	ＭＤ37	スクレイパー	頁岩	79.3	47.2	15.4	44.6
34−74	17−117	ＭＩ35	スクレイパー	頁岩	48.8	47	19	34.2
34−75	17−118	ＭＢ37	スクレイパー	頁岩	91	36.2	10	23.2
35−76	17−119	ＭＤ36	スクレイパー	頁岩	98.5	43	20	50.6
35−77	17−120		スクレイパー	頁岩	74.8	52.4	15	39
35−78	17−121	ＭＢ37	スクレイパー	頁岩	70.8	49.6	13.5	31.6
35−79	17−122	ＭＮ32	スクレイパー	頁岩	35	42	6	7.4
35−80	17−123	ＭＤ37	石棒	凝灰岩	125.7	71.7	56.2	695
35−81	17−124	ＭＮ32	磨石	デイサイト	64.5	63.3	44	252.4

第３章　自然科学的分析

第１節　出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１　はじめに

ここでは、^{14}Ｃ年代測定（ＡＭＳ法）の試料に用いた炭化材12試料の樹種同定結果を報告する。

年代測定試料は、いずれも小破片で用途や本来の形状は不明であるが、これらの樹種を明らかにすることは、遺跡での木材利用や当時の森林植生を知る蓄積試料となる。

２　試料と方法

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５mm角以下の大きさに整え、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製　ＪＳＭ-Ｔ100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

３　結果

検出された樹種は、クリ･トチノキ･エゴノキ属の落葉広葉樹３分類群であった。

各試料の同定結果一覧を第４表にまとめ、以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示した。

樹種記載

①クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版18　１a－１c（試料番号３　ＳＩ116）

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々にまたは急に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木で、果実は食用になり、材は耐久性に優れた有用材である。

②トチノキ　Aesculus turbinata Blume　トチノキ科　図版18　２a－２c（試料番号12　ＳＢ108　Ｐ１）

小型～中型の管孔が単独または２～数個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状に配列し、道管と放射組織の壁孔はやや大きな円形で交互状に密在する。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木で、種子はアク抜きが必要だが食用となり、材は軽軟緻密で加工は容易だが、木理は不規則で耐久性は低く狂いがでやすい。

③エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科　図版18　３a－３c（試料番号２　ＳＩ107）

小型の管孔が単独または２～４個が放射方向に複合して分布し、晩材では径が減少する散孔材。道

管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒が少ない階段穿孔。放射組織は異性、１～３細胞幅、多列部の上下端は方形・直立細胞の単列部となり、道管との壁孔は小型で交互状である。

エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木で、エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。エゴノキは、山野や川辺に普通にあり果皮はエゴサポニンを含み石鹸の代用になり、材は柄や器具に使われる。

４　まとめ

12試料中の８試料からクリが検出され、クリ材が最も多く利用されていたことが判った。クリ材の放射性炭素年代測定値から、クリはおよそ2500～4700 yrBPの期間、継続的に利用されていたようである。

炉からは、トチノキやエゴノキ属が検出され、燃料材に使用されていたと思われる。また、ＳＢ108のＰ１からはトチノキが検出され、柱材として利用されていたものかも知れない。

第４表　出土炭化材樹種同定結果

試料番号	試料内容	樹　種	備　考	年代測定番号
1	SI 104　炉	トチノキ	破片	PLD-3120
2	SI 107　炉	エゴノキ属	小枝または樹芯部	PLD-3121
3	SI 116　床面	クリ	破片	PLD-3122
4	SKF 106 地山より160cm下	クリ	破片	PLD-3123
5	SKF 106 底面 床付近	クリ	破片	PLD-3124
6	SKF 04　床面	クリ	破片	PLD-3125
7	SKF 07　床面	クリ	破片	PLD-3126
8	SKF 109	クリ	破片	PLD-3127
9	SKF 112	クリ	破片	PLD-3128
10	SKF 118	クリ	破片	PLD-3129
11	SKF 124	同定不可	小破片で保存悪い	
12	SB 108 P1	トチノキ	破片	PLD-3131

第２節　放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

１　はじめに

田ノ沢山遺跡（２ＴＮＳＹ）より検出された炭化材の加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２　試料と方法

試料は、ＳＩ104炉から採取した炭化材（トチノキ）１点、ＳＩ107炉から採取した炭化材（エゴノキ属）１点、ＳＩ116床面から採取した炭化材（クリ）１点、ＳＫＦ106地山より160cm下から採取

した炭化材（クリ）１点、ＳＫＦ106床付近から採取した炭化材（クリ）１点、ＳＫＦ04床面から採取した炭化材（クリ）１点、ＳＫＦ07床面から採取した炭化材（クリ）１点、ＳＫＦ109から採取した炭化材（クリ）１点、ＳＫＦ112から採取した炭化材（クリ）１点、ＳＫＦ118から採取した炭化材（クリ）１点、ＳＢ108・Ｐ１から採取した炭化材（トチノキ）１点の併せて11点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（ＡＭＳ）にて測定した。測定した^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した^{14}Ｃ濃度を用いて^{14}Ｃ年代を算出した。

３　結果

第５表に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}Ｃ年代、^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代は、ＡＤ1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。なお、^{14}Ｃ年代値（yrBP）の算出は、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}Ｃ年代が、その^{14}Ｃ年代誤差範囲内に入る確率が68.2%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}Ｃ年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のＵ－Ｔｈ年代と^{14}Ｃ年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}Ｃ年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代の算出にOxCal v3.9（較正曲線データ：INTCAL98）を使用した。なお、１σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する、68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、２σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差の２倍に相当する、95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその１σ暦年代範囲および２σ暦年代範囲の確からしさを示す確率である。１σ暦年代範囲および２σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４　考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した１σ暦年代範囲および２σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p.3-20.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. （1998） INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP,Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第５表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	δ13C (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD−3120 (AMS)	炭化材 (トチノキ) SI104 炉 No.1	-30.8	2,105±35	cal BC 170 - 90 (59.1%) cal BC 80 - 50 (9.1%)	cal BC 340 - 320 (1.3%) cal BC 210 - 40 (94.1%)
PLD−3121 (AMS)	炭化材 (エゴノキ属) SI107 炉 No.2	-30.6	3,640±35	cal BC 2,120 - 2,090 (6.7%) cal BC 2,040 - 1,940 (61.5%)	cal BC 2,140 - 1,890 (95.4%)
PLD−3122 (AMS)	炭化材 (クリ) SI116 床面 No.3	-29.9	2,555±35	cal BC 800 - 760 (38.5%) cal BC 690 - 660 (9.6%) cal BC 630 - 590 (14.0%) cal BC 580 - 560 (6.1%)	cal BC 810 - 750 (40.7%) cal BC 720 - 540 (54.7%)
PLD−3123 (AMS)	炭化材 (クリ) SKF106 地山より160cm下 No.4	-29.8	4,705±45	cal BC 3,630 - 3,590 (13.0%) cal BC 3,530 - 3,490 (13.0%) cal BC 3,470 - 3,370 (42.2%)	cal BC 3,640 - 3,550 (25.9%) cal BC 3,540 - 3,360 (69.5%)
PLD−3124 (AMS)	炭化材 (クリ) SKF106 床付近 No.5	-29.6	4,705±35	cal BC 3,630 - 3,600 (9.6%) cal BC 3,530 - 3,490 (14.0%) cal BC 3,460 - 3,370 (44.6%)	cal BC 3,640 - 3,550 (22.1%) cal BC 3,540 - 3,370 (73.3%)
PLD−3125 (AMS)	炭化材 (クリ) SKF04 床面 No.6	-29.6	4,520±35	cal BC 3,350 - 3,300 (15.7%) cal BC 3,240 - 3,170 (28.6%) cal BC 3,160 - 3,100 (23.9%)	cal BC 3,360 - 3,090 (95.4%)
PLD−3126 (AMS)	炭化材 (クリ) SKF07 床面 No.7	-36.4	2,645±50	cal BC 900 - 870 (8.0%) cal BC 840 - 780 (60.2%)	cal BC 920 - 750 (94.1%) cal BC 690 - 660 (1.3%)
PLD−3127 (AMS)	炭化材 (クリ) SKF109 No.8	-28.4	2,655±35	cal BC 830 - 800 (68.2%)	cal BC 900 - 790 (95.4%)
PLD−3128 (AMS)	炭化材 (クリ) SKF112 No.9	-23.9	2,775±50	cal BC 980 - 830 (68.2%)	cal BC 1,050 - 810 (95.4%)
PLD−3129 (AMS)	炭化材 (クリ) SKF118 No.10	-22.5	3,765±35	cal BC 2,280 - 2,250 (12.7%) cal BC 2,230 - 2,130 (51.8%) cal BC 2,080 - 2,060 (3.7%)	cal BC 2,300 - 2,110 (80.7%) cal BC 2,100 - 2,030 (14.7%)
PLD−3131 (AMS)	炭化材 (トチノキ) SB108 P1 No.12	-22.2	2,090±35	cal BC 170 - 130 (21.4%) cal BC 120 - 50 (46.8%)	cal BC 200 - cal AD 0 (95.4%)

第４章　まとめ

遺跡は、中央部を開析する沢により北側調査区と南側調査区に２分して調査した。

北側調査区は南北を沢に開析された細長い尾根状を呈している。この細長い尾根状の南側に10基の土坑が地山面で検出された。そのうちの９基は断面が三角状を呈するフラスコ状土坑である。これらの土坑の開口部の法量は、長軸117～212㎝、短軸64～156㎝であり、深さは地山面から72～150㎝である。底面の法量は、長軸120～230㎝、短軸118～186㎝である。土坑内には地山崩落土が堆積しており、本来の開口部の法量はもっと小さいことが分かる。９基のフラスコ状土坑のうち、法量が最大のＳＫＦ10の底面には浅いピットが掘り込まれている。このピットは水抜きのためと考えられるが、底面にピットを伴う土坑は１基だけである。土坑の堆積状況は、地山崩落土を含む自然堆積がほとんであるが、ＳＫＦ09の上面は遺構掘削土で埋め戻されている。ＳＫＦ07と12が重複しているが、その他は重複することなく直線上に並ぶ。また、ＳＫＦ09のように廃棄後に時間をおかず隣接する他の土坑掘削土で埋め戻されている土坑もあることから、多少の時期差は考えられるものの構築時期はほとんど同時期であろう。土坑内からは遺物が出土しておらず、ＳＫＦ07の底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果によると、構築時期は縄文時代晩期中葉を示す。出土した木炭の樹種はクリが多く、遺跡周囲に自生していたものと考えられる。本遺跡のフラスコ状土坑は採取したクリなどの堅果類を一時的に貯蔵した貯蔵穴と考えられる。南調査区では明らかに同時期の住居跡は確認できず、少し離れた集落から採取に訪れその場に貯蔵したのだろう。ただし堅果類の炭化物はどの土坑からも出土せず、一つも残すことなく持ち去ったのだろう。

南側調査区では、縄文時代前期・後期・晩期、中世の遺構が検出された。

前期の遺構は竪穴住居跡２軒、フラスコ状土坑１基、土器埋設遺構１基である。２軒の住居のうちＳＩ104は壁や柱穴が確認できず、地床炉のみ検出した。地床炉も木の根よる撹乱を受けており住居の詳細は不明である。ＳＩ116は調査区外に延びており、土層観察用のベルトで壁の一部を確認できたにすぎなかった。そのため明確な床面は確認できなかったが、西側はわずかな凹みを壁際と想定した。平面形は、長軸８ｍ（推定）、短軸2.5mの方形を呈し、長軸方向は斜面の傾斜に沿う。炉は、地床炉が２基長軸方向に並んでいる。柱穴は検出されなかった。壁は緩やかに立ち上がり、テラス状を呈する。これらの特徴は、一般的に「大形住居」と言われる住居の形態に類似する。しかし、大形住居という用語には明確な基準はなく、研究者や報告者の判断にまかせられている。たとえば、三浦謙一・佐々木勝氏は大型の基準値を、「前期～中期中葉以上は26㎡以上、中期後葉は61㎡以上」ととらえており[註1]、海道澄子氏は「長軸10m以上の住居」を大形ととらえて集成している[註2]。また、中村良幸氏は系統的に、「竪穴式」のものと「長方形柱穴列」「方形配列土壙群」あるいは「ウッドサークル」と呼ばれる平地式か高床式の建物と区別しており[註3]、武藤康弘氏は「１類：長方形大型住居、２類：円形の大型住居、３類：長方形基調の地上建物、４類：円形の地上建物」に分類している[註4]。中村良幸氏はこれらの住居の中で、長方形大形住居の特徴として、「①東北地方北部で出現して北陸地方へ南下が見られる、②中期末葉にはこの形態が消滅する、③炉祉のあり方が独特、④土器・石器の量が多い、⑤大きい集落では数棟存在する、⑥フラスコ状ピットが周囲に集まる」などの特徴をあげている[註5]。海

道澄子氏は、秋田県内の大形住居について、①縄文時代前期中葉～中期後葉まで認められる、②２段構造をもつ大形住居が多く、また、その分布は県北部に集中する、③集落内で複数の大形住居が検出される場合が多いと述べている。(註6) これらの特徴と本住居を比較してみると、まず平面形から長方形大形住居に分類される。ただし、長軸８ｍ（推定）を大形と認定できるかどうかは問題があるかもしれない。次に、地床炉が２基長軸方向に並んでおり複数の炉を有する。また、ＳＫＦ106が付設すると考えられ、ＳＫＦ113・114も時期不明ながら隣接している。ＳＫＦ106が付設する根拠として、土坑中位までは開口部の崩落土に由来しており、黒土の流れ込みは少ない。この堆積状況は、本土坑の開口部にはほとんど黒土がなかったことを示しており、ＳＩ116の床面から壁際にかけて構築されていたと推測できる。さらに、壁の立ち上がりがテラス状を呈し、２重構造をもつ。これらのことから、本住居は大形住居の特色を兼ね備えている。大館市では、池内遺跡で前期後葉の大形住居が３軒検出されている。(註7) 本住居は出土遺物から、前期中葉円筒下層ｂ式期の所産と考えられ、池内遺跡の住居より旧いことになる。大形住居に付設するフラスコ状土坑が検出された例は、中期前葉の円筒上層ａ1式期に構築された山本町和田Ⅲ遺跡のＳＩ15がある。(註8) また、坂口隆氏は、前期中葉下層ｂ式期に構築された協和町上ノ山Ⅱ遺跡のＳＩ171に、(註9) ４基の袋状土坑が付設していたとしている。(註10) もし上ノ山Ⅱ遺跡のＳＩ171に貯蔵穴が付設していたのであれば、田ノ沢山遺跡のＳＩ116と同時期であり、秋田県においては大形住居に貯蔵穴が付設するもっとも旧い遺構になろう。本遺跡のＳＫＦ106は当初貯蔵穴として利用され、その後墓に転用されている。その時期は、本住居の廃絶時と時期を同じくするのだろう。また、ＳＫＦ106と隣接し住居内に埋設土器も付設する。土器上半が確認調査時のトレンチで壊されており、埋土状況も不明であるが、幼児用の墓の可能性もあろうか。大形住居の機能については、渡辺誠氏の「公的な多機能施設」説と武藤康弘氏の「共同住居家屋」説に二分される。(註11) 公的な多機能施設には、「集会所・公民館」、「祭祀遺構」、「共同作業所」などの説がある。(註12) さて、田ノ沢山遺跡のＳＩ116を大形住居とするならば、その機能は何であろうか。本遺跡は、斜面中腹のわずかな平場に造られた小集落であり、同時期の遺構が数多く構築されているわけではない。このことから、本住居は「公的な多機能施設」とは考えられず、「共同住居家屋」説の可能性が高いと考えられる。しかし、住居の規模から見ると必ずしも共同家屋とは言い難く、一般的な住居の一形態なのかもしれない。今後の大形住居の研究は、大形住居の定義を、住居の規模や形態、遺跡の性格等を総合的に踏まえてとらえていく必要があろう。

後期の住居跡は、前期の住居跡に隣接する平場と遺跡東側の一段低い平場で検出された。ＳＩ107は住居中央に石囲炉をもつ。この石囲炉の礫は抜き取られている。また、住居上面は由来がはっきりしない白色粘土で埋められている。これらは、この住居の廃絶儀礼であろう。年代測定の結果、後期前葉を示しており、隣接するグリッドから出土した完形の小形壺形土器との関連が考えられる。この土器も、廃絶儀礼の一つとして完形のまま北側の沢近くに捨てられたのだろうか。本住居には隣接してＳＫＦ102・103・121が構築されている。そのうち、ＳＫＦ102・103は貯蔵穴、ＳＫＦ121は墓であろう。また、ＳＩ127の周りにも貯蔵穴や墓が構築される。そのうちの一つ、ＳＫＦ124は底面にフラスコ状ピットが２基掘り込まれている子持ちフラスコである。

晩期の住居は、ＳＫ133と隣接するＳＩ130が当該期の可能性があるが判然としない。晩期の遺構は副葬品として打製石斧が出土したＳＫＦ109とＳＫ133、年代測定結果から晩期と考えられるＳＫ

112がある。いずれも土坑墓と考えられ、小規模な墓地であったのであろう。

中世の遺構は掘立柱建物跡１棟だけである。遺跡西端から出土しており、性格等は不明である。調査区外の斜面に炭焼窯でもあったのであろうか。

南側調査区は、縄文時代前期中葉と後期に営まれた集落であり、晩期には小規模な墓域として利用された。住居には隣接して、貯蔵穴や土坑墓がセットのように造られた。特に、前期中葉のＳＩ116は、フラスコ状土坑と土器埋設が付設する大形住居であり、今後の類例が待たれる。

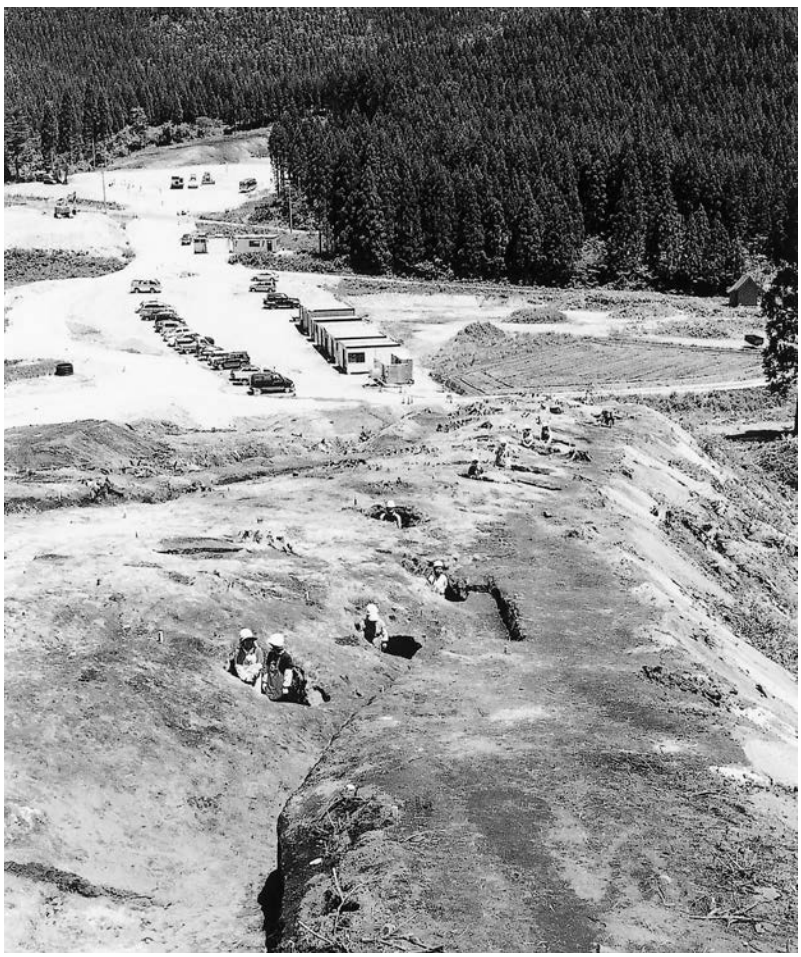
参考文献

註１　三浦謙一・佐々木勝　「縄文時代前・中期の住居址群の変遷－松尾村長者屋敷遺跡の分析」　『紀要Ｖ』
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1985（昭和60）年
註２　海道澄子　「秋田県における大形住居の収集」　『研究紀要　第18号』
秋田県埋蔵文化財センター　2004（平成16）年
註３　中村良幸　「大形住居」　『縄文文化の研究８』
雄山閣　1995（平成７年）年
註４　武藤康弘　「縄文時代の大型住居－長方形大型住居の共時的通時的分析」　『縄文式生活構造－土俗考古学からのアプローチ』　同成社　1998（平成10）年
註５　註３と同じ
註６　註２と同じ
註７　秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅷ－　遺構篇』
秋田県埋蔵文化財調査報告書　第268集　1997（平成９）年
註８　秋田県教育委員会　『和田Ⅲ遺跡－農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財調査報告書－』
秋田県埋蔵文化財調査報告書　第350集　2003（平成15）年
註９　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』
秋田県埋蔵文化財調査報告書第166集　1988（昭和63）年
註10　坂口隆　「縄文時代貯蔵穴の研究」　『未完成考古学叢書⑤』　株式会社アム・プロモーション　2003（平成15）年
註11　武藤康弘　「遺構研究　大形住居址と大形建物」　『縄文時代10』　縄文時代文化研究会　1999（平成11）年
註12　註３と同じ

1　田ノ沢山遺跡全景

遺跡全景

2　田ノ沢山遺跡全景

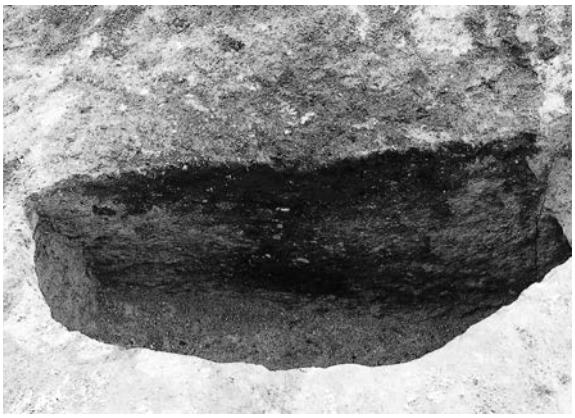


3　北側調査区検出遺構

遺跡全景、北側調査区検出遺構

4　ＳＫＦ09断面（東→）

5　ＳＫ11・ＳＫ09完掘（南→）



6　ＳＫＦ03断面（東→）

7　ＳＫＦ03完掘（南→）

8　ＳＫＦ04長軸断面全景（東→）

9　ＳＫＦ04完掘（北→）

10　ＳＫＦ05長軸断面（東→）

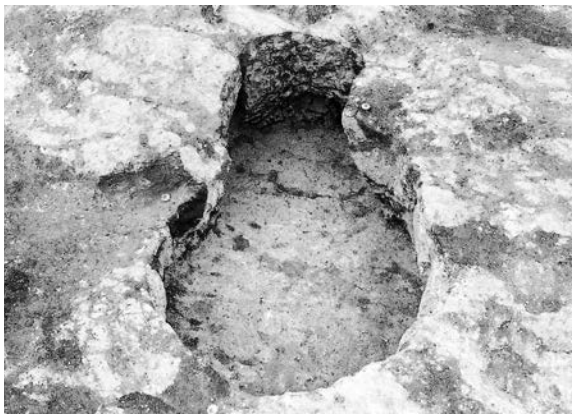
11　ＳＫＦ05完掘（北→）

検出遺構（1）

12　ＳＫＦ06断面（東→）

13　ＳＫＦ06完掘（南西→）

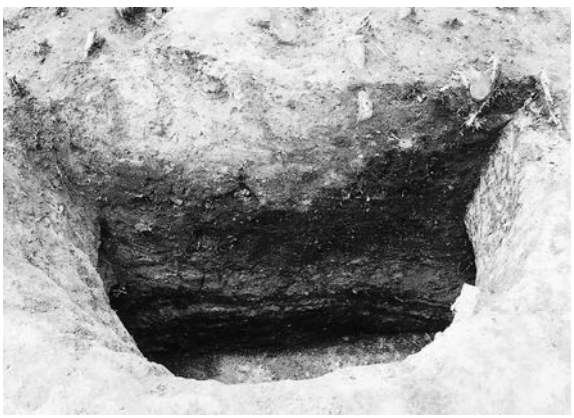
14　ＳＫＦ07断面（東→）



15　ＳＫＦ07・12（南→）

16　ＳＫＦ08断面（東→）

17　ＳＫＦ08完掘（南→）

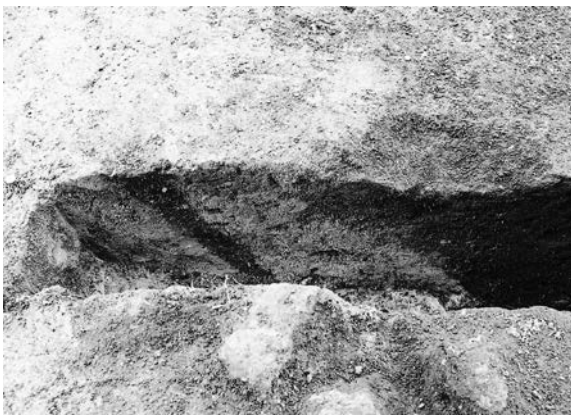


18　ＳＫＦ10断面（東→）

19　ＳＫＦ10完掘（東→）

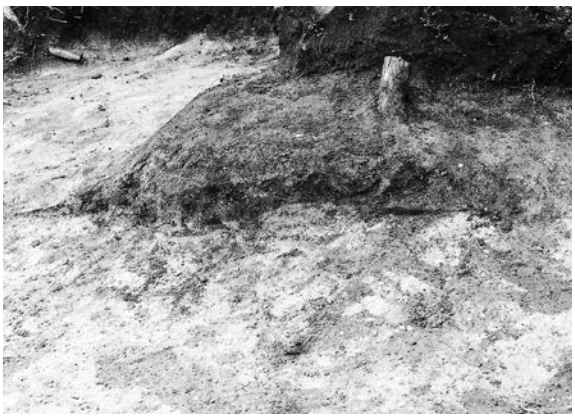
検出遺構（2）

20　ＳＩ104地床炉確認（北→）


21　ＳＩ104地床炉断面（南→）

22　ＳＩ116地床炉確認（西→）

23　ＳＩ116地床炉断面（北→）


24　ＳＩ116地床炉断面（西→）

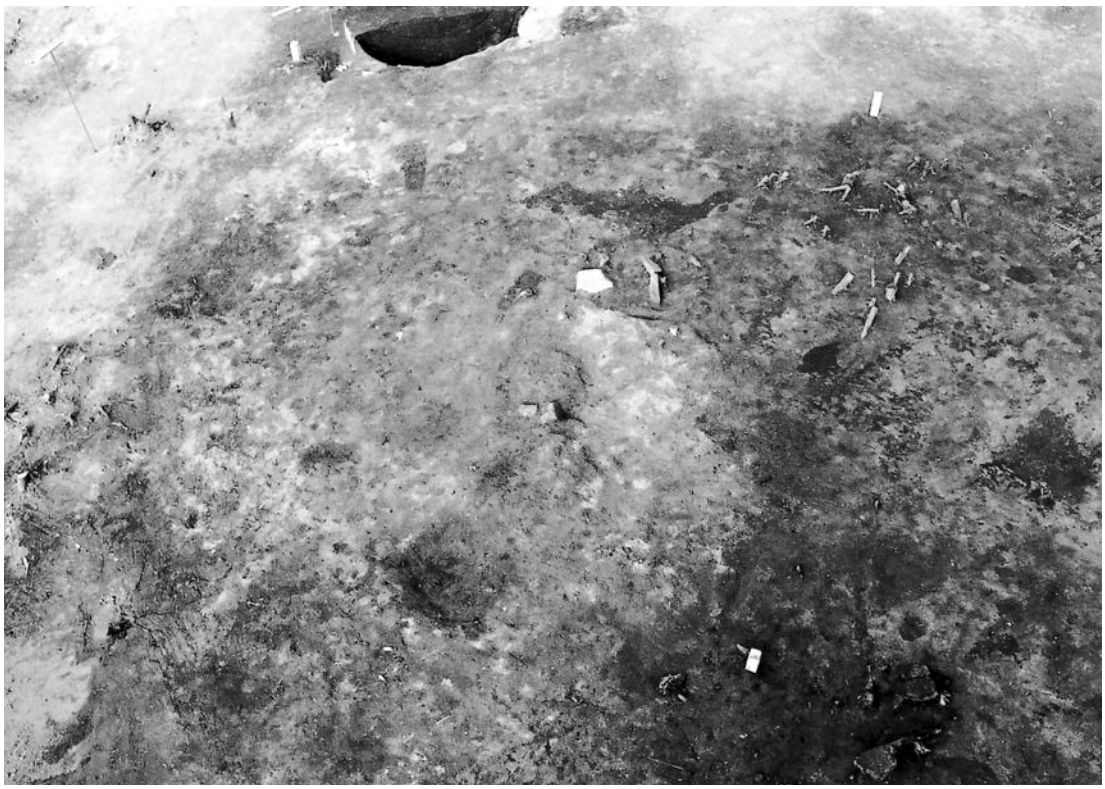
25　ＳＩ116南半分断面

26　ＳＩ107石囲炉確認（西→）

27　ＳＩ107石囲炉断面（北→）

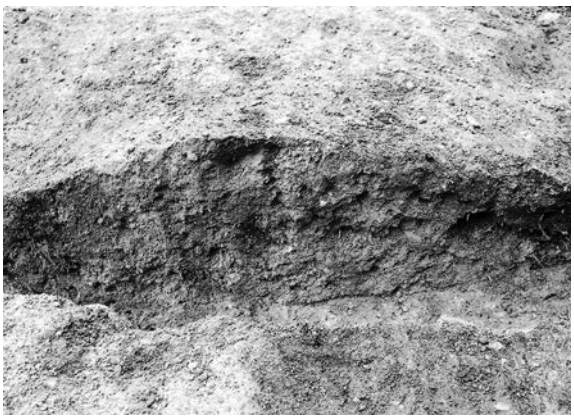
検出遺構（3）

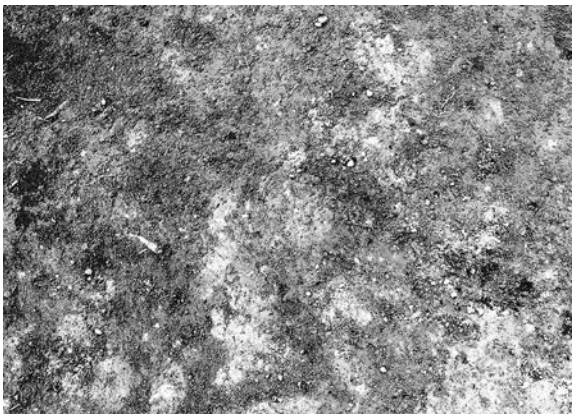
28　ＳＩ104・116完掘（北→）



29　ＳＩ107確認（西→）

30　ＳＩ127地床炉確認（南→）


31　ＳＩ127地床炉断面（南西→）


32　ＳＩ130地床炉確認（西→）

33　ＳＩ130地床炉Ａ・Ｂ断面（西→）

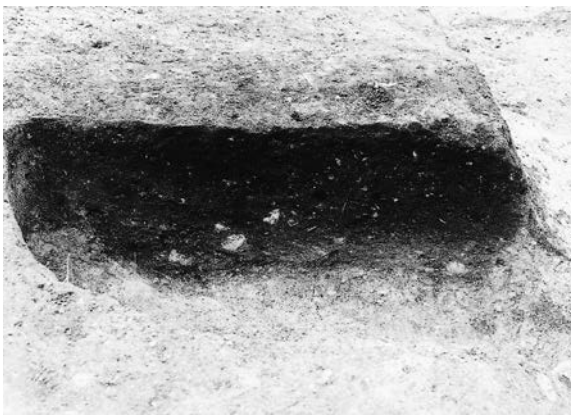
34　ＳＫ101完掘（南→）

35　ＳＫ120断面（南→）

36　ＳＫ120完掘（北→）

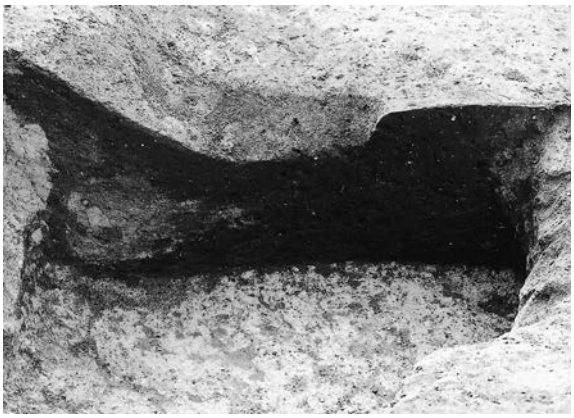
37　ＳＫ133完掘（西→）

検出遺構（5）



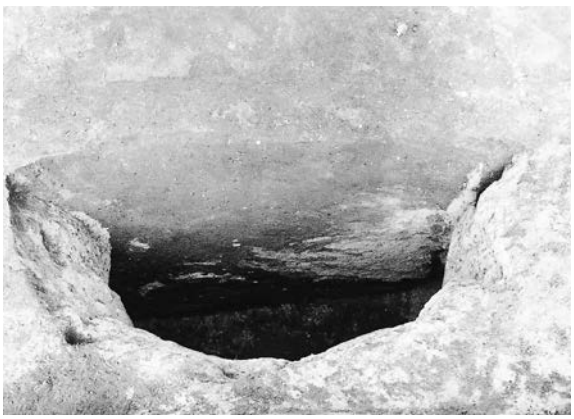
38　ＳＫ135断面（南→）

39　ＳＫ135完掘（南→）

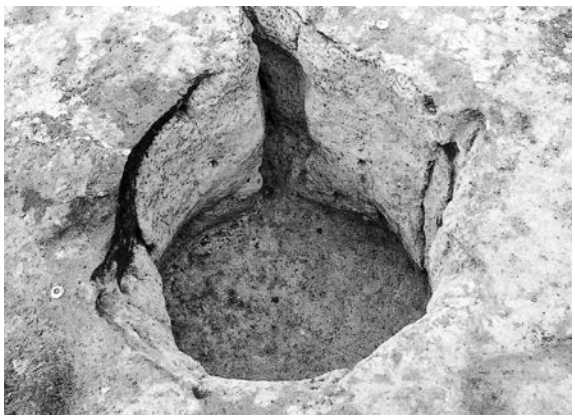


40　ＳＫＦ102断面（東→）

41　ＳＫＦ102完掘（南→）



42　ＳＫＦ103断面（西→）

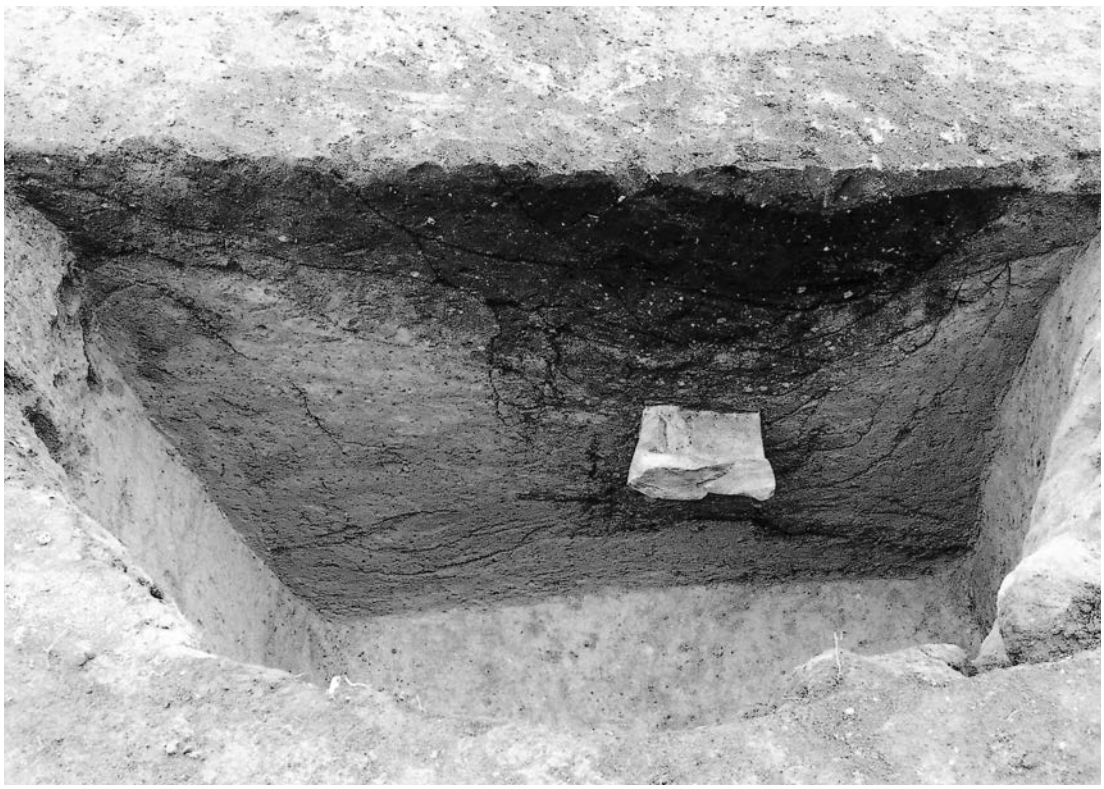


43　ＳＫＦ103完掘（西→）

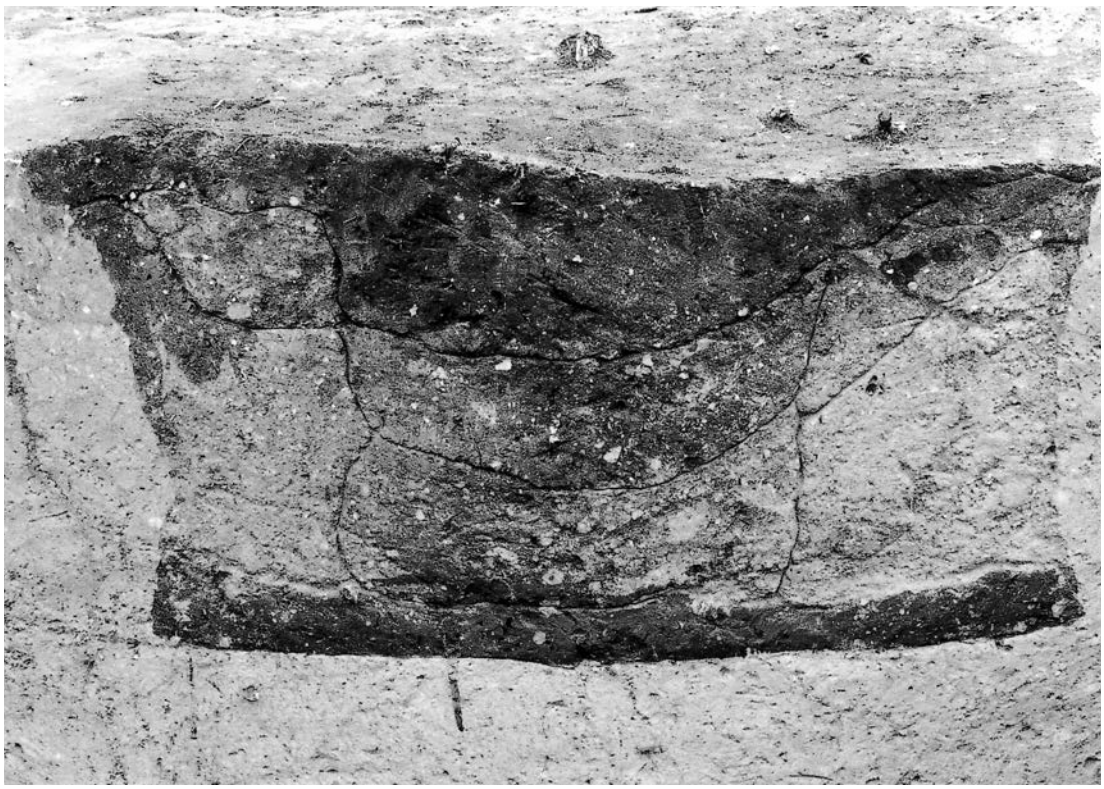
44　作業風景

45　作業風景

検出遺構（6）

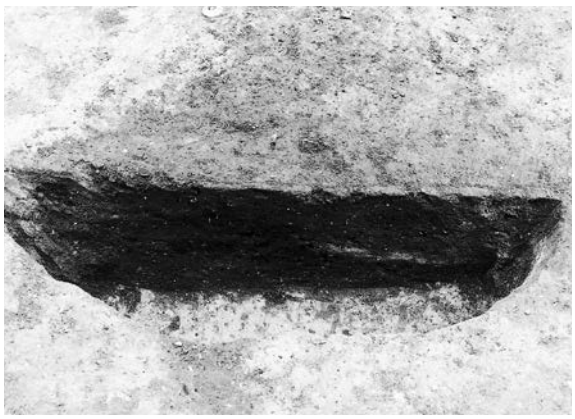


46　ＳＫＦ106東西ベルト断面（南→）

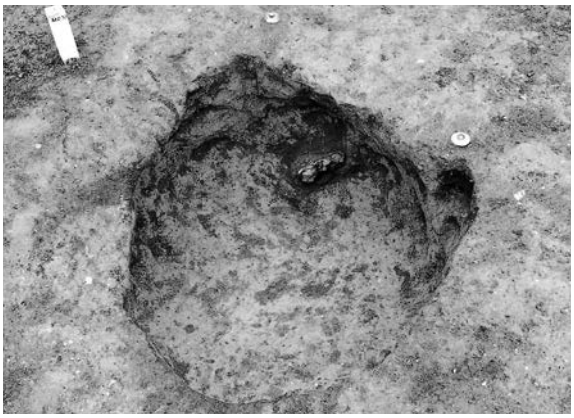


47　ＳＫＦ112断面（北→）

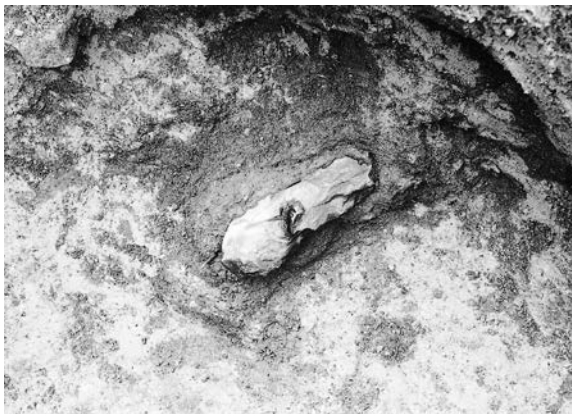
48　ＳＫＦ106完掘（南→）



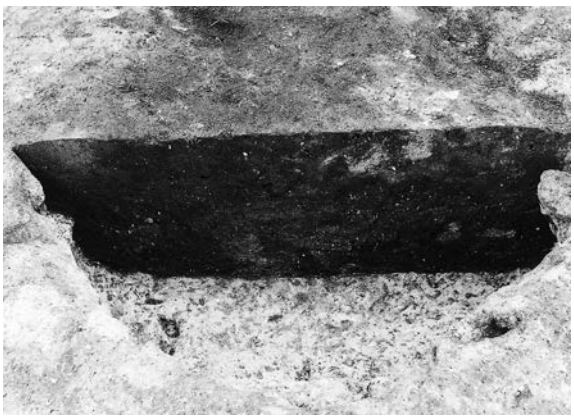
49　ＳＫＦ109断面（南東→）



50　ＳＫＦ109遺物出土状況（北東→）

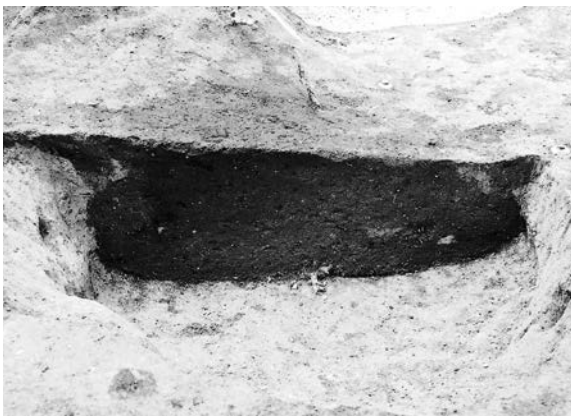


51　ＳＫＦ109遺物出土状況（北東→）



52　ＳＫＦ113断面（北→）

53　ＳＫＦ113完掘（北→）



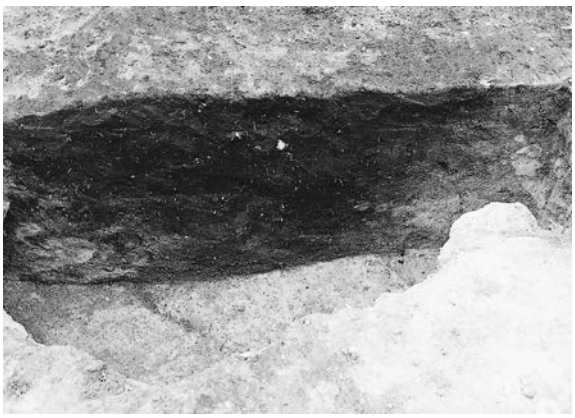
54　ＳＫＦ114断面（東→）

55　ＳＫＦ114完掘（東→）

検出遺構（8）

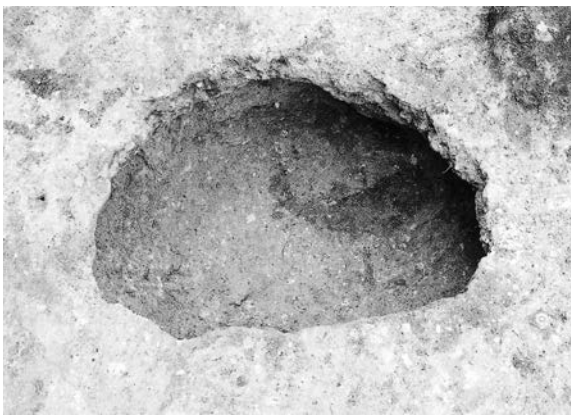
56　ＳＫＦ118断面（東→）

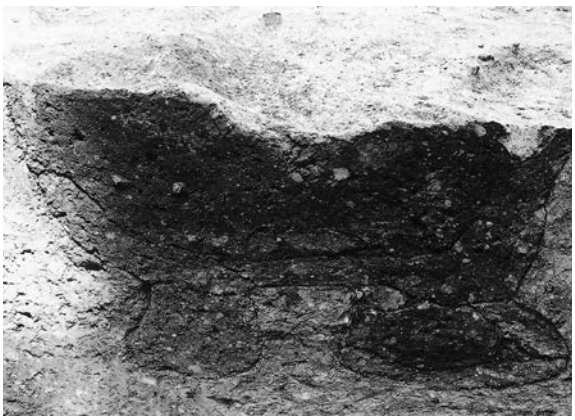
57　ＳＫＦ118完掘（東→）

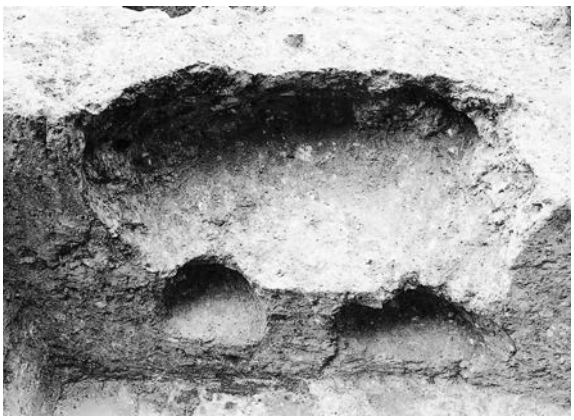

58　ＳＫＦ121断面（南→）

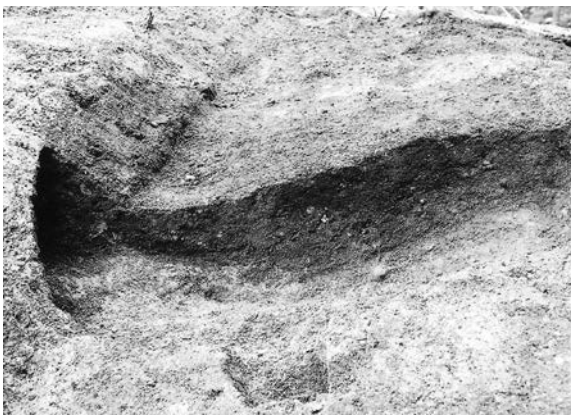
59　ＳＫＦ121完掘（北→）

60　ＳＫＦ123断面（東→）


61　ＳＫＦ123完掘（東→）

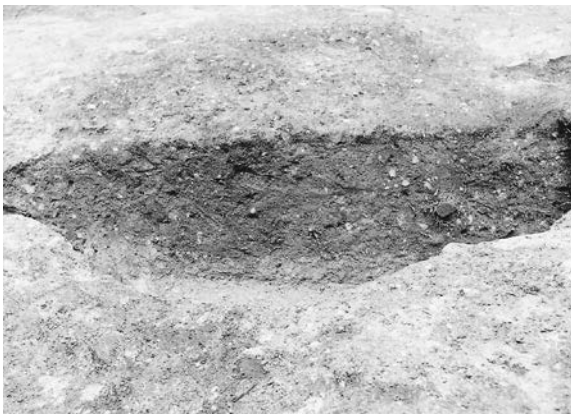

62　ＳＫＦ124断面（南→）


63　ＳＫＦ124完掘（南→）



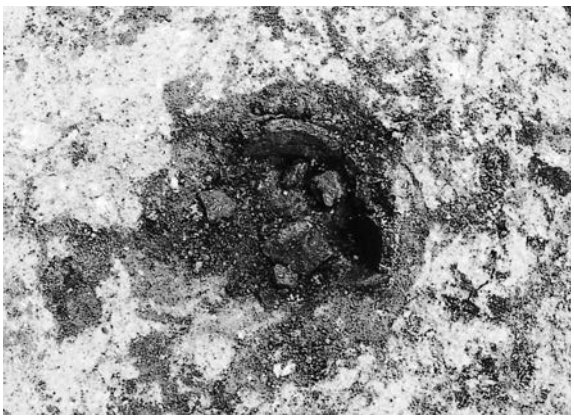
64　ＳＫＦ128断面（西→）

65　ＳＫＦ128完掘（西→）

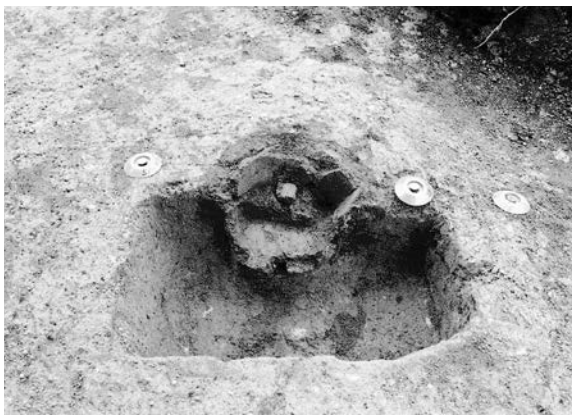


66　ＳＫＦ136断面（南→）

67　ＳＫＦ136完掘（北西→）



68　ＳＲ105確認（東→）



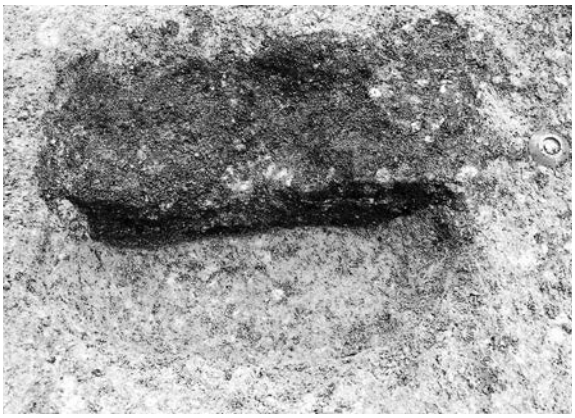
69　ＳＲ105断面（東→）

70　ＳＸ119断面（東→）

71　ＳＸ119完掘（北→）

72　ＳＸ131断面（西→）

73　ＳＸ131完掘（南西→）



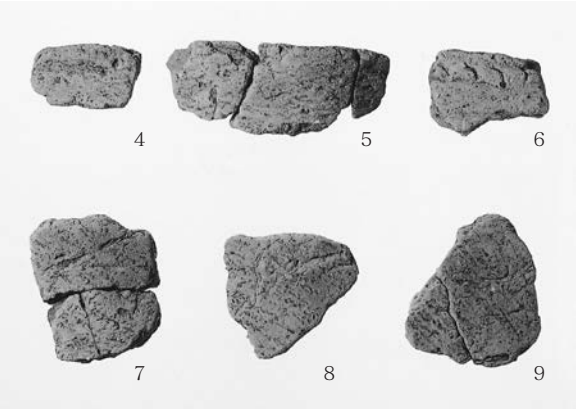
74　ＳＫＰ122断面（南東→）

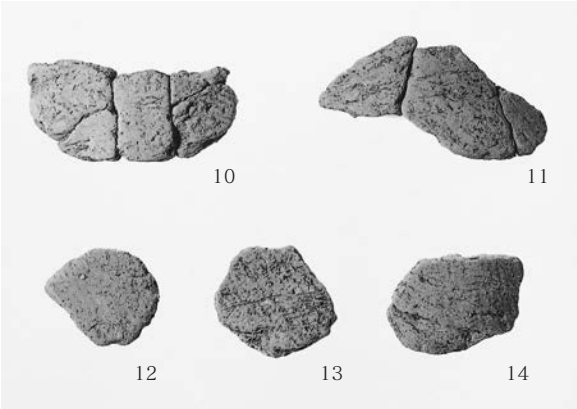
75　ＳＫＰ122（東→）

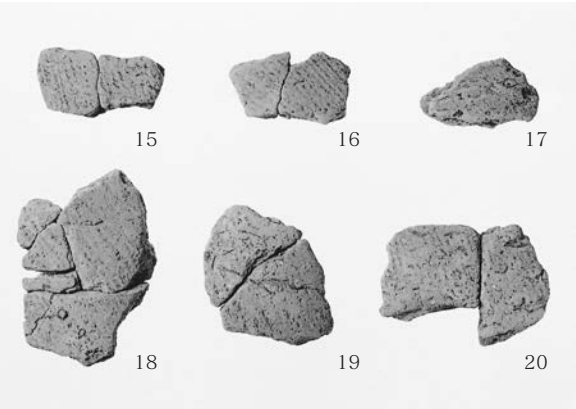
76　ＳＢ108完掘（東→）

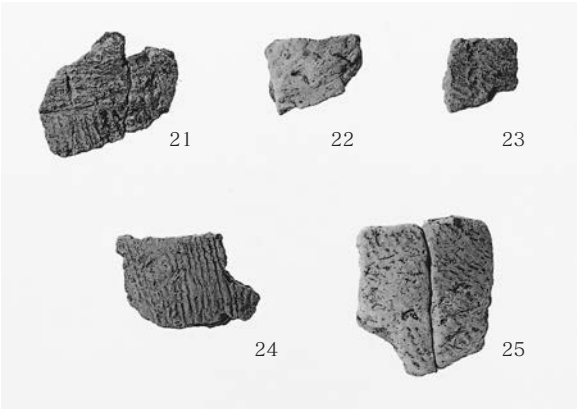
1
2

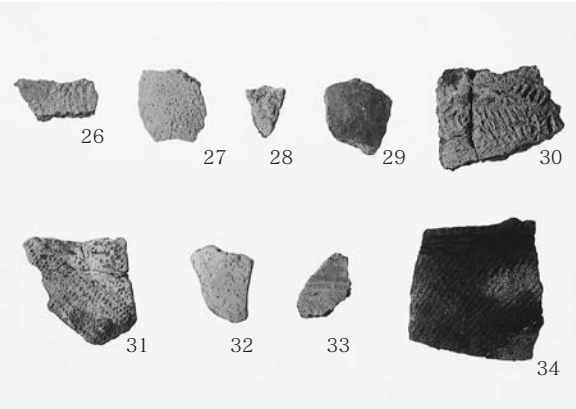
3


4
5
6
7
8
9


10
11
12
13
14


15
16
17
18
19
20


21
22
23
24
25


26
27
28
29
30
31
32
33
34

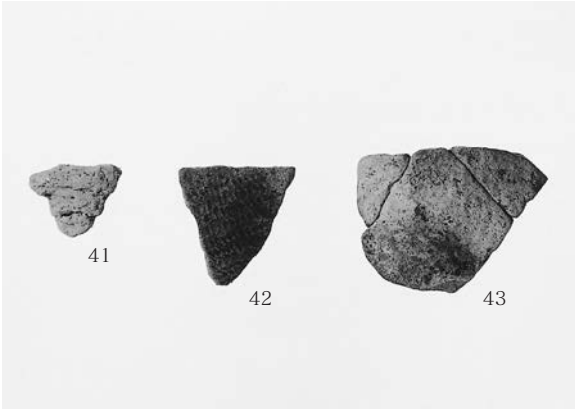
35
36
37

出土遺物（1）

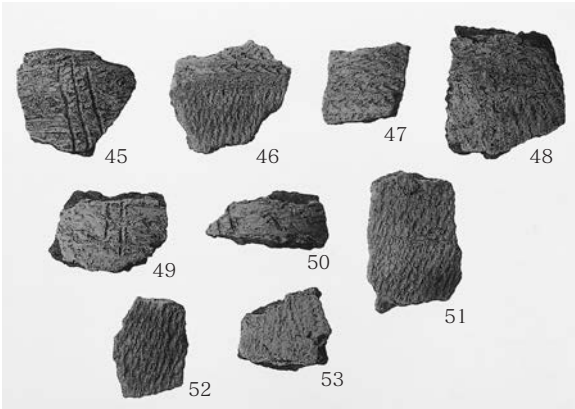
38

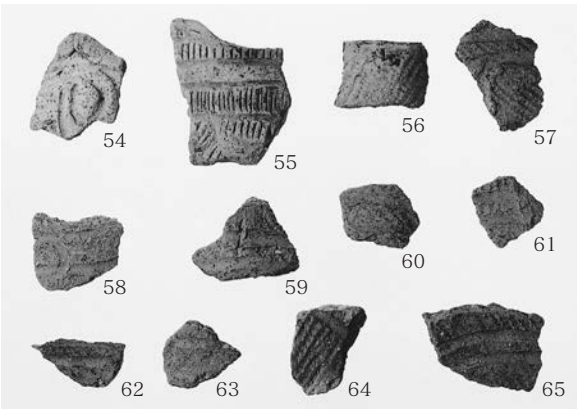
39

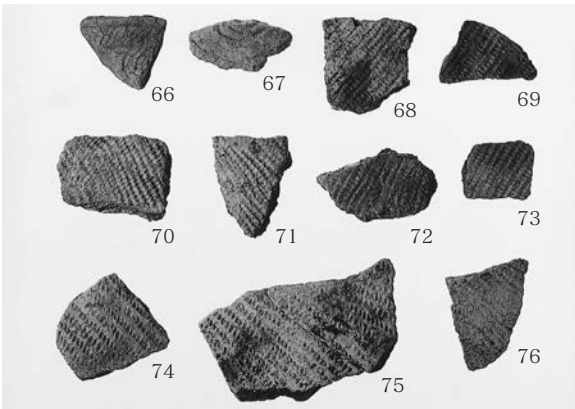
40


41
42
43

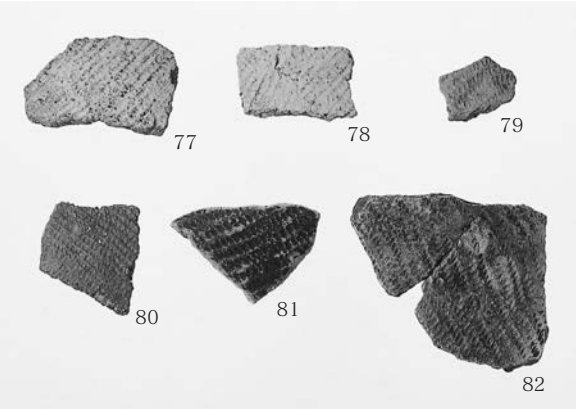
44

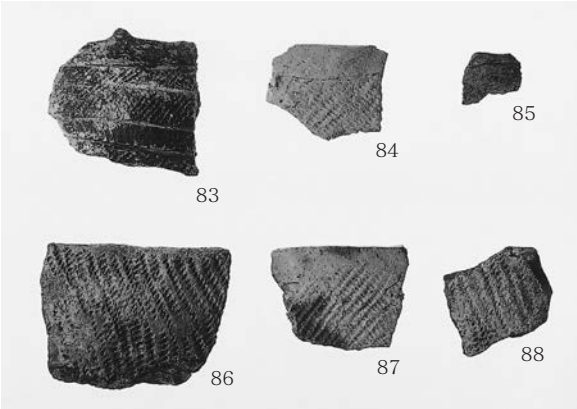

45
46
47
48
49
50
51
52
53

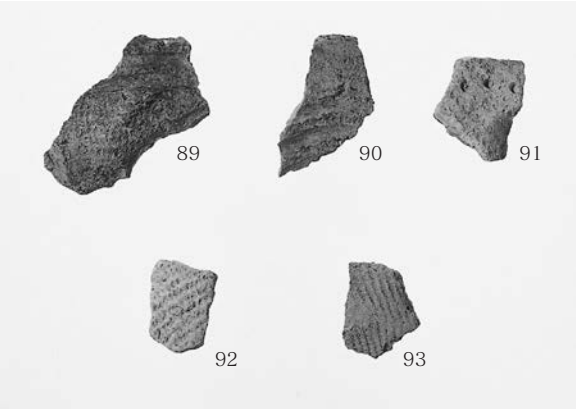

54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65

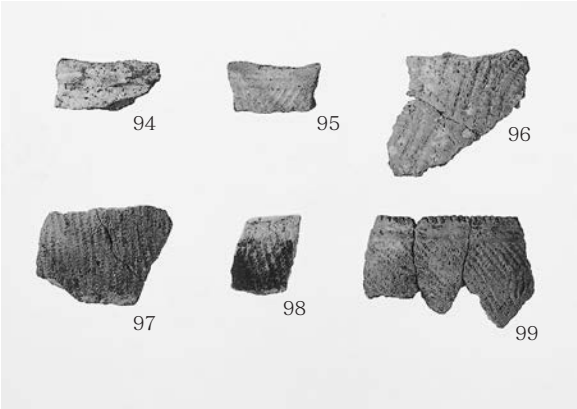

66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76

出土遺物（2）

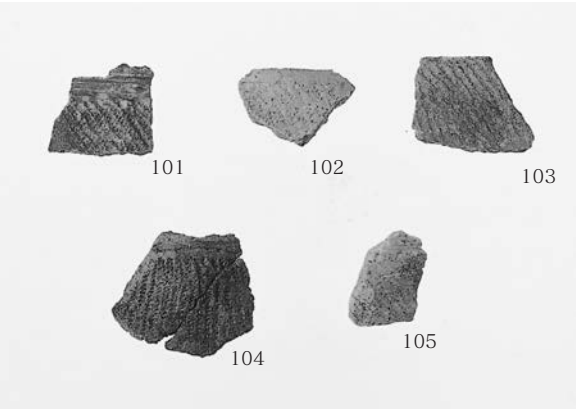

77
78
79
80
81
82

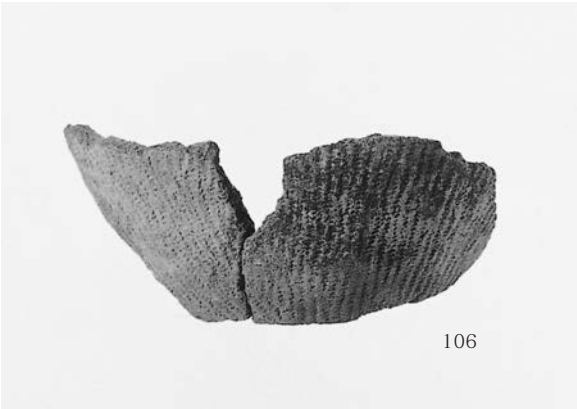

83
84
85
86
87
88


89
90
91
92
93

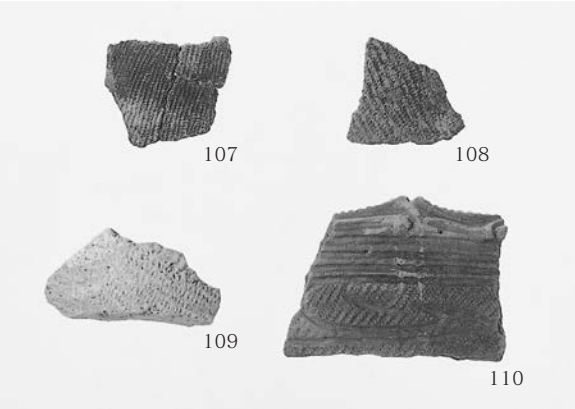

94
95
96
97
98
99

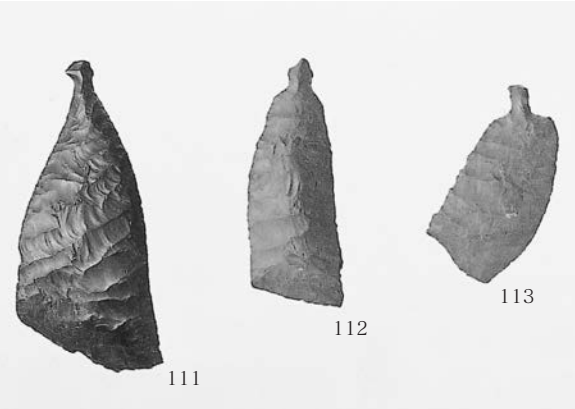
100

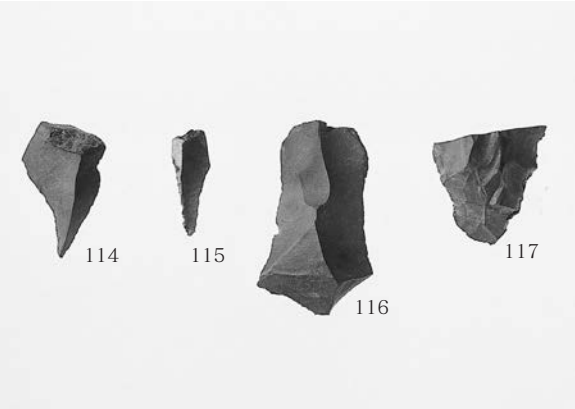

101
102
103
104
105

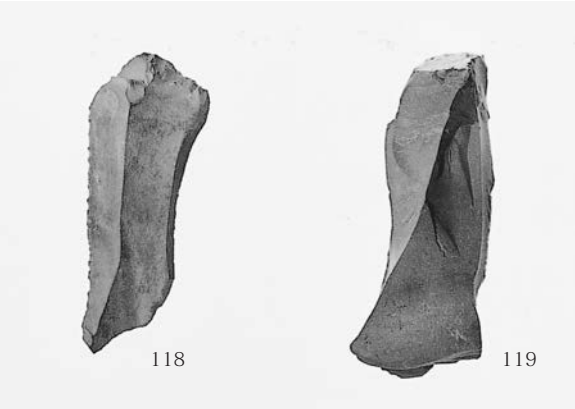

106

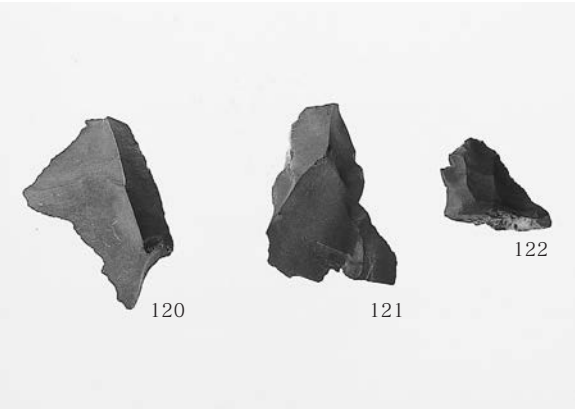
出土遺物（3）


107
108
109
110


111
112
113


114
115
116
117


118
119

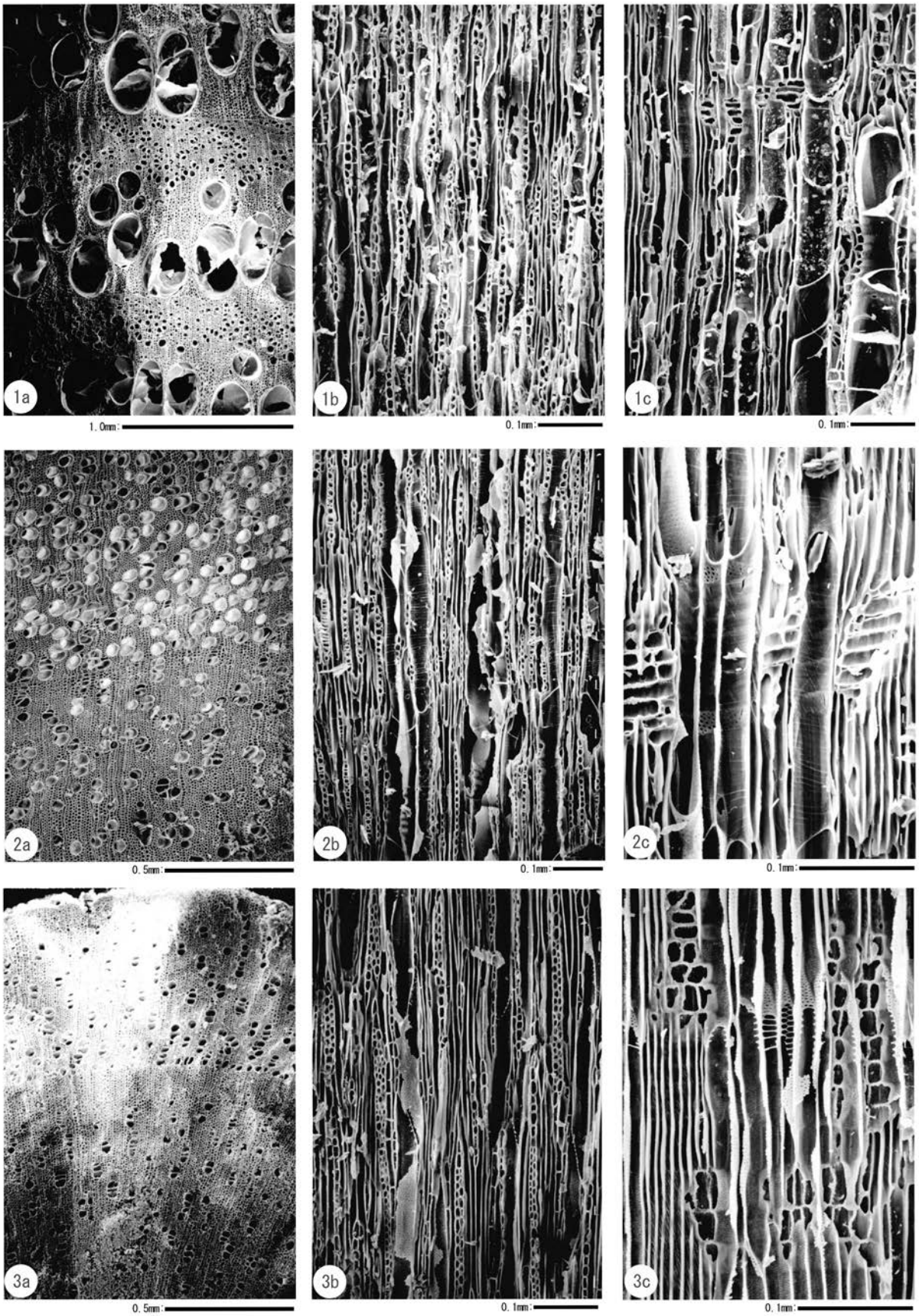

120
121
122

123

124

出土遺物（4）

図版18



1a－1c：クリ（試料番号3　ＳＩ116）　2a－2c：トチノキ（試料番号12　ＳＢ108　Ｐ1）
3a－3c：エゴノキ属（試料番号2　ＳＩ107）　a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真

ー　谷地中遺跡　ー

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

谷地中遺跡は台地の末端に立地し、元々は林地であった。遺跡北側は盛土され日本海沿岸道北自動車道が建設中である。遺跡の標高は80～82mで、周囲に広がる水田との比高差は２～３mである。

第２節　調査の方法

１　野外調査

調査はグリッド法を採用した。調査区全域に世界測地系平面直角座標第Ｘ系の座標北を基準として、（Ｘ＝35203.000 ，Ｙ＝－21097.000）を原点とする各４m間隔の方眼を設定した。方眼の原点を通る南北線をＭＡ、同じく東西線を50とし、南北線は西に向かってアルファベットを昇順、東西線は北に向かって数字の符号を昇順となるようにして付した。なお、南北線に付した２文字のアルファベットはＡ～Ｔまでの20文字の繰り返しで、ＭＡ～ＭＴ、ＬＡ～ＬＴと記述する。この方眼によって画する４m四方の区画は、その南東隅を通る南北線の符号と、東西線の符号とを組み合わせて「ＭＡ50グリット」のように呼称した。磁北は、座標北から東へ10°54′偏する。

遺構には種類別で略号を付し、あわせて検出順に連番で遺構番号を付した。遺構の調査は、原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、２分割法または４分割法による精査を行った。遺物は基本的にグリット単位で取り上げ、出土した層位、グリット名または遺構名、採取年月日を記録した。

記録は、写真と図面に拠った。遺構や遺物を対象とする写真撮影は、35mm版カメラでモノクロ、カラーリバーサル（スライド用）、ネガカラーの各フィルムを使用して行った。遺構の平面図、断面図の計測は、基本的に縮尺1/20の手実測で行い、細部表現が必要なところについては縮尺を１／10とした。また、遺構配置図やコンター図の作成にはトータルステーションを使用した。

２　室内整理

現場で作成した実測図を第１原図とし、これをもとに平面図と断面図を組み合わせた図を第２原図とした。第２原図の作成にあたっては、第１原図をスキャナーで取り込んでデータ化し、パソコン上で平面図と断面図を組み合わせた。また、トータルステーションのデータも同じくパソコン上で展開・処理した。トレース図の出力はすべてプロッターで行った。

遺物は、洗浄・注記後に報告書へ記載するものを選別した。その後基本的に１／１で実測図を作成し、報告書に記載するにあたって、適宜縮尺を変えてトレースした。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などについては拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

第３節　調査の経過

７月 ７日　谷地中遺跡の発掘調査を開始した。西側斜面から粗掘りを始める。

７月 ８日　粗掘り作業と平行して、遺跡全体の伐根除去を始める。縄文土器や石器が少量出土する。他に陶磁器片２点、寛永通宝なども確認された。

７月12日　土坑、フラスコ状土坑、袋状土坑など、20基以上の遺構を認定する。

７月13日　遺跡東側から竪穴状遺構を検出する。

７月26日　ヤード北側の段丘にフラスコ状土坑が現れており、付近の調査をする前準備として、草刈りをする。

７月27日　ヤード北側の粗掘を始める。遺跡南側から検出されたフラスコ状土坑から、縄文時代晩期の完形深鉢土器が出土する。副葬品と思われる。

７月29日　大館市、最高気温36℃を記録。遺跡遠景写真の撮影に向けて、遺跡内の清掃を行う。

７月30日　前日に引き続き、大館市の最高気温は36℃を記録。酷暑の中、遺跡遠景写真を撮影する。翌日から夏季休暇に入るため、遺跡内の清掃や機材の整頓などを行う。

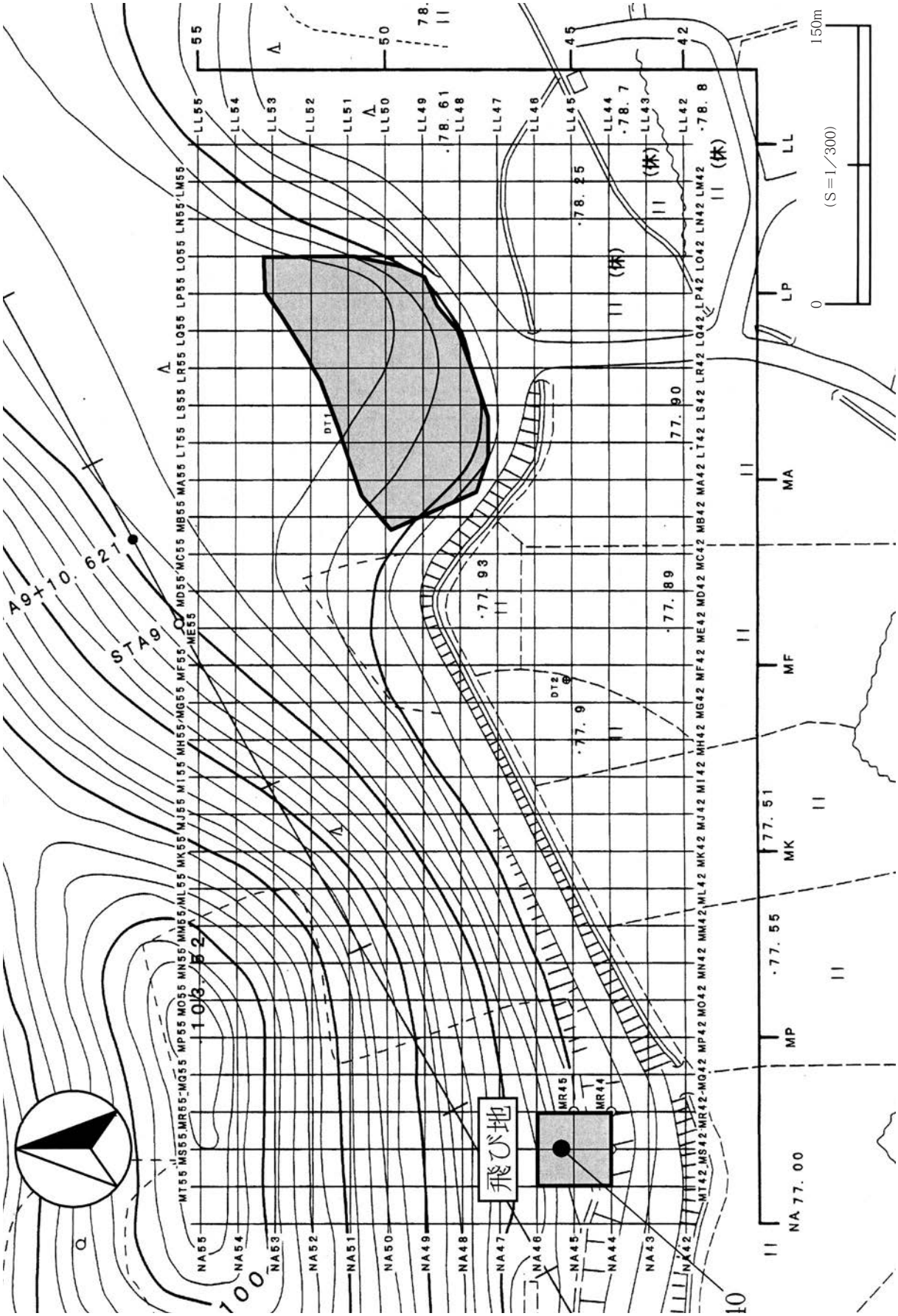
８月10日　遺構内土壌のサンプリング洗浄を始める。ヤード北側の調査範囲を拡張する。

８月16日　鷹巣高校牧野教諭、10年経験者研修で来跡。（18日まで）

８月17日　ヤード北側の精査終了。新たな遺構の発見はなかった。

８月18日　遺跡の引き渡しを行う。出席者は、日本道路公団小林氏、文化財保護室磯村学芸主事他１名、小林北調査課長、河田である。

８月19日　鎌田副所長来跡。調査期間は翌20日までであったが、台風接近の報を受け撤収、谷地中遺跡の発掘調査を終了した。



第36図　グリッド設定図

第２章　調査の記録

第１節　基本層位

本遺跡は山林として利用されていた。遺跡内の層序は３層に分けた。Ⅰ層は黒色土の表土であり、層厚は10～30㎝である。Ⅱ層は黒褐色土の遺物包含層であり、層厚は10～20㎝である。Ⅲ層は暗褐色土の漸移層である。また、東側の沢の層序は基本的に６層に分けた。Ⅰ層は黒色土の表土であり層厚は10～25㎝である。Ⅱ層は黒色土、Ⅲ層は黒褐色土で、層厚はそれぞれ15～60㎝と10㎝である。Ⅳ層は十和田ａ火山灰を混入する黒褐色土で層厚は10～20㎝である。Ⅴ層は遺跡内のⅡ層に、Ⅵ層はⅢ層に対応し、それぞれの層厚は20～70㎝と15㎝である。陶磁器はⅠ層から、縄文土器・石器はⅡ層から出土した。遺構の掘り込み面はⅡ層と考えられるが、確認面は地山面である。

第２節　検出遺構と遺構内出土遺物

１　検出遺構の概要

遺構確認面はすべて地山面であり、検出遺構は以下のとおりである。

縄文時代の土坑４基、フラスコ状土坑16基、袋状土坑16基、古代の竪穴状遺構１基、土坑１基である。縄文時代の土坑は、出土遺物、規模や形態、覆土の土色、放射性炭素年代測定結果等から、すべて縄文時代晩期前葉から中葉に構築されたものと考えられる。

２　縄文時代の遺構

（1）土坑

ＳＫ12土坑（第39図、図版21）

《位　　置》　ＬＲ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面でＳＫＦ11・13と重複して確認した。

《重　　複》　ＳＫＦ11・13に掘り込まれている。

《規模と平面形》　平面形は、残存する長軸60㎝、短軸116㎝で円形または楕円形を呈すると考えられ、深さは地山面から88㎝である。主軸方向はN－ 24°－Eである。

《埋　　土》　４層に分けた。本遺構の埋土は第３～６層である。第２層は骨片を混入する炭物層であり、後世に散布されたものである。ほとんどの層で塊状地山土や地山粒を包含しており、基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

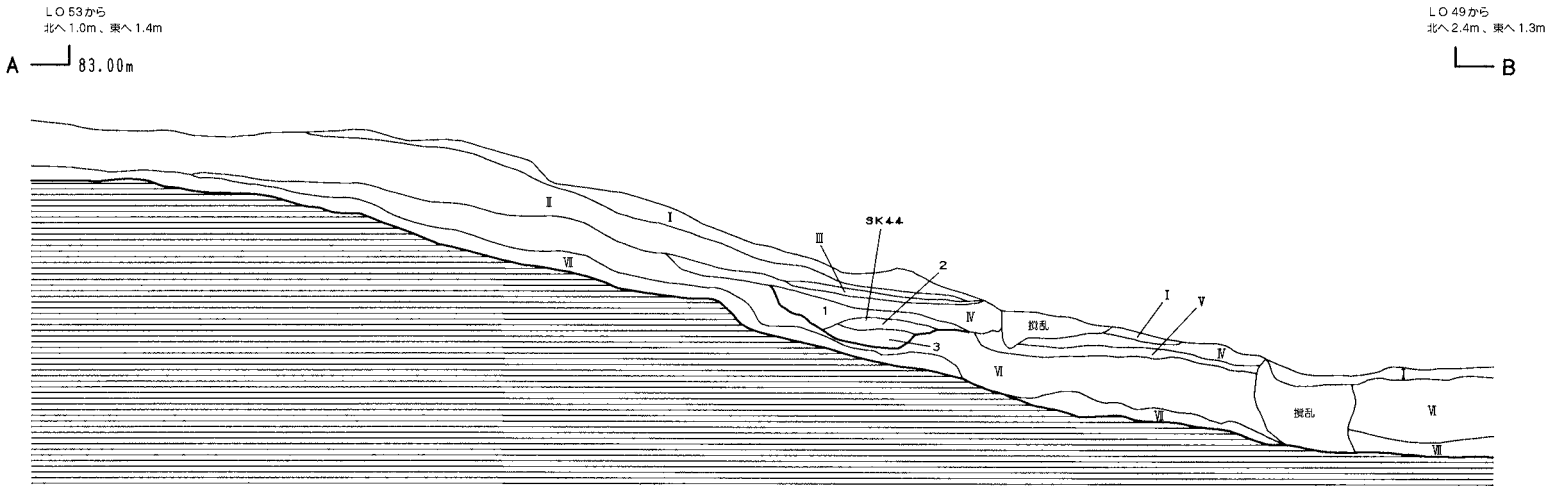
《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫ28土坑（第41図、図版21・30）

《位　　置》　ＬＰ48・49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

基本土層

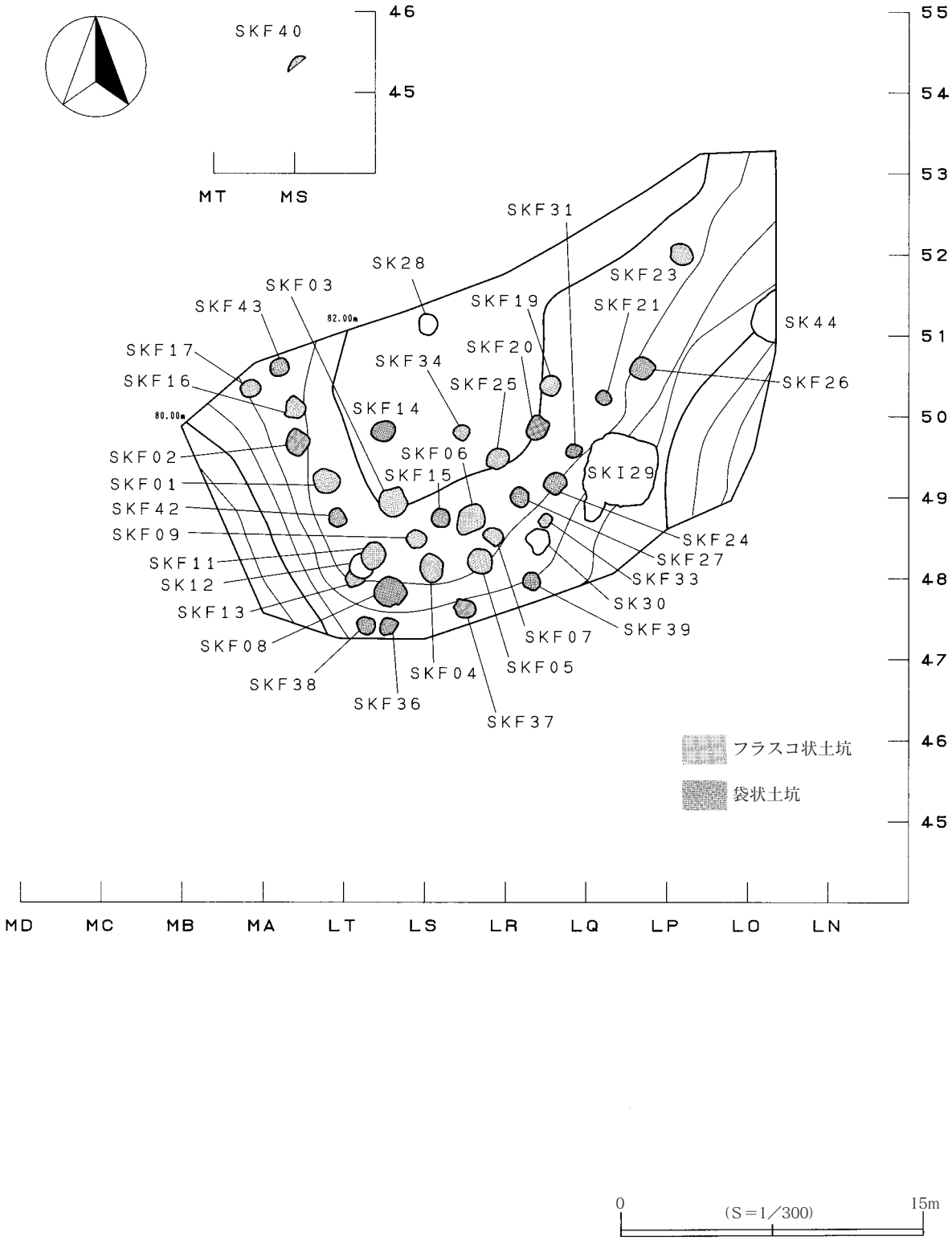


基本土層

Ⅰ　黒色土（10YR1.7/1）　しまり弱い　粘性やや弱い　表土
Ⅱ　黒色土（10YR２/1）　しまり強い　粘性やや強い　パミス微量ながら全体的に散在
Ⅲ　黒褐色土（10YR２/2）　しまり強い　粘性やや強い
Ⅳ　黒色土（10YR２/1）　しまり強い　粘性やや弱い　パミス多くまとまった帯状を形成（10%）
Ⅴ　暗褐色土（10YR３/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い　地山漸位層
　　上層の黒褐色土がもや状に入る（20%）
Ⅵ　黒褐色土（10YR２/2～10YR２/3）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒微量含む
Ⅶ　黒褐色土（10YR２/2）　しまりやや強い　粘性弱い　パミス帯状に連なる層（30%）

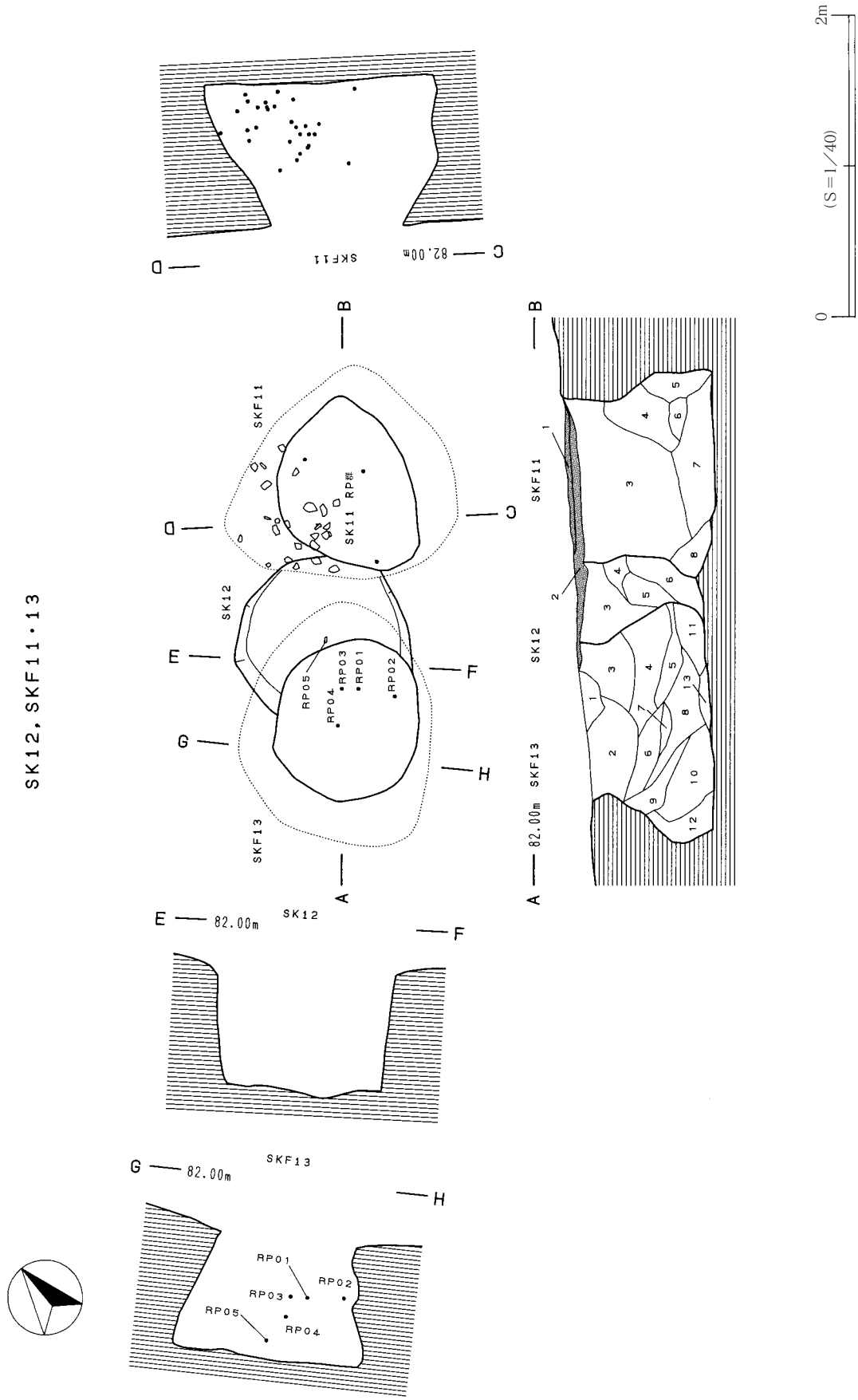
0　（S＝1／40）　2m

第37図　基本土層


SKF40
46
45
MT
MS
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
SKF31
SK28
SKF03
SKF43
82.00m
SKF19
SKF23
SKF21
SK44
SKF17
SKF20
SKF34
SKF25
SKF26
SKF16
SKF14
80.00m
SKF02
SKF06
SKF15
SKI29
SKF01
SKF42
SKF09
SKF24
SKF27
SKF11
SKF33
SK12
SK30
SKF13
SKF39
SKF08
SKF07
SKF05
SKF04
SKF38
SKF36
SKF37
フラスコ状土坑
袋状土坑
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN

0
(S＝1／300)
15m

第38図　遺構配置図

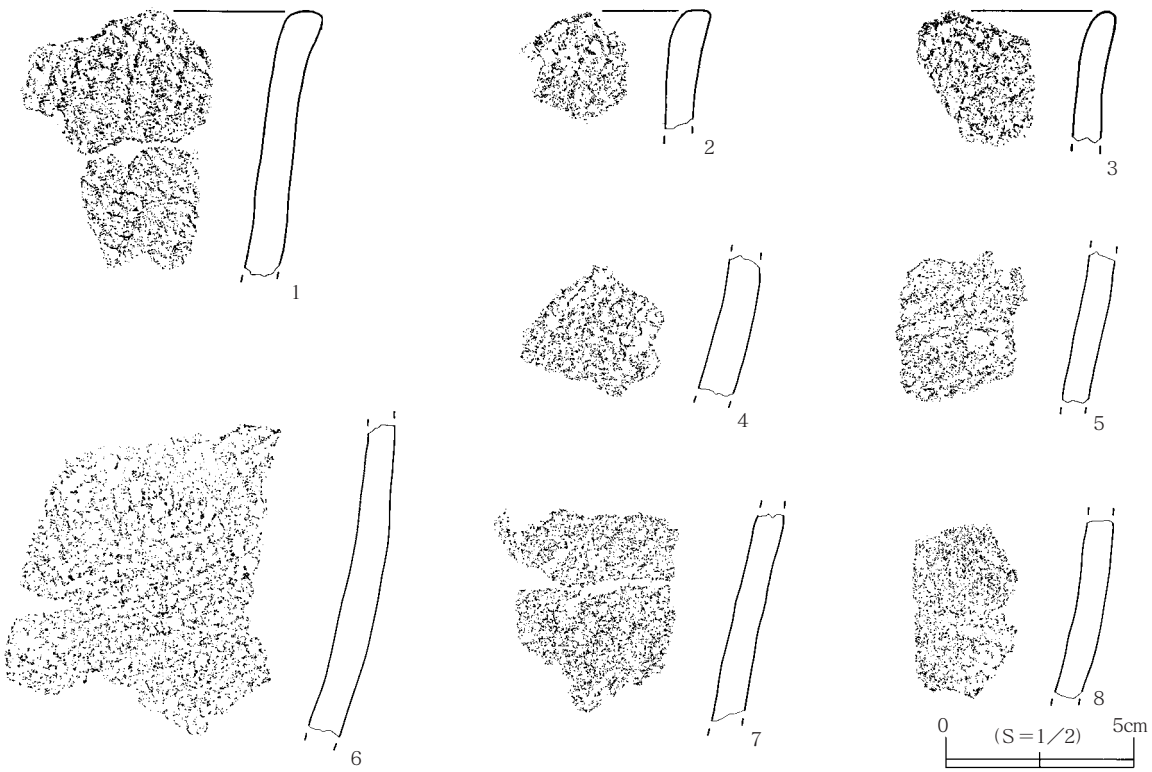


第39図　ＳＫ12土坑、ＳＫＦ11・13フラスコ状土坑

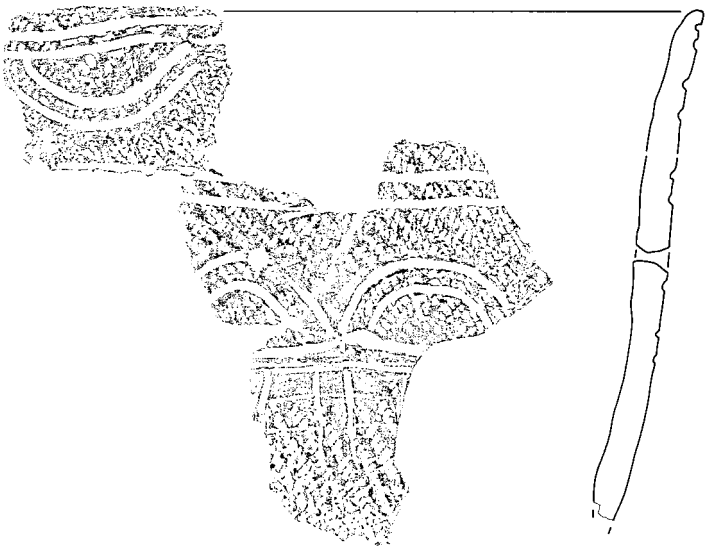
ＳＫ12
1　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強い　粘性やや弱い
地山粒少量含む
地表面に骨粒とおぼしき白い粒
（φ２～４㎜）散らばる
2　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや弱い
地山ブロック含む（φ２～３㎝５％）
１層同様の白い粒が地表面に散らばる
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり強い　粘性やや弱い
地山粒含む（φ２～５㎜15～20％）
4　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR3/3）
しまりやや強い　粘性やや強い
地山土含む（15～20％）
5　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強い　粘性やや強い
地山粒含む（φ２～５㎜20％）
6　暗褐色土（10YR3/4）しまり強い　粘性やや弱い
黒褐色土、地山土（１：１）（30％）

ＳＫＦ11
1　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強い　粘性やや弱い　地山粒少量含む
地表面に骨粒とおぼしき白い粒
（φ２～４㎜）散らばる
2　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや弱い　粘性やや弱い
地山ブロック含む（φ２～３㎝５％）
１層同様の白い粒が地表面に散らばる
3　黒褐色土（10YR2/2）しまり強い　粘性強い
地山粒含む（φ２～５㎜15～20％）
4　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性弱い
地山粒含む（φ２～５㎜５％）
地山ブロック含む（φ10㎝10％）
5　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性弱い　地山粒少量含む
壁際に地山ブロック含む（φ３～４㎝５％）
6　黄褐色土（10YR5/6）しまり強い　粘性弱い　黒褐色土含む（30％）
7　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性強い　地山粒少量含む
暗褐色土含む　底部付近（10％）
8　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性やや弱い
地山粒含む（φ２～５㎜10％）

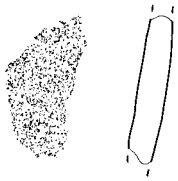
SKF13
1　黒褐色土（10YR2/2）しまり強い　粘性やや弱い
地山粒含む（φ２～５㎜15～20％）
2　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ５㎜５％）
3　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
地山粒含む（φ２㎜２％）
4　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ10㎜１％）
5　黄橙色土（10YR7/8）しまり強い　粘性強い
6　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強い　粘性やや強い
地山粒含む（φ１㎜１％）
7　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ20㎜30％）
8　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
地山粒含む（φ１～３㎜３％）
9　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ10～20㎜５％）
10　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや強い
地山粒含む（φ３㎜３％）
11　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ20㎜50％）
12　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや強い
地山粒含む（φ１㎜１％）
13　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや強い
地山ブロック含む（φ30㎜30％）



第40図　ＳＫＦ11フラスコ状土坑出土遺物

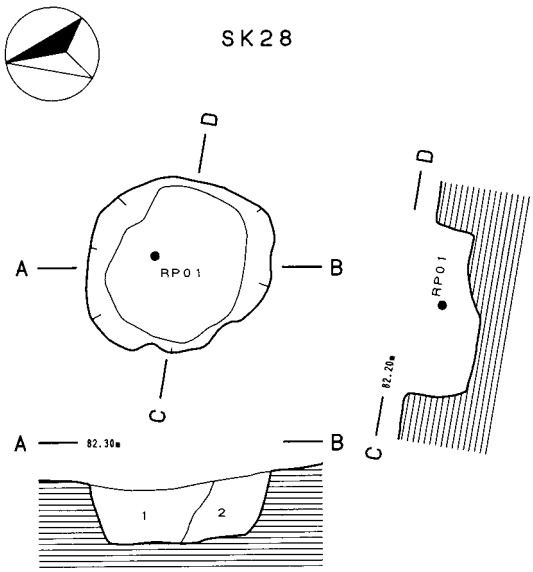


1（ＳＫＦ13）



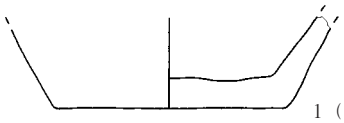
2（ＳＫＦ13）

0　（Ｓ＝1／2）　5cm



ＳＫ28
1　黒色土（10YR2/1）　しまり弱い　粘性普通
　　地山ブロック含む（φ３～５㎜20%）
2　黒褐色土（10YR2/3）しまり弱い　粘性普通
　　地山ブロック含む（φ３～５㎜40%）

0　（Ｓ＝1／40）　2m



1（ＳＫ28）

0　（Ｓ＝1／2）　5cm

第41図　ＳＫＦ13フラスコ状土坑出土遺物、ＳＫ28土坑及び出土遺物

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　平面形は、長軸98㎝、短軸92㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から38㎝である。主軸方向はN－９°－Eである。

《埋　　土》　２層に分けた。どちらも塊状地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　急に立ち上がっている。

《底　　面》　凸凹しており堅くしまっている。

《出土遺物》　第１層から縄文土器底部破片１点が出土した。胎土に繊維を混入する土器で、底部から胴部の立ち上がりにかけては被熱痕が見られる。この土器は前期前半の土器と考えられる。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫ30土坑（第42図、図版21）

《位　　置》　ＬＰ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　ＳＫＦ33と重複しているが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》　平面形は、軸124㎝の隅丸方形を呈し、深さは地山面から86㎝である。

《埋　　土》　４層に分けた。すべての層に塊状または粒状の地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　ほぼ垂直に立ち上がっている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》　なし。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

（２）フラスコ状土坑

ＳＫＦ01フラスコ状土坑（第43図、図版22）

《位　　置》　ＬＳ49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸124㎝、短軸120㎝のほぼ円形を呈し、深さは地山面から100㎝である。最大径部位の平面形は、長軸172㎝、短軸168㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－79°－Eである。

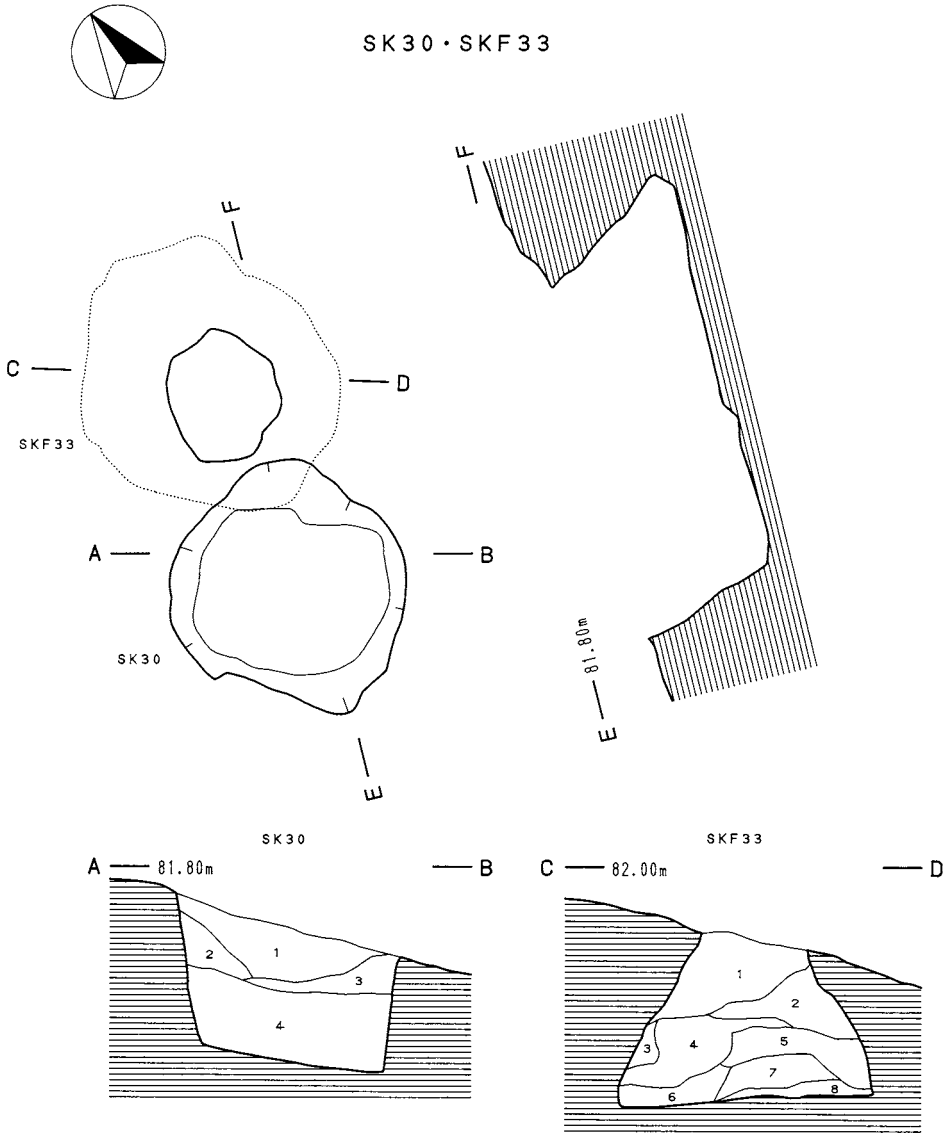
《埋　　土》　15層に分けた。第５～11層は地山崩落土と黒褐色土が互層に堆積しており、第３層は地山崩落土である。第２～15層は基本的に流れ込みによる自然堆積土であり、第１層は人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

《　壁　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

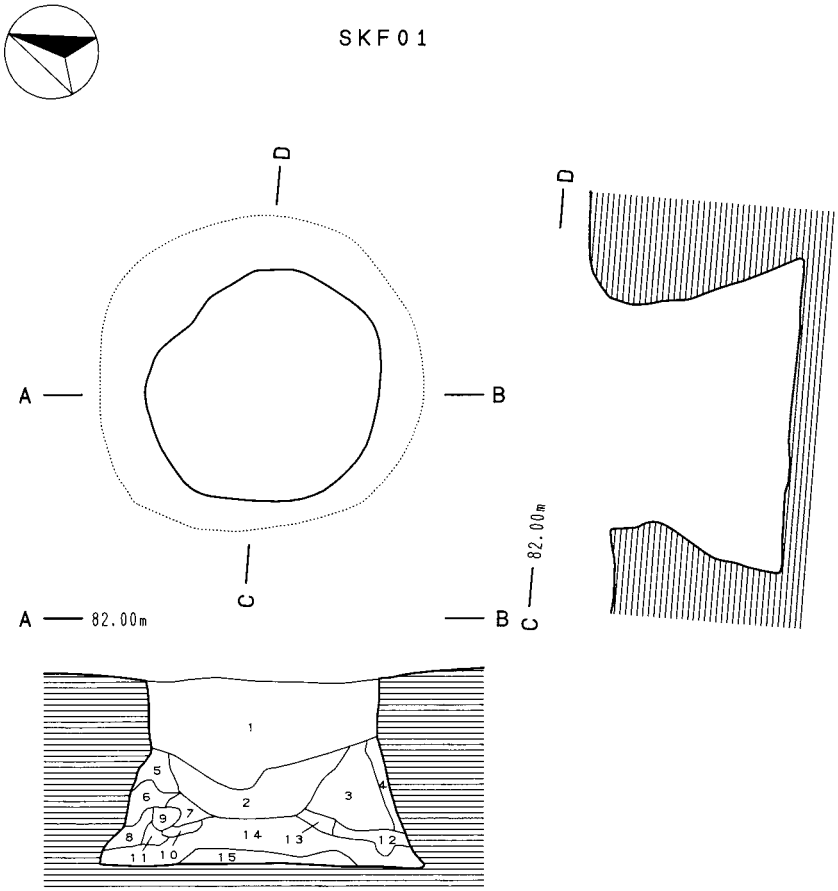


ＳＫ30
1　黒色土（10YR2/1）　しまり強い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～10mm10%）
2　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山土含む（ベース土の比１：１）
3　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強い　粘性やや弱い
　　地山粒含む（φ２～５mm）黒色土含む（10%）
4　黒褐色土（10YR2/3）しまり強い　粘性やや弱い
　　地山土含む（５～40mm30%）

ＳＫＦ33
1　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ２～５mm20%）
2　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ２～５mm30%）
3　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
　　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山土含む（15%）
4　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや強い　粘性やや強い
　　黒色土含む（５%）
5　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）
　　しまりやや強い　粘性やや強い
　　明黄褐色土含む（15%）４層との境に広がる
6　黒褐色土（10YR3/2）　しまりやや強い　粘性強い
　　地山土含む（20%）底部
7　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒少量含む
8　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒少量含む

0　（S＝1／40）　2m

第42図　ＳＫ30土坑、ＳＫＦ33フラスコ状土坑



SKF01
1　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや弱い
　　地山粒含む（φ２～５mm15～20%）
2　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）しまり普通　粘性普通
　　地山ブロック含む（φ３～５cm20%）
3　黄褐色土（10YR5/6）しまり普通　粘性やや弱い 黒褐色土含む（５%）
4　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性普通　地山粒含む（φ２～５mm20%）
5　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性普通
　　地山ブロック含む（φ５cm15%）
6　黄褐色土（10YR5/8）しまり普通　粘性やや弱い
7　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性普通　地山土含む（25%）
8　黄褐色土（10YR5/6）しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ２～５mm30%）
9　黄褐色土（10YR5/6）しまり普通　粘性やや弱い　黒褐色土含む（20%）
10　黄褐色土（10YR5/8）しまり普通　粘性やや弱い　黒色土含む（５～10%）
11　褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ５cm20%）
12　黄褐色土（10YR5/8）しまり普通　粘性やや弱い
13　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまり普通　粘性普通
　　地山粒少量含む
14　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　地山粒含む（φ２mm15%）
15　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性強い　14層と類似

0　(S＝1／40)　2m

第43図　ＳＫＦ01フラスコ状土坑

ＳＫＦ03フラスコ状土坑（第44図、図版22）

《位　　置》　ＬＲ48・49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸146㎝、短軸142㎝の円形を呈し、深さは地山面から126㎝である。最大径部位の平面形は、長軸162㎝、短軸155㎝の円形を呈する。

《埋　　土》　31層に分けた。中位までは地山崩落土と黒色土または黒褐色土が互層に堆積しており、第２～31層は流れ込みによる自然堆積土と考えられる。第１層は人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

《　壁　》　全体的に壁中位で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ04フラスコ状土坑（第45図、図版22）

《位　　置》　ＬＱ47・48、ＬＲ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸138㎝、短軸108㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から94㎝である。最大径部位の平面形は、長軸138㎝、短軸134㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 10°－Wである。

《埋　　土》　11層に分けた。中位までは地山崩落土と黒色土または黒褐色土が互層に堆積しており、第２～11層は流れ込みによる自然堆積土と考えられる。第１層は人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

《　壁　》　北側と南側の一部を除き、底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。なお、土坑底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,810±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ1,050－890（88.0%）を示し、本遺構の廃棄時期の根拠となりうる。

ＳＫＦ05フラスコ状土坑（第45図、図版23）

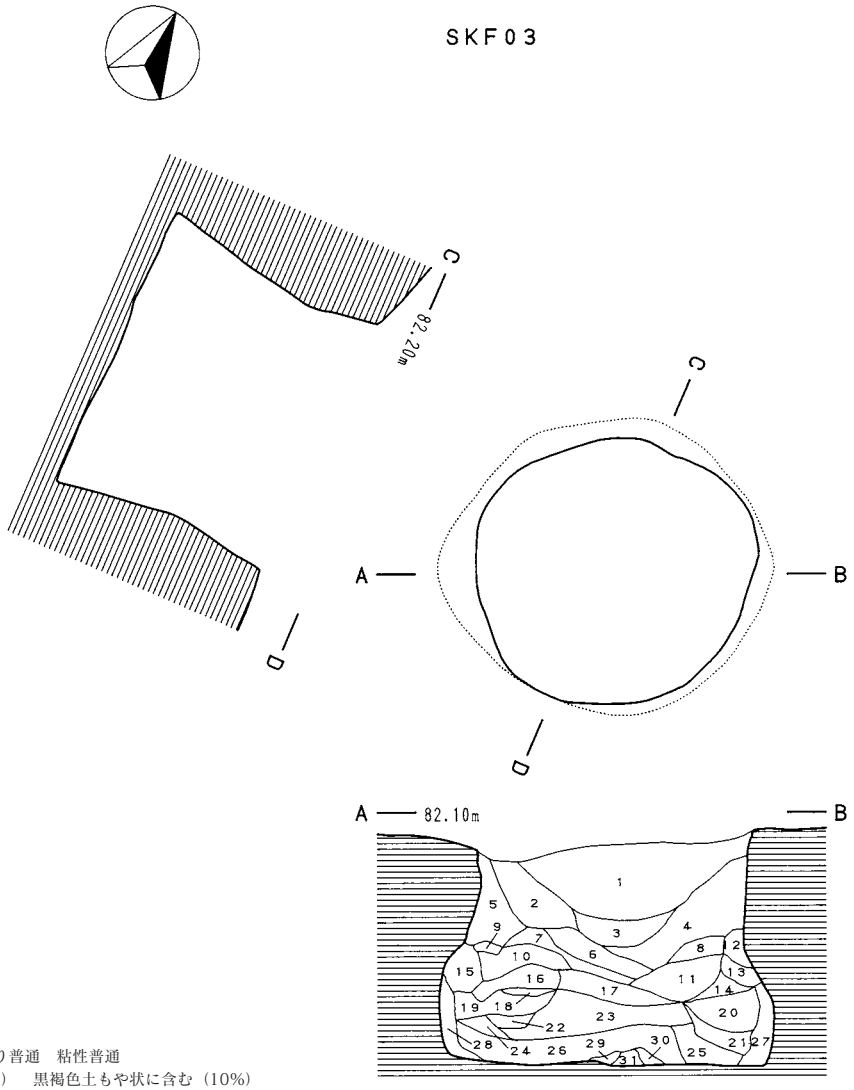
《位　　置》　ＬＱ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸140㎝、短軸124㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から101㎝である。最大径部位の平面形は、長軸162㎝、短軸150㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 45°－Wである。

《埋　　土》　２層に分けた。どちらも地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と



SKF03

1　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性普通
　地山粒含む（φ５～10㎜25%）　黒褐色土もや状に含む（10%）

2　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性普通
　地山粒含む（φ２～５㎜５%）　黒褐色土もや状に含む（５～10%）

3　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）
　しまりやや弱い　粘性強い　地山粒含む（φ２～５㎜15%）

4　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性強い
　地山粒含む（φ２～５㎜10%）

5　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性強い
　地山粒少量含む　地山ブロック含む（φ５㎝）下方に一つあり

6　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性やや強い
　地山粒含む（φ２～５㎜10%）

7　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
　しまり普通　粘性やや強い　地山粒含む（φ２～５㎜５%）

8　黒褐色土（10YR2/2）しまり弱い　粘性やや強い
　地山土含む（５～10%）

9　黄褐色土（10YR5/8）しまり普通　粘性やや弱い
　黒色土含む（15%）

10　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性普通
　地山粒少量含む　地山土含む（15%）

11　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
　地山粒少量含む

12　黄褐色土（10YR5/8）しまりやや弱い　粘性やや弱い
　黒色土、黒褐色土含む（30%）

13　黄褐色土（10YR5/8）しまりやや弱い　粘性やや弱い
　黒色土、黒褐色土含む（25%）

14　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性強い
　地山土含む（15%）

15　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い
　地山粒含む（φ２～５㎜15～20%）

16　明黄褐色土（10YR6/8）　しまり強い　粘性やや弱い
　黒色土、黒褐色土含む　10層境（15%）

17　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通　粘性普通
　地山粒含む（φ５～10㎜20%）　地山土含む　16層境（５%）

18　褐色土（10YR4/6）　しまり弱い　粘性普通
　黒色土、黒褐色土含む（25%）

19　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性普通　地山土含む（25%）

20　黄褐色土（10YR5/6）しまり普通　粘性普通　黒褐色土含む（30%）

21　黒色土（10YR2/2）　しまりやや弱い　粘性普通
　地山粒含む（φ２～５㎜15%）　地山土含む（20%）

22　黄褐色土（10YR5/8）しまり弱い　粘性やや弱い
　黒色土、黒褐色土含む（20%）

23　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）　しまり普通　粘性普通
　地山粒含む（φ２～５㎜15%）

24　明黄褐色土（10YR6/8）　しまり普通　粘性普通　地山土含む（15～20%）

25　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性普通
　地山粒含む（φ２～５㎜20%）

26　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや弱い　粘性普通　地山粒少量含む

27　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱い　粘性普通　地山粒少量含む

28　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱い　粘性普通　地山粒少量含む

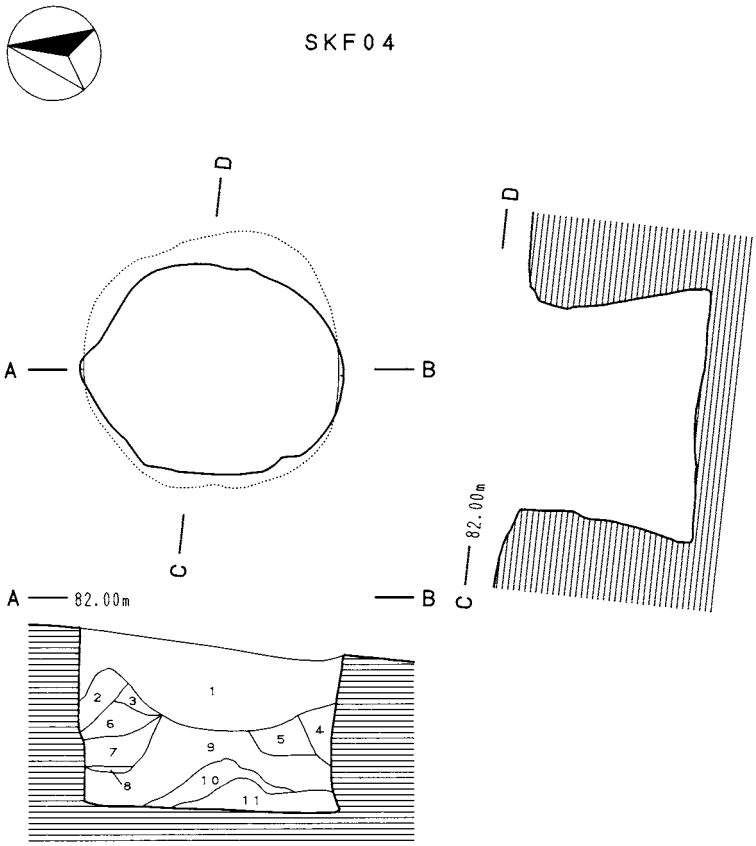
29　暗褐色土（10YR3/3～10YR3/4）　しまり普通　粘性普通
　黒褐色土含む（20%）

30　暗褐色土（10YR3/3～10YR3/4）　しまり普通　粘性普通
　黒褐色土含む（15～20%）

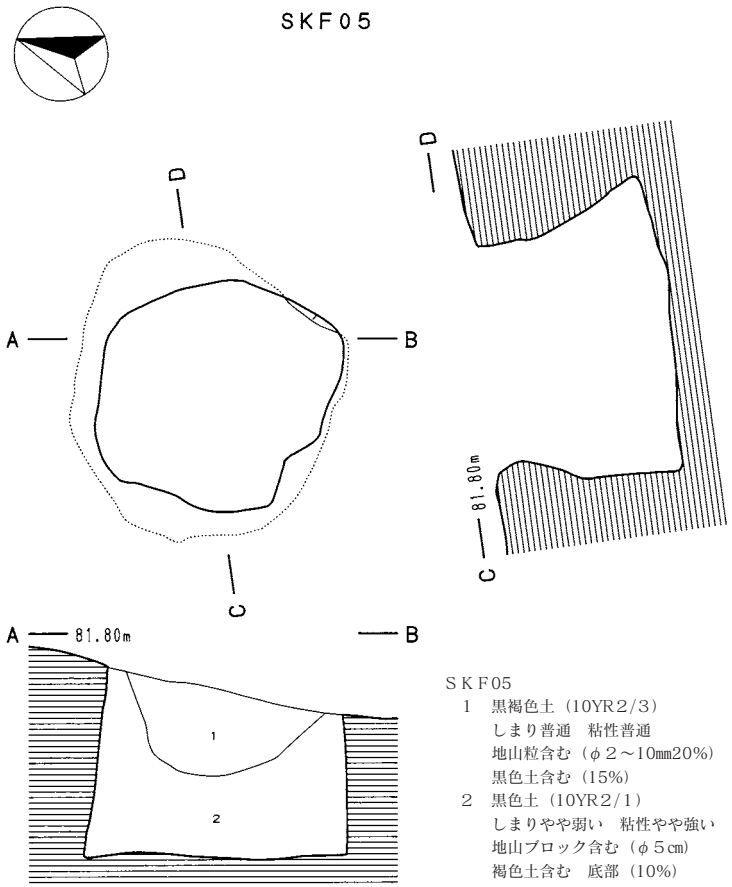
31　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR3/3）しまりやや強い　粘性普通
　地山土含む（30%）

0　（S＝1／40）　2m

第44図 ＳＫＦ03フラスコ状土坑



ＳＫＦ04
1　黒褐色土（10YR2/2）
　しまり普通　粘性強い
　地山粒含む（φ２～５㎜30%）
2　浅黄橙色土（10YR8/4）
　しまりやや弱い　粘性やや弱い
　黒褐色土含む（20%）
3　黒色土　黒褐色土
　（10YR2/1～10YR2/2）
　しまりやや弱い　粘性普通
　地山粒少量含む
4　黄褐色土（10YR5/8）
　しまり普通　粘性普通
　黒褐色土含む（15%）
5　黒褐色土（10YR2/3）
　しまり普通　粘性強い
　地山粒含む（φ２～５㎜５～10%）
　４層付近に多い
6　黄褐色土（10YR5/6）
　しまりやや弱い　粘性普通
　黒褐色土含む（15%）
7　黒褐色土（10YR2/3）
　しまり普通　粘性強い
　地山粒含む（φ２～５㎜20%）
8　黄褐色土（10YR5/8）
　しまりやや弱い　粘性普通
　黒褐色土含む（25%）
9　黒色土　黒褐色土
　（10YR2/1～10YR2/2）
　しまり普通　粘性やや強い
10　褐色土（10YR4/4）
　しまり普通　粘性やや強い
　黒色土含む（30%）
11　明黄褐色土（10YR7/6）
　しまりやや強い　粘性普通



ＳＫＦ05
1　黒褐色土（10YR2/3）
　しまり普通　粘性普通
　地山粒含む（φ２～10㎜20%）
　黒色土含む（15%）
2　黒色土（10YR2/1）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山ブロック含む（φ５㎝）
　褐色土含む　底部（10%）

0　（Ｓ＝1／40）　2m

第45図　ＳＫＦ04・05フラスコ状土坑

考えられる。

《　　壁　　》　南東側の一部を除き、底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　人為的な埋め戻し土であるが、規模や断面三角形の形態から、貯蔵穴の可能性が高い。

ＳＫＦ06フラスコ状土坑（第46図）

《位　　置》　ＬＱ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸144㎝、短軸123㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から68㎝である。最大径部位の平面形は、長軸150㎝、短軸147㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 79°－Eである。

《埋　　土》　８層に分けた。第６・７層は地山崩落土であり、基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　　壁　　》　東側の一部を除き、壁下位から底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。なお、土坑中位から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は3,375±35ＢＰ、２σＢＣ1,750－1,520（95.4%）を示す。この結果は、他の結果よりも旧い数値を示しているが、土坑の堆積土に旧い炭化材が流れ込んで混入したものと考えられ、遺構構築時期の根拠にはなり得ない。

ＳＫＦ07フラスコ状土坑（第46図、図版23・30）

《位　　置》　ＬＱ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸96㎝、短軸88㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から60㎝である。最大径部位の平面形は、長軸133㎝、短軸116㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 60°－Wである。

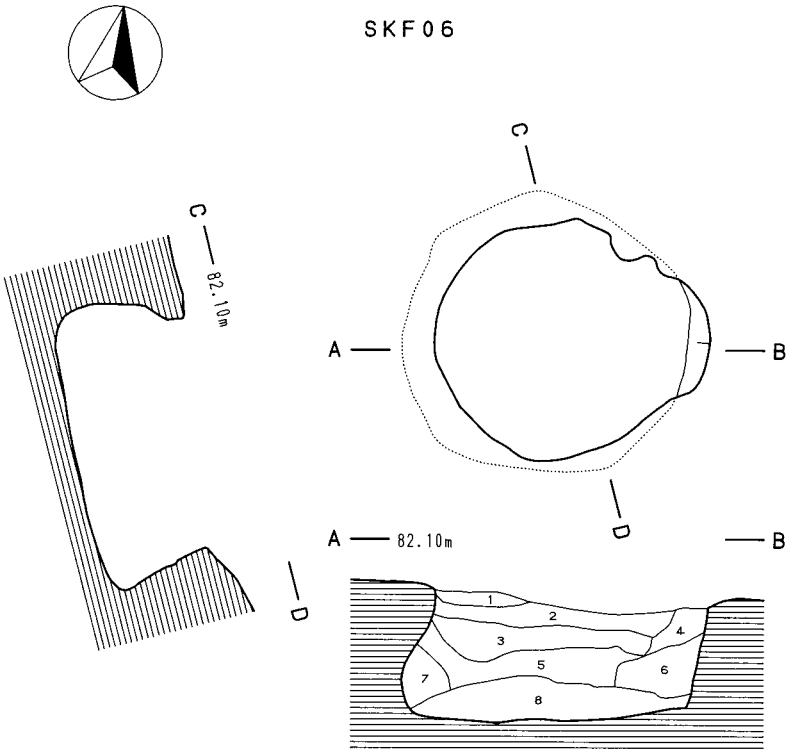
《埋　　土》　分布調査時に半截されており、残存する埋土は５層に分けた。ほとんどの層に塊状または粒状の地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

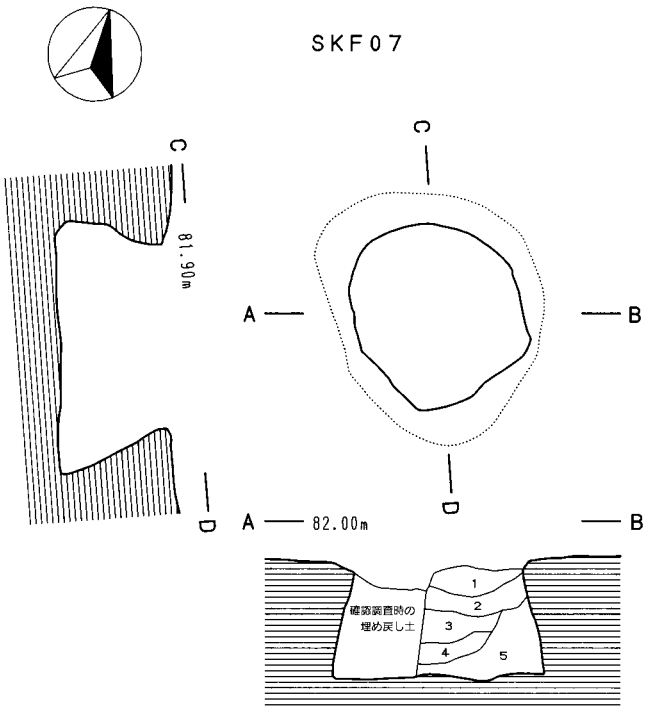
《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　確認面から、縄文土器小破片１点が出土した。摩滅が著しく施文原体は不明であるが、胎土には繊維を混入する。この土器は前期前半の土器と考えられる。

《考　　察》　人為的な埋め戻し土であるが、規模や断面三角形の形態から、土坑墓の可能性が



ＳＫＦ06
1　黒色土（10YR2/1）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山土含む（70%）
2　黒色土（10YR2/1）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山土含む（10%）
3　黒色土（10YR2/1）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山土含む（40%）
4　黒褐色土（10YR2/2）
　しまり弱い　粘性やや強い
　地山ブロック含む（95%）
5　黒色土（10YR2/1）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山土含む（10%）
6　黒褐色土（10YR2/2）
　しまり弱い　粘性やや強い
　地山ブロック（90%）
7　黒褐色土（10YR2/2）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山土含む（10%）
8　黒褐色土（10YR2/2）
　しまりやや弱い　粘性やや強い
　褐色土含む（30%）



0　（S＝1／2）　5cm

ＳＫＦ07
1　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや強い　粘性やや強い
　地山粒含む（φ２～５㎜５～１０%）
2　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性やや強い
　地山ブロック含む（φ３～４㎝15%）
3　黒色土（10YR2/1）　しまり強い　粘性強い
　地山ブロック含む（φ４㎝）下辺に一つあり
4　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや強い　粘性やや強い
　地山土、地山ブロック含む（φ２～３㎝）
5　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
　しまりやや弱い　粘性強い
　地山粒含む（φ２～５㎜10～15%）

0　（S＝1／40）　2m

第46図　ＳＫＦ06・07フラスコ状土坑及び出土遺物

高い。

ＳＫＦ09フラスコ状土坑（第47図、図版23）

《位　　置》　ＬＱ48・ＬＲ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸95㎝、短軸91㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から62㎝である。最大径部位の平面形は、長軸137㎝、短軸126㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 62°－Eである。

《埋　　土》　３層に分けた。第２・３層には粒状の地山土を、第１層には塊状の地山土を包含しており、基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》　なし。

《時　　期》　不明である。

《考　　察》　人為的な埋め戻し土であるが、規模や断面三角形の形態から、土坑墓の可能性が高い。

ＳＫＦ11フラスコ状土坑（第39・40図、図版24・30）

《位　　置》　ＬＲ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面でＳＫ12と重複して確認した。

《重　　複》　ＳＫ12を掘り込んでいる。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸112㎝、短軸88㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から100㎝である。最大径部位の平面形は、長軸148㎝、短軸132㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ ５°－Eである。

《埋　　土》　６層に分けた。第１・２層は骨片を混入する炭化物層であり、後世に散布されたものである。中位までは、地山崩落土と黒色土または黒褐色土が互層に堆積しており、流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出土遺物》　埋土中位から底面にかけて前期の土器小破片26点が出土した。出土した土器は２個体の土器破片である。そのうち８点を図示した。１～５は同一個体であり、緩やかな波状口縁を呈する。口縁部は若干外反し、底部は丸底を呈すると考えられる。器面全体にＬＲ縄文を施文し、胎土には繊維が混入する。外面には煤状炭化物が付着している。この土器は前期前葉の土器である。６～８も深鉢形土器の同一個体である。摩滅が著しいが、ＬＲ縄文を施文しており、胎土には繊維を混入する。この土器は前期前半の土器と考えられる。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ13フラスコ状土坑（第39・41図、図版24・30）

《位　　置》　ＬＲ47・48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面でＳＫ12と重複して確認した。

《重　　複》　ＳＫ12に掘り込まれている。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸108㎝、短軸92㎝で楕円形を呈すると考えられ、深さは地山面から84㎝である。最大径部位の平面形は、長軸150㎝、短軸128㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 39°－Wである。

《埋　　土》　13層に分けた。第１層は後世の撹乱である。地山混入の土と黒色土または暗褐色土が互層に堆積しており、流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　全体的に壁低位で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　埋土から縄文土器破片５点が出土し、その内の４点は同一個体である。１（ＲＰ01～04）は、底部が砲弾状の器形を呈する深鉢形土器である。口縁部は平縁であり、口端部は先細りになる。器面全体に撚の異なる原体により縦位に羽状縄文を施文している。胎土には多量に繊維を混入する。口縁上端と下端の２条ずつの平行沈線で文様帯を区画し、区画内には２条１組の沈線で下向きの半円を描く。胴部にも２条の平行沈線を配し、同じく２条１組の沈線で上向きの半円が連続して描かれる。この平行沈線から垂下するように短沈線が配されるが、文様を意識しているようには見えない。１個の補修孔を有するが、裏面には２個の未完通の穿孔痕が見られる。内面には平たい篦状工具によるナデ痕が見られる。内外面には煤状炭化物が付着する。この土器は、表館（１）遺跡の土器編年の第Ｘ群土器に比定され、早期末葉に位置づけられる。[註1] ２（ＲＰ05）は、胎土に繊維を混入する無文の深鉢形土器である。この土器は前期前葉の土器と考えられる。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。なお、土坑底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,725±35ＢＰ、２σＢＣ930－800（93.4%）を示し、本遺構の廃棄時期の根拠となりうる。

ＳＫＦ16フラスコ状土坑（第47図、図版25・30）

《位　　置》　ＬＳ49・50区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

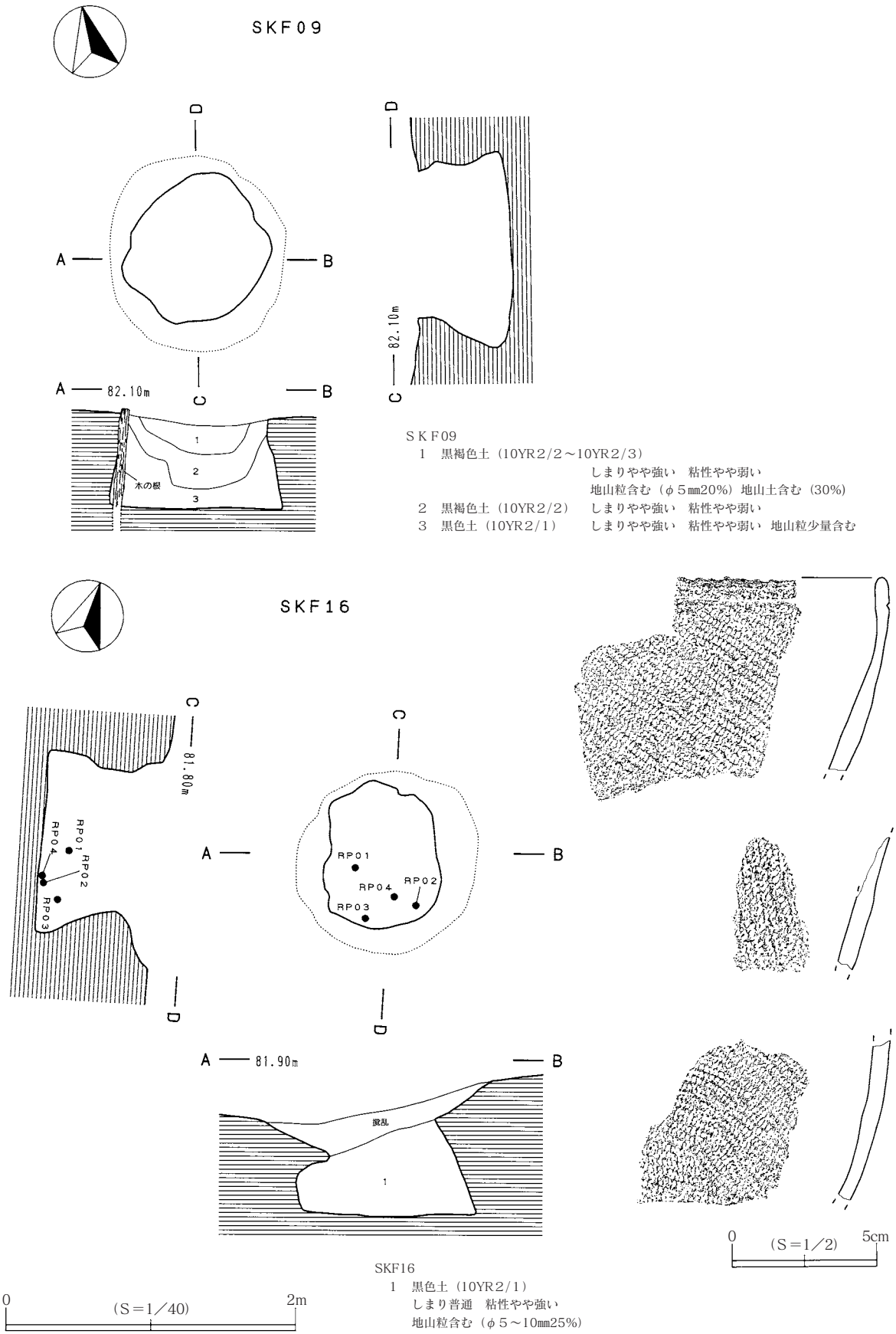
《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸102㎝、短軸79㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から87㎝である。最大径部位の平面形は、径126㎝の円形を呈する。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　埋土下位から底面にかけて縄文土器破片４点が出土した。そのうち３点は同一個体である。１（ＲＰ02）は、ＲＬＲ複節縄文を施文する深鉢形土器である。内外面



第47図　ＳＫＦ09・16フラスコ状土坑及び出土遺物

に煤状炭化物が付着し、外面には被熱痕が見られる。この土器は前期前半の土器と考えられる。２（ＲＰ03・04）は、ＲＬ縄文を施文する晩期の鉢形土器破片である。２・３（ＲＰ01）は同一個体である。口唇部に刻み目を、口縁部には２条の平行沈線を配する。胴部にはＲＬ縄文を施文し、内外面とも厚く煤状炭化物が付着する。また、外面には被熱痕が見られる。この土器は晩期中葉の大洞Ｃ$_1$式土器である。

《時　　期》　出土遺物から、晩期中葉大洞Ｃ$_1$式期と考えられる。

《考　　察》　人為的な埋め戻し土であるが、規模や断面三角形の形態から、貯蔵穴の可能性が高い。

ＳＫＦ17フラスコ状土坑（第48図、図版25・30）

《位　　置》　ＬＳ49・50区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸94㎝、短軸81㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から98㎝である。最大径部位の平面形は、長軸174㎝、短軸156㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 67°－Eである。

《埋　　土》　３層に分けた。第２・３層は地山土と黒色土や黒褐色土が縞状に堆積しており、地山崩落土混入の流れ込みによる自然堆積土と考えられる。第１層は人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

《　壁　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　第１層下部から石器１点が出土した。側縁に微調整を加えた縦長剥片である。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ19フラスコ状土坑（第48図、図版25・30）

《位　　置》　ＬＰ50区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸96㎝、短軸93㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から66㎝である。最大径部位の平面形は、長軸117㎝、短軸114㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 61°－Wである。

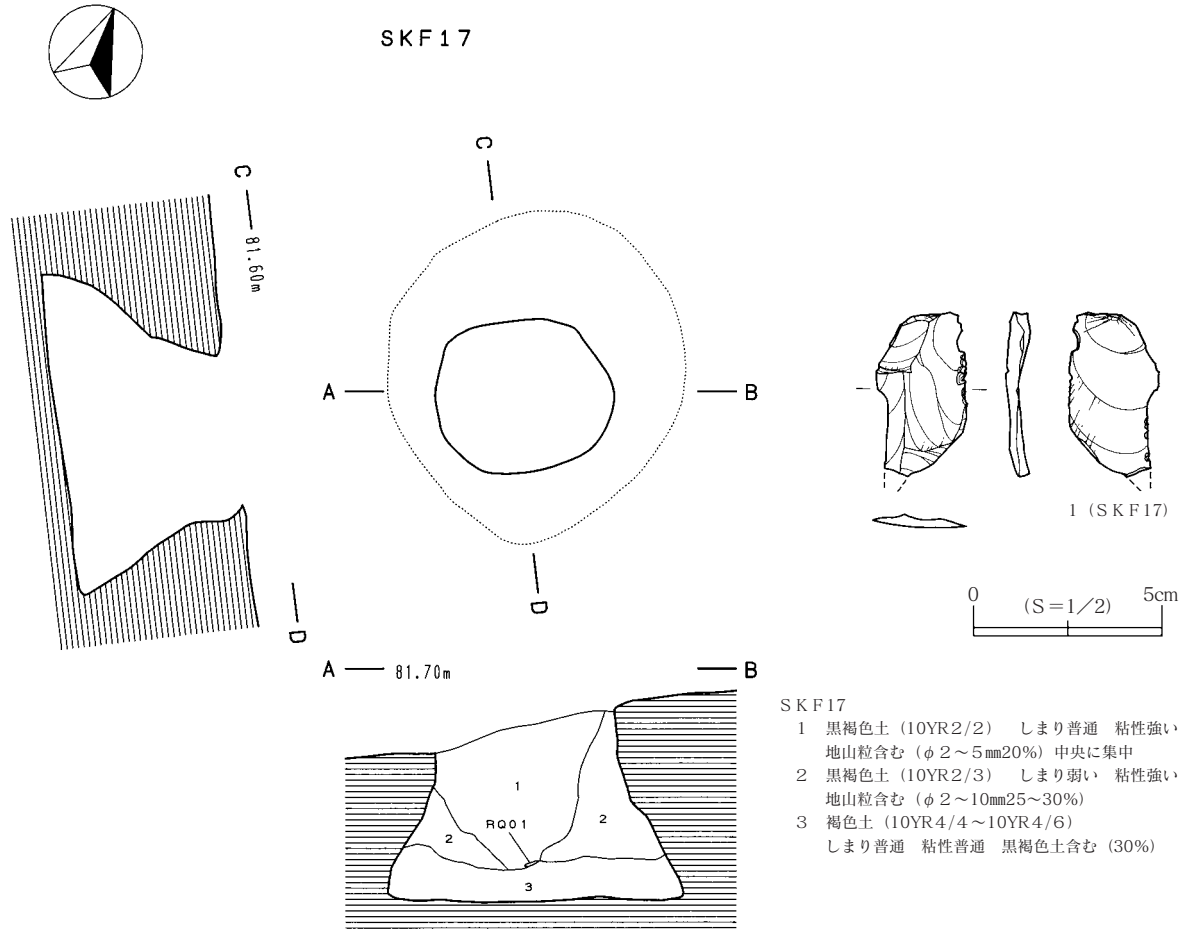
《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

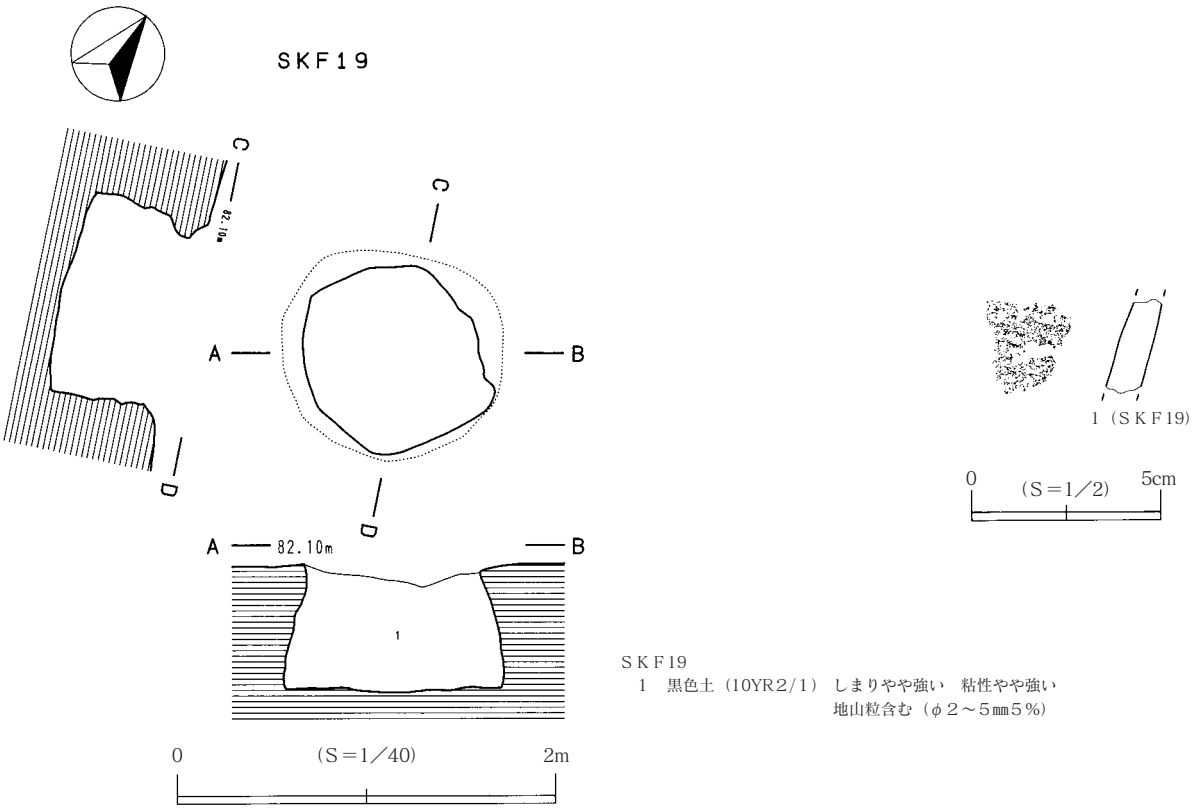
《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　埋土から縄文土器破片１点が出土した。摩滅が著しく施文原体は不明であるが、繊維が混入する前期前半の土器と考えられる。

《考　　察》　人為的な埋め戻し土であるが、規模や断面三角形の形態から、貯蔵穴の可能性が高い。



SKF17
1　黒褐色土（10YR2/2）　しまり普通　粘性強い
　地山粒含む（φ2～5㎜20%）中央に集中
2　黒褐色土（10YR2/3）　しまり弱い　粘性強い
　地山粒含む（φ2～10㎜25～30%）
3　褐色土（10YR4/4～10YR4/6）
　しまり普通　粘性普通　黒褐色土含む（30%）



SKF19
1　黒色土（10YR2/1）しまりやや強い　粘性やや強い
　地山粒含む（φ2～5㎜5%）

第48図　ＳＫＦ17・19フラスコ状土坑及び出土遺物

ＳＫＦ23フラスコ状土坑（第49図、図版21）

《位　　置》　ＬＬ51・52区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。埋土状況から本来はフラスコ状土坑であると判断した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　平面形は、長軸114㎝、短軸107㎝の隅丸方形を呈し、深さは地山面から76㎝である。主軸方向はN－ 82°－Eである。

《埋　　土》　３層に分けた。第３層は地山崩落土、第２層は地山崩落土混入の黒褐色土である。基本的に連続した自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　急に立ち上がっている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ25フラスコ状土坑（第49図、図版26）

《位　　置》　ＬＰ49、ＬＱ49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸116㎝、短軸100㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から68㎝である。最大径部位の平面形は、長軸136㎝、短軸130㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 55°－Eである。

《埋　　土》　５層に分けた。第３・４層は地山崩落土を包含しており、基本的に流れ込みによる自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　全体的に壁中位で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから貯蔵穴と考えられる。なお、土坑底面で採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,740±35ＢＰ、２σＢＣ940－810（90.3%）を示し、本遺構の廃棄時期の根拠となりうる。

ＳＫＦ33フラスコ状土坑（第42図、図版21）

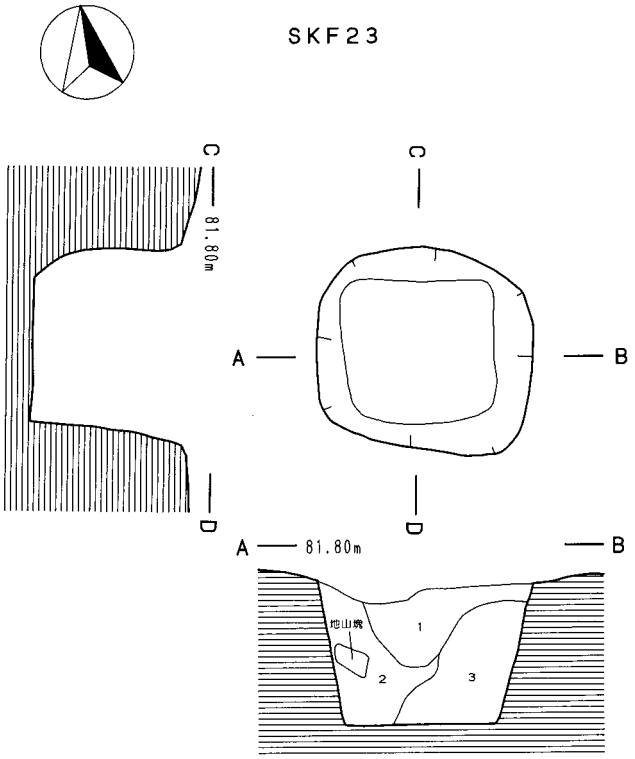
《位　　置》　ＬＰ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

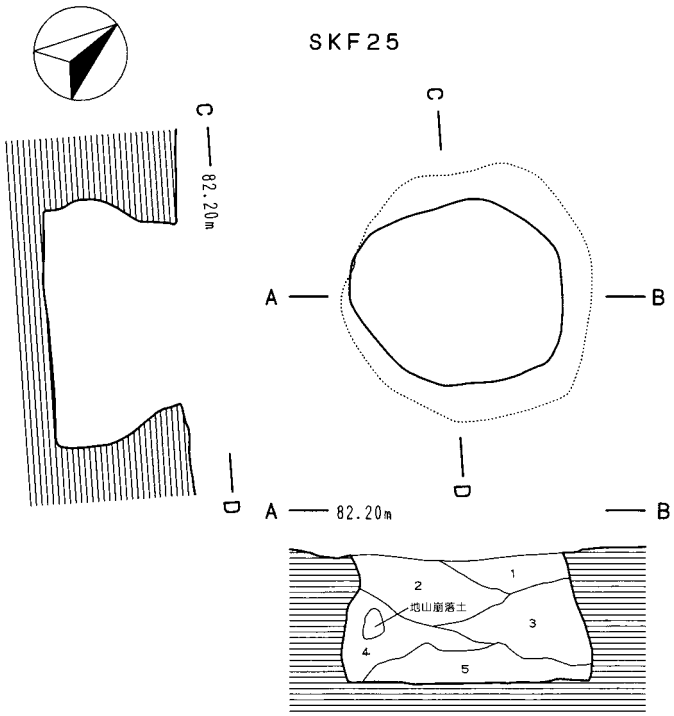
《重　　複》　ＳＫ30と重複しているが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸64㎝、短軸60㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から90㎝である。最大径部位の平面形は、長軸153㎝、短軸128㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ ５°－Eである。

《埋　　土》　８層に分けた。第５層は地山崩落土を包含しており、第４層は地山崩落土と考えられる。第２～８層は流れ込みによる自然堆積土と考えられる。第１層は人為的な



ＳＫＦ23
1　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（2～5mm20%）
2　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山土含む（30～40%）
3　黄褐色土（10YR5/8）しまりやや強い　粘性やや弱い
　　黒色土、黒褐色土含む（10%）



ＳＫＦ25
1　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒少量含む
2　黒褐色土（10YR2/2）しまり強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ2～10mm35%）
　　地山ブロック含む（φ3cm35%）
3　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
　　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ2～10mm30%）
　　両壁沿いに集中
4　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ3cm25%）
5　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山崩落土含む

0　（S＝1／40）　2m

第49図　ＳＫＦ23・25フラスコ状土坑

埋め戻し土の可能性が高い。

《　　壁　　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ34フラスコ状土坑（第50図、図版27）

《位　　置》　ＬＱ49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸90㎝、短軸74㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から48㎝である。最大径部位の平面形は、長軸108㎝、短軸100㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 49°－Eである。

《埋　　土》　７層に分けた。第５～７層は地山崩落土を混入している。第２層は塊状地山土を包含しており、人為的な埋め戻し土と考えられる。第３～７層は自然堆積土、第１・２層は人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　全体的に底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　他の貯蔵穴と比べ掘り込みの深さが若干浅いが、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

ＳＫＦ40フラスコ状土坑（第50図、図版29）

《位　　置》　ＭＱ45・ＭＲ45区に位置する。

《確　　認》　工事用道路の法面に半分削り取られた状態で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸130㎝、残存する短軸84㎝の楕円形を呈し、深さは地山面より90㎝である。最大径部位の平面形は、長軸180㎝、残存する短軸108㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 29°－Eである。

《埋　　土》　10層に分けた。第６～10層は地山崩落土を混入しており、流れ込みによる自然堆積土と考えられる。第１～５層は連続した人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

《　　壁　　》　底面付近で大きくオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

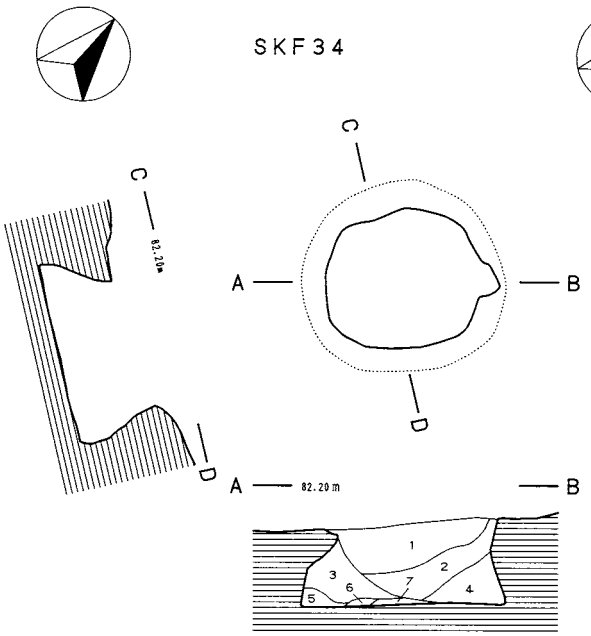
《考　　察》　規模や形態、開口状態で廃棄されていることから、貯蔵穴と考えられる。

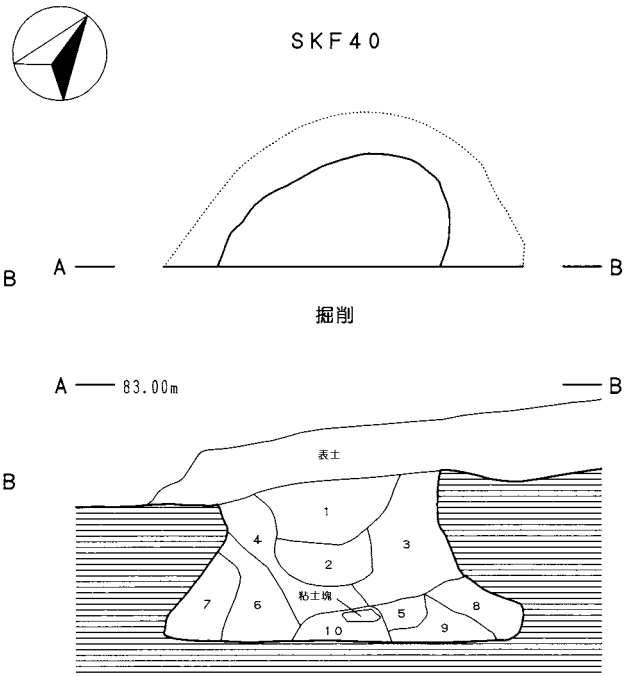
（３）袋状土坑

ＳＫＦ02袋状土坑（第50図、図版22）

《位　　置》　ＬＳ49区に位置する。

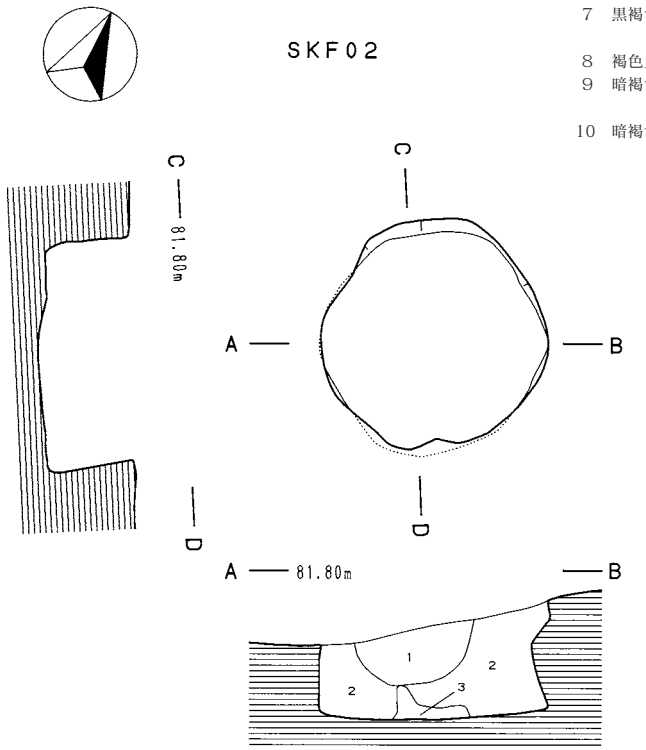
《確　　認》　精査中に地山面で確認した。





SKF34
1　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ2～5mm15%）
2　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ5～10cm30%）
3　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ1～2mm3%）
4　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
5　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ1～5mm40%）
6　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ1～5mm30%）
7　明黄褐色土（10YR6/6）しまりやや強い　粘性弱い
　　地山土含む

SKF40
1　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや弱い　粘性やや弱い　地山粒少量含む
　　小礫含む（φ2～3cm5%）
2　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや弱い　粘性やや弱い　1層より地山粒富む
　　小礫含む（φ2～3cm5%）
3　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性強い　地山粒少量含む
　　小礫多く入る（30%）
4　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）
　　しまりやや強い　粘性強い　地山粒少量含む
　　小礫わずかに入る
5　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ2～5mm25%）
6　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ5mm15%）小礫わずかに入る
7　黒褐色土（10YR2/3）しまり弱い　粘性やや弱い　地山土含む（20%）
　　非常にもろい層
8　褐色土（10YR4/6）　しまりやや弱い　粘性弱い　黒色土含む（15%）
9　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや弱い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ2～5mm10%）
10　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ2～5mm30%）　粘土ブロック入る



SKF02
1　黒褐色土（10YR2/3）しまり普通　粘性やや強い
2　黒色土（10YR1.7/1）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ10mm20%）
3　黄橙色土（10YR7/8）しまり強い　粘性強い

0　（S＝1／40）　2m

第50図　ＳＫＦ34・40フラスコ状土坑、ＳＫＦ02袋状土坑

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸120㎝、短軸116㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から50㎝である。最大径部位の平面形は、長軸124㎝、短軸121㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 62°－Eである。

《埋　　土》　３層に分けた。第３層は地山土由来の土であり、第２層は塊状地山土を包含している。連続した人為的な埋め戻しと考えられる。

《　壁　》　南側の一部が底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓の可能性が高い。

ＳＫＦ08袋状土坑（第51図、図版23・30）

《位　　置》　ＬＲ47区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸152㎝、短軸147㎝のほぼ円形を呈し、深さは地山面から51㎝である。最大径部位の平面形も、長軸152㎝、短軸147㎝のほぼ円形を呈する。

《埋　　土》　単一層である。塊状地山土を多量に包含しており、一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　西側の一部が壁中位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　埋土低位から縄文土器破片１点が出土した。羽状縄文を地文とし、２条１組の沈線により曲線文を描く。胎土には繊維を多量に混入する。この土器破片は隣接するＳＫＦ13から出土した土器と同一個体であり、早期末葉の土器と考えられる。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ14袋状土坑（第51図、図版24・30）

《位　　置》　ＬＲ49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

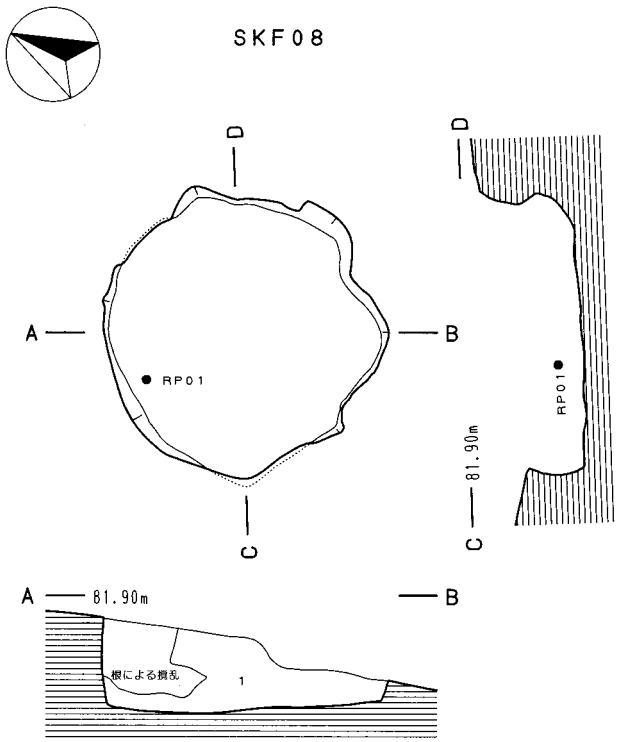
《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸126㎝、短軸106㎝の円形を呈し、深さは地山面から33㎝である。最大径部位の平面形は、長軸126㎝、短軸117㎝の不整な楕円形を呈する。主軸方向はN－ 67°－Eである。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土である。

《　壁　》　北側の一部が壁中位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

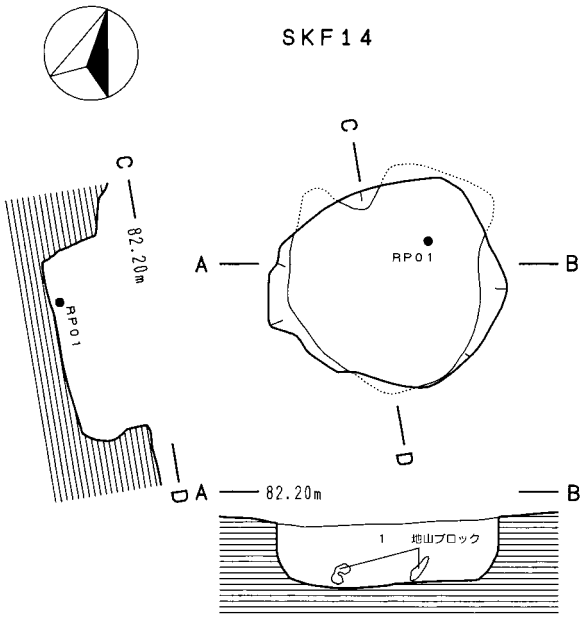
《出 土 遺 物》　底面付近から縄文土器破片１点が出土した。ＲＬ縄文を施文し、胎土には繊維が混入する。内外面には煤状炭化物が付着しており、外面には厚く被熱痕が見られる。この土器は前期前半の土器と考えられる。

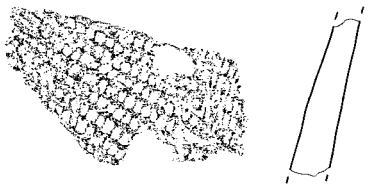


1（SKF08）

0 (S＝1／2) 5cm

SKF08
1　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱い　粘性やや弱い
地山粒含む（φ2～5mm20%）
地山ブロック含む（φ3～5cm10%）底部付近





1（SKF14）

0 (S＝1／2) 5cm

SKF14
1　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性やや強い
地山粒含む（φ2～5mm20%）　褐色土含む（5%）

0 (S＝1／40) 2m

第51図　ＳＫＦ08・14袋状土坑及び出土遺物

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ15袋状土坑（第52図、図版24）

《位　　置》　ＬＱ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸108㎝、短軸102㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から62㎝である。最大径部位の平面形は、長軸118㎝、短軸112㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 7°－Wである。

《埋　　土》　３層に分けた。すべての層に塊状地山土を多量に包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　北側の一部と南側を除き壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　不明である。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ20袋状土坑（第52図、図版25・30）

《位　　置》　ＬＰ49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸132㎝、短軸125㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から56㎝である。最大径部位の平面形は、長軸136㎝、短軸132㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 59°－Wである。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土である。

《　壁　》　全体的に壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　埋土から縄文土器破片２点、石器３点が出土した。１（ＲＰ01）は胴部下端の深鉢形土器破片である。摩滅が著しいが、無節L縄文を施文していると思われる。２（ＲＰ02）は、胴部にＲＬ縄文を施文する底部破片である。いずれも胎土に繊維が混入しており、前期前半の土器と考えられる。３～５は剥片であり、３は肉厚である。４・５には使用痕が見られる。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

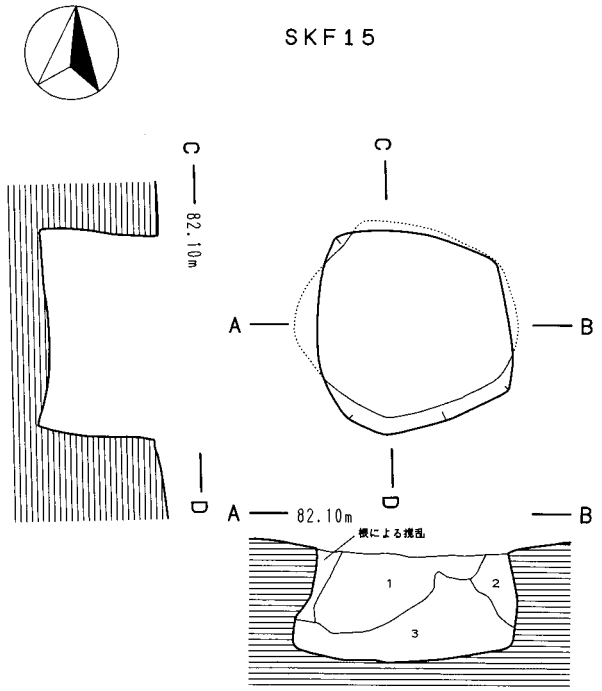
ＳＫＦ21袋状土坑（第53図、図版26・30）

《位　　置》　ＬＯ50区に位置する。

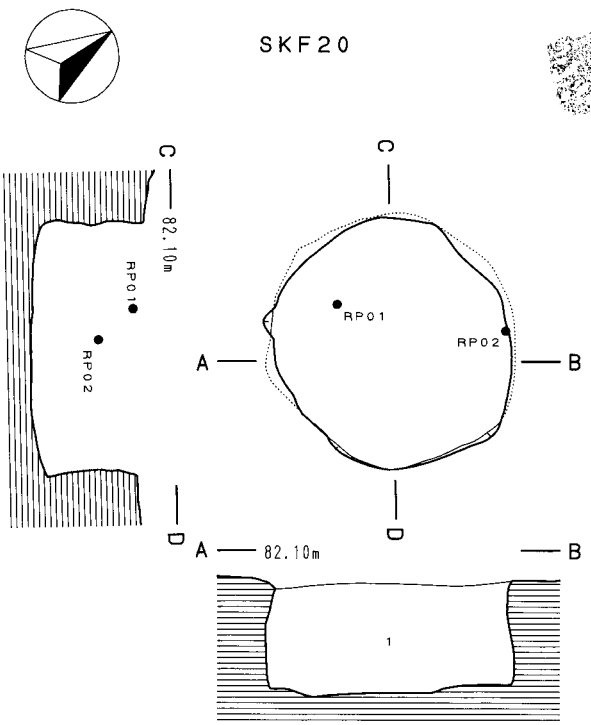
《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

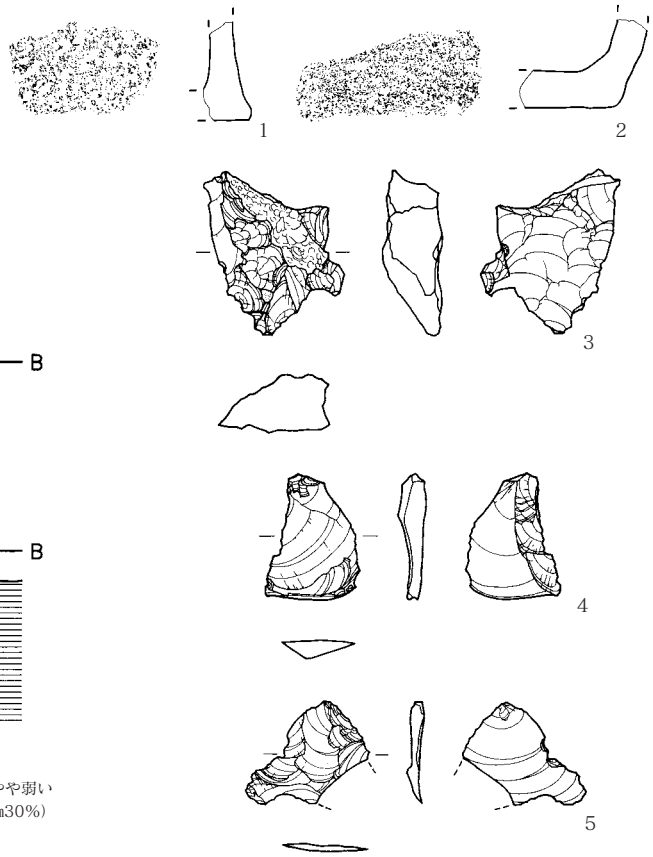
《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸80㎝、短軸72㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から26㎝である。最大径部位の平面形は、長軸92㎝、短軸81㎝の楕円形を呈する。主軸



SKF15
1　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや強い　粘性弱い　地山土含む（70%）
2　暗褐色土（10Y3/4）　しまりやや強い　粘性弱い
地山粒含む（10～20mm1%）
3　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性やや強い
地山土含む（30%）



SKF20
1　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性やや弱い
地山粒含む（φ2～5mm30%）



0　（S＝1／40）　2m

0　（S＝1／2）　5cm

第52図　ＳＫＦ15・20袋状土坑及び出土遺物

方向はN－ 81°－Wである。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　全体的に壁中位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　埋土から石器１点が出土した。わずかに使用痕が見られる剥片である。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ24袋状土坑（第53図、図版26・30）

《位　　置》　ＬＰ49区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸113㎝、短軸100㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から54㎝である。最大径部位の平面形は、長軸115㎝、短軸110㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 54°－Eである。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　全体的に壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　確認面から剥片１点が出土した。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ26袋状土坑（第53図、図版26）

《位　　置》　ＬＯ50区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸122㎝、短軸114㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から54㎝である。最大径部位の平面形は、長軸128㎝、短軸102㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 77°－Wである。

《埋　　土》　２層に分けた。いずれも塊状の地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　北側と南側の底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

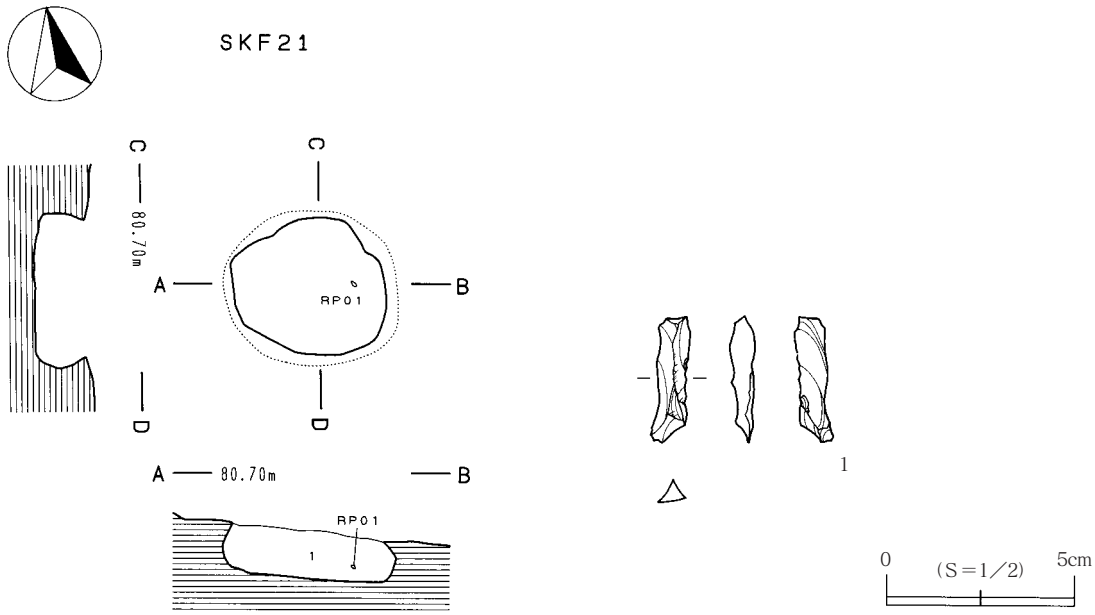
ＳＫＦ27袋状土坑（第54図、図版27）

《位　　置》　ＬＰ48・49区に位置する。

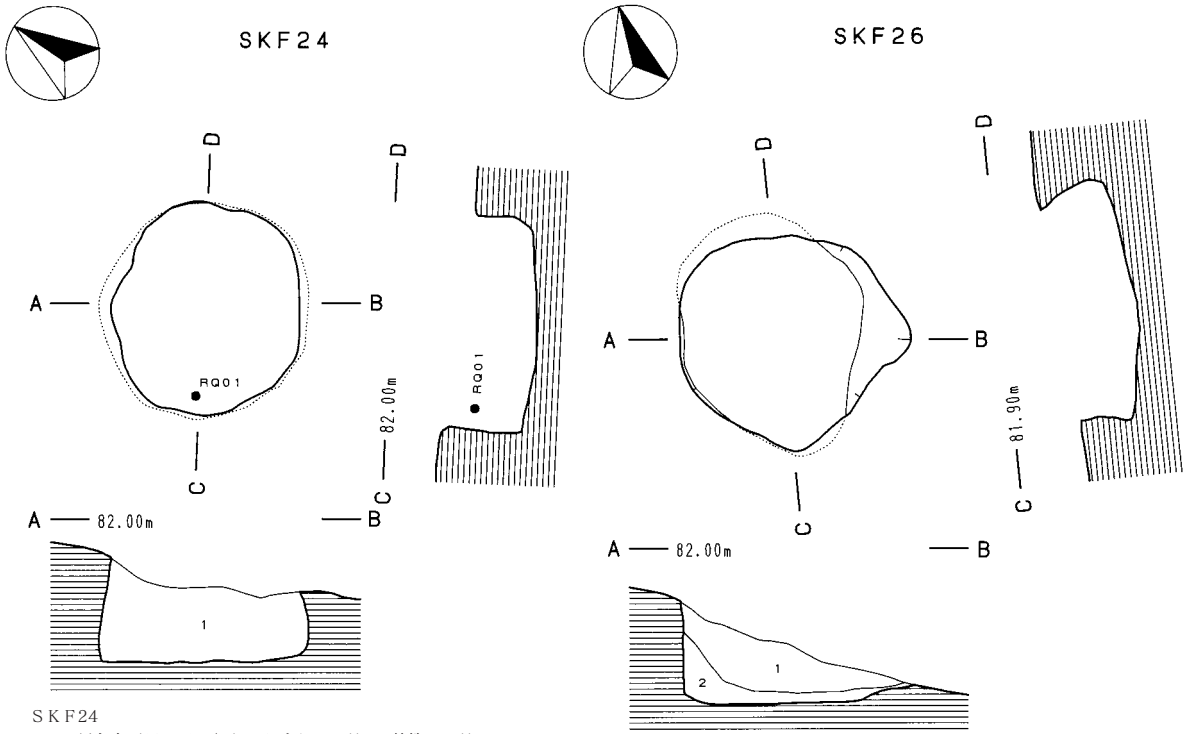
《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸96㎝、短軸87㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から40㎝である。最大径部位の平面形は、長軸98㎝、短軸94㎝の楕円形を呈する。主軸



ＳＫＦ21
　1　黒色土（10YR2/1）　しまり弱い　粘性やや強い
　　地山ブロック含む（φ1.5cm２%）



ＳＫＦ24
　1　黒色土（10YR1.7/1）　しまりやや弱い　粘性やや弱い
　　地山ブロック含む（φ２～５mm30%）

ＳＫＦ26
　1　黒色土（10YR1.7/1）　しまりやや強い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～10mm15%）
　　SP－A方向壁際にブロック流れ込む（10%）
　2　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性強い
　　地山粒含む（φ２～５mm20%）
　　SP－A方向壁際にブロック流れ込む（15%）

第53図　ＳＫＦ21・24・26袋状土坑及び出土遺物

方向はN－ 14°－Wである。

《埋　　土》　２層に分けた。第１層は遺構の掘削土であり、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　鍋底状を呈し、堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ31袋状土坑（第54図、図版27・30）

《位　　置》　ＬＰ49区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸84㎝、短軸73㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から37㎝である。最大径部位の平面形は、長軸87㎝、短軸76㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 13°－Eである。

《埋　　土》　４層に分けた。第３層は地山の埋め戻し土である。基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　西側と南側の一部が壁中位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　埋土から縄文土器破片２点が出土した。１（ＲＰ01）は繊維を混入する前期の円筒下層式の深鉢形土器破片である。ＬＲ縄文を施文している。２（ＲＰ02）はＬＲ縄文を施文する深鉢形土器破片である。胎土には繊維が混入する。内外面には煤状炭化物が付着し、外面には被熱痕が見られる。この土器は前期前半の土器と考えられる。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。なお、土坑底面で採取した試料の放射性炭素年代測定結果は2,700±35ＢＰ、２σ920－800（95.4%）を示し、本遺構の廃棄時期の根拠となりうる。

ＳＫＦ36袋状土坑（第54図、図版27）

《位　　置》　ＬＲ47区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側の縁辺部の地山面で確認した。

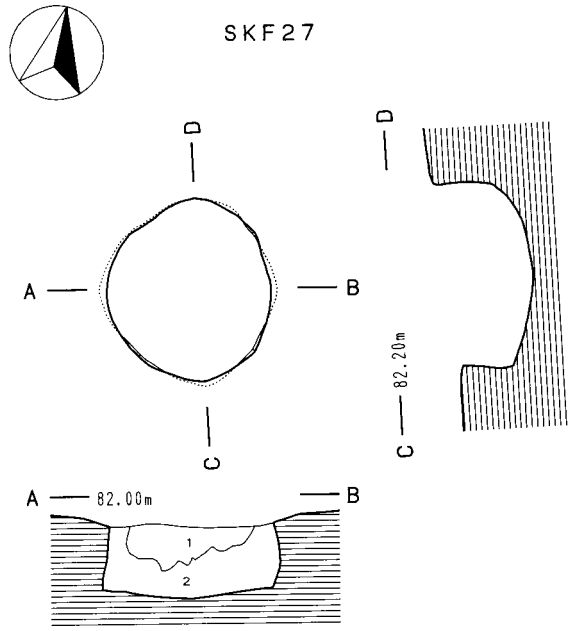
《重　　複》　なし。

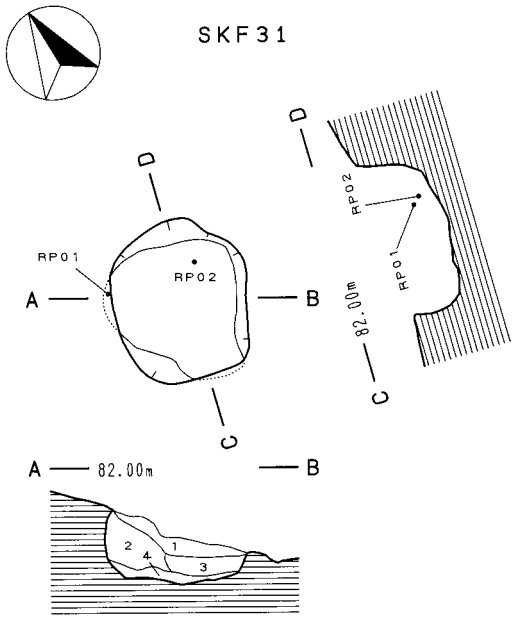
《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸82㎝、短軸77㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から58㎝である。最大径部位の平面形は、長軸106㎝、短軸102㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 4°－Eである。

《埋　　土》　５層に分けた。第２～５層は地山土を包含しており、基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　壁　》　南側の一部を除き底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。



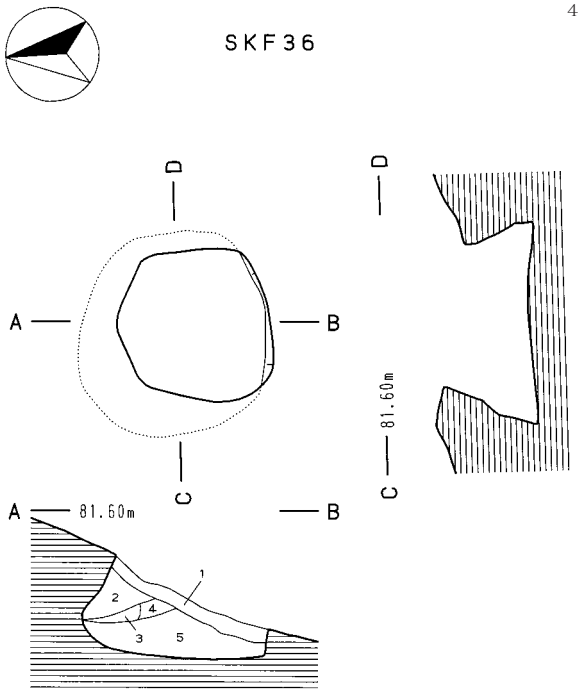


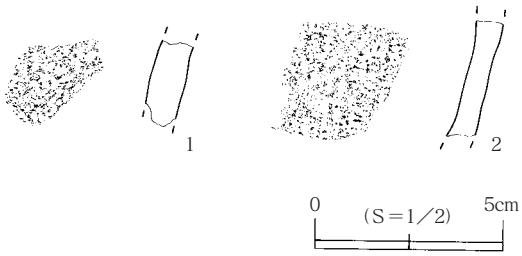
SKF27

1	明黄褐色土（10YR6/8）	しまりやや強い　粘性弱い　地山土
2	黒色土（10YR1.7/1）	しまりやや弱い　粘性やや強い 地山ブロック含む（φ３～７mm５%）

SKF31

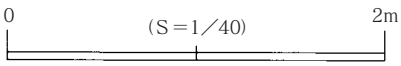
1	黒褐色土（10YR2/2）	しまりやや強い　粘性やや強い 地山粒含む（φ５～10mm３%）
2	黒褐色土（10YR2/2）	しまりやや弱い　粘性やや強い 地山粒含む（φ５～10mm５%）
3	黒褐色土（10YR2/3）	しまりやや強い　粘性やや強い 地山土含む（80%）
4	黒褐色土（10YR2/3）	しまりやや弱い　粘性やや強い 地山粒含む（φ５～10mm３%）





SKF36

1	暗褐色土（10YR3/3）	しまりやや強い　粘性弱い　地山粒少量含む 表土である
2	暗褐色土（10YR3/4）	しまりやや強い　粘性弱い　地山粒少量含む
3	褐色土（10YR4/6）	しまりやや強い　粘性やや弱い 暗褐色土含む（10%）
4	褐色土（10YR4/4）	しまりやや強い　粘性やや弱い 地山粒含む（φ２～５mm10%）
5	黒褐色土（10YR2/3）	しまり弱い　粘性やや弱い 地山粒含む（φ２～５mm15%）　地山土含む（20%）



第54図　ＳＫＦ27・31・36袋状土坑及び出土遺物

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ37袋状土坑（第55図、図版28）

《位　　置》　ＬＱ47区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側縁辺部の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸108㎝、短軸89㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から42㎝である。最大径部位の平面形は、長軸113㎝、短軸92㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 86°－Eである。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　全体的に底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ38袋状土坑（第55図、図版28）

《位　　置》　ＬＳ47区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側縁辺部の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸98㎝、残存する短軸70㎝の楕円形を呈し、深さは地山面から50㎝である。最大径部位の平面形は、長軸100㎝、残存する短軸92㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 80°－Eである。

《埋　　土》　４層に分けた。第２～４層は地山土を包含しており、基本的に連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　南側の一部を除き壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　構築場所、規模や形態から、ＳＫＦ39と同時期の縄文時代晩期の可能性が高い。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ39袋状土坑（第55図、図版28・30）

《位　　置》　ＬＰ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に南側の落ち際の地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、長軸92㎝、短軸89㎝のほぼ円形を呈し、深さは地山面から40㎝である。最大径部位の平面形は、長軸94㎝、短軸92㎝の楕円形を呈する。主軸方向はN－ 80°－Wである。

《埋　　土》　３層に分けた。底面に副葬品として深鉢形土器を埋納しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　西側の一部が壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　底面の西側壁際から、口縁を壁際に向けて横位に置かれていた鉢形土器が出土した。口縁部が若干内湾する器形を呈し、器面全体にＲＬ縄文を施文する。底部から胴部立ち上がりにかけてはナデによる調整が施される。内外面には厚く煤状炭化物が付着している。この土器は、晩期前半の土器と考えられる。なお、土器外面に付着した炭化物の放射性炭素年代測定結果では、2,780±35ＢＰ、２σ暦年代範囲ＢＣ1,010－830（95.4%）を示す。

《考　　察》　副葬品を埋納していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ42袋状土坑（第56図、図版29）

《位　　置》　ＬＲ48、ＬＳ48区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、軸82㎝の隅丸方形を呈し、深さは地山面から30㎝である。

《埋　　土》　単一層である。一括した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　南東側と北西側の一部が壁下位でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　なし。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

ＳＫＦ43袋状土坑（第56図、図版29・30）

《位　　置》　ＬＳ50区に位置する。

《確　　認》　精査中に地山面で確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　開口部の平面形は、径80㎝の円形を呈し、深さは地山面から48㎝である。

《埋　　土》　４層に分けた。第２・３層は塊状地山土を多量に包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

《　　壁　　》　東側の一部を除き底面付近でオーバーハングしている。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。

《出 土 遺 物》　確認面から石器１点が出土した。１は石匙の未完成品で、つまみ部分の一部を調整している。刃部は未調整である。

《考　　察》　人為的に埋め戻していることから、土坑墓と考えられる。

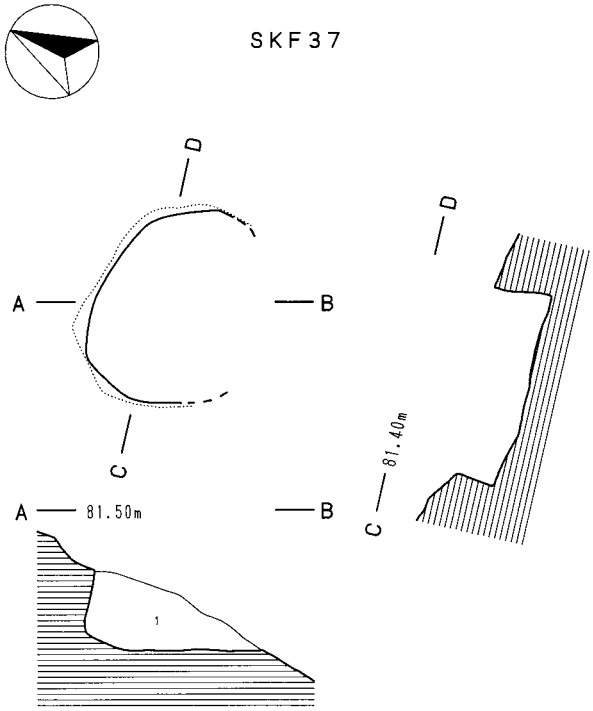
３　古代の遺構

（1）竪穴状遺構（第57・58図、図版20・29・30）

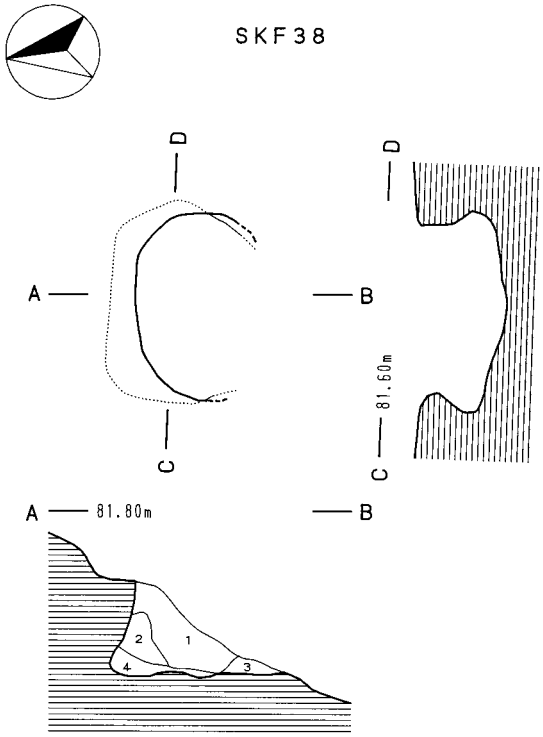
ＳＫＩ29竪穴状遺構

《位　　置》　ＬＯ48・49区に位置する。

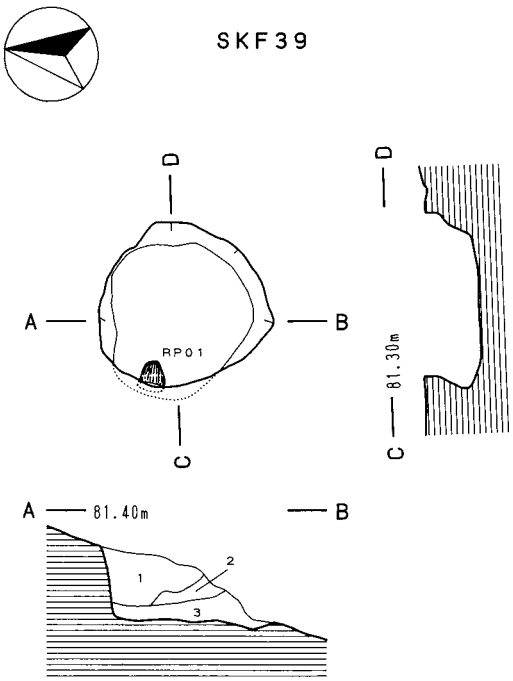
《確　　認》　精査中に東側斜面の地山面で確認した。



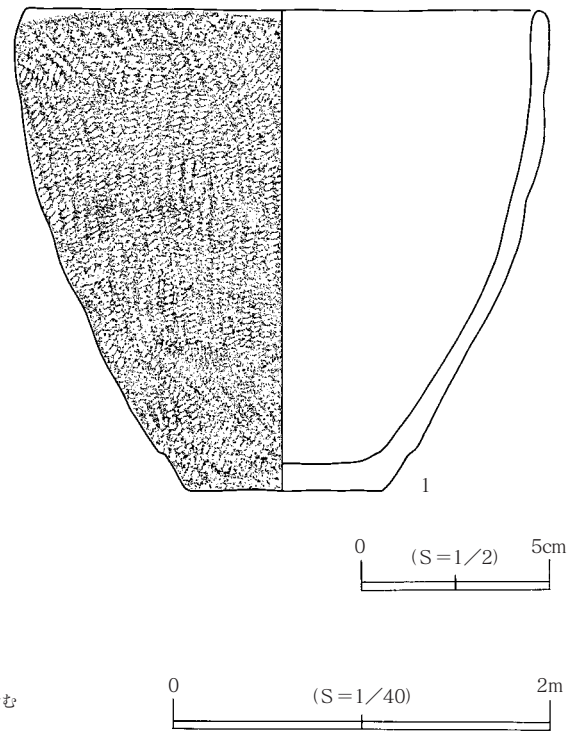
ＳＫＦ37
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性弱い
地山粒含む（φ２～５mm15%）
地山ブロック含む（φ３～５cm20%）
北壁側に集中



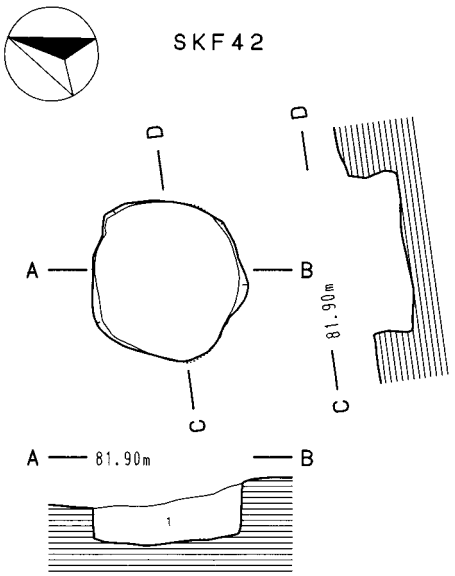
ＳＫＦ38
1　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR3/3）
しまりやや強い　粘性弱い　地山粒含む（φ２～10mm20%）
2　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや強い　粘性やや弱い
地山土含む（30%）
3　褐色土（10YR4/4）　しまりやや強い　粘性やや弱い
地山粒少量含む
4　暗褐色土　褐色土（10YR3/4～10YR4/4）
しまりやや弱い　粘性弱い　黒褐色土含む（15%）２層との境



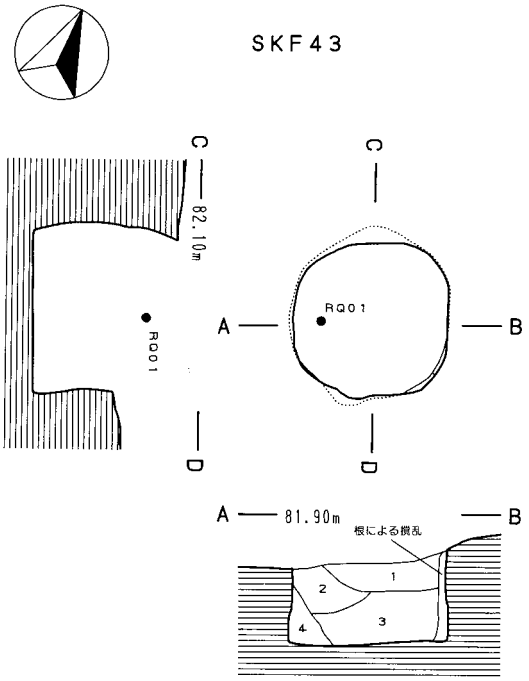
ＳＫＦ39
1　黒褐色土（10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性やや弱い
地山ブロック含む（φ３～４cm２５%）
2　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性やや弱い
地山粒含む（φ２～５mm５～10%）
3　黒褐色土　暗褐色土（10YR2/3～10YR3/3）
しまりやや弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む



第55図　ＳＫＦ37・38・39袋状土坑及び出土遺物

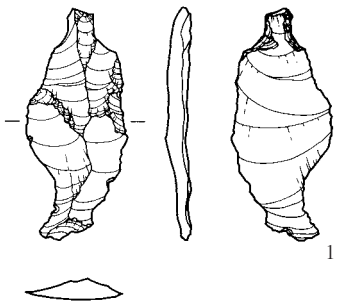


SKF42
1　黒色土（10YR2/1）　しまり弱い　粘性やや強い　地山粒少量含む
　　地山ブロック含む（φ2㎝）



SKF43
1　黒色土（10YR2/1）　しまり弱い　粘性やや弱い　地山粒少量含む
2　黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強い　粘性強い
　　地山粒含む（φ2～5㎜15%）
3　暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強い　粘性やや強い
　　地山粒含む（φ2～10㎜20%）
4　黒褐色土（10YR2/3）しまりやや強い　粘性やや弱い
　　地山粒少量含む

0　（S＝1／40）　2m



0　（S＝1／2）　5cm

第56図　ＳＫＦ42・43袋状土坑及び出土遺物

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　平面形は、長軸3.44m、短軸3.42mの方形を呈する。建物方位は、N－ 10°－Eを示す。南壁西側には、緩やかに傾斜する、長さ120㎝、幅96㎝の入口が取り付く。入口から床面には高さ20㎝の階段が１段構築されている。

《埋　　土》　23層に分けた。壁際から流れ込むように堆積しており、自然堆積土と考えられる。

《　壁　》　西側壁高は地山面から108㎝、東側壁高は地山面から56㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

《柱　　穴》　検出されなかった。

《底　　面》　平坦で堅くしまっている。床面には炭化物が広がっており、敷物が炭化したものと考えられる。

《出 土 遺 物》　埋土から同一個体の縄文土器破片７点と石器４点が出土した。そのうち、土器破片３点と石器２点を図示した。1～３はＬＲＬ複節縄文を施文したと考えられる深鉢形土器破片である。胎土に繊維を混入し、３の外面には被熱痕が見られる。これらの土器は前期の土器である。４は縦長剥片を素材としたスクレイパーである。縁辺に片面調整により刃部を作出している。５は表面に小さい剥離痕が残る剥片である。

《考　　察》　底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は950±30ＢＰ、２σＡＤ1,010－1,170（95.4%）を示し、本遺構は古代末に位置づけられる。

（2）土坑

ＳＫ44土坑（第58図）

《位　　置》　ＬM50・51区に位置する。

《確　　認》　東側の沢の断面精査中に確認した。

《重　　複》　なし。

《規模と平面形》　東側の一部が調査区外に延びており、平面形は、長軸220㎝、残存する短軸116㎝で楕円形を呈すると考えられる。十和田ａ火山灰層の直下から掘り込んでいる。深さは掘込面から80㎝である。主軸方向はN－ 3°－Eである。

《埋　　土》　３層に分けた。第２・３層は塊状の地山土を包含しており、連続した人為的な埋め戻し土と考えられる。

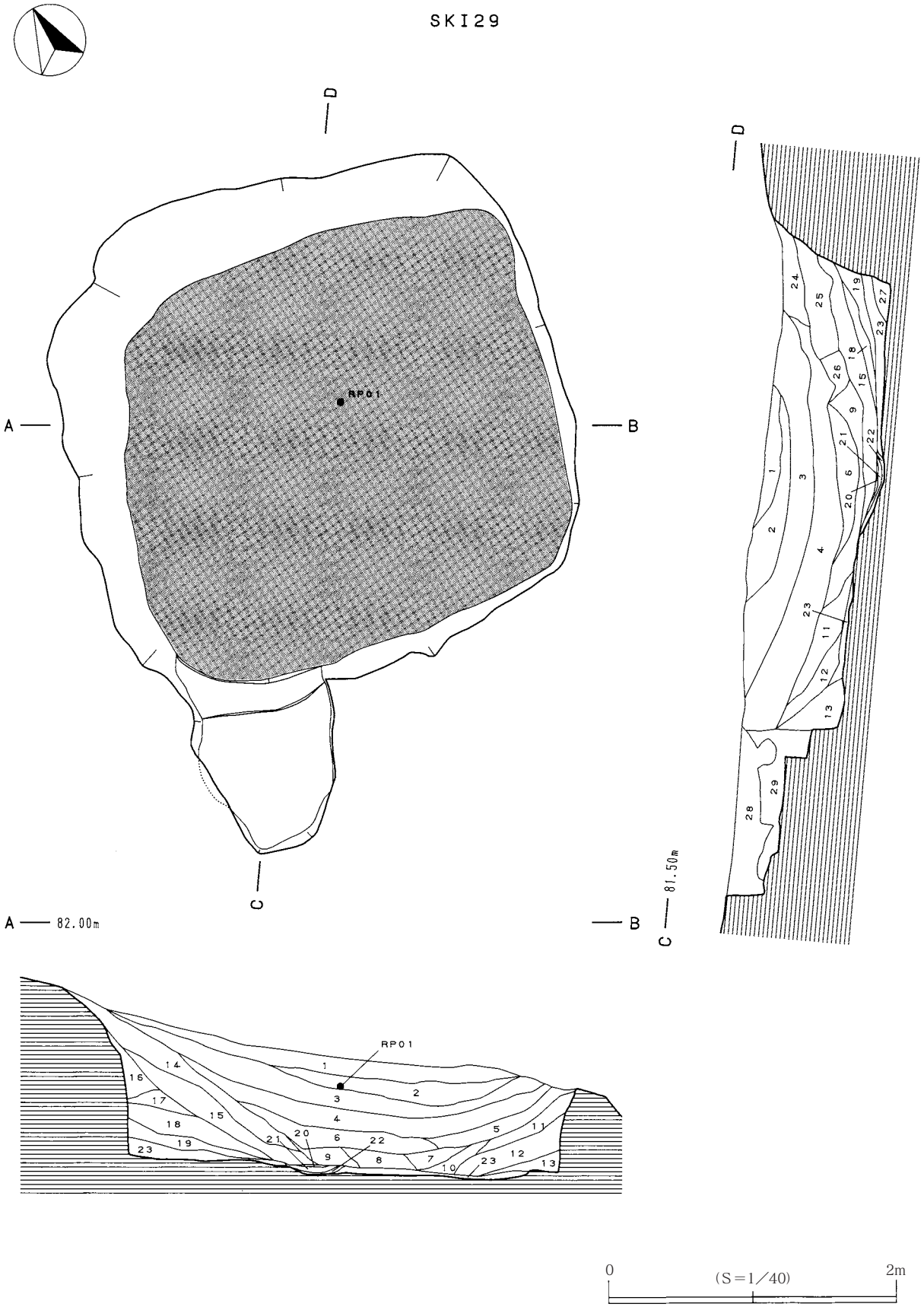
《　壁　》　やや緩やかに立ち上がっている。

《底　　面》　鍋底状を呈する。

《出 土 遺 物》　なし。

《時　　期》　土坑底面から採取した試料の放射性炭素年代測定結果は1,160±35ＢＰ、２σ暦年代範囲はＡＤ770－980（95.4%）を示すが、十和田ａ火山灰直下から掘り込んでいることから915年以前と考えられる。

《考　　察》　同時期の遺構が検出されておらず、性格等は不明である。



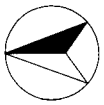
第57図　ＳＫＩ29竪穴状遺構

ＳＫＩ29 A−B

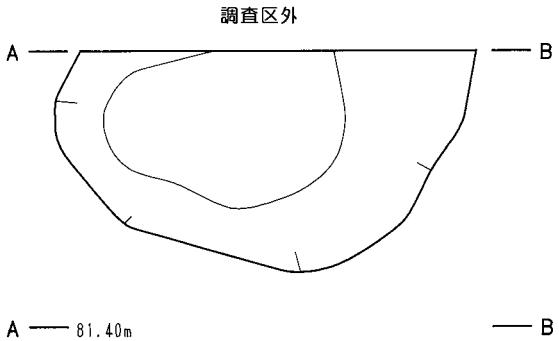
1　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
2　黒色土（10YR1.7/1～10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性強い　地山粒少量含む
3　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　１層に類似
4　黒色土（10YR1.7/1～10YR2/1）　しまりやや弱い　粘性強い　２層に類似
5　黒褐色土（10YR2/2）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
6　黒色土（10YR2/1）　しまり普通　粘性強い　地山粒含む（φ２～10mm５%）下辺に沿って分布
7　黒色土（10YR1.7/1）　しまり弱い　粘性強い　地山粒少量含む
8　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）　しまり普通　粘性強い　地山粒少量含む
9　黒色土（10YR1.7/1～10YR2/1）　しまり弱い　粘性強い　地山土含む（40%）
10　黒色土（10YR1.7/1）　しまり弱い　粘性強い　地山粒含む（φ２～５mm15%）
11　黒褐色土（10YR2/2～10YR2/3）　しまりやや弱い　粘性強い　地山粒含む（φ２～５mm10%）
12　黒褐色土（10YR2/3）　しまり普通　粘性強い　地山粒含む（φ２～５mm10%）地山土含む（30%）
13　黒褐色土（10YR2/3）　しまり弱い　粘性強い　地山粒少量含む
14　黒褐色土（10YR2/2）　しまり弱い　粘性強い　上辺に黒色土含む（15%）下辺に沿うように地山粒含む（φ２～10mm15～20%）
15　黄褐色土（10YR5/6）　しまり普通　粘性やや強い　地山粒含む（φ２～10mm15%）黒褐色土含む（20%）
16　黄褐色土（10YR5/6）　しまり普通　粘性やや強い　ベース土と黒色土がマーブル状に入る（２：１）
17　明黄褐色土（10YR6/6）しまり普通　粘性やや弱い
18　黄褐色土（10YR5/8）　しまり普通　粘性普通　黒色土含む（10%）
19　黄褐色土（10YR5/6～10YR5/8）　しまり強い　粘性やや弱い
20　褐色土（10YR4/4）　しまり弱い　粘性弱い　地山粒含む（φ２～３mm80%）
21　黒色土（10YR2/1）　しまり強い　粘性普通　地山粒少量含む
22　暗褐色土（10YR3/4）　しまりやや弱い　粘性やや弱い　地山ブロック含む（φ５mm60%）
23　黒色土（10YR2/1）　しまり強い　粘性普通　地山粒少量含む

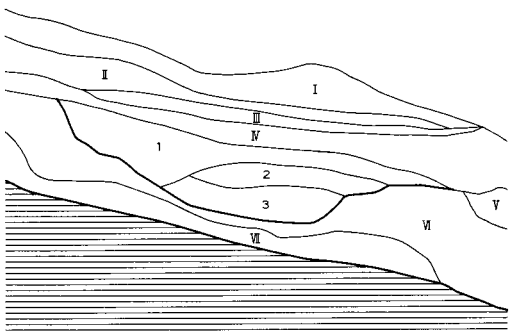
ＳＫＩ29 C−D

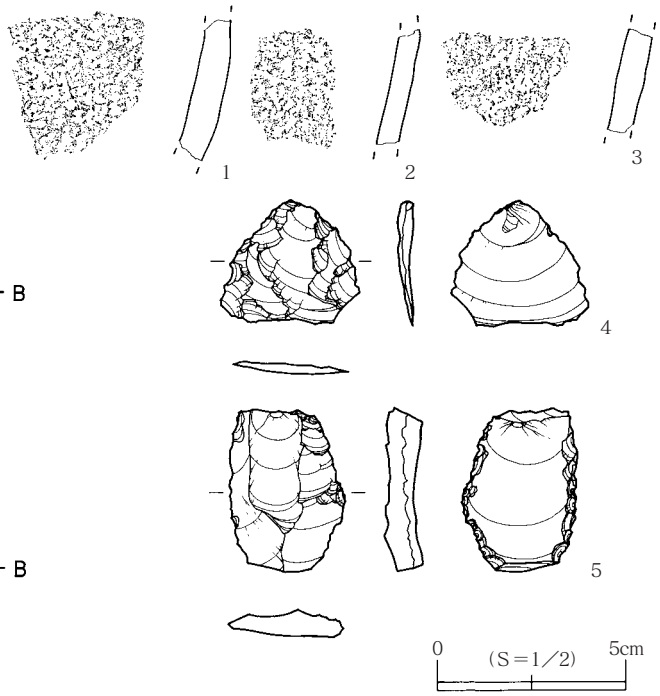
1　１層に対応　12　12層に対応
2　２層に対応　13　13層に対応
3　３層に対応　14　14層に対応
4　４層に対応　15　15層に対応
5　５層に対応　16　16層に対応
6　６層に対応　17　17層に対応
7　７層に対応　18　18層に対応
8　８層に対応　19　19層に対応
9　９層に対応　20　20層に対応
10　10層に対応　21　21層に対応
11　11層に対応　22　22層に対応
23　23層に対応
24　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）　しまり弱い　粘性弱い　地山粒少量含む
25　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや強い　粘性やや弱い　地山粒含む（φ２～５mm20%）地山ブロック含む（φ３cm15%）下辺
26　黒色土（10YR2/1）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山粒含む（φ２～５mm15%）
27　黄褐色土（10YR5/6）　しまり弱い　粘性弱い　黒褐色土含む（10%）
28　黄褐色土（10YR5/6）　しまり弱い　粘性やや弱い　黒色土系と地山ブロック（φ３～５cm）マーブル状に入り混じる（１：１）
29　黒色土　黒褐色土（10YR2/1～10YR2/2）　しまりやや弱い　粘性普通　地山粒含む（φ５～10mm20%）



ＳＫ44

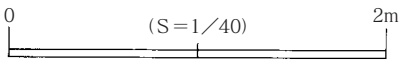






ＳＫ44

1　黒褐色土（10YR2/2）　しまりやや強い　粘性やや強い　地山粒少量含む　パミスあり
2　黒褐色土（10YR2/3）　しまり強い　粘性やや弱い　パミス分布（20%）
3　黒色土（10YR2/1）　しまり強い　粘性やや弱い　パミス分布（φ３～５cm15%）



第58図　ＳＫＩ29竪穴状遺構出土遺物、ＳＫ44土坑

第３節　遺構外出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、石器、近世陶磁器、銭貨であるが、いずれも少量である。土器は早期・前期・後期・晩期の時期ごとに分類した。また、石器は器種ごとに分類した。

１　土器

【第Ⅰ群土器】早期の土器

遺構外からは出土しなかった。

【第Ⅱ群土器】前期の土器（第59図、図版31）

出土した土器はすべて深鉢形土器破片であり、胎土に繊維を混入している。１は口縁部破片であり、口端部の断面形が先細りを呈する。口縁部には２条の平行な押引き沈線文を配する。また、胴部にはＲＬ縄文を施文している。この土器は前葉の早稲田６類に比定される。２・５・６・７はＯ段多条ＲＬ縄文を施文している。６の外面には被熱痕が見られる。３は口縁部が強く外反する土器である。器面全体にＲＬ縄文を施文する。外反する外面には被熱痕によりハジケが見られ、内面には厚く煤状炭化物が付着する。４も口縁部が外反する土器である。器面全体にＲＬ縄文を施文する。これらの土器は、円筒下層ａ式土器以前の前半の土器と考えられる。８は横位不整撚糸文を施文している。９はＲＬ縄文を施文する。胎土・焼成は類似する。これらの土器は、中葉の円筒下層ａ式土器と考えられる。

【第Ⅲ群土器】後期の土器（第59図、図版31）

深鉢形土器小破片である。わずかに弧状沈線文が見られる。この土器は、前葉の十腰内１式土器であろう。

【第Ⅳ群土器】晩期の土器（第59図、図版31）

13は、器面全体にＲＬ縄文を施文する鉢形土器である。内外面には煤状炭化物が付着する。14は、口縁部が強く内湾する鉢形土器である。口縁部に３条の平行沈線を配する。胴部にはＬＲ縄文を施文している。この土器は中葉の大洞C_1式土器と考えられる。

２　石器

石匙（第59図、図版31）

横型石匙が１点出土した。片面調整により縁辺全周に刃部を作出している。つまみ部分の抉れの調整は雑である。先端部分が折損している。

石篦（第60図、図版31）

石篦は３点出土した。16は頭部が尖り、直刃を呈する。片面調整により刃部を作出しており、表面のみに調整している。17は頭部に幅があり、直刃を呈する。片面調整により刃部を作出しており、両面に調整痕が見られる。18は両端が折損しているが、形態から石篦と考えられる。

スクレイパー（第60図、図版31）

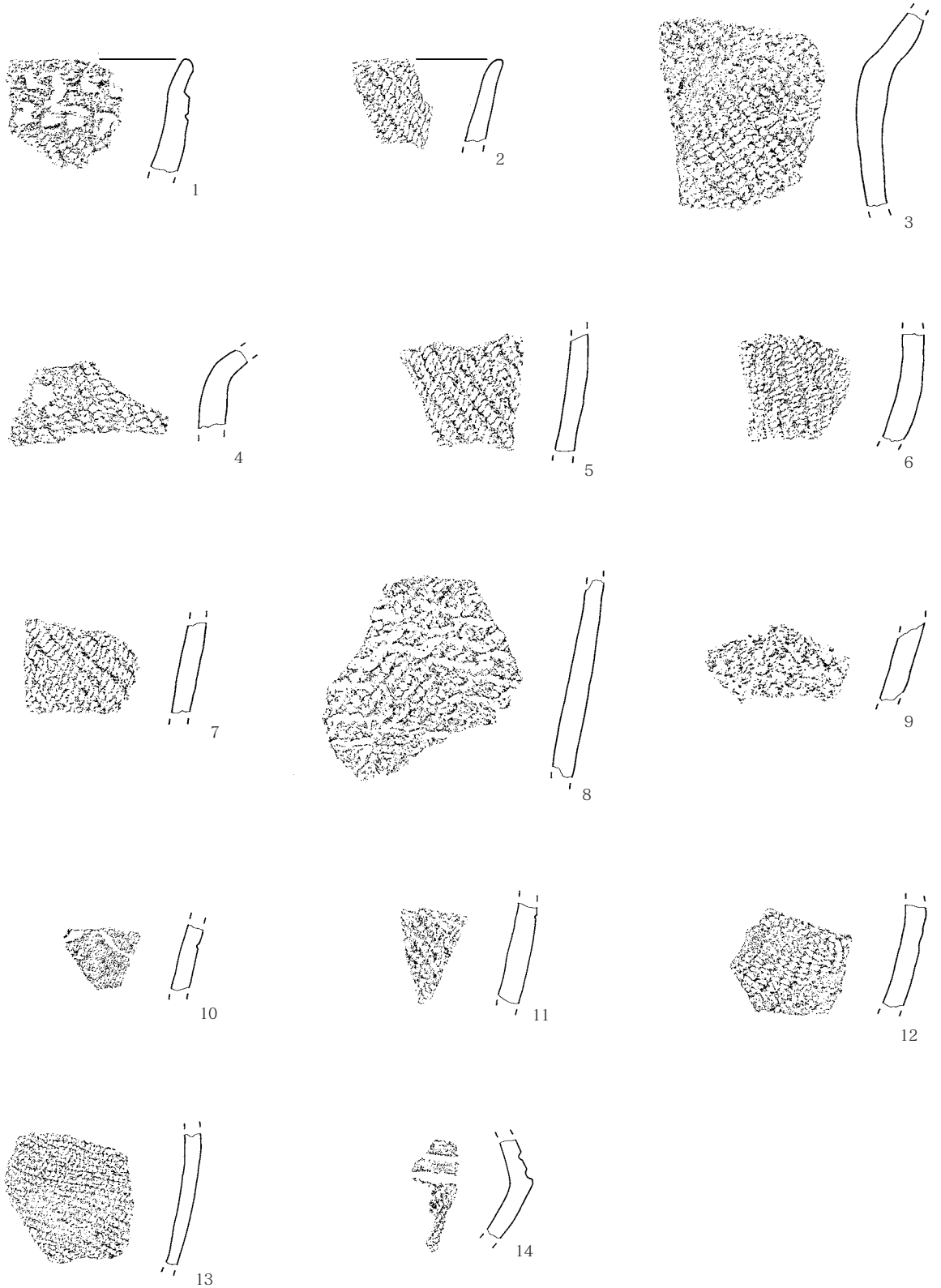
スクレイパーは６点出土した。基本的に片面調整により刃部を作出している。21・24は縦長剥片を素材とし、21はＬ字型を呈する。どちらも全縁に調整を施している。

３　陶磁器

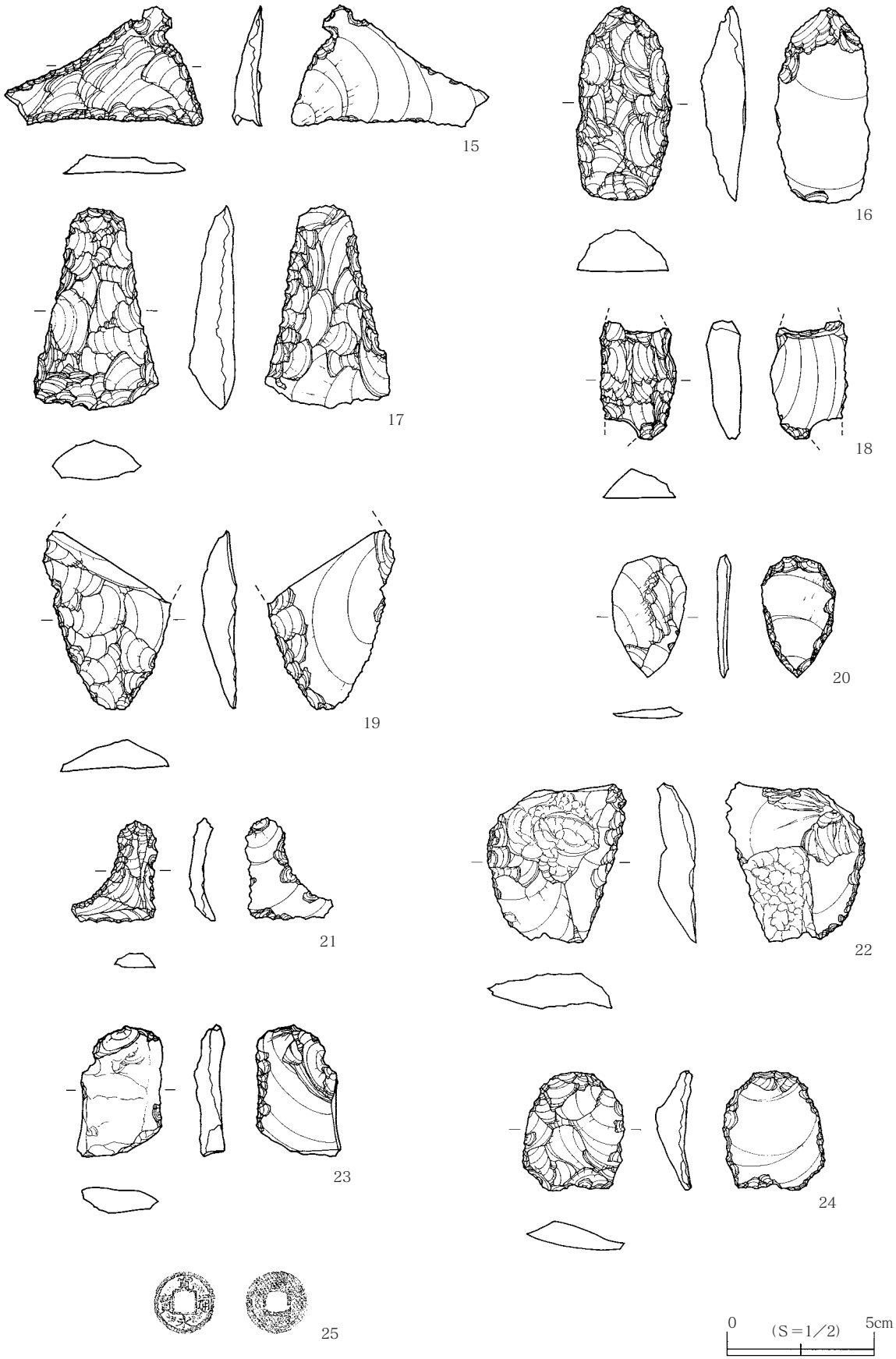
16世紀の瀬戸・美濃産の小皿破片１点と18世紀後半の肥前産の皿破片１点、在地の皿破片１点が出土した。いずれも文様を描かない小破片であり、図示しなかった。

４　銭貨（第60図）

寛永通寶１点が出土した。1697～1747年、1767～1781年鋳造の３期の新寛永である。(註2)



第59図　遺構外出土遺物（１）



第60図　遺構外出土遺物（２）

第６表　縄文土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器　形	部　位	口唇部・口縁部	頸　部	肩　部・胴　部	底　部	分　　類	備　　考
41－1	30－1	ＳＫ28	深鉢	底部					Ⅱ群	外被熱痕　繊維含む
46－1	30－12	ＳＫＦ07	深鉢	胴部					Ⅱ群	繊維含む
40－1	30－2	ＳＫＦ11	深鉢	口縁部	口唇面取り　波状口縁 ＬＲ縄文				Ⅱ群　前葉	外煤状炭化物　繊維含む 2～5と同一個体
40－2	30－3	ＳＫＦ11	深鉢	口縁部	口唇面取り　波状口縁 ＬＲ縄文				Ⅱ群　前葉	外煤状炭化物　繊維含む 1･3～5と同一個体
40－3	30－4	ＳＫＦ11	深鉢	口縁部	口唇面取り　波状口縁 ＬＲ縄文				Ⅱ群　前葉	外煤状炭化物　繊維含む 1･2･4･5と同一個体
40－4	30－5	ＳＫＦ11	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅱ群　前葉	外煤状炭化物　繊維含む １～3･5と同一個体
40－5	30－6	ＳＫＦ11	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅱ群　前葉	外煤状炭化物　繊維含む 1～4と同一個体
40－6	30－7	ＳＫＦ11	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅱ群　前葉	内煤状炭化物　繊維含む 7･8と同一個体
40－7	30－8	ＳＫＦ11	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅱ群　前葉	内外煤状炭化物　繊維含む 6･8と同一個体
40－8	30－9	ＳＫＦ11	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅱ群　前葉	内外煤状炭化物　繊維含む 6･7と同一個体
41－1	30－10	ＳＫＦ13	深鉢	口～胴部	口唇先細り　平行沈線４ 弧状沈線文		平行沈線２　弧状沈線文 羽状縄文　内ナデ		Ⅰ群　大畑Ｇ式	内外煤状炭化物 繊維多量に含む 補修孔１　未完通の穿孔２
41－2	30－11	ＳＫＦ13	深鉢	胴部			無文		Ⅱ群　前葉	繊維含む
47－1	30－14	ＳＫＦ16	深鉢	胴部			ＲＬＲ複節縄文		Ⅱ群　前葉	内外煤状炭化物　外被熱痕 繊維含む
47－2	30－13	ＳＫＦ16	鉢	口縁部	口唇刻み目　平行沈線２		ＲＬ縄文		Ⅴ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物　外被熱痕
47－3	30－15	ＳＫＦ16	鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅴ群　大洞Ｃ１	内外煤状炭化物　外被熱痕
48－1	30－16	ＳＫＦ19	深鉢	胴部					Ⅱ群　円筒下層	内煤状炭化物　繊維含む
51－1	30－17	ＳＫＦ08	深鉢	胴部			弧状沈線文　羽状縄文		Ⅰ群　末葉	繊維含む ＳＫＦ13と同一個体
51－1	30－18	ＳＫＦ14	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅱ群	内外煤状炭化物　外被熱痕 繊維含む
52－1	30－19	ＳＫＦ20	深鉢	胴部			無節Ｌ縄文		Ⅱ群	外被熱痕　繊維含む
52－2	30－20	ＳＫＦ20		底部			ＲＬ縄文		Ⅱ群	外被熱痕　繊維含む
54－1	30－21	ＳＫＦ31	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅱ群　円筒下層	内外煤状炭化物　外被熱痕 繊維含む
54－2	30－22	ＳＫＦ31	深鉢	胴部			ＬＲ縄文		Ⅱ群	内外煤状炭化物　外被熱痕 繊維含む
55－1	30－26	ＳＫＦ39	鉢	完形			ＲＬ縄文　胴部下端ナデ		Ⅴ群　前葉	内外煤状炭化物
58－1	30－23	ＳＫＩ29	深鉢	胴部			ＬＲＬ複節縄文		Ⅱ群	繊維含む　2･3と同一個体
58－2	30－24	ＳＫＩ29	深鉢	胴部			ＬＲＬ複節縄文		Ⅱ群	外被熱痕　繊維含む 1･3と同一個体
58－3	30－25	ＳＫＩ29	深鉢	胴部			ＬＲＬ複節縄文		Ⅱ群	外被熱痕　繊維含む 1･2と同一個体
59－1	31－35	ＬＲ50	深鉢	口縁部	口唇先細り 押引き平行沈線２ ＲＬ縄文				Ⅱ群　早稲田６類	内外煤状炭化物　繊維含む
59－2	31－36	ＬＳ50	深鉢	口縁部	Ｏ段多条ＲＬ縄文				Ⅱ群	繊維含む
59－3	31－37	ＬＴ50	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅱ群	内煤状炭化物　外被熱痕 繊維含む
59－4	31－38	ＬＲ50	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅱ群	内外煤状炭化物　繊維含む
59－5	31－39	ＬＳ50	深鉢	胴部			Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅱ群	繊維含む
59－6	31－40	ＬＴ50	深鉢	胴部			Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅱ群	外被熱痕　繊維含む
59－7	31－41	ＬＳ50	深鉢	胴部			Ｏ段多条ＲＬ縄文		Ⅱ群	内煤状炭化物　外被熱痕 繊維含む
59－8	31－42	排土	深鉢	胴部			横位不整撚糸文		Ⅱ群　円筒下層ａ	内煤状炭化物　繊維含む
59－9	31－43	ＬＲ51	深鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅱ群　円筒下層ａ	内外煤状炭化物　外被熱痕 繊維含む
59－10	31－44	ＬＱ48	深鉢	胴部			弧状沈線文		Ⅳ群　十腰内１	内外煤状炭化物
59－11	31－45	ＬＱ48	深鉢	胴部			Ｏ段多条ＬＲ縄文		Ⅴ群	繊維含む
59－12	31－46	ＬＱ48	深鉢	胴部			Ｏ段多条ＬＲ縄文		Ⅴ群	内外煤状炭化物
59－13	31－47	ＬＳ48	鉢	胴部			ＲＬ縄文		Ⅴ群	内外煤状炭化物
59－14	31－48	ＬＴ49	鉢	胴部			平行沈線３　ＬＲ縄文 内ナデ		Ⅴ群	

第７表　石器観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器　種	石　質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量（g）
48－１	30－27	ＳＫＦ17	剥片	頁岩	42.6	24.5	5.6	4.8
52－３	30－28	ＳＫＦ20	剥片	頁岩	44	31.2	16	19.2
52－４	30－29	ＳＫＦ20	剥片	頁岩	33	23.8	6.2	3.8
52－５	30－30	ＳＫＦ20	剥片	頁岩	33	20	2.1	1.6
53－１	30－31	ＳＫＦ21	剥片	頁岩	32.2	10.5	6.5	1.6
56－１	30－32	ＳＫＦ43	石匙	頁岩	61	26.4	5.5	6.6
58－４	30－33	ＳＫＩ29	スクレイパー	頁岩	43.5	30.7	8.5	12.5
58－５	30－34	ＳＫＩ29	剥片	頁岩	32.4	35.8	3	3.4
60－15	31－49	ＬＲ50	石匙	頁岩	40.6	66.6	6	14
60－16	31－50	ＬＴ50	石篦	頁岩	66	31	14.5	28.8
60－17	31－51	ＬＳ50	石篦	頁岩	69	42	15.5	36.4
60－18	31－52	ＬＰ49	石篦	頁岩	40	25.4	11.4	12.8
60－19	31－53	ＬＳ49	スクレイパー	頁岩	61.6	39.6	9.5	20.6
60－20	31－54	ＬＲ50	スクレイパー	頁岩	42	25	4.6	4.6
60－21	31－55	ＬＳ50	スクレイパー	頁岩	35	28.8	5	4.2
60－22	31－56	ＬＳ50	スクレイパー	頁岩	54.5	45.5	11.5	28.6
60－23	31－57	ＬＱ50	スクレイパー	頁岩	44.5	27.5	9	12.6
60－24	31－58	ＬＳ50	スクレイパー	頁岩	40.5	33.6	8.7	11.8

第３章　自然科学的分析

第１節　出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１　結果

検出された分類群は、落葉広葉樹のクリ･コナラ節･コナラ亜属･カツラ･トネリコ属と、広葉樹の細い枝材、タケ亜科の根茎と思われる部位、ヨシ属に類似する単子葉類の稈であった。

同定結果の一覧を第８表にまとめ、以下に同定根拠として材組織の特徴を記載し、組織写真を提示した。

樹種記載

①コナラ属コナラ亜属コナラ節　Quercus subgen. Quercus sect. Prinus　ブナ科

図版32　１ａ－１ｃ（試料番号４　ＳＫＦ13）

年輪の始めに非常に大型の管孔が１層配列し、晩材は薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射状に分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースが発達している。放射組織は単列のものと細胞幅が非常に広く細胞高も高い広放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は乾燥すると割れや狂いが出やすいが、堅く丈夫な有用材である。

②コナラ属コナラ亜属（コナラ節？）　Quercus subgen. Quercus（sect. Prinus ?）　ブナ科

図版32　２ａ－２ｃ（試料番号６　ＳＫＦ31）

前述のコナラ節に類似するが、晩材部の管孔はやや大きく分布密度が多い。晩材の小型管孔の孔口は、角形から多角形で、接合しているものもある。典型的なコナラ節の材と比べ、孔圏外の小型管孔は大きくて均一に分布していることから、コナラ節の節部や根張り部分かまたは被熱により発砲している可能性がある。クヌギ節の可能性もなくはないので、コナラ亜属の同定レベルに留めた。

③クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版32　３ａ－３ｃ(試料番号５　ＳＫＦ25)

図版33　４ａ－４ｃ（試料番号３　ＳＫＦ04）

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々またはやや急に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

試料番号３は年輪界が不明瞭で環孔性も不明瞭で、放射組織は２細胞幅のものが多く見られることから、クリの節部または根材の可能性が高い。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性にすぐれている。

④カツラ　Cercidiphyllum japonicum Sieb.et Zucc.　カツラ科

図版33　５ａ－５ｃ（試料番号２　ＳＫＦ04）

小型で多角形の管孔が年輪内に密在し年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状や水平に開いた口孔の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔、内腔に隔壁状のチロースが発達している。放射組織は異性、１～２細胞幅、多列部の上下端に方形・直立細胞からなる単列部が１～３細胞層ある。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、

割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

⑤トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科

図版33　６ａ－６ｃ（試料番号６　ＳＫＦ31）

中型の管孔が１～２層配列し、その後は単独または２個が複合した小型で厚壁の管孔がまばらに分布する環孔材。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、１～２細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ･ヤチダモ･トネリコ･アオダモなど約９種がある。材は重硬で弾力性があり折れ難く、有用材である。

⑥広葉樹　broad-leaved tree

図版34　７ａ－７ｂ（試料番号７　ＳＫＩ29）

単子葉類の稈に混じり検出された直径５mmほどの材であり、これより細い材も見られた。

複数の小型の管孔が放射方向に複合して分布している。中心部の髄は円形である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、放射組織は異性で1～2細胞幅、細胞高は高い。放射組織が同性の種類でも、成長当初の１～２年輪部分では異性となり細胞高が高くなる傾向がある。試料は１年輪しかない当年枝であるため、種の特徴が発現されていない可能性もあり、種類は不明である。

⑦タケ亜科　Gramineae subfam. Bambusoideae　イネ科

図版34　８ａ（試料番号１　ＳＫ44）

小塊の炭化物であり、本来の形状は不明である。維管束は多数が散在する不整中心柱で、維管束の周りは厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が帽子状に発達している。維管束は畝っており、配列も整然としていないことから、根茎部と思われる。

⑧単子葉類（ヨシ属類似）　Monocotyledonus (cf. Phragmites)　イネ科

図版34　９ａ（試料番号７　ＳＫＩ29）

稈は草本性で軟らかい。稈の中心部には皮層があるようで、皮層に囲まれた中空部があったと思われる。維管束が散在する不整中心柱で、タケ亜科（タケ・ササ類）に比べ維管束の分布密度は少なく、維管束鞘も薄い。稈の外周部の5細胞層は肥厚はしていなく、その内側に厚壁の薄い細胞層がリング状にあり小さな維管束が円周状に点在している。このような稈の外周部の組織は、ススキ属とは異なりヨシ属の稈と類似する。しかし、試料の組織は良好では無く、単子葉類の種類数は多く充分な組織学的情報も少ないので、ヨシ属とは特定できない。

ヨシ属は全国の川岸や湿地に生育する大型の多年草で、北海道以南の湿地に群生するヨシ、本州以南の川岸や砂質地に生育するツルヨシ、本州以南の水湿地生育するセイタカヨシの3種がある。屋根材や壁材、床材など様々な利用が知られている。

第８表 出土炭化材樹種同定結果

試料番号	試料内容	樹　種	備　考	年代測定番号
1	SK44・2層	タケ亜科(根茎)	破片	PLD-3132
2	SKF04 底部	カツラ	小枝または樹芯部	PLD-3133
3	SKF06	クリ(節部または根材)	破片	PLD-3134
4	SKF13 底面	コナラ節	破片	PLD-3135
5	SKF25 底部	クリ	破片	PLD-3136
6	SKF31 底面	トネリコ属	小枝または樹芯部	PLD-3137
		コナラ亜属(コナラ節?)	破片	
7	SKI29 床面	単子葉類(ヨシ属類似)	直径1.5～7mmの稈	PLD-3138
		広葉樹	直径2mmの細い枝	

第２節　放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

１　はじめに

谷地中遺跡（２ＹＴＮ）より検出された炭化物の加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２　試料と方法

試料は、ＳＫ44・2層から採取した炭化物（タケ亜科）１点、ＳＫＦ04底部から採取した炭化物（カツラ）１点、ＳＫＦ06から採取した炭化物（クリ）１点、ＳＫＦ13底面から採取した炭化物（コナラ節）１点、ＳＫＦ25底部から採取した炭化物（クリ）１点、ＳＫＦ31底面から採取した炭化物（トネリコ属）１点、ＳＫＩ29床面から採取した草本炭化物（単子葉類）１点の併せて７点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（ＡＭＳ）にて測定した。測定した^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した^{14}Ｃ濃度を用いて^{14}Ｃ年代を算出した。

３　結果

第９表に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}Ｃ年代、^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}Ｃ年代は、ＡＤ1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。なお、^{14}Ｃ年代値（yrBP）の算出は、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}Ｃ年代が、その^{14}Ｃ年代誤差範囲内に入る確率が68.2%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、田ノ沢山遺跡　第３章に記述してある。

第９表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD−3132 (AMS)	炭化物 (タケ亜科) SK44・2層 No.1	-24.3	1,160±35	cal AD 780 - 800 (5.7%) cal AD 810 - 900 (36.5%) cal AD 910 - 960 (26.0%)	cal AD 770 - 980 (95.4%)
PLD−3133 (AMS)	炭化物 (カツラ) SKF04 底部 No.2	-19.0	2,810±35	cal BC 1,005 - 915 (68.2%)	cal BC 1,050 - 890 (88.0%) cal BC 880 - 830 (7.4%)
PLD−3134 (AMS)	炭化物 (クリ) SKF06 No.3	-24.6	3,375±35	cal BC 1,740 - 1,710 (15.1%) cal BC 1,700 - 1,610 (53.1%)	cal BC 1,750 - 1,520 (95.4%)
PLD−3135 (AMS)	炭化物 (コナラ節) SKF13 底面 No.4	-27.4	2,725±35	cal BC 900 - 830 (68.2%)	cal BC 970 - 960 (2.0%) cal BC 930 - 800 (93.4%)
PLD−3136 (AMS)	炭化物 (クリ) SKF25 底部 No.5	-23.7	2,740±35	cal BC 905 - 830 (68.2%)	cal BC 980 - 950 (5.1%) cal BC 940 - 810 (90.3%)
PLD−3137 (AMS)	炭化物 (トネリコ属) SKF31 底面 No.6	-27.2	2,700±35	cal BC 900 - 875 (23.2%) cal BC 860 - 850 (8.2%) cal BC 845 - 805 (36.8%)	cal BC 920 - 800 (95.4%)
PLD−3138 (AMS)	草本炭化物 (単子葉類) SKI29 床面 No.7	-6.8	950±30	cal AD 1,020 - 1,070 (23.8%) cal AD 1,080 - 1,160 (44.4%)	cal AD 1,010 - 1,170 (95.4%)
PLD−3222 (AMS)	土器付着炭化物 ＳＫＦ39遺構内土器 №1	-18.0	2,780±35ＢＰ	cal BC1,000- 890 (55.0%) cal BC 880 - 840 (13.2%)	cal BC1,010 -830 (95.4%)

第４章　まとめ

谷地中遺跡の北側は盛土されて日本海沿岸東北自動車道が建設中であり、調査面積は台地の末端部分のわずかに500㎡であった。検出された遺構は、縄文時代の土坑と古代の竪穴状遺構・土坑である。

縄文時代の土坑は台地縁辺部に密集して検出された。検出された土坑は大きく２つのタイプに分かれる。一つは断面が三角フラスコ状を呈するフラスコ状土坑と、もう一つは断面が若干丸みを帯びる袋状土坑である。なお、単なる土坑は基本的に袋状土坑と性格が同様であり、本章では袋状土坑に含むものとする。本遺跡で検出されたフラスコ状土坑（ＳＫＦ40は場所が離れているため含まず）は16基であり、袋状土坑は19基（うち土坑は３基）である。フラスコ状土坑と袋状土坑の規模を比較すると、底面積の平均はフラスコ状土坑が1.8㎡、袋状土坑は1.1㎡である。また、地山面からの深さの平均は、フラスコ状土坑が83㎝、袋状土坑は50㎝であり、フラスコ状土坑は袋状土坑より規模が大きい。ちなみに、田ノ沢山遺跡北側調査区で検出された９基のフラスコ状土坑の規模は、底面積が2.1㎡、深さは地山面から110㎝であり、本遺跡のフラスコ状土坑より一回り大きい。さて、谷地中遺跡で検出されたフラスコ状土坑であるが、埋土の堆積状況により２つに分かれる。一つは開口状態で廃棄された土坑で自然堆積状況を示すもの、もう一つは人為的に埋め戻されたものである。16基のフラスコ状土坑のうち、自然堆積の土坑が11基、人為堆積の土坑は５基である。規模を比較すると、この２つの土坑の底面積の差はほとんどなく、深さは自然堆積の土坑が約10㎝深い。フラスコ状土坑の中で、開口状態で廃棄され自然堆積した土坑は貯蔵穴と考えられる。人為的埋め戻している土坑については後述する。次に袋状土坑であるが、フラスコ状土坑に比べ底面積が狭く、30㎝以上も浅くなる。また、すべて人為的に埋め戻されているという特徴がある。ＳＫＦ39からは副葬品として鉢形土器が出土している。これらのことから、袋状土坑は土坑墓と考えられる。それでは、人為的に埋め戻しているフラスコ状土坑の機能は何であろうか。これらの土坑は、開口状態で廃棄されたフラスコ状土坑に比べ深さは10㎝程浅いものの、貯蔵穴としての機能には問題はないだろう。谷地中遺跡で検出された縄文時代の土坑は、出土した土器と年代測定の結果や、縁辺部に密集しているにもかかわらずほとんど重複がないこと、明らかに他の遺構掘削土で埋め戻されている土坑があることから、構築時期差はほとんどないと考えられる。ちなみに年代測定の結果では、貯蔵穴のＳＫＦ04は2,810±35ＢＰ・ＳＫＦ25は2,740±35ＢＰ、土坑墓のＳＫＦ39は2,780±35ＢＰを示す。土坑墓はすべて袋状土坑であり、５基だけフラスコ状を呈する土坑墓を掘り込むとは考えにくく、貯蔵穴の可能性が高いと考えられる。しかし、堆積状況から、田ノ沢山遺跡のＳＫＦ106のように貯蔵穴から土坑墓への転用もあり得ようか。谷地中遺跡は縄文時代晩期中葉のほぼ同時期に貯蔵場所と墓域として利用された。貯蔵場所と墓域は明確な区画はなされず、貯蔵穴と土坑墓が密集する。後期になると、鹿角市の大湯環状列石や北秋田市鷹巣地区の伊勢堂岱環状列石、北秋田市森吉地区の漆下遺跡のように集落から独立して大規模な墓域が形成される。配石は伴わなくとも独立する墓域が形成される傾向は後期から晩期に継続する。晩期において集落から独立した大規模な墓域を形成する遺跡としては、大館市の家ノ後遺跡(註3)、山内村の虫内Ｉ遺跡(註4)、北秋田市森吉地区の向様田Ａ・Ｂ遺跡(註5・6)などがある。本遺跡は規模的には小さいが、貯蔵地と墓域が共同で利用された類例の少ない遺跡といえよう。

古代の遺構は、竪穴状遺構１基と土坑１基が検出された。この２つの遺構は時期差があり、土坑についての性格は不明である。竪穴状遺構は遺跡南東側の緩い斜面上に構築されている。１辺が3.4mの方形を呈し、壁高も1.1mと規模が大きい。また、西壁北側には長さ1.2m、幅90㎝の入口が張り出しており、昇降のための階段も１段付設する。県内の中世の竪穴状遺構については、石川和良氏が集成と考察を行っている(註7)。その中で、竪穴状遺構は古代期の竪穴住居がカマドや炉を失った結果、徐々にその機能を住居施設から作業関連施設に移行したものであるとしている。また、竪穴状遺構は城館内から数多く検出され、街道沿いには単独で近い形で検出されていることを述べている。そして、その差は、前者を各地方の有力者と契約関係を結びその下で定着した職能民、後者を遍歴・漂泊という本来の生業形態を色濃く残した職能民とに区別している。さて、県内の中世における竪穴状遺構の初見を琴丘町の盤若台遺跡ＳＫＩ101としている(註8)。この遺構は筆者が調査したもので、構築時期を年代測定の結果から中世半ばととらえた。この遺構は１辺が２m程の方形を呈し、壁中央に緩やかに傾斜する入口が付設する。谷地中遺跡で検出した竪穴状遺構は、規模も大きく入口の位置も異なることから類似性を見いだせない。盤若台遺跡の竪穴状遺構は、この後に位置づけられる他の遺構と規模や形態が類似し、古代と中世における竪穴状遺構に形態の差を伺わせる。また、古代の入口を付設する竪穴状遺構は、琴丘町の小林遺跡で１軒だけ検出されている(註9)。この竪穴状遺構はＳＫＩ5200で、年代測定の結果９世紀の所産と旧い。長軸2.56m、短軸1.82mの長方形を呈し、東壁北側に楕円形平面を呈する入口が付設する。入口が壁際に付設することは本遺跡のＳＫＩ29と同じであるが、規模は小さくむしろ中世の竪穴状遺構と類似する。さて、本遺跡のＳＫＩ29であるが、カマドや炉、柱穴は検出されていない。しかし、床面全面には炭化物が充填しており、これは床に敷物を敷いていたと考えられる。床に敷物を敷くということは、そこで「眠る」「座る」という行為が考えられ、少なくとも立ち仕事をする作業小屋とは考えにくい。竪穴状遺構が竪穴住居から機能的に変化していくとすれば、本遺構は規模や形態からまさにその転換期に当たるだろう。

谷地中遺跡では、早期末葉から前期前半の土器破片が出土している。しかしその他の土器のほとんどは晩期に属する。このことから、早期末葉から前期前半には狩猟や採集のために移動した場所であり、晩期中葉になり貯蔵場所と墓域に区画されることなく利用された。晩期の竪穴住居跡の検出例は後期に比べて少なく、当時期における集落形態等については不明な点が多い。本遺跡の調査面積はわずかに500㎡であり、日本海沿岸自動車道が延びる北側にも遺構は広がっていると考えられる。谷地中遺跡の周辺に同時期の集落があるのか、それとも分散している集落の貯蔵場所や墓域として利用されていたのかなど今後の解明に期待したい。

参考文献

註１　青森県教育委員会　『表館（１）遺跡Ⅲ　発茶沢（１）遺跡Ⅳ』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第120集
1989（平成元）年
註２　兵庫県埋蔵銭調査会　『日本出土銭総覧』　1996（平成８）年
註３　秋田県教育委員会　『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－家ノ後遺跡－』
秋田県埋蔵文化財調査報告書　第229集　1992（平成４）年
註４　秋田県教育委員会　『虫内Ⅰ遺跡－東北自動車道秋田線発掘調査報告書に係る埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅢ－』
秋田県埋蔵文化財調査報告書　第274集　1998（平成10）年
註５　秋田県教育委員会　『向様田Ａ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅷ－　遺構篇』
秋田県文化財調査報告書　第346集　2003（平成15）年
註６　秋田県教育委員会　『向様田Ｂ遺跡　向様田Ｃ遺跡　向様田Ｅ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書ＩＸ－』　秋田県文化財調査報告書　第347集　2003（平成15）年
註７　秋田県教育委員会　『森吉家ノ前Ｃ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書ＸⅥ－』
秋田県文化財調査報告書　第393集　2005（平成17）年
註８　秋田県教育委員会　『般若台遺跡－主要地方道琴丘上小阿仁線高速交通関連整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』
秋田県文化財調査報告書　第331集　2001（平成13）年
註９　秋田県教育委員会　『小林遺跡Ⅱ　平安時代・中世篇－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書ＸＩＸ－』　秋田県文化財調査報告書　第376集　2004（平成16）年

1　遺跡近景（北東→）

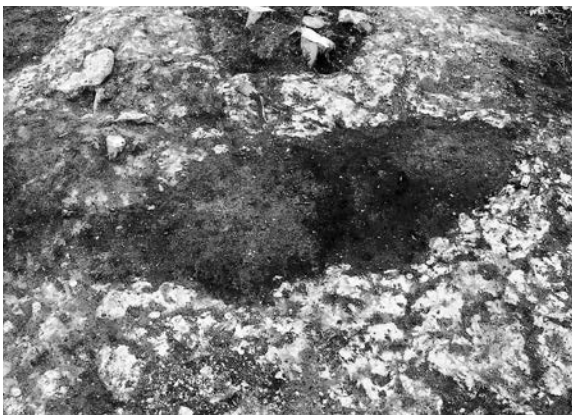
2　遺跡近景（南→）

遺跡近景

3　遺構検出状況（西→）

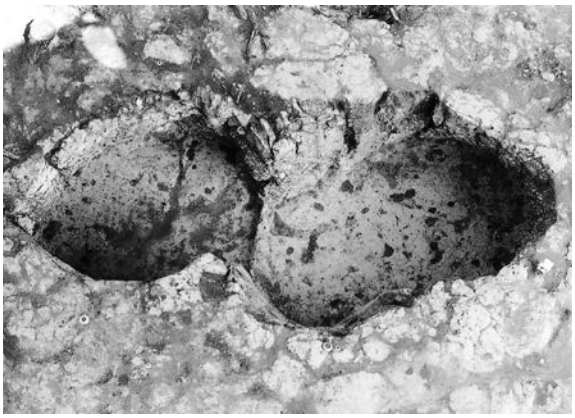
4　ＳＫＩ29完掘（東→）

検出遺構（1）



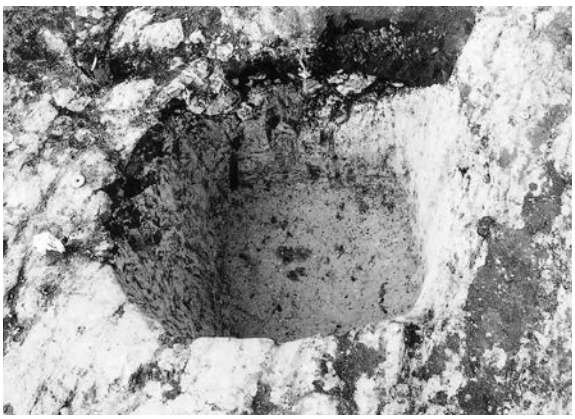
5　ＳＫ12、ＳＫＦ11・13確認（北西→）

6　ＳＫ12断面（南→）



7　ＳＫ12、ＳＫＦ11・13完掘（北→）

8　ＳＫ23断面（南→）



9　ＳＫ23完掘（南→）

10　ＳＫ28断面（西→）

11　ＳＫ28完掘（南東→）

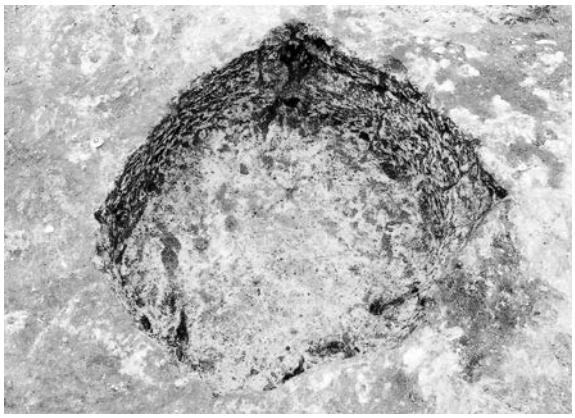
12　ＳＫ30、ＳＫＦ33完掘（東→）

検出遺構（2）

13　ＳＫＦ01断面（西→）

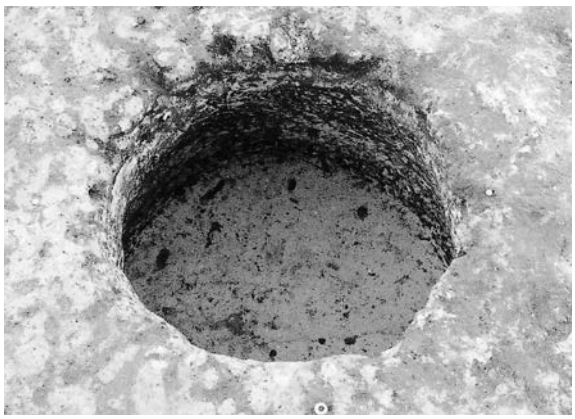
14　ＳＫＦ01完掘（南→）

15　ＳＫＦ02断面（南→）



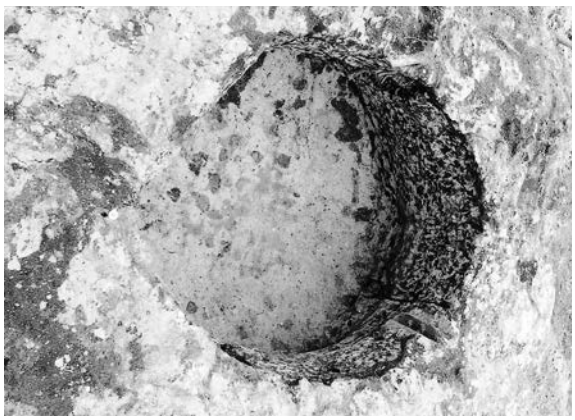
16　ＳＫＦ02完掘（南→）

17　ＳＫＦ03断面（南→）



18　ＳＫＦ03完掘（北→）

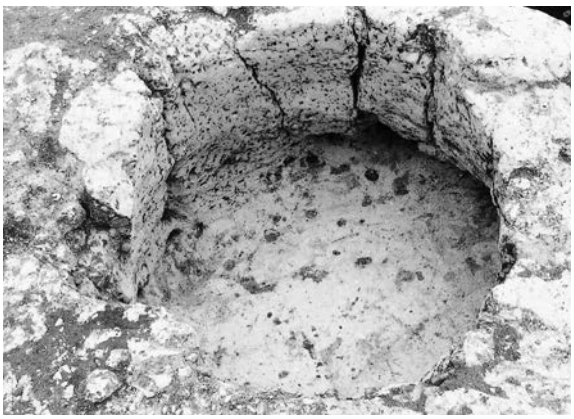
19　ＳＫＦ04断面（西→）



20　ＳＫＦ04完掘（北→）

検出遺構（3）

21　ＳＫＦ05断面（西→）

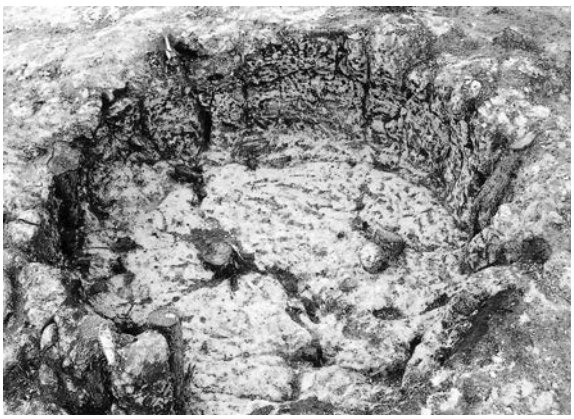


22　ＳＫＦ05完掘（南→）

23　ＳＫＦ07断面（南→）

24　ＳＫＦ07完掘（南→）

25　ＳＫＦ08断面（西→）



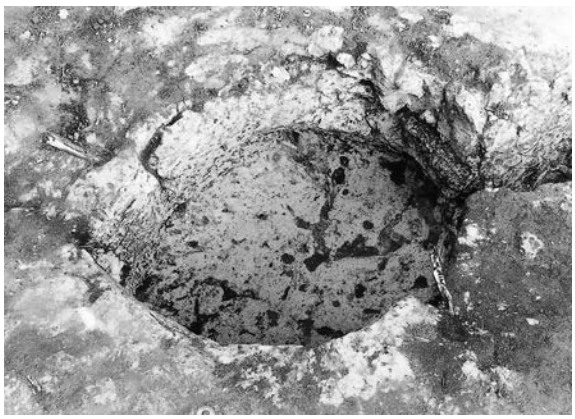
26　ＳＫＦ08完掘（南→）

27　ＳＫＦ09断面（南→）

28　ＳＫＦ09完掘（北→）

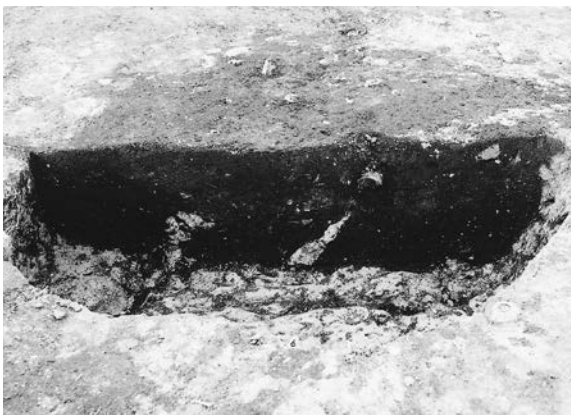
検出遺構（4）

29　ＳＫＦ11断面（南→）


30　ＳＫＦ11完掘（北→）

31　ＳＫＦ13断面（南→）

32　ＳＫＦ13完掘（東→）


33　ＳＫＦ14断面（南→）

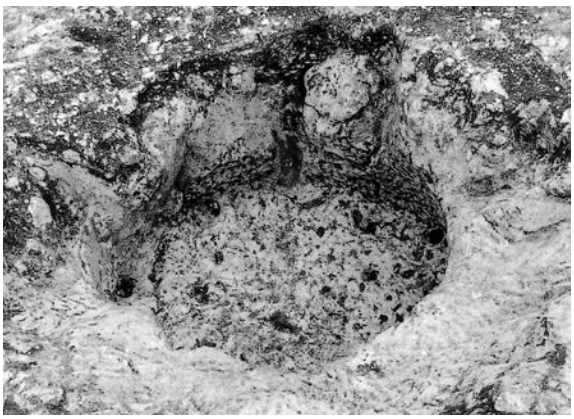
34　ＳＫＦ14完掘（北→）

35　ＳＫＦ15断面（南→）

36　ＳＫＦ15完掘（北→）

検出遺構（5）

37　ＳＫＦ16断面（南→）

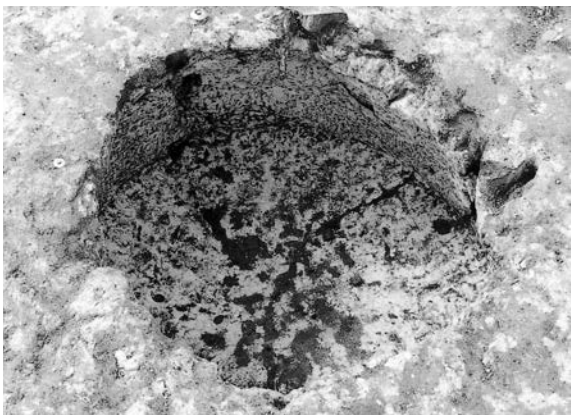


38　ＳＫＦ16完掘（南→）

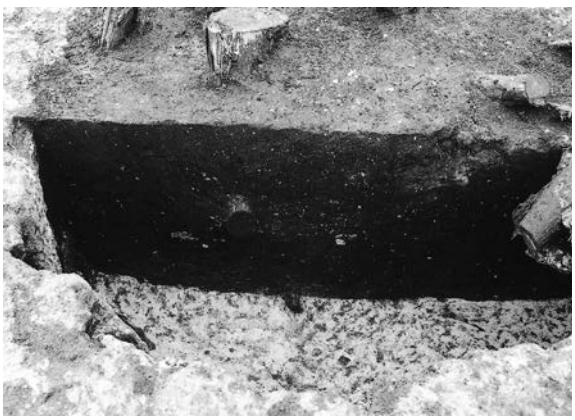
39　ＳＫＦ17断面（南→）

40　ＳＫＦ17完掘（南→）

41　ＳＫＦ19断面（南東→）



42　ＳＫＦ19完掘（南→）



43　ＳＫＦ20断面（南東→）

44　ＳＫＦ20完掘（北→）

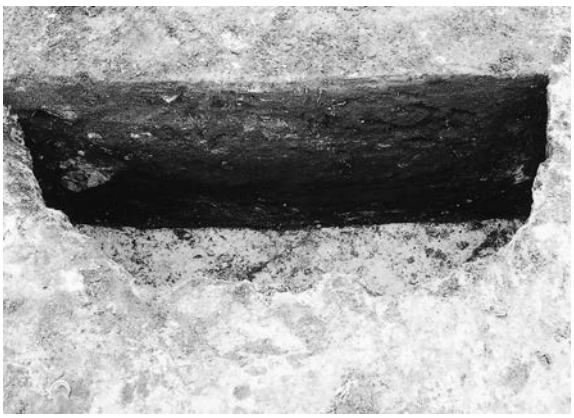
検出遺構（6）

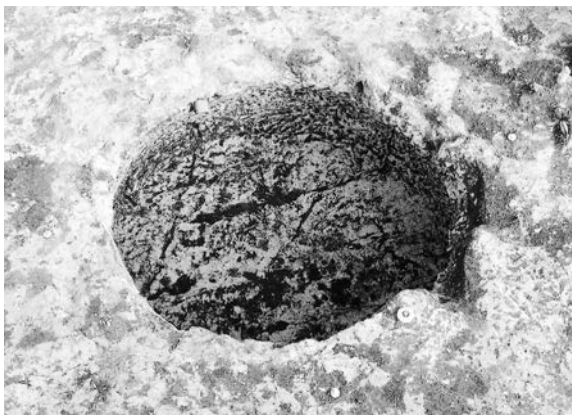
45　ＳＫＦ21断面（南→）

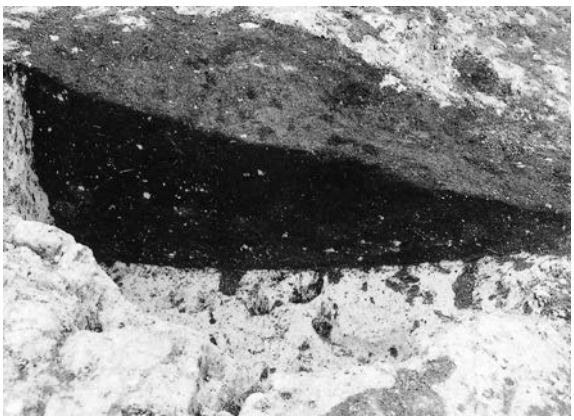
46　ＳＫＦ21完掘（南→）

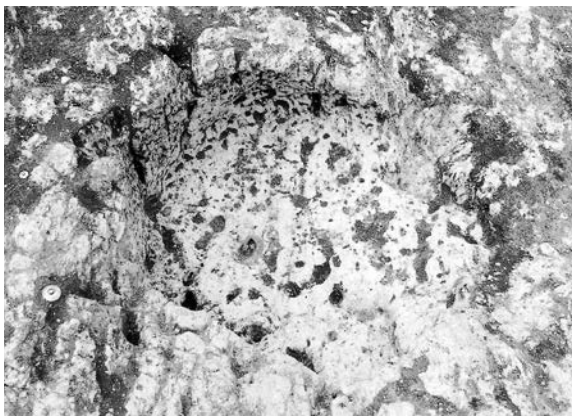
47　ＳＫＦ24断面（西→）

48　ＳＫＦ24完掘（西→）

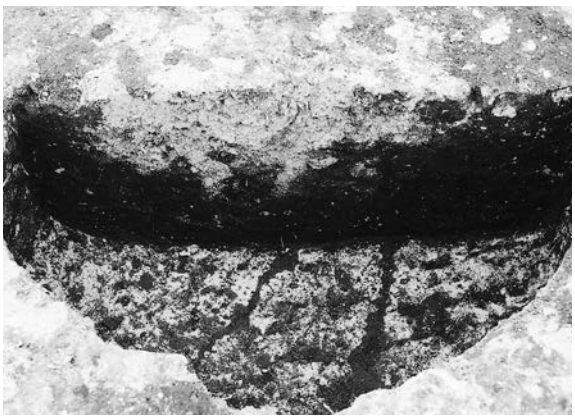

49　ＳＫＦ25断面（南東→）


50　ＳＫＦ25完掘（北→）


51　ＳＫＦ26断面（南→）

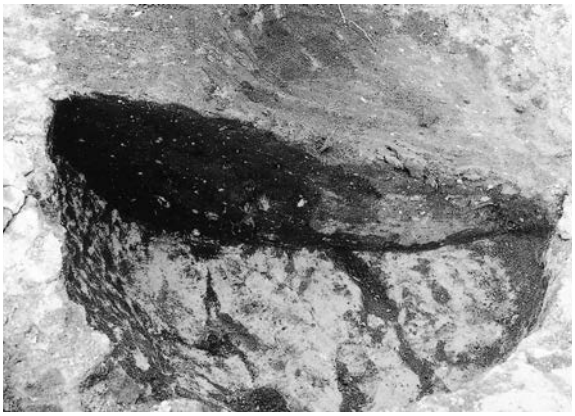

52　ＳＫＦ26完掘（南→）

検出遺構（7）

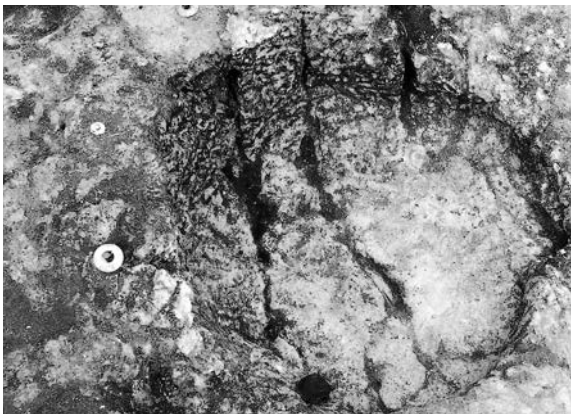


53　ＳＫＦ27断面（南→）

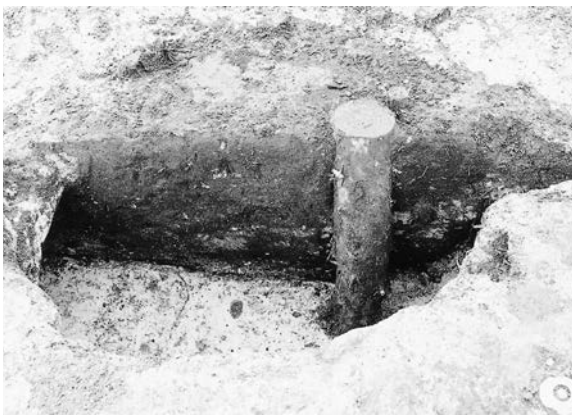
54　ＳＫＦ27完掘（北→）



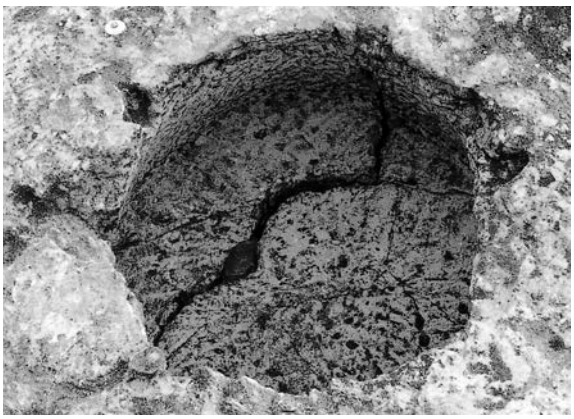
55　ＳＫＦ31断面（南→）



56　ＳＫＦ31完掘（南→）



57　ＳＫＦ34断面（南→）



58　ＳＫＦ34完掘（北→）

59　ＳＫＦ36断面（西→）

60　ＳＫＦ36完掘（西→）

検出遺構（8）

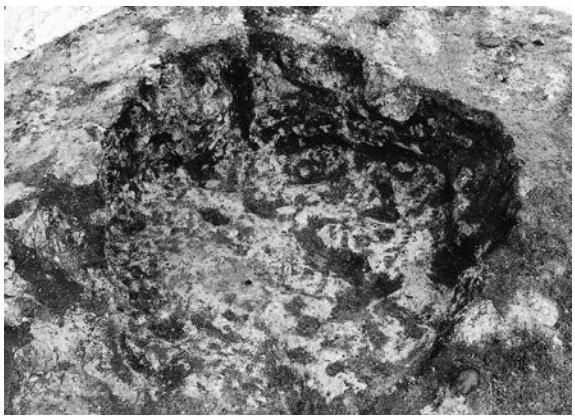
61　ＳＫＦ37断面（西→）

62　ＳＫＦ37完掘（西→）

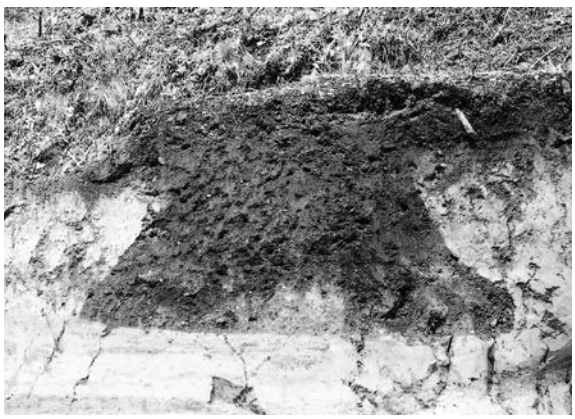
63　ＳＫＦ38断面（西→）

64　ＳＫＦ38完掘（南→）

65　ＳＫＦ39断面（西→）

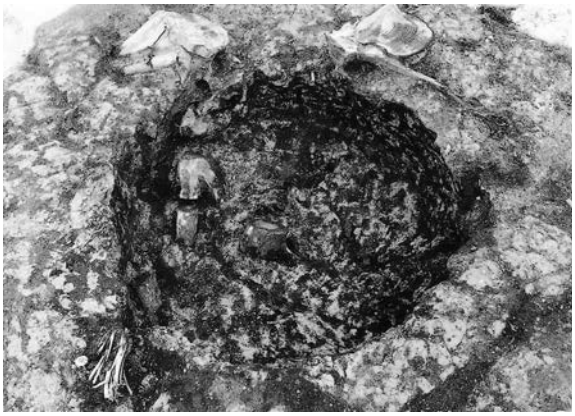

66　ＳＫＦ39完掘（南→）

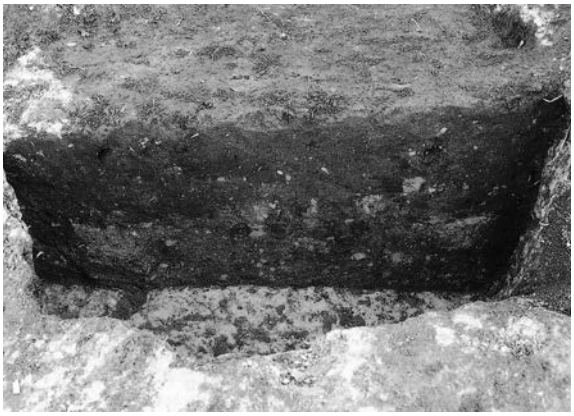
67　ＳＫＦ39遺物出土状況（東→）


68　ＳＫＦ40断面（南→）

69　ＳＫＦ40完掘（南→）

70　ＳＫＦ42断面（南→）


71　ＳＫＦ42完掘（南西→）


72　ＳＫＦ43断面（南→）

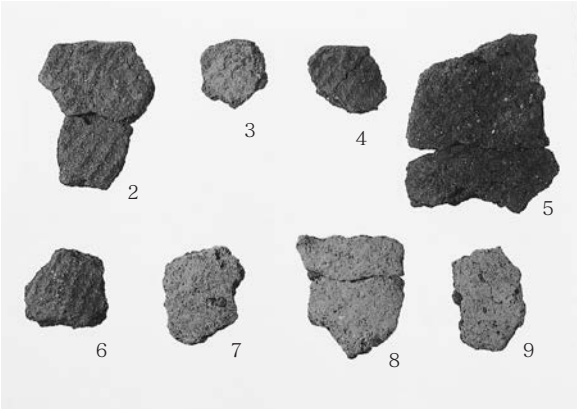
73　ＳＫＦ43完掘（南→）

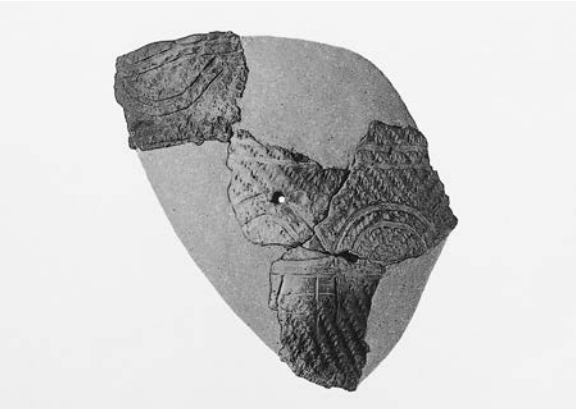
74　ＳＫＩ29東西ベルト断面（南→）

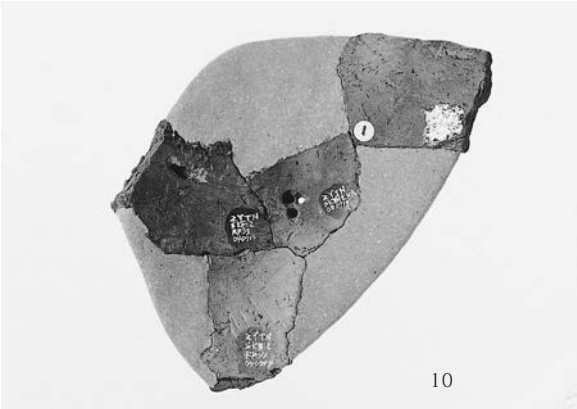
75　ＳＫＩ29南北ベルト（東→）

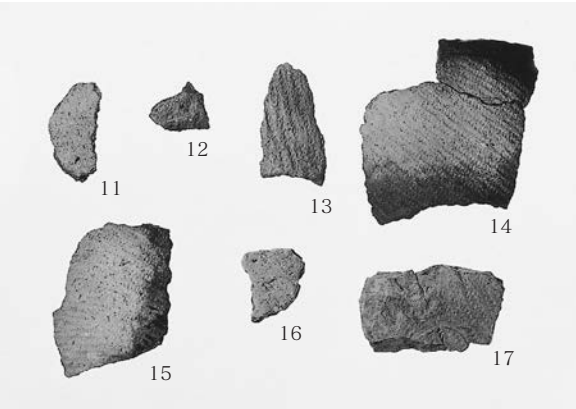
76　ＳＫＩ29炭化物出土状況（東→）

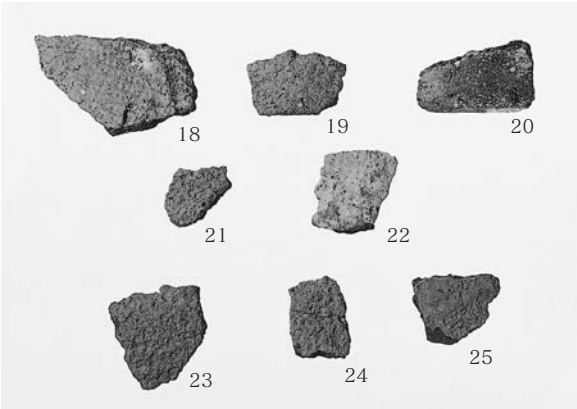
1


2
3
4
5
6
7
8
9

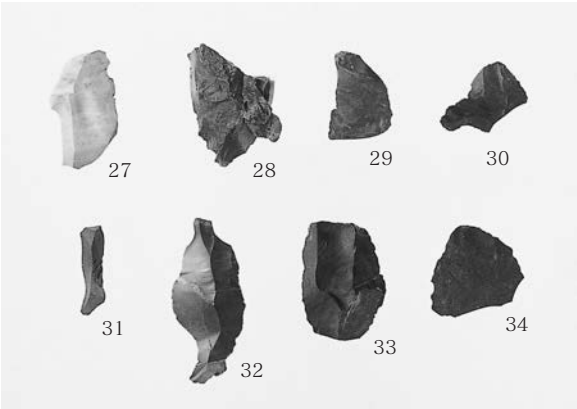



10

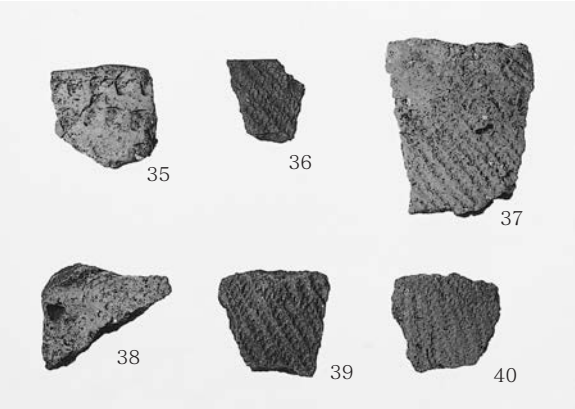

11
12
13
14
15
16
17

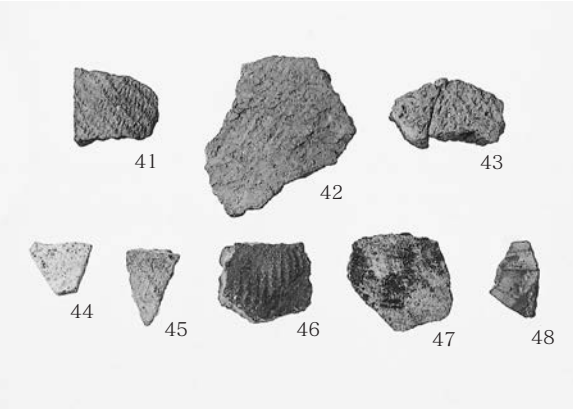

18
19
20
21
22
23
24
25

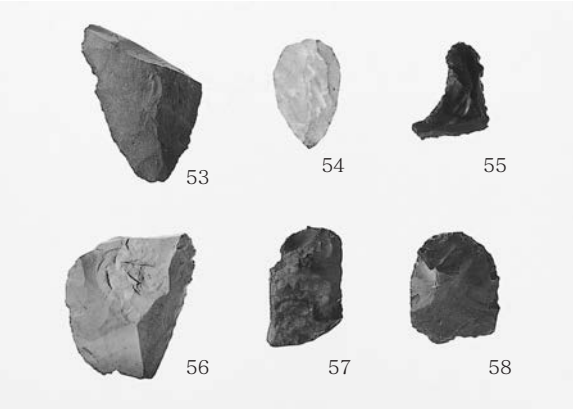
26


27
28
29
30
31
32
33
34

出土遺物（1）

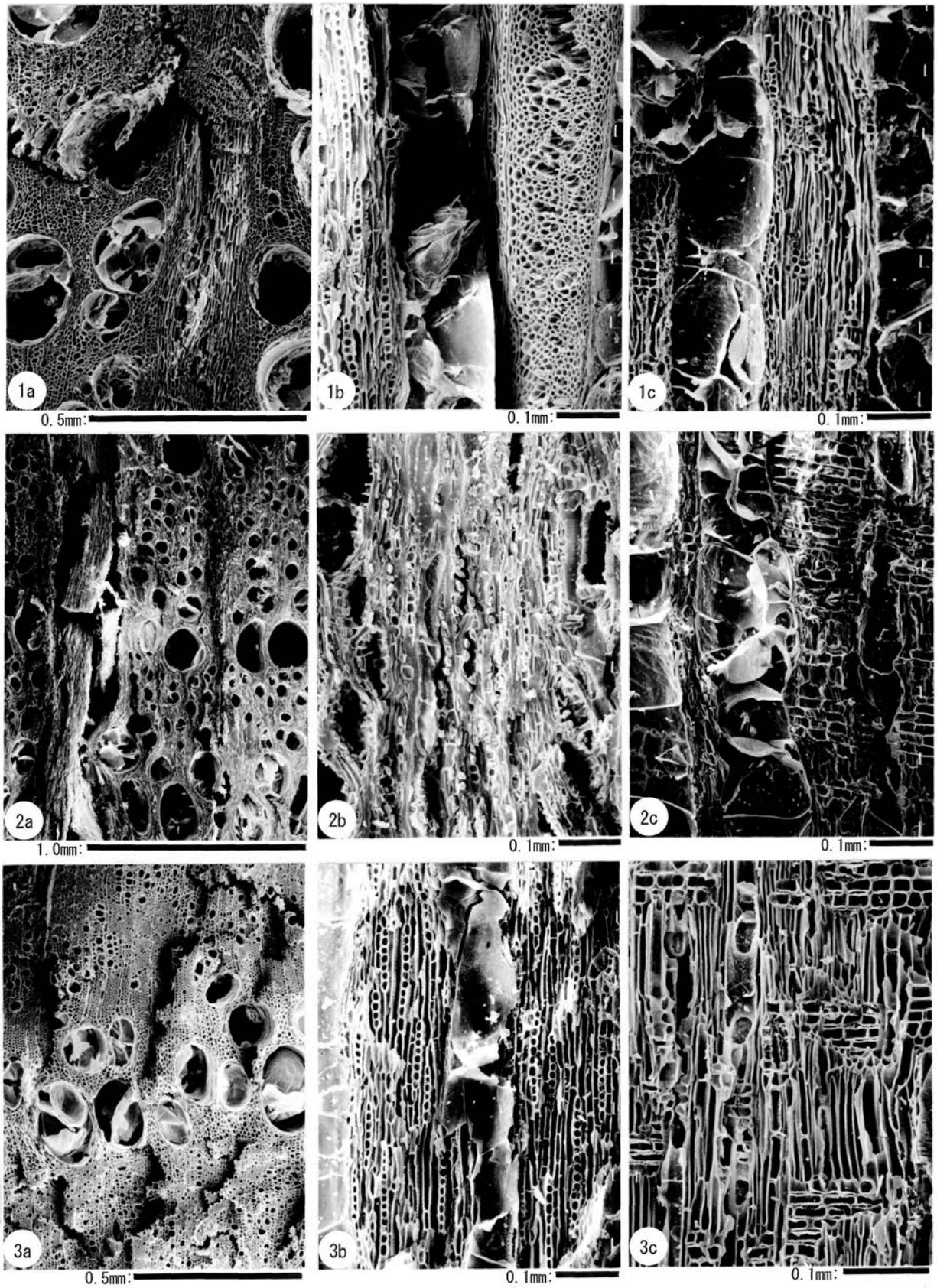






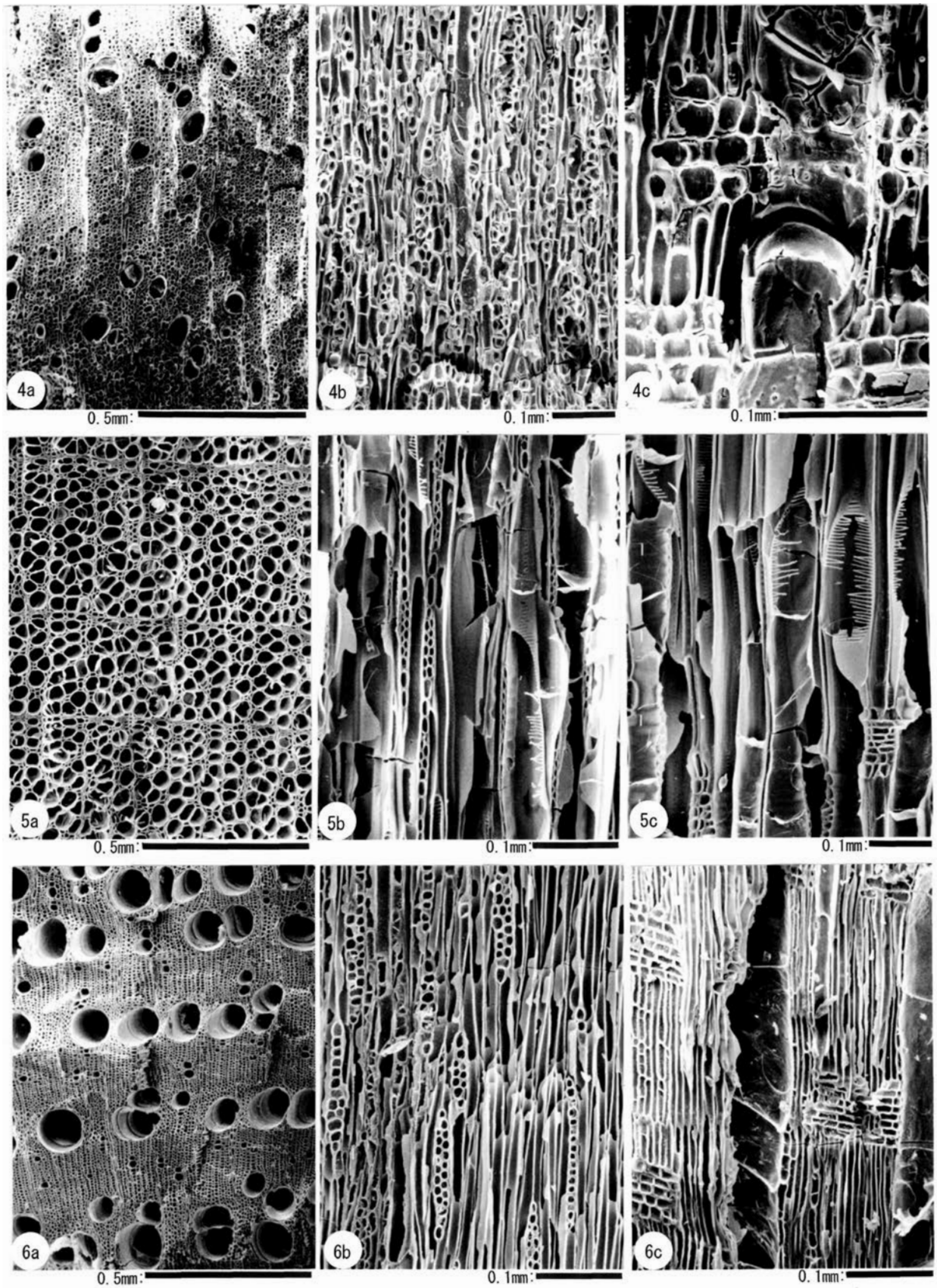
出土遺物（2）

図版32



1a－1c：コナラ節（試料番号4　ＳＫＦ13）　2a－2c：コナラ亜属（試料番号6　ＳＫＦ31）
3a－3c：クリ（試料番号5　ＳＫＦ25）　a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

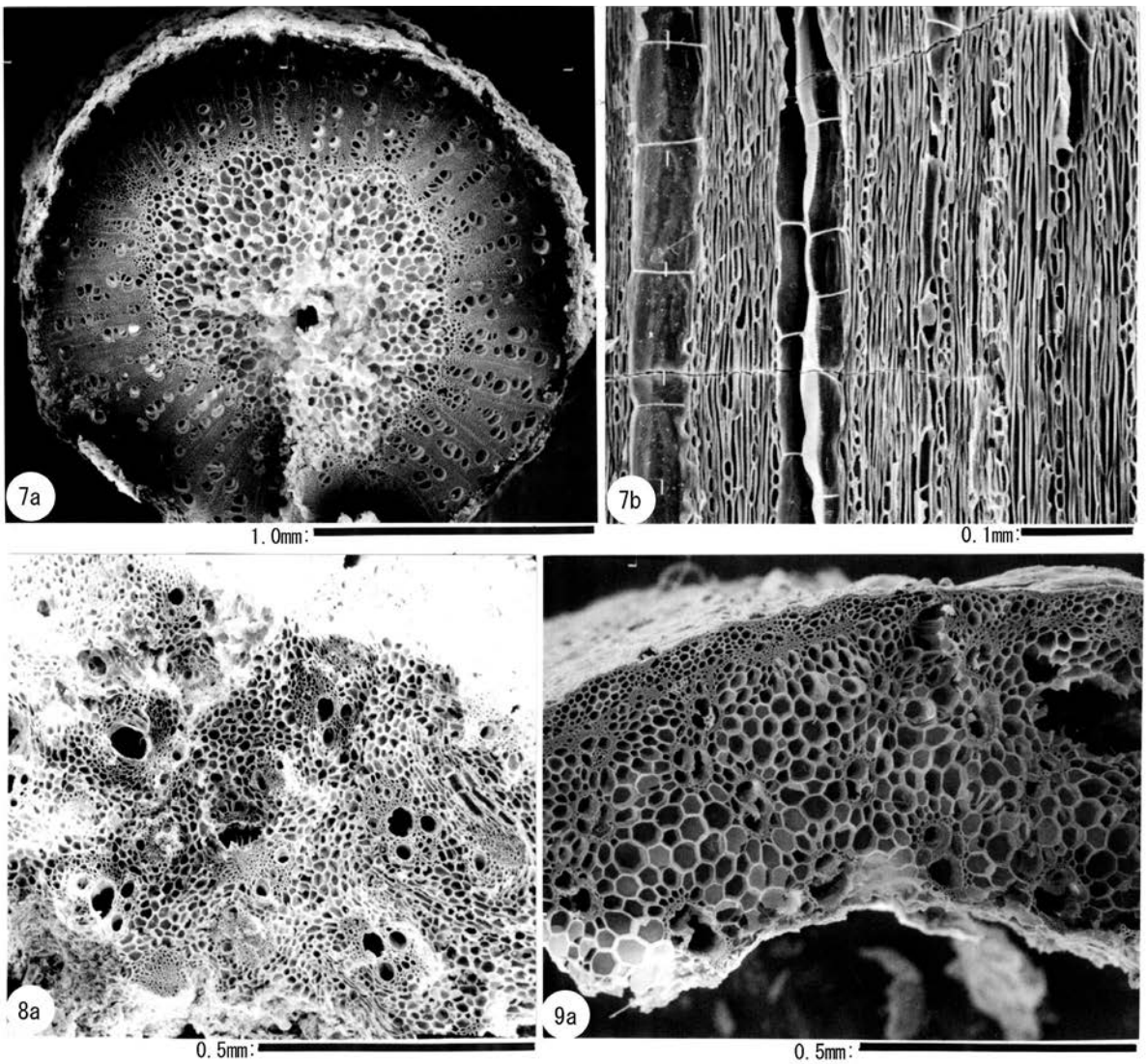
出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真（1）



4a－4c：クリ　節部または根材（試料番号3　ＳＫＦ04）　5a－5c：カツラ（試料番号2　ＳＢ04）
6a－6c：トネリコ属（試料番号6　ＳＫＦ31）　a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真（2）

図版34



7a－7b：広葉樹（試料番号7　ＳＫ129）　8a：タケ亜科　根茎（試料番号1　ＳＫ44）
9a：単子葉類　ヨシ属類似（試料番号7　ＳＫ129）　a：横断面　b：接線断面

出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真（3）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たのさわやまいせき　やちなかいせき
書名	田ノ沢山遺跡・谷地中遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ＸＸⅢ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第404集
編著者名	河田弘幸・成田雄毅
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦2005年６月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たのさわやまいせき 田ノ沢山遺跡	あきたけんおおだてし 秋田県大館市 あきひとどめあざたの 商人留字田ノ さわ 沢100－１	052040	－	40° 19′ 19″	140° 36′ 19″	20040511 ～ 20040706	2,400㎡	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
やちなかいせき 谷地中遺跡	あきたけんおおだてし 秋田県大館市 あきひとどめあざやち 商人留字谷地 なか 中83外			40° 18′ 50″	140° 35′ 17″	20040707 ～ 20040820	500㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
田ノ沢山遺跡	集落 貯蔵場所	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 フラスコ状土坑 土器埋設遺構 性格不明遺構	5 6 23 1 6	縄文土器 石器	北側調査区 貯蔵場所 南側調査区 竪穴住居と貯蔵穴・土坑墓からなる小集落
	集落	中世	掘立柱建物跡	2		
谷地中遺跡	貯蔵場所 墓域	縄文時代	土坑 フラスコ状土坑 袋状土坑	3 16 16	縄文土器 石器	晩期の貯蔵場所 墓域
	集落	古代	竪穴状遺構 土坑	1 1		

秋田県文化財調査報告書第404集

田ノ沢山遺跡・谷地中遺跡

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅢ－

印刷・発行　平成17年６月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電話（0187）69-3331
FAX（0187）69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王３丁目１番１号
電話（018）860-5193
印　　刷　株式会社　ウェーブ